奇譚クラブ

1958年　4月号

緊縛女性五題　『捕われの令嬢』　水沢雅美

創作「十三人目の奴隷」　夢原狂介

4月号

昭和三十三年三月三十日印刷
昭和三十三年四月一日発行（第十二巻四月号
第五号　通巻第百六号）
（毎月一回一日発行）
昭和三十二年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

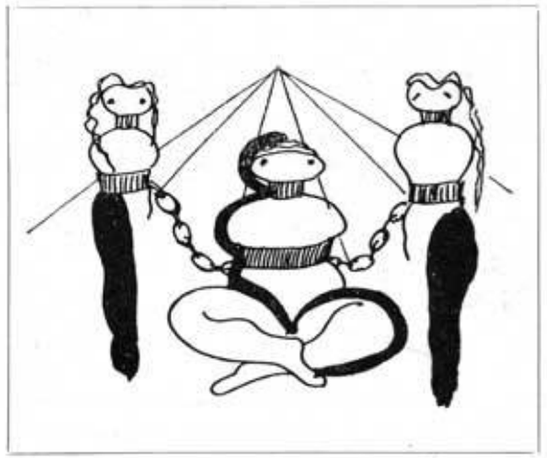
昭和三十三年四月号

4

奇譚クラブ
昭和三十三年三月三十日印刷
昭和三十三年四月一日発行　四月号（第十二巻第五号）
昭和三十一年四月二十日　第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）

定価二百円
（送料八円）

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



IBM. 2805

〔次目要主号最近クラブ譚奇〕

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十二年
○七月号（復刊第十六号）
【定価二百円】（〒8円）

口絵
涙のダイヤモンド（地下の拷問室）……甲斐仁参・案……四馬孝・提供
縛られた女優たち……楓月太郎・画
花坂道子嬢艶姿集
切支丹迫害史の内（石抱き算盤責め）……北原紳子・画
緊縛映画名場面集……楓月太郎・提供
「愛は惜しみなく」……藤本仙治・提供
私の本箱から（大衆小説の縛り場面）……星光一
異説八百屋お七「幻想炎の娘」（前篇）……館地佐渡
少年矯正院体験記「重厚禁」……獄収一
私のアイデア「ローソク責め」……甲斐仁参
ママになりたいパパ……館地佐渡・提供
ある女性から編集長への手紙
「恥しい夢」……泉かよ子
麻生保の生活と意見（一）……麻生保
創作「L・T商会」……佐川増夫
ある夢想家の手帖から……沼正三
猟奇抄……月岡映子
股のぞきの責め図「姐妃のお百」……南川和子
告白「防毒服と私」……飯田靖子
落日婦士道……青山芳樹
本書に関するノート……甲斐仁参
「女装通信」……青柳一章
創作マットに生きる夢……浜藤
ある女給の体験（四）……日下四郎
続・切腹曼陀羅図絵……法谷紅次
和装教室（花嫁衣裳の巻）……白金正守
映画速報……河合
「奇談倶楽部」の会合（責めの研究会報告）……沼本青柳正三
家畜人ヤプー（第七回）……岸
南支那海の鬼……本田由郎
空想のネタ……土路草一
ワイセツか哲学か（パリー法廷で裁かれ）……白鳥銀之介・提供
たサディズム）……原忠正
現代マゾヒスム芸術時評……伊藤晴雨
女血だるま
アブ・モード・オール・スクラップ……矢桐重八
輝とブリーフ……池田ふみ子
一輝亭雑記……内田武男
私のアイデア集大成……佐々木ツトム
「通信」……土路草一
黒いペチコート（マリアンヌの手紙よ）……鶏鳴吐夫・訳
女斗美編……土俵四股平
那津子の浣腸日記……山田那津子
仏、米の婦人ふんどしに就いて
私のキタ・セクシュリアス……山本節夫
六月号の批評と感想……近藤一
緊縛映画速報欄……千葉栄市
雑誌通信……丘明
口絵解説……藤木仙治
読者通信
南支那海の鬼……本田由郎
空想のネタ……土路草一
ワイセツか哲学か（パリー法廷で裁かれ）……白鳥銀之介・提供
たサディズム）……原忠正
現代マゾヒスム芸術時評……伊藤晴雨
女血だるま
アブ・モード・オール・スクラップ……矢桐重八
輝とブリーフ……池田ふみ子
一輝亭雑記……内田武男
私のアイデア集大成……佐々木ツトム
「通信」……土路草一
黒いペチコート（マリアンヌの手紙よ）……鶏鳴吐夫・訳
女斗美編……土俵四股平
那津子の浣腸日記……山田那津子
仏、米の婦人ふんどしに就いて
私のキタ・セクシュリアス……山本節夫
六月号の批評と感想……近藤一
緊縛映画速報欄……千葉栄市
雑誌通信……丘明
口絵解説……藤木仙治
読者通信

○八月号（復刊第十七号）
【定価二百円】（〒8円）

口絵
美への冒瀆……四馬孝・画
加賀利江子嬢艶姿集……加賀利江子
花蝶「美吉野」の折檻……滝れい子・画
映画写真「夕立勘五郎」……楓月太郎
映画題名、女優名当懸賞……楓月太郎
洋画スチール二題……提供
「駅衣」「岩窟の野獣」
旅硝り劇団の責場面から……星光一
除花植物（或る浣腸マニヤの告白）……島直樹
「時報」……麻生保
告白「恋する夫人への手紙」……日下和夫
ある女給の体験……縛子
高井好晴氏のアイデアに答えて……南川和子
緊縛映画名場面集……楓月太郎・提供
縛られた女優たち……千葉栄市・提供
洋画スチール二題……編集部選定
「征服者」「魂術師の応」
病床徒然草……柳沢吉保
告白「鞭の線に描かれて」……皆川のぶ子
異説八百屋お七「幻想炎の娘」（後篇）……笛地佐渡
壮烈な大和撫子……藤山秀緒
ある夢想家の手帖から……沼正三
探偵小説に現れた地獄絵巻……高崎勉
美女を十字架にクギづけ（生にえのまわり）……東一郎
肉体の狂宴……土俵四股平
ワイド映画の縛りシーン……峠美也子
相撲取草……
和装教室（長襦袢羽れ場の巻）……白金紅次
魔女裁判に関するノート（続）……甲斐仁参
「苦しみを求めて」（1）……細谷
を持つ女性の手記より……近藤
家畜人ヤプー（第九回）……沼正三
「短信」……山下真一
赤い煙瓦の家……津々平
体験談「水兵生活と輝」……内田武男
ビーチボールの魅力……佐田春雄
残虐な女性……森本愛造
医学幻想……古井直
映画速報欄……千葉市
告白「女性志願者の夢」（前篇）……真崎伸一
麻生保氏の生活と意見（二）……麻生保
切腹随想……兵頭庫一
私の本箱から（単行本、雑誌の責場面）……星光一
美少年処刑の図「笑い」……山口
梨花会例会報告……筑紫美弥幸
現代マゾヒスム芸術時評……原忠正
フエチ通信「赤い下穿き」……高木栄二
痛められし桃の実（第一回）……（マリアン）
ヌの手記より）……鶏鳴吐夫・訳
続・潰滅の前夜（完結篇）……十路草一

本誌百号突破記念
懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒って御応募下さるようお待ちいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。（この際は誌上で連絡いたします。）

◎賞金（各篇につき）
優作　壱万円　若干篇
秀作　五千円　若干篇
佳作　三千円　若干篇

種目　小説、創作、告白、手記、体験、等本誌に適当した題材を扱ったもの

枚数　三十枚乃至五十枚程度（四百字詰）但し多少の増減は差支えありません。

締切　当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿　「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表　入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

用紙　二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便（百瓦につき八円）にて御送付願います。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔（映画、雑誌）通信〕映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二月分贈呈します。

〔（読者通信）編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思い出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

○本誌月極購読料○

一月分一冊（送料八円）二百円
三月分三冊（送料共）六百円
半年分六冊（送料共）千二百円
一年分十二冊（送料共）二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ　第十二巻　第五号
毎月一回一日発行
四月号　定価二百円（送料八円）
昭和三十三年三月三十日印刷
昭和三十三年四月一日発行
編集人　箕田京二
印刷兼発行人　吉田稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所　天星社
振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は挟込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下されば、確実で早くて大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。（但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います）

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

読者通信……矢桐　重八

十月号（復刊第十九号）【定価二百円】（〒8円）

口絵
責画「鼻いじめ」……四馬孝・画
縛られた女優たち（場面集）……阿部秀・楓月太郎・提供
緊縛写真「グラマー・ガールのニュースタイル」
責画「地下倉庫」「いでゆ」……北原純子・画
洋画スチール二題
「古城の剣豪」「指紋なき男」
絵物語「お加代源三郎旅日記」……藤木　仙治
告白「女性志願者の夢」（後篇）……真崎　伸一
女性の悲鳴について……南川　和子
「苦しみを求めて」（2）（縄への憧憬）
を持つ女性の手記より）……近藤　一
良二断想集……高木　良二
終戦奴隷（或る勤労動員女学生の手記より）……雪　俊
私の好きな女靴……波路　洋
「吊し責め」の実験（奇談倶楽部集会報告）……岸本　青柳
女性化願望と男性思慕……古井　真哉
家畜人ヤブー（第十回）……沼　正三
東京の人よ何を穿く（腰巻とパンティとふんどし）……松原三千代
「艶美なる捕物帖」……牧　志文・画
ある夢想家の手帖から……沼　正三
大陸暴行列車（内股烙印38号の女の手記）……本田　由郎
可憐なサド、可憐なマゾ　佐々木ツトム
製糸工女……木口　房代
緊縛映画雑感「再映画化作品について」……阿部　秀
告白「恋する夫人への手紙」（二）……麻生　和夫
アブ・モード・オール・スクラップ……
痛められし桃の実（第二回）……矢桐　重八
（マリアンヌの手記より）……鴉嘔吐夫・訳
「美女達のお尻が風船をつぶすアイスシヨー」……清水　恵二
マゾヒズムへのいざない……天野　哲夫
女性切腹随想……田谷　敬生
和装教室（古典模様矢絣御供の巻）……白金　紅次
雑報と雑感……沼　正三
浣腸嶽裸通信「アブ・マニア雑談」……赤井　獄
捕縄術入門……収　一茂
戦争未亡人の告白「ヒツプ受難」……花田　育子
美容病院（第一回）……久留木　栄
モデル志願の女性より……永井　朱実
架空小説「残虐芸術展覧会」……伊藤　晴雨
雑誌通信「挿絵を中心として」……丘　一明
フランソワの手記……山梨　参次
読者通信……

〇十一月号（復刊第二十号）【定価二百円】（〒8円）

口絵
責絵「拘束服」……四馬孝・画
滝れい子画集……滝れい子・画
舞妓（まいこ）……予後（よご）
緊縛写真「猿ぐつわと縄目」……
（伊吹真佐子嬢）
縛られた女優たち（場面集）……楓月太郎提供
東映「朝焼け富士」……三浦　光子
宝塚「題不詳」……尾上さくら
サジスチックな洋画スチール二題
伊映画「カルタゴの女奴隷」
米映画「異教徒の旗印」……久留木　栄
口責めと幾何学図形……三根　耕二
悲しきはマゾヒストの告白……山下　真一
性倒錯の男と女……久留木　栄
美容病院……椿　秋二
体験記「つばきの沼」……
「秘蔵の黒髪」……白金　紅次
ある夢想家の手帖から……沼　正三
「苦しみを求めて」（完結）……近藤　一
女性ホルモン服用の実験報告……波路　洋
再映画化作品について（2）……阿部　秀
私の本箱から……星　光一
ダイアナ夫人……乗杉　貴代子
妙齢美人の吊責め……岸本　青柳
ジェームス・ディーンの事……黒岩　縄一
残虐芸術展覧会……伊藤　晴雨
私のキタ・セクシュアリス……山本　節夫
創作「東京自殺クラブ」……南方　純
「跪いた勲爵士」の物語……菅　道夫
告白「アヌス自虐体験記」……保月　定吉
あらびやの奴隷市……泉　かよ子
不良グループの私刑……本田　由郎
アブ・モード・オール・スクラップ……
女はらきりの夢……矢桐　重八
雑報と雑感……藤山　秀緒
終戦奴隷（後篇）……沼　正三
マゾヒズムへのいざない……雪　俊
下着通信……天野　哲夫
特異な角度から（3）……山下　真一
「演出」……九雅　節夫
家畜人ヤブー（第十一回）……牧　高志
通信「最近号の感想と批評」……沼　正三
読者通信……近藤　一

〇十二月号（復刊第二十一号）【定価二百円】（〒8円）

口絵
責絵「蝶」（ハリツケ）……四馬孝・画
滝れい子画集……滝れい子・画
「夜の脱衣場」「マダム」
縛絵「ローソク責」……杉原虹児・画
映画紹介「縛られた女優たち」……阿部秀・提供
新東宝「修羅八荒」……遠山　幸子
大映「女狐屋敷」……近藤美恵子
写真「縛つた女体」……本誌写真部撮影
（くさり）（ボリウム）（凝視）（光沢）
洋画スチール二題
米映画「キング・コング」
米映画「壮烈カイバー銃隊」
「カラーシヤの教典」……西小路公彦
マゾヒズムへのいざない（……天野　哲夫
創作「ゆうべのお客様」……近藤　一
「麻生保氏の生活と意見」……麻生　保
「靴への愛慕と踏まれる喜び」……波路　洋
黒いペチコート……鴉嘔吐夫訳
屠腹乙女桜（前篇）……藤山　秀緒
家畜人ヤブー（第十二回）……沼　正三
ワイド映画の縛りシーン……峨蛾美也子
「逆比例」……牧高志・文画
ダイアナ夫人……乗杉　貴代子
危難に遭つた美貌の女……岸本　青柳
美容病院……久留木　栄
「非きもの読本」……白金　紅次
大衆小説の中から拾つた縛りシーン……山下　真一
残虐芸術展覧会……伊藤　晴雨
ある夢想家の手帖から……沼　正三
ある女給の体験（6）……日下　絹子
一輝亭続記……内田　武男
白人の娘のこと……樺田　荒夫
探ったい秘密……須藤　律夫
看護人……青葉　槙一
帝国海軍の私刑……香川　章二
「真実は誰も知らない」……辻村　隆
ナースと浣腸日記……岩村　美智子
ケンちやんのこと……柴崎　黎子
男奴隷のことども……皆川のぶ子
本誌紹介「緊縛映画一覧」……編集部編
読者通信……

〇新年号（復刊第二十二号）【定価二百円】（〒8円）

巻頭口絵
責画　木馬責の構想……久留木　栄

奇譚クラブ 復刊第二十六号 四月号 目次

表画「猿ガ島に捕われた令嬢」……滝 れい子・画
縛られた女優たち……阿部 秀・提供
新東宝「危し伊達六十二万石」北沢典子
松竹「若き日の千葉周作」高木悠子 東映「力闘空手打ち」
第三部、園ゆき子

絵口頭巻
四馬 孝画集 屋根裏の秘密室……四馬 孝・画
和装縛り 〃赤い扱帯〃……モデル……花坂道子嬢
緊縛フォート集「早春賦」……本誌写真部特写
「洋画スチール」二題……編集部選
米画 「ジャワへの順風」 米画 「肉の蠟人形」

『捕われの令嬢』……水沢雅美……18
＜緊縛女性に関する小品五題＞
十三人目の奴隷……夢原狂介……28
切腹雑感とその種々相に就いて……須藤律夫……38
私の訴える 愚者の言……貴山 茂……42
創作 被虐供養……青葉槙一……44
家畜人ヤプー……沼 正三……52
シナリオとその周囲……黒河徹也……66
美容病院……久留木 栄……72
千恵子より泰子さんへの手紙より
変ないたずら……三隅千恵子……81

魔境圏 No.8 (2)……土路草一……86
現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正……98
ジャーナリズムに見るコブロ趣味……とやま・かつひこ……100
（街に拾ったフェチシズム）
麻生氏の生活と意見……麻生 保……102
縛られ女優二十花選……南方佳男……104
ある夢想家の手帖から……沼 正三……108
日本印象記 ―外人の見た女はらきり―……南方 純……113
『忙中閑お慰み読本』……牧 高志……118
―縛り舞踊放談の巻―
「私のアイデア」磔縛り七態……奈加多須磨尾……122
時代小説 縄恋草紙……海野築郎……124
マゾヒズムへのいざない (7)……黒田史朗……130
創作 紅 山 彦……三条卓史……134
最近の時代劇の縛り映画から……嵯峨美也子……138
アイデア（棒を使用した女体拘束のアイデア）……久留木 栄……140
悦虐クラブ定例会報告……泉 かよ子……146
＜告白＞ 私の生い立ち……杉江美津子……156
緊縛映画速報欄……阿部 秀……160
読者通信……165
編集後記……176

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

滝れい子画集「女学生」「三十娘」
縛絵……杉原虹児画
写真……柱後手しばり……辻村隆構成
洋画スチール「女囚二一三号」より
「ニュー・ガールの緊縛模様」
新年の責めのアイデア……久留木栄
カメラと映画雑記……黒河徹也
カラーシヤの教典……西小路公彦
マゾヒズムのいざない……黒田史朗
「ボクの責め方」続稿……
マニア通信……宝塚二三夫
お灸通信　灸折檻と妻……伊吹寅太郎
映画女優緊縛に関する一考察……河村操
ある夢想家の手帖より……沼正三
女性ホルモン服用の実験報告……古井真哉
ブレさんの浣腸日記……岩村美智子
ナースの浣腸日記……伊藤晴雨
責物美人伝（腰元お菊）……久留木栄
美容病院……桂弥生
告白　墓情のあり方……
九雅節夫氏に寄す……佐々木ツトム
一三浦右衛門の最期……桂牧次郎
姫　鏡……近藤一
〝我が娘を鎖で監禁〟……青葉槙一
お伊勢参り……
〈創作〉鞭とナイフ……
時代小説「女賊変化」……海野築朗
〈手記〉私のいたづら……南時夫
麻生保氏の生活と意見……麻生保
〈マゾヒストの告白〉……
犬の生態……杉本真三
女体切腹秘話　愁風連……青山芳樹
奇ク十二月号雑感……楓月太郎
夜光る……辻村隆
生首礼讃……南方純
家畜人ヤブー……沼正三
雑報と雑感……沼正三
緊縛映画速報欄……阿部秀
読者通信……
編集後記……

○臨時増刊号（復刊第二十三号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵　責小説特集号

拷問……滝れい子画
吸血女流画家……北原純子画
ある奇術師の恋……滝れい子画
鬼兵衛刺青異譚……滝れい子画
遊女草水の最期……北原純子画
縛られた妻……滝れい子画
巫女屋敷の責絵巻……滝れい子画
賭拷問（特高刑事の惨虐行為）……片矢薫
犠（淫奔マダム狂騒曲）……二俣志津子
巫女屋敷の責め絵巻……岡田咲子
老いらくの恋異聞……榛ノ木参一
復讐のドラマ……片矢薫
鬼兵衛刺青異譚……二俣志津子
吸血女流画家……岡田咲子
ある奇術師の恋……吉丘垣根
惨虐戦慄用女工……片矢薫
遊女草水の最後……片矢薫
囚衣……古川裕子
奴隷妻……片矢薫
悪魔と口紅……桂牧次郎
悪女……岡田咲子
縛られた妻……阜川新二郎
廓の灯影……片矢薫
M……岡田咲子
S……竹谷十三子
責苦……岡田咲子
記録係……上村秀久
赤につかれた男……

○二月号（復刊第二十四号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵　責画

滝れい子画集……四馬孝画
「舞妓受難」……歌姫誘拐
「女体自刃」……〈滝れい子画〉
緊縛映画名場面集……阿部秀提供
「冥土の顔役」「危し伊達六十二万石」

緊縛写真……（本誌写真部特写）
ニュー・ガールの緊縛模様……編集部選
愛川悦子、大塚啓子、田中芳代
洋画スチール二題……
米映画「ポーリンの冒険」「追はぎ」
九五七年の時代劇映画から……南方佳男
美容病院……久留木栄
姉妹先生の惨虐な責め……岸本青柳
家畜人ヤブー……沼正三
少年褌美に関する構想……杉俊夫
黒の魅惑……須藤律天
被虐の一日……吉田慈一
病者の獄……青葉槙一
フアンドロナの女王……辻村隆
ある夢想家の手帖より……沼正三
大阪屋花鳥（女牢名主）……小坂多美枝
マヤの黄昏……山川和男
さんまをやく哀愁……鬼山絢策
現代マゾヒスム芸術時評……原忠正
街で見つけたフエチシズム……とやま
嵐の中の花……浦田紀夫
一見合写真の撮り方……牧高志
最近の縛りシーンから……嵯峨美也子
責物美人伝……伊藤晴雨
マニア通信……宝塚二三夫
磔刑と女優……奈加田須磨尾
探偵小説に現れた地獄絵巻……高崎勉
マゾヒズムへのいざない……黒田史朗
十三人目の奴隷……夢原狂介
麻生保氏の生活と岡見……麻生保
沼正三便り……沼正三
浣腸物語……朝霧幾代
臨時増刊号「責小説特集号」について……
滝れい子画「マゾヒズム画廊」……
読者通信……

○三月号（復刊第二十五号）

【定価二百円】（〒8円）

口絵　責画　蠟涙……四馬孝画

滝れい子画集　五輪塔……滝れい子画
写真「腰元折檻」後手吊責……村井知可子
ニューガールの緊縛模様……大塚啓子
縛られた女優たち……阿部秀
冥土の顔役、柳生武芸帳、大名囃子……
緊縛映画のスチール……藤本仙治
千原しのぶの巻
東映「快傑黒頭巾」「はやぶさ奉行」
シナリオとその周囲……黒河徹也
ガーベラの甘き香り……辻村隆
大阪屋花鳥（女牢名主）……小坂多美枝
家畜人ヤブー……沼正三
女体切腹　屠腹乙女桜……藤山秀緒
探偵小説にあらわれた地獄絵巻
江戸川乱歩の「盲獣」……高崎勉
緊縛映画誌上封切……阿部秀
「女体風俗」和装開眼の巻……高志
体験記　椿事……牧槙一
麻生保氏の生活と意見……青葉保
漁村風景（裸美雑記）……山口幸一
美容病院……久留木慈一
被虐の一日……吉田栄
昔物語にあらわれた男責……菅良太
十三人目の奴隷……夢原狂介
街でみつけたフエチシズム……とやま
現代マゾヒズム芸術時評……原忠正
映画通信「縛られた女優」……南方佳男
強盗事件に関する新聞記事……南時夫
女将と女装の種々責……岸本青柳
マヤの黄昏……山川和男
ある夢想家の手帖……沼正三
マゾヒズムのいざない……黒田史朗
マニア通信……宝塚二三夫
魔教団NO8……上路草一
初姿縛られた女優……大河原珠樹
読者通信……

猿ガ島に捕われた令嬢

<滝　れい子・画>

新東宝　「危し伊達六十二万石」　北沢典子

新東宝　「危し伊達六十二万石」　北沢典子

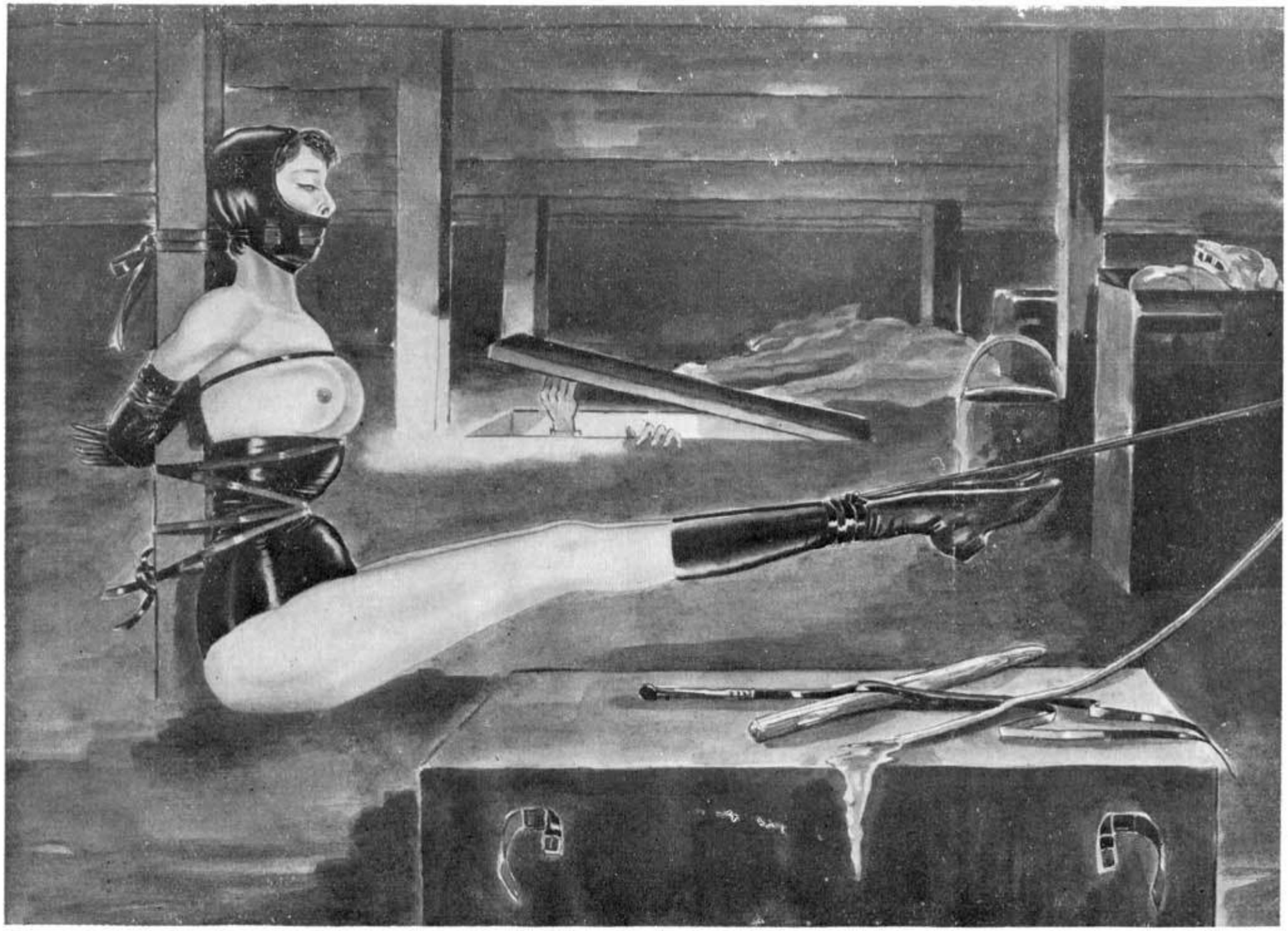
縛られた女優たち（緊縛

松竹　「若き日の千葉周作」　高木悠子

東映　「力闘空手打ち 第三部」　園ゆき子

屋根裏の秘密室

四馬 孝・画



薄暗い屋根裏に白く浮かんだ女体、長く引伸ばされた脚線、胸と胴を革紐でくびれるように締めつけられて膨れ上つた双つの乳房、頭から、すつぽりとかぶせられた革の猿ぐつわ、今将に、この屋根裏へ上つて来ようとする男は、果して何者？

和装縛り

赤い扱帯

——モデル——<花坂道子嬢>

早春賦

午前中は日本晴だつたが、モデル嬢が約束の時間より遅れた為、車へ現場へ急行した時は空一面暗雲が掩い、立春とはいえ空からは白いものがちらつき初めた。

車の中で暫く待機してカメラの準備やモデル嬢の化粧などしている中、時間が経つて夕暮が近くなり光線の状態は益々悪くなつてくるばかりだつた。それに木立の中は、驚くほど暗く、露出計の針は一向に上らない。大口径レンズの威力で、とにかくフラッシュなしでシャッターを切つたが、最初の計画の十分の一も進行させることが出来なかつたのは残念だつた。

後手に縛つて吊り下げるというようなことは、モデル嬢の協力があつて、如何に苦痛を辛抱してくれたところで、恐ろしく時間と手間をくうものである。

於・四条畷
本誌写真部撮影

……モデル……〈川辺砂登子嬢〉

『洋画スチール』二題

＜編集部選＞

米映画「ジャワへの順風」ヴェラ・ラルストン　F・マクレイ　主演

「この女を、どの鞭で責めてやろうか？」背後の鞭かけには夥しい鞭が並んでいる。サロンを經った土人女の恐怖の瞳

米映画「肉の蠟人形」ヴィント・プライス　フィリス・カーク　主演

自ら殺した美人を蠟づけにし永遠に弄ばんとする嗜虐の魔人、死美人を縛つて何をしようとするのか！

新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1958年 4月号

(第十二巻 第五号 通刊第百六号)

捕われの令嬢たち

△緊縛女性に関する小品五題▽

水沢雅美

その一　女子大生

それは、昭和十八年も秋深い頃だった。

「何だ何だ」

新宿駅の北口、出勤に急ぐ人の群が、思わず足を止めた。

なんの人だかり――と、

「どけっ、何をぶらぶらしとるかっ」

鋭い声、人ごみは一瞬『ザザッ』と下ったが、二、三歩、立ち止まって、なおも見詰る。

女だ！　憲兵に取り巻かれた女。それも縛られている。白のキッドの手套の両手を後手に。今どき珍しい、赤くルージュを塗った唇を噛んで。美しく整った白い顔は、血の気を失って青ざめている。長めの髪の裾は軽くウエーブし、黒色の上質のワンピース、肌色の絹ストッキングに黒のハイヒールのパンプスまで穿いている。まだ二十才そこそこの女。

「凄い別嬪じゃないか」

「今どきパーマまでしている」

「泥棒か」

「いいや、きっとスパイだ」

「そうだ、女スパイだ」

「だから憲兵までついているんだ」

「ああいう、お嬢さんみたいな奴が危いんだ」

ガヤガヤと、皆、思い思いにざわめく。

「みんな見ておけ」

憲兵の中の、指揮者らしい軍曹が喚いた。

「こいつはスパイだ。非国民だ。油断するとこういう奴がまだまだ出るぞ」

それから三十分後、

またしても一人の女が、同じ道を憲兵隊司令部へと引きたてられて来た。今度は、大柄な、年は矢張り二十一、二才であろうか。長い黒髪を後でリボンで結び、質素なスーツ、スカートに肌色の新しい木綿の長靴下、黒短靴姿。白の木綿の手套という質素な身なり。矢張り青ざめ乍ら落着きをみせた顔で、悪罵

を浴び乍ら両手錠、腰縄で引かれてゆく。

その朝、中野区のお屋敷町の中にある杉原邸は、思いもかけぬ客に眠りを醒された。

憲兵である。女中の取次に慌てて出た杉原夫人は、令嬢の郁子を出せといわれて茫然と立ちつくした。

取りすがっても、訳は云わない。突きのけて奥へ踏み込みそうな勢に、暫くの猶予を願って主人の達彦に相談する。しかし結局は、郁子を出さねばならなかった。

夢を破られた郁子は、流石にハッと青ざめた。しかし唇を噛むと

「行くわ、だから待って貰ってね」

「お前、何があったの?」

だが、郁子は答えぬ。流石にシュミーズを着る指が、わなわなと慄えいる。

玄関で憲兵が靴を踏み鳴らしている間に郁子は、顔を洗い髪を梳き薄化粧を済ました。

そして、口紅も赤く、一番上等のワンピース・ドレスを母に出させて着ると、絹の長靴下をピッタリ穿き、紅い環のガーターを留めた。白手套、ハイヒールで出かけるというのだ。

「お前!」

気も動転している母は、流石に呼びとめた。相手は憲兵、今どき、ただでさえ服装のやかましいときに。

「いいわ」

娘は唇を噛んでいい切った。

「何んだ。このざまは!」

憲兵軍曹が顔色を変えた

「よしっ、こんな非国民の娘には縄をかけろ」

こうして、まだ女学校を出たばかり、十九才の女子大生は後手に縛られた罪人姿で、引き立てられたのだ。

郁子は、何をしたのか。

何もしなかった。しかし、この美少女の若い胸は、自分たちの自由主義的な文学研究会が追求されたのだと直感した。

そして、それは事実だった。

郁子の女学校で、二年上級だった吉野登紀子。現在、小学校教師をしている登紀子が、はたして続いて検挙されてきたのだ。

拷問は、憲兵らの感情を害した郁子に、もっとも集中した。

逆吊り、宙吊り、鞭、鉄拳——そして何度か気を失い、流石に耐えかねて悲鳴をあげ、泣き呼ぶこの令嬢を苛みつくした。一方、グ

ループの中心と見られた登紀子も、同じように拷問、暴行を受けた。

郁子は、かたく猿ぐつわを嵌められ、手足をギリギリ巻きに縛されて柱に縛りつけられた。

苦痛、恐怖、絶望、屈辱、疲労、そして泣き声、呻き、身もだえ……。

だが、それだけではなかった。

身動き一つ許されない中に、生理的要求がヒシヒシと迫ってくる。体はガタガタと震え出した。真青な顔をゆがめ、屈辱に身もだえし、涙に溢れる眼で呻いて哀願する令嬢。憲兵たちはドッと笑った。

遂に自制が限界に達した。

生暖い液体が、女子大生、郁子の腰を、スカートを、絹靴下を、ハイヒールをグショグショに濡した。高慢なお嬢さんの自尊心は完全に打ち砕かれた。そして猿ぐつわの下で、眼に一杯涙をためてジッと見まもる吉野登紀子の前で、喪心したようにうなだれたまま、このお嬢さんの文学少女は自白を始めたのだった。

その二　婦人科学者

炎熱。

インド東部、アッサム台地の山中を、一群の隊列が重々しく進んでゆく。

銃、ターバン、武装した人々。

そして、その中に囲まれて、二人の異様な人影。

捕虜だった。両手を後手にロープで縛られ数珠つなぎにされている。

男と女。二人ともまだ若い。そして——日本人だ！。日焼けた顔をうつ向けてはいるがまぎれもない日本青年と日本婦人だ。二人は固く白布で猿ぐつわを嚙まされていた。淡緑色のカッターに同じ色のズボン、そして青年は、編上式の膝下まである黒革の長靴、婦人は同じく編上式のブーツ（半長靴）を穿いていた。

ピシッ！　鞭が婦人の背に鳴った。（早く歩け！）と云うのだろう。よろめく女。青年が後を振り返ろうとする。と、青年の肩に再び鋭い鞭。

二人とも、まだ若い。二十四か、五だろう。日焼けした額は、血の気を失って土色だった。婦人は、流石に眼に涙を一杯ためている。汗がグッショリと、カッターを濡し、泥と埃によごれ、処々、破れている——。そして鞭の跡か負傷か、二人共、白い腕に血がにじんでいる。

暑い、苦しげにあえぎ、よろめき乍ら歩みを移す二人。

と、一行の頭領らしい男が振り向いて何かいった。男たちは、捕虜の男女に白布で眼かくしをしてしまった。

行軍は続く。苦しげにあえいでは、立ちどまろうとする二人。鞭の雨。

やがて夜。

山中に岩かげに並んだ大木の根方に、二人はそれぞれ縛りつけられてつながれる。

一行は見張りを残し、焚火をして眠る。二人の男女はグッタリとうなだれる。だが、どうして眠れよう。

「ウウッ、クククッ」

女が猿ぐつわの下で、声をしのんでむせび泣き出した。息をするのも苦しい猿ぐつわ。身もだえして泣きじゃくる。

「ウウッ、ウウウ、ククック、ウウオーン、ウエーン、ククック」

青年が「ウウ」とうめいた。女は泣き続ける。そうだ。いま二人にとっては泣き声以外に、お互を結ぶものは何もないのだった。

青年は、東大研究生の天才科学者、川上幸雄君、女性は、その妻、同じ東大研究生の婦人科学者、川上和子さん、（ともに二十四才）だった。

二人は言語学の研究のためにインドへ留学アッサム地方に分け入ったのだ。処が、此処でケナヤ族のために捕われてしまったのだ。

青年科学者と、その若妻は、こうして惨たらしい捕われの姿のまま、八十キロの道を炎熱の下、拐われて行くのだった。

研究心に燃え、困難に打ち勝つ覚悟では来たものの、和子さんは根が良家のお嬢さん育ち、幸雄君もやはり坊ちやんだった。二人は猿ぐつわの下で歯を喰いしばり乍らも、絶望と苦痛に打ちひしがれた。ただ、二人が一緒だということ、それ一つで支えられていた。

和子さんの話

私は、もう本当に、打ちひしがれてしまって殆んど失神同様だったの。でも貴方がいるんだ。貴方が眼かくしされているけど、一緒に縄でつながれているんだと思って自分を励ましたのよそりやもう苦しかったわ。

眼かくしされる前は、貴方の両手が私の眼の前で後手に縛られているでしょう。それが、もう痛痛しくて悲しくて悲しくて。眼かくしされたら、本当に淋しくってやりきれなくなっちやったの。

で、ケナヤ族の村にやっとたどりついた時には、もう駄目だと思ったわ。そして、そこで二人、目かくしのまま別々にされて——もう本当にいっそ、ここで殺された方がいいとさえ思ったわ。それから、たった一人連れて行かれて、土牢へ放り込まれたの。眼かくしは、とられたけれど、猿ぐつわはそのままで両脚もグルグル縛られて岩の上に転がされてたのよ。

一日に一ぺんの食事——っていったって玉蜀黍なの。それと水を与えられるきり。その時だけ猿ぐつわを外されるのよ。いっそ、この口の自由なうちに、舌を嚙み切って死のうと何度も思ったわ。だけど、貴方がいる、まだ貴方と会えるかも知れないと思って、歯を喰いしばって我慢したの。だけど、もう貴方は殺されているかも知れないなんて思ってね。たまらなかったわ。ええ、泣いてたわよ。泣かずにはいられなかったわ。泣くまいと思ったけれどね。オイオイ泣けて来てしまったのよ。そしてね、——羞しいんだけど、みんな話すわね。縛られて転がされたきり、お小用もさせてくれないの。必死でこらえて、それから泣き叫んだけど、そのまま。とうとうズボンをグシヨグシヨにしてしまった時は、ほんとに情なかったわ。そうね、貴方と村へ着いたのが確か十七日の午後よ。それから二十日の夕方まで、そうして転がされていたのね。ええ、その間、拷問といえば、土牢に放り込まれる前にね、貴方と引き離されるのがいやで動かなかったのね。だから、打ったり蹴ったりされたけど、後はなかったわ。だけ

ど、たった一人で土牢に入れられたまま――本当に生きる希望どころか、完全に打ちのめされてしまったわね。

貴方と二人で捕えられたのが、十六日の朝だったわね。だから、まる五日、縛られ続けた訳ね。そして二十日の、そう午後四時くらいになる頃かしら、土牢から運び出されたの肩にかつがれて。

『もう駄目』って思ったわ。村の広場に引き出されて、中央の柱に縛りつけられて立たされたのよ。大勢、村中総出の中でね。もう半分以上、気を失ってたか知れないわ。きっとここで焼き殺されるんだと思ったわ。そして『死刑』の宣告ね。それきり、しばらく気が遠くなったわ。貴方の顔がボーッと霞んできたのよ。

正気に返ったら、縄が解かれているの。ハッとしたら、手足を押えられてシャツもズボンも脱がされるのよ。もがいたけど、女の力だし、縛られ続けていたから、自由が全然きかないの。そして、ナイロンの長靴下だけの裸にされてしまったのよ。それから又、高手小手にギッチリ縛りあげられてしまったの。思い出しても身振いする程くやしかったわ。そして大勢にとりかこまれて、刑場の崖へ引き立てられたのね。

幸雄君の話

ぼくの方も話そう。ぼくも、やはり土牢へ放り込まれた。その前に、縄を一たん解かれ鋼鉄の手錠、足錠を嵌められ、鉄鎖できびしく縛られたんだ。若し、あのままだったら、君もぼくも助からなかっただろう。だけど、どうしたわけか、翌日、拷問に連れ出される時、奴等は又、前のロープで縛ったんだ。奴等は、何といって弁明しても許さないんだ。何か企みがあってアッサムへ潜入したんだろうって云うんだ。君が殺されようとした時、同様の形で、ぼくも逆吊りの拷問をされたんだよ。何べんも気絶した末、ぼくが受けたのは石牢の中の水漬けだ。これは本当に苦しかった。手足を縛られたまま、立膝をついた形で冷い水にまる二日、浸されてたわけだ。体は冷えきって意識はなくなってしまう、革の長靴は水を吸ってグッと締ってきて、手足が痺れてしまった。しかも体をのめらせたら、水におぼれてしまう。君も、こんな目に会っているのかと思ったら、くやしくて涙が出たよ。そうして二十日だ。やっぱり同じ日だよ。ぼくは昼に引き出された。そして、あの村から約五キロ先の山の中へ連れて行かれたんだ。幸い言語学の専門なので、よく土人の云うことがわかった。虎が夕方になると出るので、その虎に喰い殺させるつもりなんだ。全く血の凍る思いだった。君の顔が目に焼ついて離れなかった。処が、奴等はぼくの縛しめをよく検査しなかったのさ。ぼくは水漬にされながらも、岩角に縄をこすりつけていたんだ。それで、奴等がぼくを山の中の大木に縛って逃げるように帰ると、縄目を切るために全力を振りしぼった。そしてやっと縄を切って逃げることが出来たんだ。君のことが心配でならなかったから、谷間をこっそり村に近いと思われる方へ下りた。処が谷川から見上げたら、君が高い崖の大木の枝から、逆吊りにぶら下げられてるじゃないか。

そうなの。ストッキングだけの裸の私を、崖の大木に逆吊りにしたの。それも、ただの逆吊りじゃないのね。後手の縛しめを足首の方へぐいっと引いて、体を弓なりにのけぞらしたのよ。苦しかったわ、一ぺんに気が遠くなってしまった。その途端――今から思えばしばらく時間があったか知らないけど――逆吊りのロープを切り落されたのね。そのまま谷底へ。一瞬、貴方の顔が浮んで、心の中で幸雄さん！って叫んだまま、それっきり何も覚えていないわ。

あの時、目の前が真暗になった。だけど、君の体が谷川の淵に水しぶきをあげた途端、助かる！と思った。それから夢中だった。崖の蔭の窪地で、君の体を一心にこすって人工呼吸して君が眼を開いた時、ぼくは思わず君を固く抱きしめた。――

その三　スチュアデス

羽田飛行場の午後。

日航機の出発が迫っている。

「なにをしてるのだろう？」

美貌、長身の若いスチュアデスは、いぶかしげに首をかしげた。

さっきから、どうもおかしい。と、いって一見した処、変った様子でもない。肥り勝ちの頑丈な感じの紳士。

大小のトランクを、しきりに開いたり閉めたりしているだ。それだけなら不思議とは云えない。だが、何だって、中のものを出し入ればかりするんだろう。

「お忘れ物ですか？」

そっと寄って声をかけると、相手はギクリとしたように振り向いた。その一瞬、スチュアデスの眼に映ったのは、一体何の器械だろうか。白い丸味を帯びた角型のもの、計器の蓋のようなもの、それ等をトランクに入れ換えていたのだった。

「いや、別に」

紳士は、殊更落着いた物腰で静かに打ち消した。だが、何か異様な眼光。

振り返るのは失礼だ。しかし踵を返し乍らフト彼女はそれとなく振り返って見た。チラリと会う視線。彼女は鋭い眼光に射すくめられて、思わず目を伏せた。

出発。さっきのトランクを受けとって、別の堂々たる紳士が機上へ乗り込む。今の紳士は見送りらしかった。

置いてあるのを発見した。用を済まして出てきた瞬間——何か白い布片のようなものが眼前へふわりと近寄った。強烈な臭い——美貌のスチュアデスは気が遠くなった。

それから十分。

やがて、機は出発し、非番の彼女が身仕度を整えに手洗所へ立った。ほんの数分間、いな数十秒の出来ごとだった。

彼女は、手洗所の入口に大型のトランクが頑丈な紳士は顔色も変えず。スチュアデスのすらりとした体を折り曲げて、大型トランクにつめこんでしまった。

軽々と持ちあげて——外へ。

数分後、一機のヘリコプターが羽田の空へ

飛び立った。

そして――その日の昼過ぎには、相模湾の上空で空中爆発の上、墜落した日航機の事件が報ぜられた。

羽田から北東へ飛ぶヘリコプターの中で、若いスチュアデスの恐怖に満ちた眼が大きく見開かれている。

スチュアデスはナンシー杉だった。米国に生れ、父の故国、日本に渡って来た彼女は、東京の大学を出ると、日航のスチュアデスとして、多くの女性の中でも最も優秀な成績だった。

だが、――思いもかけないこの運命。

ヘリコプターを操る。この頑丈な紳士は果して何者か。ナンシー杉は、まだ日航機の爆破は知らない。この紳士は明らかに、何ものかをたくらむものであり、それを目撃した彼女が邪魔であるに違いなかった。

ナンシー杉の白手套を嵌めた細そりした両手には、鋼鉄の手錠が固く嵌められ冷たく光っている。両手は背中に捻じ上げられ、細い手首に、腕に、麻のロープがギリギリ蛇のように嚙み入り喰い込んでいるのだ。ゲージの細かいナイロンストッキングをピッタリと穿いた、すらりと長い両脚も、足首に鋼鉄の足錠が嵌め込まれている。縄は、タイトスカートの上から太腿に、膝がしらに、膝下に、足首に、そしてハイヒールの靴先にまでからみつき喰い入っている。口には、アルミニウム球が一杯につめ込まれていた。その上を、革マスクの防声具が固くかけられ、完全に発声を不可能にしていた。彼女はグッタリとして座席の隅にうずくまっていた。

浅間山。

軽井沢の奥。夕暮近い山林の中の草原。

焚火か、白い煙が流れる。ヘリコプターは高度を下げた。

人影。

紳士は、ものも云わずナンシー杉の体を、太いロープを結えた。ヘリコプターから、ロープで地上へ吊り下そうと云うのだ。

美しいスチュアデスはヘリコプターから吊り下され宙にぶら下った。眼もくらむ思い。地面が迫って来る。そして、ドサリと投げ落すように草原に叩きつけられた。続いて通信筒が落される。

不良外人を主とする大盗賊団に捕えられたナンシー杉は、こうして、秘密を知っている者として彼等一味の手で拷問の上、その処女性を蹂躙されようとするのだった。

美しい二世の女と不良外人団、この山中の隠くれ家に巻き起される事件は、まだ世の誰も知らない。

果して、美貌のスチュアデス、ナンシー杉の今後の運命はどうなるであろうか。御想像下さい。

その四　花嫁

青木悦子は、冷いコンクリートの床に俯伏せに倒れたまま、さめざめと泣いていた。

純白のウエディング・ドレス、純白の長手套、白絹のヴェール、白一色の美しい花嫁姿のままの悦子嬢は、両手両脚をむざんにも縛り上げられているのだった。

楽しい希望の門出の絶頂から、絶望の淵へ。両親親戚は勿論友人達も、こぞって祝ってくれた式場から、ほんの一瞬、あっと云う間もなく人知れず攫われて、ここに投げ込まれたのだった。

（保夫さん――）

涙が止めどなく流れて、頬をすりつけているコンクリートを濡した。嗚咽が、猿ぐつわの下から漏れる。長手套の両手は、むごたらしく後手にギリギリからげられ、かき乱され捲り上げられたウエディング・ドレスの裾からむき出しにされた太腿のストッキングの下に深く嚙み入っている縄の痛々しさ。

若い令嬢の花嫁は、屈辱と絶望に打ちひしがれてグッタリと横たわる。

やがて、頑丈な木の扉が開いて現れた男、思わず悦子は、あッと驚きの声を挙げた。

「あッはゝゝはあ、悦子嬢誘拐の張本人が、この俺だとは誰も思うまい。しかし、今は違

う。あれ程君に執心した俺だが、今では可愛さ余って憎さが百倍、さんざん弄んだ上で、香港かマカオあたりでも淫売婦として叩き売ってやろう。俺という男は最初からそんな男なんだ。」

悦子が保夫と婚約する前から執拗に結婚を申込んできた第三国人の貿易商林だった。男は頬にある刀傷をひきつらせながら惨忍に微笑をさえ浮かべて、縛られた悦子の側へ近づくのだった。

今日こそ晴れて相思相愛の保夫と結婚式を挙げる人生最高の喜びから、急転直下、可憐な悦子は色魔の虜になってしまったのだ。

「その花嫁衣裳が役に立たなくなって、お気の毒さまだが、そのかわり、この俺が一夜の新郎さまになってやろうかね」

ムクツけき触手が後手に縛られて身動きも出来ない悦子の上に迫ってきた。

「いや、いや、いやッ、誰か、来てッ」

紙をさくような悲鳴がコンクリートの壁にこだましたが、この地下室へ助けに来る人の気配さえなかった。

髪に挿した花が床の上に散っていたましさを加えている。

潮の香に混ってヒタヒタと波打つ音がコンクリートにじかにつけた耳に聞えてくるところを見ると、ここは港の岸壁に沿った倉庫の地下室でもあろうか。どうせ林が手下の不良仲間に金をやって仕組んだことだろう。次第に落着を取り戻した悦子の頭の中で、そんなことを考える余裕が出来た。

それと共に後手に縛られた細引の縄目が肌に喰い込んで痛さが増してきた。思いきり背中へ曲げられた肘も鈍い痛さに耐えきれなくなってきた。しかし、それ以上に耐えられないのは、冷たいコンクリートに投げ出されていたので冷えきった全身に悪感のようなものが走ってきたことだ。思えば、式場へ入る前の一とき、仕度部屋から一人でトイレへ行こうとしたところを何者かに拐れてきたのだから、もうあれから、二時間以上も辛抱しているのだ。

一旦感じ出すと更に一層尿意が激しくなってくる。この生理的要求をどう処理しようかということが今の悦子にとっては急務になってきた。恐ろしい林の企みさえも、一瞬、悦子の頭の中から忘れ去ろうとする位だった。

この時、乱暴な手でヴエールがはがれた。

「はゝゝ、観念して大人しくなったナ、どんなに叫んだって、ここは人の来るところじゃないからな、まあ、素直に俺の云うことを聞

くというのだったら、淫売婦に叩き売るのだけは勘忍してやってもいいのだぞ」

覗き込む林の淫らな眼は、恰かも悦子の心中を見抜いたものの自信さであった。保夫という婚約者を持ちながら悦子は、屈伏してしまうのだろうか。

遠くで汽笛が長く尾を引いて響いた。

その五　オールド・ミス

茅野裘佐子は、椅子にきびしく後手に縛りつけられていた。

緑色のワンピースのふくよかな胸に、ブラジャーからこぼれるように乳房が盛り上っている。双肌ぬぎになった白い肩は、シュミーズの紐が落ちかかり、悶える度にネックレスが揺れる。

椅子の後へ廻されて、重ねて固く縛られた白のナイロン手套の両手。

うなだれた顔に、長い髪が乱れてかかり、額はゾッとするほどの青白さは、こうして捕われの身になるまでの驚愕をあらわしているかのようである。

年齢よりも、ずっと若々しく見える豊かな頬は血の気も失せ、怒りと恐怖のためピリピリと痙攣している。呆然と大きくうつろに見開かれた眼、絶望と屈辱と苦痛とにゆがんだ受口の唇。

スカートはむざんにも捲くり上げられ肉づきのよい太腿はむき出しにされている。両足は椅子の脚の両脇へしっかりと踏まえているのは、この娘の並々ならぬ気丈夫さを示しているのかもしれない。

太腿のつけ根近くまでピッタリと穿いたウーリーナイロンのストッキングの右足は、ガーターで吊った処でストッキングが切れ、ゆるんで膝頭までずってしまっているのも痛々しい。ぽってりと白く脂ぎった肌がガーターの間から電燈の光にまぶしく光っている。

膝下でもう一つ紅いガーターで留めているが、ストッキングが脛、足の甲あたりでシワになっているのは今迄の抵抗の激しさを物語っている。靴先と踵のあいたサンダル風のパンプスがきちんと両足揃って穿いているのがかえってこの際みじめさを添える。

女は銀行員だった。東京、山の手の良家の娘に生れた美貌の令嬢だが、もう三十三才、娘時代を戦時中に過した為と、斜陽族であることが煩して、まだ独身だった。それだけに三十娘特有の脂の乗りきったボリウムのある肉体、教養のある落着いた物腰だが、今はこ

のインテリーのサラリーガールも、一個の荷物のように椅子に縛りつけられているのだった。

後手に縛られた縄は椅子の背にギッチリと括られているので、両足は自由だったが立ち上ることも出来なかった。

「どうだい？　決心がついたかね、お前の勤めている銀行へ、この俺たちを手引きさえしてくれりゃ、このまま無疵の身体で家へ帰してやろうというのだ。何もお前に仲間へ入れとか、金を盗んで来いとか、いうのじゃないんだ。どうだ、うんというか」

かたくなにムンとつぐんだ口のあたりを邪慳に手荒くこずいた隼の健は、女が一向に返事をしないので次第に持前の惨忍さを表面に出してきた。

「下手に出て大人しくしてりゃ、つけ上りやがって。よし、そっちがそのつもりなら、身体を傷めつけてでも、うんといわして見せなきゃ、おいらの顔が丸潰れだ」

健が机の抽出をごそごそいわして取り出したのは、二本のヤットコだった。

くわえた煙草を床に叩きつけると棚で埃をかぶっていたトーチランプの把手をヤケに押してマッチの火をつけた、シューという焔を噴く音が室内の静寂を破って恐ろしく大きく響いた。

悪魔の手に落ちた茅野裕佐子の運命は？

捕われの令嬢は悪魔の手で蹂躙される運命にあるだろうか。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十五号を数えましたが、現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号（30年10月号）〈売切〉
復刊第2号（30年11月号）〈売切〉
復刊第3号（31年4月号）二百円（送16）
復刊第4号（31年5月号）二百円（送8）
復刊第5号（31年6月号）二百円（送8）
復刊第6号（31年7月号）〈売切〉
復刊第7号（31年8月号）〈売切〉
復刊第8号（31年9月号）二百円（送8）
復刊第9号（31年10月号）二百円（送8）
復刊第10号（31年12月号）二百円（送8）
復刊第11号（32年1月号）二百円（送8）
復刊第12号（32年2月号）二百円（送8）
復刊第13号（32年3月号）二百円（送8）
復刊第14号（32年4月号）二百円（送8）
復刊第15号（32年6月号）二百円（送8）
復刊第16号（32年7月号）二百円（送8）
復刊第17号（32年8月号）二百円（送8）
復刊第18号（32年9月号）二百円（送8）
復刊第19号（32年10月号）二百円（送8）
復刊第20号（32年11月号）二百円（送8）
復刊第21号（32年12月号）二百円（送8）
復刊第22号（33年1月号）二百円（送8）
復刊第23号（臨時増刊号）二百円（送8）
復刊第24号（33年2月号）二百円（送8）
復刊第25号（33年3月号）二百円（送8）

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は三冊以上まとめてお申込の方には送料は当方にて負担いたします。六冊以上一緒にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキャビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。

十三人目の奴隷

夢原狂介

フアッション・モデルという好餌に欺まされて、私とお嬢さんとは人身売買団の為に捕えられてしまいました。百五十万円という金で私達が奴隷として売られた先は、豪荘な邸宅の持主でした。そこで私達は最初、賓客とし　予想外の待遇を受けました。

私達は給仕女の案内でこの邸の主人の部屋へ連れてゆかれました。この主人は、私達に対して「人工の美は倦きたから、自然の美を探究するため自分に協力してくれ」と言うのです。そして承諾してくれれば、一人に五十万円ずつ渡し、しかも毎月三十万円を送金すると言うのです。

この時、例の給仕女がお茶を運んで来ました。そしてお茶を配ってしまうと、主人である男に蹲いて、その足に叮寧な接吻をして出てゆくのです。この光景を私達は呆然として眺めていました。

すると男は

「御覧の通り、あの女は私の奴隷なんです。あの女も初めは、私の持論に反対でした。そして私の要求を拒んだのです。そのため私は不本意ながらも、あの女に奴隷の罰を加えたのです。奴隷にされた以上、主人の命令には絶対服従するのが世界の掟です。あの女もそれを悟って、今では私の命ずるままになりました。それから来賓として初めて来られた方には、必ず足に接吻を差上げるように申付けてあります。……あ、そうだ。あなた方も定めし、あれの接吻をお受け下さったでしょうね」

私は思い出しました。あの女がちょっと頸を伸ばすようにしたのは、そのためだったのか。でも女は、何んと思ったのか接吻はしなかった。

「足にキッスなんかして頂かなくても結構ですわ」

「何、キッスをしなかった。私がそばにいないとすぐそれだ。横着な奴だ。後でうんと懲しめておきましょう。」

私は気の毒に思って

「でも堪忍してあげて下さい。忘られたんでしょうから……」

「いや、そうはゆきません。法律を忘れていたから罪を犯しても無罪というわけにはゆきません。それと同じですよ。この邸では私の命令が法律なのです。憲法です」

と、むきになって云うのです。私は内心おかしくなって来ました。現在、自分が法律を犯していながら、何と云う好い気な事を図々しく放言する男だろう。真面目になって聞くのが馬鹿馬鹿しいと思いました。男は又、話を元に戻して

「どうです。私に協力してくれませんか。そうすれば、あなた方は思い通りの贅沢が出来る上に、お国元へも大金を送れるし、全く願ったり叶ったりでしょう。あなたのような美しい方こそ、女性の極致美に深い理解と、そして真摯な研究心を持つ私に、その身体を提供するのが運命でもあり、光栄であると信じますが……」

全く私達を馬鹿にしたようなことを、しやあしやあと立板に水のように云うではありませんか。私は余り腹が立つのて

「あなたと云う方は現在、法に触れることをしていながら、よくもそんなことをおっしゃいますのね。もう、お話などは聞きたくありません」

私は、男の顔を見るのも厭になって、横を向いてしまいました。

「では、どうしても私に協力するのがお厭だとおっしゃるのですね。じやあ、仕方がありません。私は出来るだけ円満に事を運びたかったのですが、やむを得ません。私は大金を出してあなた方を買ったのです。私はあなた方の所有者です。その所有者の要求を拒むのなら、あなた方に対する賓客の礼遇を即座に停止した上、罰として今から奴隷として生涯、この邸につながれて、死以上の辱しめを受けるのです」

私は思いました。この男の目的は、私達を苦しめることにあったのです。協力だとか云っても、それは單なる言葉のあやであって、協力しても、しなくても、結局は男の意思通りにならねばならないことを承知の上、今までくどくど喋っていたに過ぎません。その間

に私達が苦しむ精神的な悶えを眺めていたかったのです。それは丁度、猫が捕えた鼠を殺すまでの間、おもちゃにして楽しむのと同じ心理だと思います。考えると、この男の惨忍性が底無し沼のようで怖しくなって来ました。でも、私達は所詮、袋の鼠で、どうすることも出来ません。幾分、自棄的になって思わず

「知りません！　人でなし、勝手になさい！」

と云い放ちました。すると男は、傍の柱にある釦を押しました。間もなく、異様な姿をした大男が二人ぬっと現われ、主人の男に頭を下げてから私達のそばへ、ずかずかと寄って来ました。椅子を離れる間もなく、その男達によって私達は両手を後に縛られて、背中をこずかれながら別の廊下を通って曳き立てられました。こうして私達は、再び以前の状態に引戻されたわけです。世にこれ程、無法なことがあるでしょうか。私達は今更ながら自分の運命を呪わずにはいられませんでした。連れてこられた処は、鉄柵で囲まれた檻のような部屋でした。その中へ私達は入れられました。「あっ」と驚く私達を尻目に、錠を下して男は去って行きました。私は、お嬢さんと抱き合って、暫くは声も立てずに泣き崩れるのでした。

それから凡そ一時間位、経った頃、頭巾を冠った人が檻の前に立っているのです。私達は「ハッ」と身を竦めていると、その人は錠をはずして中へ入って来ました。そして、お嬢さんの二の腕を摑んで外へ連れ出しました。私は、ひょっとすると救いに来てくれたのかもしれないと思いましたが、薄暗いのでよく判りませんが、その人の態度から考えると、すぐ、そうでないらしいことが判って、がっかりしました。

やがてその頭巾は、お嬢さんに

「お前の着ているものは皆、脱いでこれを着るんだ」

と、傍にあった服を投げつけました。その声は忘れもしない、あの八番頭巾の声でした。お嬢さんは、八番頭巾が手にした鞭をひゆうひゆう鳴らすので、怖いのか素直に着更えていらっしゃいました。しかし、その着更えの間でも、女性として聞くに堪えないような暴言を、お嬢さんに浴せるのです。それは、とても今ここで口にするのも恥しい事ですので、御想像下さいまし。着更えの終ったお嬢さんの次は私の番です。同じように着更えたのですが、何分にも木綿の袷では、この寒さが防げる筈もありません。二人ともブルブル震えていました。そして八番頭巾は、邪慳に私の腕を摑んで壁際に立たせました。そして、かかっている鎖の輪を私の両手首にパチンと嵌めてしまいました。私は泰西名画にある『アンドロメダ姫』のような姿勢で吊られたのです。勿論、お嬢さんも同じです。すると八番頭巾は別の鎖で、お嬢さんの左足首と私の右足首へ『二人三脚』のようにガチャリと嵌め終って

「さあ、これで仕度が済んだから、これからお前達は、御主人様に奴隷の誓いを申上げるんだ」

と云いました。私は腹が立って仕方がありません。こんな惨めな目に遭わした上、望みもしない奴隷だ等と勝手に決めて、人を馬鹿にするにも程度がある。誰が誓いなんかするものか、殺されてもいい、あの男、いや、あの獣を思い切り罵倒してやるのだと考えましたが、しかし冷静に考えると万一、、私の身に変った事があると、後に残ったお嬢さんが唯一人でどうなさるだろうと思うと、余り思いきった事も云えず思案にくれました。八番頭巾が

「それでは、お願いしようかね」

と云うと、暗い処から二人の男が出て来て私達を鞭で追って引き立てて行くのです。二人三脚ですから、ともすれば倒れそうになります。やっとのことで、廊下ずたいの一部屋に入ると、板造りの粗末な椅子に坐らせました。その前には小さな卓があって、一段高い所に大きな椅子が主待ち顔にポツンと置いてあるだけで、全く冷い雰囲気の漂う部屋でした。暫くすると前方のカーテンが、さーっと

開かれて主人の男が、その椅子にどっかと腰かけて、やがて取出した煙草に火を付けながらギヨロリと凄い眼で私達を見下して
「どうだね、二人のお嬢さん。なかなか素晴しいとは思わないかね。その衣裳の着心持はどうだね。サラサラと涼しくて気持がいいだろう。それに、日本中を探してもない大きなアクセサリーを付けて貰って全くよく似合うよ。お前達も、これで自分が奴隷であることを認めただろう。それで今度は、認めた証拠を私に示さねばならない。その方法として、お前達はこの通りに私に云うのだ」
と、何か書いた紙片を私達の眼の前に突きつけました。黙読すると
「私は、貴下の奴隷として、私のすべてを貴下に供して、奉仕すべき女であることを誓います」
と書いてありました。全く私達を侮辱するのも甚しい文章です。私は体中の血が逆流する思いでした。お嬢さんも、悲憤の涙をこぼして俯向いていらっしゃいました。
「あなたという人は、こんな馬鹿げたことを書いて、私達が承知すると思ってらっしたのね。封建時代じゃあるまいし、今時、そんな文句が通用すると思ってらっしゃるの。馬鹿馬鹿しいにも程度がありますわ」
この言葉に、さすがの主人も気にさわったのか
「何をっ！ 世間がどうあろうと、俺の世界は俺が自由にするんだ。貴様のような奴隷女から文句を聞くことはない！ 曽て俺は、この女の母親から癒し難い侮辱を受けたのだ。それでも俺は水に流して紳士的に話してやるのを甘く見るのか！」
主人は私達の後に立っていた男に何か合図をしました。と思った一瞬、背中に焼けつくような痛みを覚えました。そして、苦しい中で私は考えました。母親から侮辱云々とは一体、何を意味するのかしら？……。そこで、やっと思い出しました。それは、お嬢さんの留守の時、中年の人が奥さんに叱られるようにして帰って行くのを見た時の出来事。そうだすると、あの当時から既にお嬢さんを狙っていたのか、何んと執念深い男もあるものだ。その時の恨みを再び思い出しているのであろうか。とすれば、復讐と慾望の二筋道で私達を誘拐したのかと考えると、底知れぬ恐怖にかられるのでした。それに、も一つ、主人の男が誰かの顔に似ているようにも思えるのです。
「俺の命令に背けば、必ず痛い目を味わねばならん事が、これで判ったろう。奴隷のくせにそうでないと云うならそれでいい、貴様が奴隷だと自覚するようにしてやるぞ」
と、私達を睨みつけました。それから私達は部下の男に曳き立てられて、地下室のような処へ連れて行かれました。そこは、一米四方にも足らない鉄柵に囲まれた檻のような処です。一人の男が、この檻の一部を持って上に引張ると丁度、鳥籠のようにパクリと入口が開きました。やがて私達は、鎖のついた首輪を嵌められ蹴とばされて、ジャラジャラと土間を引きずる鎖の音と共に、その中へ入れられてしまいました。この浅間しい姿を御想像下さい。まるで犬です。中が狭いので身動きも出来ません。すると男は、私のお尻を鞭の先で、こずいて
「この牝の方が尻の肉が締っているぜ」
と、悲鳴をあげる私の苦悶の様子を面白がっています。そして今度は、他の男が鎖をぐんぐん引張るので、嫌でも応でも顔を入口の方に向けねばなりません。それのみか、その鎖をぐいぐい引張る度に、檻の中で私は丁度蟇のように顔を斜め上にした恰好で、男の眼に曝されねばなりません。
「おい、手前も、ちょっと踏める面じゃねえか。そんなに目をつぶらないで笑って見ろよ。それとも寒いか、道理でブルブル震えていやがらあ、よしよし、今に暖くしてやるから」

と云うと、今一人の男の耳へ何事か囁きました。私は、どんな事をされるのかと不安に怯えていると、二人の男は私の檻を挾んで向い合せになりました。そして一人の男は、俯向けになった私の上で、クスクス笑い出しました。と突然、私の背中に細紐を引きずるような感じがしました。ハット思って背中へ手を廻したが、別段、何もありません。変だなあと思っていると、今度は、お腹の辺りがむずむずするのです。私は無意識に手をやった途端「キヤッ」と叫びました。大きな蜘蛛が、毛むくじゃな細長い脚を一杯に拡げて蹲いているのです。田舎育ちの私は、蛇をそれ程恐しいとは思わない癖に、蜘蛛と見ると身の毛のよだつ位、気分が悪くなるのです。その蜘蛛が現実に自分のお腹の上にいるのです。私は無意識に払除けようとしたのですが、手首にも鎖がつけられているので手を動かすことは出来ません。身体をもじもじして蜘蛛を取除こうとしますが、一向に逃げ出す気配はありません。男達はニヤニヤ笑い乍ら

「どうだい、少しは暖くなったかい」

といって私の身体を、鞭の先で弄り廻すのです。私は狭い檻の中で、悲鳴をあげて転り廻りました。その中に、蜘蛛をお尻の下敷にしてしまったのかも知れません。やがて、お尻から太股の方に、一面に気味の悪い感覚が拡がってゆくのを覚えたまま、意識が朦朧となって気を失ってしまいました。

やがて私は、男の声に気づきました。それは主人の男でした。

「どうだね。犬猫にも等しい奴隷であることを、身を以て経験したろう」

と、憎々し気に云うのです。私は実の処、先程のひどい責めに、最初の決意もくじけて、もう降伏してもいいと考えたのです。でもお嬢さんはどうかしらと思って、ちらっと見ると、私の意中が通じたものか目をパチパチさせて首を縦に、ちょっと振られました。お嬢さんさえ承知なら少しも早く、この責めを逃れたい一心から、こくんと肯きました。

「判ったか、おい出してやれ」
傍の男は檻の戸を引上げて、私達を出しました。私は、ほっとした思いで立とうとすると、主人の男は
「俺が許すまでは、四つ這いになってるんだ！」
私達は首輪についた鎖を傍の男に握られて、犬のように主人の前にしゃがんでいるのです。すると主人は、さっきの紙片を又、出して
「さあ、この通り一緒に声を出して読み上げるんだ」
もう、こうなっては仕方がありません。恥を忍んで読みました。
「そんな小さな声じゃ聞えないぞ。もっと大きな声を出せ」
と怒鳴ります。私達は又、読みました。
「貴様等、その軀でそんな声しか出せないのか。出せるようにしてやろうか」
と鞭を振り上げますので、私達は必死になって大声で叫びました。そして、やっとのことで許されたのですが、その無念さ恥しさといったら、たとえようもありません。そのままじっと俯向いていると、今度は
「奴隷の作法を覚えて置くんだ」
と頭髪を掴んで、私の顔を自分の足にすりつけ
「叮寧に接吻するんだ」
と云うので、私達は、心の中で泣きながら主人の云う通りしました。これで私達は、暴虐な男から強要されるままに、一方的な誓いを立てさせられました。そして、この男が云う奴隷なる忌わしい名の女に突きおとされたのです。
私達は今後どんな厭なことでも、そしてどんな恥しいことでも素直に受けねばならないのかと思うと、生きていることさえ嫌でなりません、それからと云うものは二人共歎きの日を送っていました。
二日ばかり経って或る日のこと、部下の男が私達を曳き立てて、見晴しのよい部屋に連れて来ました。外の景色を見るのが今が初めてです。真っ先に眼に映ったものは、果しない海でした。しかし、どこの海か判りません。舟の蔭も見えませんし唯波頭が弱い冬の陽にキラキラ輝くだけで全く静かな風景です。きこえるものはガラス越しに波の音が微かに耳に入る位のものです。どこかの海岸かと思って窓の下に眼をおとすと、目の下は広い空地で、そこはどんなことに使われるのか判りません。目を転じて反対側を見ると、樹木が処々にあって公園のようです。泉水もあるようです。私はこの様子を見て、この邸がとても広い地面に建っていることを想像しました。それに、見慣れない巨大な樹木がギッチリと生い繁って、梢の先が窓の直ぐ下まで伸びている位です。私は、この巨大な樹木が植えつけたものではなく、自然に生え育ったように思われました。海の色や波の具合を見ると、内海とは少し違うようです。すると裏日本か、それにしても、こんな大きな樹があるのは変だ。こんなことを考えている時、ドアーが開いて主人の男が一人の部下を連れて這入って来ました。その男は、何が入っているのか、小さな木箱を両手で大事そうに抱えているのです。とに角、又、私達に何かしに来たのに違いありません。主人の男は、お嬢さんに
「おい、上衣を脱げ」
と、突然に云いましたので、お嬢さんはビックリなさって、その男の顔をまじまじと見て居られました。上衣を脱げば下は素肌ですから無理もありません。お嬢さんは、もじもじしていらっしゃるのです。
「早く脱ぐんだ」
男は急き立てます。お嬢さんは仕方なく、眼を閉じて脱ぎました。三方硝子張りの室内です。朝の光が室一杯に差し込んで、眼が覚める程、明るい中にお嬢さんの白い肌がまぶしい程輝いています。湯上りの肌に粉白粉を刷いたような美しい胸に静脈が淡く浮出

ているので、心持ち青白く見えます。乳房が前方に向ってむっちりの張出し、その先っぽに淡紅色の乳首がつつましやかについているのが、白い乳房を一段と美しく見せます。やがて主人の男は、お嬢さんを傍に立てかけてあった巾五十センチばかりの部厚い長い板の前に立たせました。私は身長でも測るのかしら、それにしては裸にするのが変だと思って見ていると、傍の男に合図したのです。するとその男は、丁度お嬢さんにその板を背負すような恰好にして頸と下半身をぐるぐる巻きに縛りつけるのです。そのために、お嬢さんは俯向くことも出来ません。眼を閉じて、じっとして居られますが、心の騒ぎが露わな胸に盛り上っている二つの乳房に現われています。

さて、主人の男はお嬢さんの傍へ私を立たせてから、お嬢さんに向って

「お前達は、俺の奴隷であることをハッキリ認めたのだから、それを永久に忘れぬよう、今から生涯消えない印をつけてやる」

と云うのです。そして私を振返り

「この奴隷は、お前の主人だから、お前はこの主人の印を見て、お前も奴隷であることを忘れぬようにするんだ」

と私に云いました。私はお嬢さんが気の毒でなりません。

「お願いします。勘忍してあげて下さい。その代り私に、しるしを入れて下さい。お願いします」

と哀願したのですが、

「お前は黙ってろ！」

と突放されました。お嬢さんは

「いいのよ、仕方がないわ」

と悲しそうに、おっしゃるのでした。

私は、この男はどこまでも残酷に生れているのかしら、お嬢さんの美しい肌へ、刺青かそれとも烙印を——。この美しいお肌も今限り見納めになるのかと思うと、堪らなくなって再び哀願しました。

「ね、お願いします。どうぞ、私の肌に入れて下さい。あなたのいいと思われる処へ、例えどこへでも厭とは云いません。全身に入れられても構いませんから、お嬢さんにだけは許して上げて下さい」

と必死で頼みましたが、
「ならん、それよりもお前は、この奴隷の肌を今のうちに見ておくのじゃ。しかし俺は、烙印のような醜い痕を残すような非芸術なものは嫌いじゃ。又、刺青のような不鮮明なものは好まん。俺は、俺独特の方法によって入れるんだ。この方法で一旦入れたものは、焼かれても肌に残る位、強烈な作用で肌に喰い入るのだ」
やがて男は、傍の男に命じて、お嬢さんに目かくしをしました。そして私も後手に縛られて、傍へ立たせられました。
すると男は、例の本箱から小さな瓶を五、六本取出して、そのうちの一本をコップに注ぐのです。そうして、その上に又、その小瓶の液体を三分の一ばかり入れました。すると白い煙がふわりふわりあがると同時に、鼻を刺す激しい臭が室内にたちこめました。しばらくして、別のコップへ別な瓶の液体を注いで、その上に初めの液体を少量入れます。そして今度は新しいコップに又、液体を入れてその中へ別の液体を二、三滴ポタポタと落し込みました。それを傍の男が、ガラス棒でゆるやかに掻きまぜているのです。やがて今一人の男が、ゴム板のようなものに、絵とも字とも判断のつかない形に長短、様々な形の孔のあいたものを取り出して、お嬢さんの胸へピッタリと押し当てるのです。その一瞬、お嬢さんはビックリなさって、頸をちょっと反らすようになったのが気の毒でした。一人の男は、スポンジへ一番後に作った液体をしみ込ませて、ゴム板を擦るように撫ぜてゆくのです。お嬢さんは痛いのか、それとも気持が悪いのか、折々、口を微かに開けて頸を左右に捻じるようになさるのです。それが済むと主人の男は、木箱から出した三つの小さな壺の一つへ、綿のような穂先の筆を突込んで、それを又、ゴム板の処々へ塗っているのです。ここで男達は、そのゴム板をお嬢さんの胸に押し当て、縄で縛りつけて一休みするのでした。しばらくして今度は初めに作ったコップの液を、再びゴム板の上から押付けるようにして塗り込んでいました。すると急に、お嬢さんの顔が赤くなって来て「あっ、熱い、熱い」と叫ばれて、前よりも烈しく頸をお振りになるのです。私は思わず目をつぶりました。「お嬢さん、しっかりして下さい」と心に念じて目を開いた時は、もう終っていましたが、お嬢さんは首縄のままで、がっくりとなっていらっしゃいました。やがて男達はゴム板を外して縛ったままのお嬢さんを、部屋の外の縁側に運び、日光に晒しました。しかし、お嬢さんの肌は以前と少しも変りません。それにしても、十二月のこの空気に裸身を晒されていらっしゃるお嬢さんのお気持を察して、お気の毒で堪らなくなり、頭がヅキヅキ痛みました。それから私だけが、馬小屋のような部屋へ戻されて、頭を抱えてうずくまっていました。二時間位経ったと思われる頃、お嬢さんがしょんぼりと戻っていらっしゃいました。そして小声で
「ねえや、あたし、とうとうこんな身体になってしまいましたわ。もう、お家へは帰れないし、帰りたくないの。それで、ねえやだけは、あたしのことは構わずに、機会があったら逃げて頂戴」
と、淋しそうにおっしゃるのです。
「お嬢さん、何をおっしゃるのです。そんな気の弱いことで、どうなさいますの。それにお嬢さんを残して、どうして私が逃げられましょうか。ね、お嬢さん、お願いです。そんなことをおっしゃらずに、時期を待ちましょう。神様がきっと助けて下さいますわ」
私は、お嬢さんの肩に手をおいて励ましました。すると、お嬢さんは
「でも、こんな身体で、どうしてお家へ帰れると思うの。あたし、そんな恥しい思いをする位なら死んだ方がましだわ。ほら、こんなにひどいの」
と御自分で胸をはだけて、私にお見せになりました。私は
「あっ」

と思わず叫びました。あの美しい雪のような肌をしていらっしった、お嬢さんの胸に血のような赤いハートが描かれて、その中へ『奴隷第十号』と青色で書いてあるのです。そして、ハートの周りを太い鎖が、黒色で取り巻いているのですが、それだけではありません。ハートの下の方に横書で「限りなく、あなたの愛に隨喜する私」と書いてあります。何という、けがらわしいことをする淫獣でしょう。私は、お嬢さんに縋りついて泣きました。私の涙が、お嬢さんのお乳の上に落ちましたが、お嬢さんは拭おうともなさらずに

「ねえや、泣かないで、泣くと、あたしも泣けそうになるわ。あたしは、こんな目に遭う運命だと諦めているの。ねえやこそ、しっかりして頂戴」

と、矢張り半分泣いていらっしゃいました。消えるものなら、なんでもないのですが、強い薬と太陽の光で焼付けられ、肌の深部に喰入ってしまったものが、消える筈もありません。お嬢さんも私も、くやし涙にくれるのでした。

こんなことがあった、その翌々日でした。昨日の雨が上って空も晴れていますが、それだけにちょっと風の強い日でした。邸の奴隷達が集められました。私達を入れて十二人でした。その中には、あの給仕女の人もいました。その人は私達を見て、ちょっと意外の様子でしたが、直ぐ、矢張り、そうだったのかといった表情に変りました。

やがて、主人の男が変な帽子に妙な服装で出て来ました。そして奴隷達を整列させた前で、

「お前達は、運動が不足してはいけない。今日は戦車競争、昔、ローマで行われた『チャリオット・レース』だ。その競技をする。先ず、騎手と馬になるものをジャンケンで決める。勝った者は騎手、負けた者は馬だ」

皆の者は、ジャンケンをしました。その時私はお嬢さんが相手でした。私は、どうかして負けて上げたい。そして、少しでもお嬢さんの負担を軽くして上げたいと思いましたが、どうしたはずみか、私が勝ちました。これは失敗したと思いましたが、傍に男達がいるので、私が敗けたとは云えないのです。

戦車、と云っても、長さ一メール位の丈夫な板に、四つの小さな車がついていて、その板の上に石油箱のようなものを打ちつけた簡単なものです。そして板の端に、長さ二メートルばかりの革のベルトが二本ついています。その戦車を奴隷の前に六台並べました。

「充分運動が出来るように、パンテイ一つになるのだ」

と男達は叫びました。奴隷達は互に顔を見合せていましたが、やがて、ゴソゴソと羞しそうに脱ぎ始めました。浅黒い肌、黄色い肌赤い肌、白い肌と、さまざまです。やがて、奴隷達は持場につきました。男達はベルトを馬になる女の身体に結いつけて廻るのです。皆、恥しいために顔から頸筋まで赤くして、うつ向いているのです。そのために、

「こらっ、真直、向いとれ」

と頬をピシャリと叩かれている人もあります。又、

「いい、肉附きをしてやがるねえ。ぽちやぽちやしてるじやねえか」

と、胸から背中を這い廻るように撫ぜられている人もありました。雨上りの風で一入、冷たく感じます。私も皆と同じように、鳥肌になって震えていました。男は、お嬢さんをベルトで、肩から胸へと締付けながら、

「こりや傑作だ。お前だけだぞ、こんなに立派にして貰ったのは、——嬉しいだろう」

と、意地悪そうに笑います。お嬢さんは黙って顔を赤くして、うつ向いておられました。

「厭かい、厭なら俺から御主人に、そう伝えてやってもいいぜ」

男は、お嬢さんの顔をぐいと仰向かせました。お嬢さんは仕方なく、首を振られました。
「じや、嬉しいのかい？」
今度は、お嬢さんは首を縦に振られました。
「黙ってちや判らねえ、どっちなんだ。ハッキリ云いな」
主人が主人なら、召使までも残忍な人間です。お嬢さんは小さな声で、きまり悪そうに「嬉しいのです」と、おっしやったのですが
「なに、いやかい。よし、それなら俺からそう申上げてやろう」
男は傍を去ろうとするので、お嬢さんは慌てて、その男の服を掴んで
「ちがうんです。ちがうんです」
と泣き出しそうな顔でおっしやるのです。
「それじや、なんだい」
「私、嬉しいのです」
「それなら、初めから、そうハッキリ云えばいいものを、手間ひきの、から牝だね」
これで、お嬢さんに対する侮辱が済んだと思っていると、今度はお嬢さんを皆の方にくるりと廻して
「おいっ、お前達、これを見な」と、お嬢さんの胸を叩き
「どうだい、美しいだろう。だから見ろ、嬉し涙を流して喜んでいやがらあ——嬉しいだろう」
お嬢さんは諦めなさったのか、コクンと肯かれました。ああ、お嬢さんの心の中は、どうなんでしょう。永久に消えない呪いの烙印を肌に焼き込まれて、その上、衆目にこの浅間しい姿を曝されながら、心にもないことを云わねばならない、そのお気持。これが地獄でなくてなんでしょう。私は、たとえようもない、うら悲しい気分に胸が詰るようでした。この男は殊に意地悪でした。その証拠に、他の馬はそれ程でないのに、お嬢さんだけが肩、背中、脇腹と、バンドが当っている処が、窪んでいるのです。強く締めつけられているためでしょう。お嬢さんが折々、大きな溜息をついていらっしやるのが、痛ましくて長く見て居られません。
用意が終ると、主人の男は
「負けるじやないぞ。負けたものは罰として勝ったものから鞭をうけるんだ」
やがて合図と共に、私達、奴隷は浅ましい姿で一齊にスタートを切りました。
ガラガラと軋めく車輪の音、それに、馬になった人の首と腰に吊された鈴が、けたたましく鳴り渡り、時ならぬ騒々しさを出現しました。乳房を両手に、しっかと押え乍ら走る女。胸のベルトが痛いのか、手を差し込んで顔をしかめて走る女。犬のように舌を出してハアハアと喘いで走る女。本当に何とも云えない凄惨な光景です。お嬢さんも、全身汗にまみれて走っていらっしやいましたが、ベルトが強いためか、息が苦しそうです。私は何故、ジャンケンに負けてあげなかったかと、後悔しましたが仕方がありません。本当に、私の乗った車を、お嬢さんに曳かせるなんて、罰が当るような気がしてなりません。大きな樹木を廻った頃から、急にお嬢さんの足並が乱れて来ました。ああ、これはいけない。困ったことになったとそっと、お嬢さんの横顔を見ると、顔を真青にして今にも倒れそうな御様子です。私は思い切って、車から降りようと思いましたが、正面の席から男達が目を離さず見ていますので、どうすることも出来ません。私は
「お嬢さん、もう少しです。済みません、頑張って下さい。しっかりして下さいね」
と、精一杯の声を振り絞って声援しました。やがて、スタートラインに戻ったときは、五番目でした。しかし、待っているものは、罵倒の嵐でした。

（以下次号へ続く）

切腹雑感とその種々相に就て

須藤律夫

昨冬以来正月にかけて、テレビに演芸に〝忠臣蔵〟が登場し、想いを遠く元禄時代に馳せると共に、二、三、忠臣蔵の実説など繙いて見た。その中で一寸思いついた事など抄録して見度いと思う。

× × × ×

○一人の切腹に十二分

元禄十六年二月四日、四十七士は切腹となったが、堀内伝右ヱ門の覚書によると、その前夜一同は大いに歌い、大いに飲み、隠し芸の公開までやった。天下泰平の当時武士が切腹の作法を知らなくても、それ程恥ではなかったが奥田孫太夫が『拙者は作法を知らぬ、教えてくれ』と伝右ヱ門に言った時、傍から磯貝十郎左ヱ門が『なあに、首を伸ばしてればいいんだ』と笑ったと伝えられている。

刀を腹に当てるか当てない瞬間、介添人が首を討つから殆んど自分では切らないで済むが、武林唯七外数人は『手を上げて合図する迄介添しないように……』と覚悟のほどを示した。一人の切腹に大体十二分位かかったらしい。

○殿中刃傷一号

殿中刃傷といえば例の松の廊下浅野内匠頭と思われているが、その第一号はそれより約六十年前の寛永五年（一六二八年）に発生し之を練馬区（東京）の先祖がやってのけている。三代家光の時、遠江国横須賀五万二千五百石の城主井上主計頭正就が老中にのぼった。その子正利の妻に島田越中守の息女を迎える事になり、その仲人をつとめたのが旗本御使番役の豊島氏の一族刑部信満、ところが正就は家光から他の女との縁談をすすめられ君命もだし難く、島田氏の縁談を破ってしまう。その裏には家光を将軍に仕上げた女傑春日局が正就を自分の勢力下に置きたかったと言う筋書がある。面目を無くしたのは信満で、八月十日殿中で正就に切りつけて倒し、自らも腹かき切って自決した。だから赤穂浪士のような事件には発展しなかったが、幕閣を大いに震撼させたのである。

× × × ×

数年前に〝切腹の種々相〟を本誌に発表した事があるが、その後の蒐集記録を年代順に整理して見た。茲に私の蒐めた十九例の中、

僅か二例を除いては総て毎年七月以降の出来事であり、切腹自殺もまんざら季節に関係のないものでもないらしい。猶、昭和三十二年五月四日、角界改革に伴う〝出羽の海〟親方の切腹事件は筆者の都合により割愛した。

○自殺マニヤ割腹図る

昭和二十七年九月――

二日夜九時半ごろ東京都世田ケ谷区北沢一ノ一三の三派出婦会会長八木長一郎さん（五八）方玄関先で、千葉県船場市前原町三無職湯浅喜一（三〇）は切腹自殺をはかり近くの国立世田ケ谷病院に収容されたが全治六ケ月の重傷。北沢署の調べによると湯浅さんは内妻に逃げられ、八木さん方に居ると言う噂を聞いたので、『俺の女房をかくしている筈だ。若し違っていたら腹を切る』と押問答の末、逆上して長サ十三センチの短刀で腹を切ったもので前にも三回カルモチン自殺をはかった事がある自殺マニヤである。

○カミソリで切腹

昭和二十八年二月――

二十六日朝七時半ごろ世田ケ谷区太子堂五○日通運転手鈴木勇雄さん（二三）は自宅で西洋カミソリで切腹自殺を図り国立世田ケ谷病院に収容されたが重体、世田ケ谷署の調べでは神経衰弱から。

○出刃庖丁で切腹

昭和二十八年九月――

十日午前○時三十分ごろ、新宿区柏木町五ノ一、一五○計器加工業、寺崎勝介さん（二七）が自宅で出刃庖丁で切腹した上、顔を切りつけ自殺を計っているのを家人が発見、近くの春山外科病院に収容したが、瀕死の重傷、淀橋署の調べでは事業不振から最近神経衰弱気味で発作的に自殺を計ったもの。

○病気から腹切り自殺

昭和二十九年十二月――。

五日午前七時十五分頃板橋区志村前野町七一無職坂島元さん（八〇）は自宅居間でナイフで腹を切り自殺を図ったが家人に発見され、近くの山田病院に収容されたが危篤、志村署の調べでは病苦から。

○酒乱の息子を戒めて割腹

昭和二十九年十一月――。

八日午前二時ごろ港区芝金杉浜町一九木型屋佐々木進次郎さん（五三）が自宅二畳の間で仕事用の切り出しを使い腹を真一文字に約五寸程切って苦しんでいるのを帰宅した長男の一昭さん（二六）が発見、手当したが出血多量で間もなく死亡した。三田署の調べに

よると佐々木さんは数年前妻と死に別れてから一昭さんと二人暮しをしていたが、最近一昭さんが酒びたりになって仕事をせず、常に口論が絶えなかった。七日夜も酒を飲んだ一昭さんと口論、一昭さんはそのまま表に飛び出したが、その後で酒乱の息子をいさめる為に割腹自殺したものらしい。

○14の少年割腹自殺

飼育の伝書鳩を盗まれ

昭和二十九年十一月――。

（千葉）十二日午前八時半頃千葉市幕張町一、堂の山防空ごう跡に十五才位の少年の変死体を警ら中の千葉署員が発見、調べると同町一ノ一、三三一魚屋鈴木きんさん長男勲君（一四）幕張中学三年生――で去る十日から家出中のもので、原因は伝書鳩が好きで可愛がっていた鳩が盗まれたのを悲観、出刃庖丁で切腹自殺したもの。

○切腹、青酸自殺

多摩川水門付近で

昭和三十年七月――。

十八日朝六時ごろ世田ケ谷区玉川上野毛町三六五先通称『明神池』前の多摩川水門付近で、中年の男が紺の上衣を枕に足を水の中につけ、あお向けになって腹を切り、血まみれになって死んでいるのを釣りに来た付近の人が発見、玉川署に届出た。同署、警視庁鑑識課で調べたところ、男は目黒区上目黒二の二

○三七染物商林喜太郎さん（五六）で、ジャクナイフ様のもので腹を約十センチ切り頸動脈を切った上青酸カリを飲んで自殺したもの

○熱海で切腹

昭和三十年七月――。

（熱海発）二十日午後四時二十分ごろ、伊豆伊東駅前伊東交通のハイヤーに熱海錦ケ浦から乗った男が伊東への途中、宇佐見トンネル前で車の故障で止っていた熱海駅前熱海交通田辺和夫さん（三四）運転のハイヤーに乗っていた女を無理矢理引きずり下し、熱海方面に逆行し、約三キロの網代町地内で短刀で女の心臓部を突き刺し自分は割腹自殺、間もなく二人共絶命した。熱海署の調べによると男は横浜市南区中村町三の一九五田中さん方川崎交通運転手朝鮮人金富一（三一）女は同南区井戸ケ谷上町一七三友愛看護婦大塚郁子さん（二三）で、二人は最初熱海交通のハイヤーで錦ケ浦に来たが、男が用を足しに行ったスキに『わたしはあの男に殺されるから』と通りかかったハイヤーの田辺運転手に頼み男は後から来た伊東交通のハイヤーに乗り『前方の車の女は詐欺犯人だから』と言って追跡して刺殺したもの。二人は恋愛関係にあったが、最近女が冷たくなったので無理心中したものらしい。

○西洋カミソリで切腹

昭和三十年十月――。

二十一日午前十一時半ごろ東京都葛飾区亀有二ノ一四六五無職粉川米吉さん（六七）は病気を苦に自宅で西洋カミソリで切腹自殺した。

○精神異常婦人、切腹して自殺

昭和三十一年一月――。

二十九日岡山県新見市西方、電通職員岡本貞次郎さん（五一）の妻道子さん（四八）がこの程自宅風呂場で出刃庖丁を下腹部に突き刺し、死んでいるのを貞次郎さんの長男徳一さん（二七）が発見した。道子さんは精神異常者で数年前にも腹を切った事があり、事件当日も家にいないために探していたもの。

○軽便カミソリで切腹

昭和三十一年七月――。

六日朝七時三十分ごろ、台東区浅草菊屋橋二ノ四無職尾崎幸さん（五三）は自宅で軽便のカミソリで腹部を切り、自殺をはかっているのを家人が発見、近くの海老名病院に収容したが瀕死の重体、蔵前署の調べでは病気を苦にしたもの。

○愛人を殺して切腹

結核の朝鮮人が無理心中未遂

昭和三十一年七月――。

二十六日午前一時五分ごろ荒川区三河島一ノ二九一二旅館荒川荘――経営者野村チヨさん――二階四畳半止宿人化粧品雑貨行商朝鮮人金在勲（二四）の部屋から突然『助けてく

れ』の女の悲鳴が聞えて来たので、チヨさんが部屋を覗くと金がジャックナイフで腹を割き切って苦しんでおり、その傍にかねてから金の所に遊びに来て時々泊っていた愛人の同町四ノ三三〇五飲食店女給佐藤モトさん（二五）が胸、両腕など数ケ所を刺され全身血に染って虫の息となっているのを発見、荒川署に届出た。同署で調べたところ、金は一ケ月前大阪から上京、荒川荘に止宿して行商を行い佐藤さんが勤めている食堂で食事をするうち親しくなり深い仲となったが、金は結核で結婚出来ないのを悲観、無理心中を図ったものらしい。二人共近くの荒川方一診療所に収容されたが、佐藤さんは全身十三ケ所を刺されており瀕死の重体、金は全治三週間の傷、荒川署では金の回復を待って一応殺人容疑で逮捕取調べるといっている。

○旅館で切腹

昭和三十一年八月――。

（武蔵野発）二十一日午前十一時五十分ごろ武蔵野市吉祥寺二、一一五吉祥寺駅前一休ホテル（経営者木村四郎さん）で前夜泊った男女が心中しているのを女中が発見、武蔵野署に届出た。男は庖丁でノド、腹を切って死んで居り、女は首を絞められた上ノドを二ケ所庖丁で突かれていた。武蔵野署で調べた結果、男は都内杉並区東田町一ノ一六梅原庄吉さん（三二）女は都下北多摩郡保谷町上保谷四三〇佐伯晃さん妻寿美子さん（二四）とわかった。二人は北多摩郡田無町五八一山田病院に結核で入院中知り合ったもの。

○放火し腹をさし違える

岐阜で心中未遂

昭和三十一年九月――。

（岐阜発）八日午前〇時十五分ごろ岐阜市金華山頂の岐阜城東側にある売店から出火、同家十坪を焼いた。岐阜中署で出火原因を調べたところ、現場付近で腹をさし違えて虫の息となっている男女を発見した。岐阜県稲葉郡稲葉町無職岩田豊さん（二二）と、同県揖斐郡大野町A子さん（一八）で放火心中を図ったが火が熱くなりはい出したものらしい。

○『離婚喜ぶ妻が憎い』

路上で刺殺、切腹図る

昭和三十一年九月――。

家庭裁判所で離婚を言渡された夫が帰途、喜ぶ妻を憎んで出刃庖丁で刺し殺した。同日午後六時半ごろ江戸川区亀戸六丁目国電亀戸駅近くの都電通りで、同区大島五ノ四五都営住宅九十号六印刷工山口三千雄（四二）が出刃庖丁で妻甲志子さん（三三）の心臓を刺し自分も腹を切ろうとしたのを通行人が見つけ後から抱きとめた。かけつけた城東署同駅前交番の巡査が山口を捕え、甲志子さんを近くの加藤病院に運んだが間もなく死んだ。山口は腹部にカスリ傷を負っただけだった。調べでは七月半ばごろ甲志子さんが『夫の給料では暮して行けない』と経済的な問題を理由に東京家裁に離婚訴訟を起こし家を出てしまった。二人の間には十二才の長男を頭に、二男二女があり、甲志子さんがいなくなったあと山口は男手一つで子供の面倒を見ていたが、その為め勤めも思うようにならず、八日はじめ勤め先の印刷工場をやめた。その間、裁判が進められ、十七日二人は東京家裁に呼ばれ正式に離婚をいい渡された。そのあと二人は『別れるなら家の物を整理しよう』と有楽町から国電で亀戸に来たが、駅前で甲志子さんが急に『質居に入れた着物が心配だ、直ぐ来るから待っていてくれ』と言って近くの泉居質店に入った。山口はその間に近くの金物居で出刃庖丁を買い、甲志子さんが戻って来たところを刺したもの。山口には『離婚が決ったと言って子供の事を忘れて喜んでいる妻が憎かった、自分も死ぬつもりだった』と言っている。子供達は父母の間に起きた悲劇も知らず、明日は学校の遠足だと言うので早くから家に寝ていた。

○腹や首を切り自殺

昭和三十一年九月――。

二十二日午前六時ごろ東京都江戸川区小松川二の五五さき小松川橋三百メートル下流の荒川放水路に若い男の変死体が浮いているの

を通行人がみつけ小松川署に届出た。調べたところカミソリで切ったあとが腹に二ケ所、後頭部から右首にかけて五ケ所あり、首の一つが頸動筋に達し致命傷となっていた。同署から警視庁鑑識課に連絡、検視したところ持っていた定期券から同区東小松川五の一〇〇一山本製作所住み込み工員上西秀雄さん（二四）で自分の部屋に置いてあった遺書からゼンソクを悲観したもの。

○妹を殺し切腹

大宮、〝暗い血〟の一家を悲観

昭和三十二年七月――。

（大宮発）二十四日夜十時半ごろ大宮市高鼻一の三三四、元〝やぶそば〟こと山本みつさん（四七）方で長男の工員周作（二三）が妹のひろ子さん（一一）を短刀で刺殺し、自分ものどや腹三ケ所を切って自殺をはかったが死に切れず、苦しんでいるのを外出から帰ったみつさんと三男の勇吉さん（一七）が見つけ、大宮署に届け出た。同署では周作を殺人の容疑で調べている。調べによると同家は去る十七日父親の惣作さん（六七）が台所で転んだのがもとで急死、ひろ子さんと二男の正一さん（二〇）がともに精神薄弱児、母親も精神異常者で生活も苦しく、前途を悲観した周作が同夜七時ごろ母親と弟を外出させ、兇行に及んだもので、周作は四週間の負傷、弟妹を近くの収容施設に入れる事になっていた。

○老人切腹して重体

昭和三十二年十月――。

二十九日午後四時四十分ごろ、江東区堀川三好町四の一無職羽畑鹿太郎さん（六〇）が自宅で腹を切り自殺を図っているのを帰宅した家人が発見、近くの安江病院に収容されたが重傷、原因は神経衰弱によるもの。

私は訴える　愚者の言

貴山茂

私い気の弱い気の小さい男性です。女王の様に気位の高い女性に思いきり弄んで貰いたいと、いつも望んで居ります。けれども、まだそういう人に遇う機会に恵まれません。私は元来、女性のおもちゃになる様に生れてきた人間かも知れません。女性の前に出ると顔が真っ赤になって、その人の顔を正面から見返えす事が出来ません。若し相手の女性が

「私の馬になってごらん」

と言ったら、私は喜んで言いなりになる事でしょう。私はどんな言いつけでも素直にききます。どんな恥しい事でも私は、その人の命令であったら喜んでする事でしょう。

例を挙げればきりがありませんが、第一恥しくて具体的に書いたりする勇気がありません。満員電車の中で一人の女性が腰掛けている私の上に倒れてきてギュウギュウ押された時でさえ、私はもう本当にボウーッとなってしまいました。若しレスリングでもして女性の重い腰の下にでも敷かれたら私は気絶してしまうかもしれません。ですから、それ以上の事をされたら私はそれこそ、どうなるか、自分でも分りません。

その様な正体を持った私ですが、気が小さいから、他人から自分の本性を知られる事を恐れて表面はいつも澄ましして居ります。従って、いつまで経っても自分の夢を実現する事が出来ずに悩んで居ります。昔の奴隷制度が今でもあったら、どんなによいかと思っております。自分が袋に入れられて奴隷売買に出されるのです。すると金持の婦人がそれを買い取って屋敷へ連れて帰って、思う充分、私を弄ぶのです。そんな事が実際にあったら、どんなに素晴しい事でしょう。

人間椅子、人間ベッド、人間便器、等は

すべて私の最も望むところです。でも私の場合は相手が女性でなければなりません。世の中には同性同志のそういった関係を好む人もあるそうですが、私には理解出来ません。私は異性に屈辱を与えられる事を望みますから、自分にお金があっても、商売女を買ったりする事は好みません。反対に自分が婦人から買われて玩具にされたら、どんなに嬉しい事でしょう。それは買われるという事だけで、既に非常な屈辱だと思うからです。男が女に養って貰うという事が既に屈辱感を抱かせてくれます。自分がお金を出して優位に立って居たならば仮令相手がどの様に優れた女性であっても、最早や、屈従的な気持を抱く事はむつかしい事だと思います。

大体マゾヒズムというものは、精神的な要素が極めて強力であると思うのです。ですから、実際にそういう目に遇わなくても、そういう想像をする丈でも非常な快感を抱く事が出来るのです。だから相手があらゆる点で優位に立っている事が望ましいのです。世の中の男性は或程度、女性に対してマゾ的になる可能性を持っているのですが、自分というものを或る程度までしか下げる事が出来ず、又相手の女性が一定限度迄しか高く感じられないから、そのマゾ的なものが容易に表面に表れないのだと思います。ところが、私の様な場合は、非常に極端に自分というものを卑下する事が出来ますので、普通以上の女性に対した場合は自己卑下による快感を持つ事が出来るのだと思います。

私は元来、征服者と被征服者の快感は、必ず被征服者のそれの方が、より強力であると考えております。ですからマゾヒストはサジストよりも深い快楽を得る可能性を持っているのですが、その可能性を可能たらしめる機会は返ってマゾヒストには恵まれていないと思います。ですから私ともこの世の中にサジスチックな女性が本当に居られるのか、どうか疑問に思わずにはいられないのです。若し、そういう人が本当に自分の目の前に現れたら、どんなにか驚き又どんなにか感謝する事でしょう。

神は人間の私にこの様な卑しい性情を与えて置き乍ら、その欲望をいつまでも失望のままに置いて、一体、いつまでこの悩みを続けさせるつもりなのでしょうか？　私は本来なら男性的な男性に生れて来たかったのです。一体誰がこの様な女性的な男性を造ったのでしょうか？　私の様な人間が存在する罪は私自身に在るのでしょうか？

造物主は、我々に欲望だけを与えて、満足は永久に与えて呉れないのでしょうか？——私は訴える次第です。（了）

○若妻を殺して切腹

昭和三十二年十二月——。

（横浜発）二十四日午前四時三十分ごろ、横浜市鶴見区仲通り三の二一五米商土居英雄さん（六五）が同家裏の精米所に住んでいる長男の誠（二四）と妻安子さん（二四）が起きて来ないので不審に思い覗いたところ、奥四畳半と六畳は一面の血の海で、シキイの上に二人が折り重なって死んでいるのを発見、鶴見署に届出た。同署で調べたところ、誠は刃渡り四十二センチの日本刀で切腹さらに首を突き刺し、安子さんは腹、首を突かれて死んでいたので誠が安子さんを殺して無理心中をとげたものと判った。誠は今春安子さんと結婚、家の仕事を手伝っていたが、四月ごろから神経衰弱気味となり、病院に通い回復したが、最近再び悪化、二十二日から床に就いていた。遺書はなく、神経衰弱による発作的の兇行とみられる。安子さんは妊娠九ケ月で部屋中を逃げ回った跡があった。

——完——

（一九五八、一、八記）

×　×　×

×　×　×

〈創作〉

被虐供養

青葉槇一

裸体契約

江南鉄道のバスの運転手をしている、山川清太郎は、その日非番だったので、昼過ぎから、ブラリと街へ出かけた。

九月も下旬になっていたが、まだ残暑が残っていて、雑沓に揉まれていると、汗が流れてくるほどである。

山川は上衣を小脇に抱え、薄く汚れているワイシャツを気にしながら、あてどもなく、ほっつき歩いていたが、そのうちに疲れてくると、ちょうど目の前にあった喫茶店の扉を押した。

店内はいっぱいで、どのテーブルもふさがっていた。それでも空いた席はないかと、立ったまま、あちこちと見回していると、すぐ側の椅子から、中年の紳士が声をかけた。

「失礼だが、よかったら私につきあってくれませんか——？　一人だもンで、ちょうど相手がほしかったところです」

「はア……」

見ると、紳士の前の席は空いている。

「遠慮はいりませんよ。さア、さア——」

「じゃア、お邪魔します」

山川が掛けると、ウェイトレスが近寄って来た。

「ビールですか？」

と紳士は云って、山川が肯くと、

「ジョッキ。大だよ」

と代って注文した。

山川は、煙草をとりだして火を点けたが、おちつかない気持ちであった。

「暑いですなア。今年はどうも残暑がきびしくって……」

「そうですネ」

そんな会話の間にも、紳士は品定めでもするように、ジッと山川の陽灼けした顔を瞶めた。その妙に執拗な視線にあうと、山川はわけもなくドギマギして眼を伏せたりした。

「どうも初対面の貴方に、いきなりこんなことを云いだしたりして、なンですがねえ、実は、貴方を見込んで、一つお願いしたいことがあるんですよ」

山川がジョッキを空けるのを待っていたように、紳士はそう云って、親しげな微笑を浮

かべた。
「はテ……」と返事を躊躇っていた山川は、
「どうでしょう。きいてくれますかナ？」
と重ねて云われると、
「はア、しかし、どんなことでしょうか？——」
と答えてしまい、その後でフッと不安になった。
「とにかく此処じゃア話もできない。どこか静かな処へいきましょう。大丈夫、御損のいくようにはしませんよ」
紳士が立つと、それにつれて、山川も立たないわけにはいかなかった。
〝鳥好〟と看板のでている料理居の玄関をはいると、馴染みの店であるらしく紳士は、
「いつもの部屋、あいてるね——」
といって、靴を脱いだ。
奥まった座敷に通ると、すぐにビールが運ばれ、水たきの用意がされた。
「一寸こみいった話があるんでね。後はいいから、呼ぶまでは誰も来ないでくれ」
と女中を下らせると、
「さアさア、遠慮なく——」
といって、紳士は自分もコップに口をつけた。
山川は、まだ多少警戒していたが、好物のビールがいくらでも飲めると思うと、心がゆるんでいくのを、どうすることもできなかった。
「お見うけしたところ、貴方は大分いい軀をしていられますナ」
何本めかのビールを空にした頃、紳士はそう云って、山川の、ガッチりとした広い肩のあたりを眺めた。
「イヤ、そうでもありません」
「実は、貴方のような方を探していたんでしてね。それで是非お願いする気になったんだが、イヤ、お礼のほうは、充分何するつもりです——」
山川は、父親が長い間寝たきりで、好きなビールもロクに飲めないことを思いだした。すると、わけはよく判らないながらも、まさか命にかかわることもあるまいと、半分はビールの酔もてつだって、
「私でよかったら、何ンなりとお役に立ててください」
「そうですか。それで私も安心しました。ところで、まアどちらでもいいようなものだがどうでしょう、一度貴方の軀を見ておきたいですな」
「私の軀を——？」
「此処なら誰も来ない。一寸でいいから裸になってみてくれませんか」
「ええ、それは、お言葉とあれば……」
山川は、立ちあがってシャッを脱ぎ始めた。
「どうせ裸になるんだから、いっそのこと真ッ裸になってくださいよ。パンツもすっかり脱って——そのほうが私もいい」
パンツもといわれて、山川は一寸気が臆したが、いまさら嫌だとは云えず、思いきって、安物のキャラコのパンツを脱ぎすてた。
「私の想像したとおりだ！　実に立派です。自分でもそう思いませんか」
そう云われて、山川はあらためて自分の軀を見回してみた。
「全く素晴しい。申分ありません。では、これからすぐに参りましょう。仕事の手筈は邸へいって詳しく話します。いいですね」
紳士が電話器に手をのばすと、山川はあわててパンツに足を通した。

模造将校

紳士と山川を乗せた自動車は、市街地をぬけると、閑静な住宅地にはいり、やがて、一軒の相当に大きい、和洋折衷の邸宅の門内へすべり込んだ。
門をはいるとき、山川がチラと見た表札には、ただ〝三輪〟とのみ記されていた。
応接間の椅子に埋ずまって、山川が壁にかかった五十号程の油絵を見ながら待っていると、三輪氏が、風呂敷包を二つも抱えてはいって来た。包を解くと、驚いたことに、中から出てきたのは、一揃いの陸軍将校の軍服で

ある。それには、歩兵大尉の襟章までついていた。略帽もあるし、もう一つの包からは、磨きたてられた長靴が取りだされた。

「面倒だが、もう一度裸になって、この服と着更えていただこう――」

「はア――下着は、このままでいいんですか？」

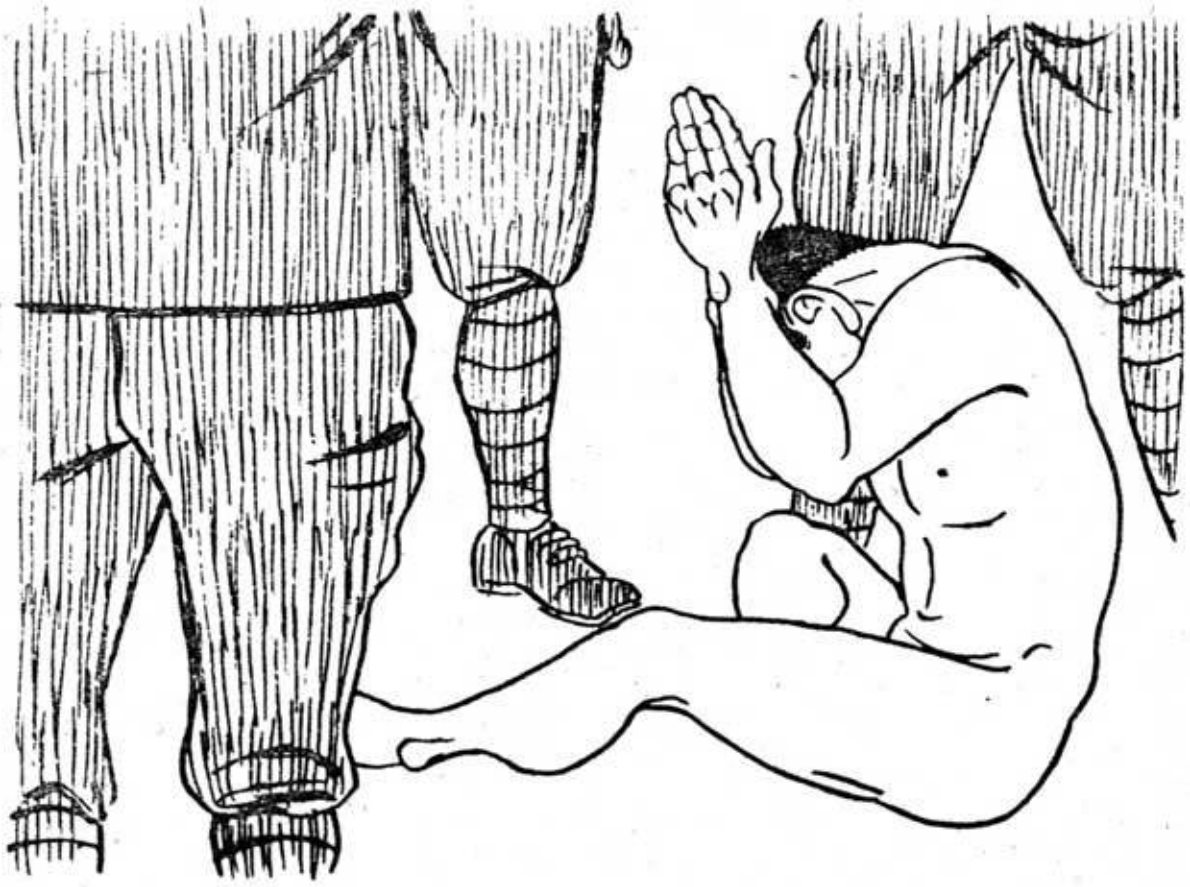
「いや、下着も全部だ。ところで、六尺褌の締め方は御存じかな？」

「ええ、中学のとき水泳で締めたことがありますから――」

「そうですか。じゃア、まずこれを――」

三輪氏の差しだす六尺褌を受けとると山川は確く締め込んだ。真ッ白な褌は、浅黒い山川の皮膚に鮮かな対象をなした。久しく忘れていた褌の緊縛感だったが、今の彼には、それを味わっている余裕などない。狐につままれたような心持で、云われるままに次々と衣服を着け、陸軍将校の扮装をしていった。戦争中は山川も召集を受け、兵隊にとられたが、勿論将校服を着るのは初めてである。すっかり扮装ができあがると、彼は妙に晴れがましい気がしたが、そんな気持になったのがなんだか恥かしくもあり、わざと肩をいからせたりした。

「ほう、なかなか立派な大尉殿だ！」



三輪氏は満足げに云って、いっとき山川の姿に見惚れていたが、

「ではいいですな。これから先も、私の云うとおりにやってください」

と念をおすように云って扉を開けた。

山川は、（もうどんなことがあっても驚かないぞ）と、腹に力を入れると、大股に廊下へ出た。

やがて連れていかれた部屋は、病室になっているらしく、微かに消毒剤の臭がただよい片隅のベッドには、蒼白く痩せ細った青年が寝かされていた。

山川は、死人のように生気の無い青年の顔に、その両眼だけが、落ちくぼんだ眼窩の底で、異様にギラギラと光っているのを見ると思わず背筋に冷いもののはしるのを覚えた。

「御病人ですか――？」

山川は、扉のところに立ちすくんだまま、そう訊ねるともなく云った。

「一人息子です。コレが或る大尉の裸体を見たいと云ってきかぬので、貴方にこうして来て貰ったんです……」

三輪氏は、漠然とした調子で低く云うと、太い吐息をした。

「しかし、私では――」

「いや、不憫にも一彦は、もう人の区別もできぬようになっているのです。将校の軍服を着てさえいれば、その大尉だと思うのですよ。それに貴方は、大尉にソックリだ。顔貌（かたち）から背恰好まで、実によく似ている。一彦は大尉だと信じて疑わないでしょう。ホラ、あんなに顔を輝かせている――」

山川は、ゴクリと固い唾をのみ込んだ。

「では、あらためて裸になって貰おう。判っているだろうが、褌もすっかり脱ってな」
三輪氏の言葉に、山川は催眠術にかかったように、上衣の釦へ手をかけた。
山川は、最後に六尺褌をはずすと、しぜんベッドの方を向いて立ったが、なぜか一彦の顔を見ることはできなかった。しかし、舐め回されるように、自分の肉体が見られていることは、痛い程に判った。
三輪氏は、ツイと褌を拾うと、山川の両手を後にとった。
何か只ならぬものを感じて、山川が振り返ると、そのときはもう、両手が後で括られていた。
「どうするんです？縛ったりして——」
山川は抗議するように云ったが、三輪氏は無言で、素早く山川の脱ぎ捨てたズボンから帯革を抜きとった。
それを見ると、山川の顔色は変った。本能的に鞭打たれると覚ったのだ。
「ミ、三輪さん！——」
山川は後退りながらそう叫んだが、その瞬間、ピシッと鋭い音が裸の肩先で炸裂した。
「痛ッ！　三輪さん。何をするんです！　これじゃ話が違うじゃないですか——」
「しかし、君は、何なりとお役に立つと云った筈だ」
「そ、それは、しかし、こんなひどいことを……！」
又も鞭が唸りをあげた。
「ああッ！……」
山川は、逃げるつもりか、扉に軀をぶつけたが、それにはいつのまにか鍵がかけられている。酔はすっかり醒めていた。
「タ、助けてください！助けて……」
山川は遂に泣声をだした。
三輪氏は、仕方なく、山川の耳に口を寄せて囁いた。
「済まん。なるべく痛くないようにして打つから、もう少し辛抱してくれ——」
しかし、そんな言葉は耳にはいらず、
「嫌だ、嫌だ！やめてくれ、助けてくれー」
と云いながら、山川は部屋の中をグルグルと逃げ回ったが、椅子に躓いて転倒すると、雨のように降る鞭打に、悲鳴をあげてのたうち回った。
一時間程後、三輪邸の門を、ポケットの紙幣を握りしめながら、逃げるように駆けだしていく山川の姿が見られた。

狂気の群

あまり人の訪うことのない、三輪邸の玄関のベルが、けたたましく鳴りひびいた。
妻に先だたれてからは、使用人をおかぬ三輪氏は、自ら立って玄関へいったが、ポーチに佇んでいる鳥打帽の男を見ると、瞬間激しい驚きに撃たれたように、大きく眼を見開いた。
「私、こういう者ですが——」
男はそう云って、事務的に名刺を差しだした。
それには、〝××警察署刑事〟と肩書があり、〝梶原捷二〟と刷られていた。
「梶原！——梶原さんといわれるんですな」
三輪氏の名刺を持った指は、ブルブルと小刻みに顫えていた。
「そうです。実は、一寸お訊きしたいことがあって——」
「そうですか——とにかく、おあがりください。さア、どうぞ——」
三輪氏は、気をとりなおしたように、応接間の扉を開けた。
席につくと梶原刑事はすぐに口をきった。
「一カ月ばかり前だと思いますが、貴方は、バスの運転手をしている山川という男を、お宅へお連れになったことがありますね」
「——山川といいましたかナ、あの男は。ええ、確かにそんなことがありました」
「では、そのときの様子を、少し詳しく話していただけませんか」
梶原は、鋭い視線を、ジッと三輪氏の顔にそそいだ。
三輪氏は、苦しげに表情を歪めると、

「承知しました。隠さずに、何もかも申しあげましょう。只話の順序として、息子の一彦のことからお話しなければなりませんが、よろしいでしょうか――」

「どうぞ――」

梶原刑事は、三輪氏に視線を当てたまま、一寸姿勢をあらためるようにした。

× × ×

そこが何という処なのか、支那大陸の中ということだけは判っているが、やみくもに方角も判らず逃げて来たので、かいもく見当もつかなかった。しかし、ともかくも戦火に残った、壊れかけた土壁の小屋を見つけて、二人はホッと一息ついていた。その二人とは、三輪一彦と上官の梶原大尉である。

駐屯部隊で、ほしいままの暴虐を振っていた梶原大尉は、敗戦と知ると、部下の報復を恐れて、当番兵の三輪二等兵を連れ、いちはやく遁走したのであった。

「三輪。お前、恐いか――？」

ワラの上へ、大の字に転った梶原は、簡単な食事の仕度をしている一彦の、蒼白い顔を見上げた。

「いいえ。大尉殿と一緒ですから――でも、本当に誰か追って来るんでしょうか？」

「追って来るかどうかは判らん。しかし、見つかったら只じゃすまんな。奴等何をするか判ったものじゃない。逃げているほうが安全ってわけだ」

しかし、まさかに此処まで追っては来まいという、梶原大尉の観測は、次の朝、早くも覆されたのである。

一まず隠家におちついて安心すると共にその疲れで、眼の醒めたのは午近くであった。一彦は、用をたしに裏へ出ていた。

ワラの中で、まだウトウトしていた梶原大尉は、何か人声を聞いたように思い、ハッとして上半身を起した。耳をすますと、確かに近付いて来る数人の靴音だ。ガバと立ちあがった梶原が、戸口から外を覗うと、手に手に銃剣をきらめかした七、八名の兵隊が、殺気立った面をして、もう五、六米の近さに迫って来ていた。どれもかっては部下だった顔である。

丸腰になっていた梶原大尉は、狼狽して武器を探したが、刀を手にとらないうちに、銃剣が胸に擬されていた。

「おい、梶原大尉！　俺達の来たわけは判るだろう。貴様も男なら、男らしく表へ出ろ」

藤田という上背のある上等兵が、威嚇するように呶鳴った。

梶原大尉は、弱味を見せまいと、

「おう」と野太く答え、大股に長靴を鳴らして外へ出た。

何も知らずに戻って来た一彦は、恐ろしい事態を知ると、真ッ青になって、小屋の蔭に身を隠した。

梶原が不意に上体を低くしたと思うと、たちまち一人が「アッ」と云ってのけぞった。まるでそれが合図のように、一対八の凄惨な格斗が始まったのである。

一彦は恐怖に顫えながら、逃げだすこともできず、まして加勢にとびだすなどとは思いもよらず、壁にしがみついたまま、只ハラハラと見ているばかりであった。

動物のような斗争は続いていたが、次第に梶原の足許が危うくなってきた。兵隊達は梶原が疲れてくるのを待っているのだ。

突然、八人は武器を捨て、一っせいに梶原に跳りかかった。

一彦は眼をつぶった。しかし、すぐまた開けてみた。彼等はまだしきりに揉み合っていた。兵隊達はどうするつもりか、必死に抵抗する梶原大尉の軀から、衣服を剝ぎとろうとしているのだ。

どういう隙をみつけたか、梶原が逃げ出した。長靴の片方は脱げ、上衣もシャツも無いみじめな恰好で、転がるように逃げ回る梶原を、バラバラと八人が追う。すぐにまた捕って、ズボンや袴下を剝がされた梶原は、どこまでも逃げようとして駆け出したが最後に残った六尺褌も、すでに結び目が解けている。面白がって追い回していた兵隊達は、遂に褌もぬけおちてしまった梶原を、グルリと包囲

して、その輪をだんだんに縮めていった。
梶原は、地面へペタリと坐ってしまい、
「助けてくれ！命だけは助けてくれ。俺が悪かった。どんなことでもして謝る。赦してくれ。頼むから赦してくれ！このとおりだ。このとおりだ！……」
両手を合わせ、拝みながら泣声をあげた。
藤田はそのさまを、残忍な笑を浮かべながら見下していたが、
「オイ、土居。お前、此奴を、褌で後手に縛ってしまえ」
と一人に云って、自分は帯革を握ると、ビュンと鳴らした。
梶原大尉は怯えたように眼を上げたが、次の瞬間には、悲鳴と共に軀を波うたせた。鞭の乱打と、獣の咆哮のような悲鳴が続き、梶原の皮膚は、ところどころ破れて血を吹き出した。
やがて、梶原がグッタリしてきたのを見ると、藤田は、
「オイ、みんな。今度は此奴をあの木に縛りつけろ」
と云って、鞭を銃剣に持ちかえた。
「梶原。いいざまだナ。いまわのきわに何かいいのこすことはないか、フフフ、武士の情だ、きいてやるぞ」
藤田は、立木の幹へグルグル巻きに縛られた梶原の姿を、小気味よさそうに眺めながら云う。
「オ、俺を、殺す気かッ？！」
梶原大尉は身をもがき、搾りだすように叫んだ。
「きまったことヨ。俺達は、貴様に復讐するためにやって来たんだからな」
「タ、助けてくれッ！命だけは助けてくれ。オ、お願いだ。お願いだ！……」
「ほざくな！貴様も日本軍人なら、最期を潔くしろ」
藤田は、銃剣をかまえて一歩進んだ。
「嫌だ、嫌だッ死ぬのは嫌だ。助けてくれ。命だけは勘弁してくれェッ！……」
梶原大尉は、恥も外聞もなく、小児のように声をはりあげて、泣き喚いた。
藤田は、何か思いついたように、急に銃剣を下ろすと、
「オイ、みんな。此奴を此処で殺ってしまうのは、一寸おしい。連れていって、ゆっくり弄んでやろうじゃアないか――」
と云って、ニタリとした。
哀れな姿で、梶原大尉が拉致されていった後、一彦は喪心したようになって、小屋に隠れていたが、梶原が責められるのを見ていたときの、不思議な心の昂りは、いつまでも消えなかった。
真ッ裸のまま、全身血と泥にまみれた梶原大尉が、小屋へ戻って来たのは、翌日の明方近くであった。
一睡もしないで明かした一彦は、夢中で駈け寄った。
「大尉殿ッ！」
「三輪！」
二人はヒシと抱き合った。
ややあって、梶原は、ソッと三輪の軀を離すと、
「三輪。俺は、奴等のねている隙に、やっとの思いで逃げて来たんだ。お前の顔を、もう一度だけ見ておきたかったからな……俺は、奴等から、あの後も、口では云えない程の辱めを受けた！　この上おめおめと生きていては、奴等の嬲り殺しに合うだけだ。そんなことになる前に、俺は自分で死のうと決心したのだ。日本軍人らしく見事腹を切ってな」
「大尉殿！」
「何も云うな。俺の決心は固いのだ！　三輪。お前、俺の最期を見届けてくれるな」
「はい……」
「俺は、お前の介錯で切腹できるのが嬉しいぞ……！」
一彦は、またあの時のような不思議な昂奮に襲われてきた。崇拝する梶原が死ぬというのに、歓喜に似た感情が、ゾクゾクとこみあげてくるのである。
梶原大尉は軀を拭き清めると、作法どおり

腹に刀を当て、静かに瞑目した。「うッ！」という低い呻きが、一文字に結ばれた唇から洩れ、切り割かれた傷口から、押し出ようとして犇く腸管を、おりからパッと射しだした朝日が、華かに輝かせた。

墓地

三輪氏は、話し終ると、ホッと深い溜息をついた。

それまで、石像のように動かなかった梶原刑事は、

「――それで、一彦君は、無事に帰還されたんですね」

と、かすれた声で云って立ちあがった。

「そうです。しかし、生きて還ったとはいうものの、アレはもう、身も心もすっかり蝕まれておりました……！」

「――その大尉は、梶原剛一というのではありませんか」

梶原刑事は、テラスのガラス戸に向ったまま、ゆっくりと云った。

「そうです！……」

三輪氏は顔をあげると、ある期待をもった眼で、背の高い梶原の後姿を見守った。

「三輪さん。その大尉は、私の実の兄です」

梶原刑事は、それだけ云うとガラスに映った自分の顔をジッと睨めた。子供の頃から兄に瓜二つだと云われた顔。その精悍な顔は、いま蒼白に歪んでいる。梶原は唇を噛むと、クルリと向きを変えた。

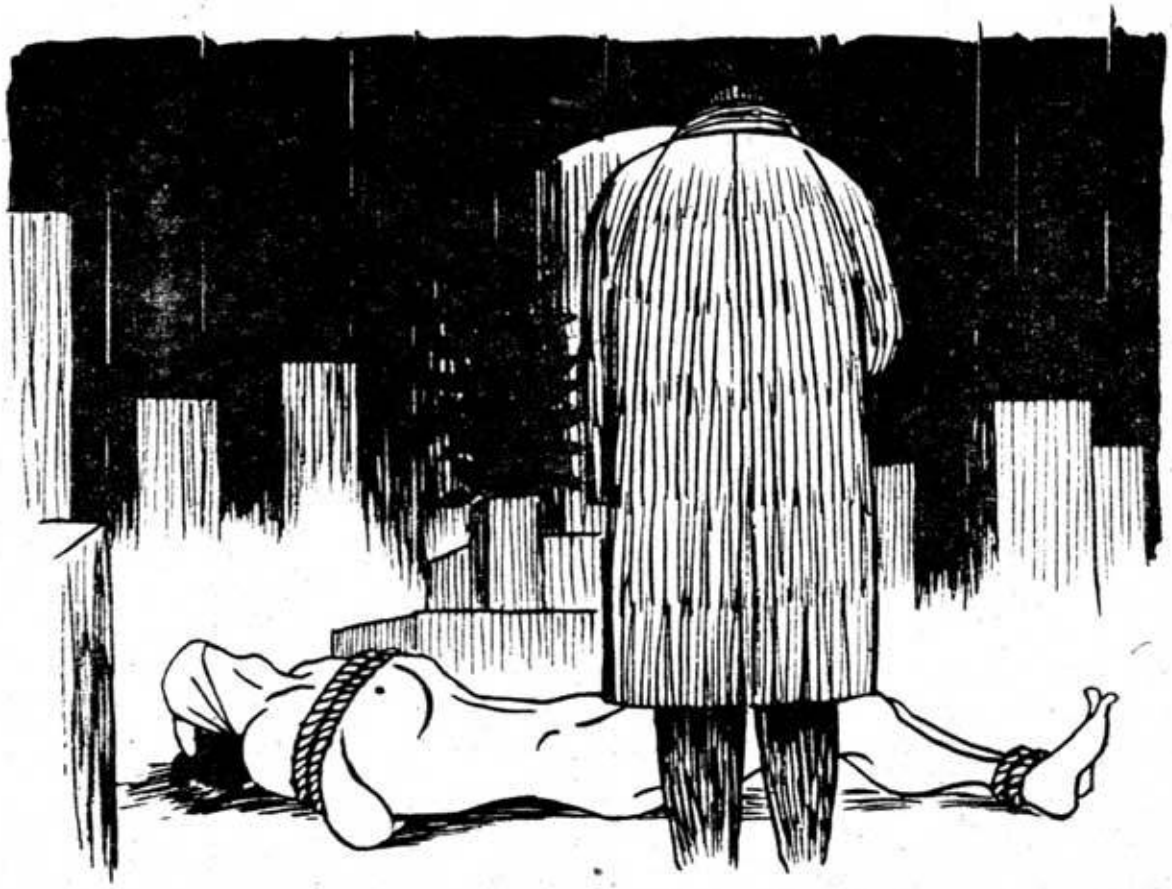
「三輪さん。貴方は、さぞ兄をお憎しみでしょう。どんなに憎んでも、憎みたりないに違いありません。私は、兄を赦してくれとは申しません。只、私でできるならば、兄の罪の万分の一なりと、償いたと思います！……」

悄然と肩をおとすと、梶原刑事は深く頭をたれた。

「いや、梶原さん。私は今では、少しも大尉を恨んではおりませんよ。そりゃア、はじめは、一彦がこんなになったのは、みんな大尉のせいだと、随分恨みもしました。しかし、そのうちに、一彦は大尉に愛されて、本当は幸福だったのではないかと、思うようになったのです。あいった性質も、一彦自身生れながらにもっていたのかも知れない――そう考えれば、アレの気持が哀れで、なんとかして思いを遂げさせてやりたいものと、写真をたよりに、大尉に似た人はいないかと、探して歩きました。それにしても、もう少し早く、貴方に逢っていたらと、それだけが悔まれます。貴方に逢えば、一彦がどんなに喜んだかと思いますとな……」

「と云われると――？」

「死にました。一彦は――。今日が初七日です。その日に貴方が訪ねてくださったのは、やはり何かの因縁でしょうなあ……」



「そうでしたか！それはお力おとしのことで……深くお悔み申しあげます」

「ありがとうございます。では、線香の一本

もやってくださいますか。一彦もきっと喜ぶでしょう」

「それはもう、是非、そうさせていただきます」

仏間にはいると、梶原刑事は、すぐに一彦の写真に眼をとめた。それは軍服を着ているが、瞳の涼しい美青年であった。梶原は、微かな戦慄と共に、兄に対する嫉妬を感じたのである。

電気の点いた刑事部屋で、梶原刑事は、もう何本めかの煙草を灰にしていた。

同僚の井島刑事がはいって来ると、机の抽出をガタガタやりながら、声をかけた。

「梶原。お前、まだ帰らンのか——？」

「う、うン……電話を待っているんだ——」

「そうか。お前、この頃なんだかボンヤリしてるみたいだナ」

「いや、そんなことはない！」

井島刑事は、また慌しく出ていきながら、

「雨になったぜ——」と云った。

梶原刑事が腕時計を見ると、七時を少し回っていた。

まもなく、三輪氏からの電話がかかってきた。

「——梶原です。先程はどうも。え？　アア雨ですか。いいえ、かまいません。そちらさえよろしければ、私はやっぱり今夜のほうが——で、時間は決りましたか？　そうですね。では十時に墓地の入口でお待ちします。ハア。ハア。では——」

電話を切ると、梶原は、そそくさとレインコートに腕をとおし、灯の滲んだ鋪道へ、足早に出ていった。

梶原刑事は、これから自分のしようとしていることを思うと、酒を飲まないではいられなかった。しかし、後悔はしていなかった。彼は九時半まで酒場で過した。だが、しっかりした足どりで、約束の場所へ向かった。

三輪氏は、すでに来て待っていた。

「梶原さん。よく来てくださいました。せっかくの貴方のお申出で、快くお受けはしたものの、やはりお断りしたほうが良かったのではないかと——」

「いや、もう何も云わんでください。私はこうして来たのです。サア、中へはいりましょう。一刻も早く、亡き一彦君に、供養させてください！」

一彦の墓の前に来ると、梶原はやにわに着ているものを脱ぎ捨てた。

「さあ、私を縛って、鞭打つのです！」

梶原の声は、昂奮に顫えた。

雨が急に激しくなりはじめた。

三輪氏は、「一彦！」と小さく叫ぶと、泥の中に転った梶原刑事めがけて、最初の鞭を振り下した。

そのとき、梶原の身体に、ありうべからざる変化が起ったのである。三輪氏は一瞬眼を疑ったが、すぐにすべてを察すると、一段と力をこめて、骨も砕けよとばかり、鞭を叩きつけた。

鞭打の苦痛が、梶原刑事の激情を、いやがうえにも駆りたて、脳の中では、美しい一彦に責められる兄大尉の姿が明滅した。

梶原が、潜在的なマゾヒストであったことを知った三輪氏は、しかし、自分もまたサディストであったことには気付かぬまま、闇の墓地には、世にも奇怪な供養の行事が、いつ果てるともなく続けられていったのである。

（完）

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵（写真を含めて）並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。（困難なときは略画はなくとも差支えありません。）（編集部）

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤプー

沼　正　三

初めて読む方に　今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤプーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人犬畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた――劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ポーリーン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウイリアムは、本国星カルーから地球別

第二十三章　畜人洗礼儀式

一　口唇締金具（リップ・ファスナー）

麟一郎は頸部に激痛を覚えた。痛覚の末梢神経の尖端が一つ一つ焼き潰されている……

声を出そうとしても、先程突込まれた鉛筆位の棒がもう竹筒程になって、口を満開させ、筒の先が舌を吸い込んで、息をするのがやっとだ。これは舌の筒（シリンダー）と俗称される道具、舌去勢の時使うもので、任意の寸法に切断し、切口を止血し、予後の治療を必要としない舌用手術具だ。正式には舌切断器（タング・カッター）と呼ばれるが、舌人形の舌整形など

荘に来ている。円盤で時間遊歩に出たポーリーンの墜落事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球面にやって来た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享楽し得るのに反して、麟一郎はヤプーとして扱われ、畜化処置を施される。――この家畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

麟一郎はクララと無理心中を試みて失敗し、去勢され、家畜適性検査を受けた。隣別荘のマック少年を交え、六人の白人がその予備檻に来た。クララは、彼をリンと名附け、自分の飼育する土着ヤプーとして登録し、権利宣言をしつつ鞭った。喋ろうとするリンを彼女は足で踏んで黙らせ、猿轡を施さんとする。……

にも使われること勿論である。

「さあ、好きな様にお切りなさいな」

とポーリンが云う。クララは驚いて、

「舌を切っちやうの？」

「だって、口をきかせたくないでしょう？」

「ええ、でも、暫くの間で良いの。妾猿轡（ギャッグ）のつもりだったのよ」

「そうなの。じゃ舌袋（バッグ）か、止金（クラスプ）か、チャックか……どれが良いかしらね」

「そりやチャックだね」とセシル。

「そうね、妾も賛成。チャックが一番使い易いわ」とドリスも同調する。

「クララ、そうする？」

ポーリーンが彼女に訊ねた。元々彼女に任せたクララには異論のあり様もない。

皆がチャックというのは、先にイース女性達の舌人形使用風俗について述べた時（五章一）、触れた口唇締金具（リップ・ファスナー）のことである。彼女等の中、貴婦人達は両唇を閉鎖されたのを買い、平民女性は、その高価を避けて、口唇締金具附（ファスナー）ので我慢する。

これは引手の鎖錠に指紋錠（フィンガー・ロック）を併用するのが普通である。ある人のある指の指紋を合鍵にし、しかも蠟等で型取った代用物では駄目で、あくまで、生きたその指で引手を持たない限り引手が動かぬ様になっている。絶対に他人には開けない。ヤプー自身にもどうにもできない。だから猿轡の用を兼ねる。この口唇締金具（リップ・ファスナー）が今麟一郎の口に装着されるのだ。

チャックは、締めようとする開口の両側で基底部を縫い附けなければならぬが、口唇締金具の場合は、縫う代りに、唇の裏面に生体糊で接着するのである。黒奴は、作業し易い様に台を適当な高さに上げ、口を無理に開かせられて悪鬼さながらのヤプーの両唇をめくった。上唇、下唇と歯齦（はぐき）の間に、セメダインの様な糊を塗り附け、手早く締金具の上片と下片をその各々に挿入する。その作業は慣れて手早かった。

その間にクララは指紋錠の鍵になる引手に右手の人差指を当てて指紋を吸収させた。一円アルミを小判型にした程度の小片である。指を退けると渦状の紋が彫り込んだ様に残った。黒奴はそれを恭しく受取ると、ヤプーの右唇の端で、上下両側の歯金を合せつつ嵌め込んだ。

「どうぞ、お試しを」

ヤプーの口から詰物を取って、黒奴が一礼する。クララは引手を持って右に引いた。

ジュッ

とチャックの締る音がして、あとには口をむずと結んだ儘の無念そうなヤプーの顔が残る。引手が左口許から立っているのを両唇の間の内側へ折れ込ませると、唯口を閉じている丈の様に見えるが、

少し開いている両唇の間からは、奥に、本当の歯の代りに、金属の二列の細い歯が並んでいるのが見える。

ポーリーンは、指紋錠の説明をして、

「さあ、これでもう、貴女がこの引手を引いてやらない限り、口をきくことはないわ」

「月の羊羹や垢飴を一杯入れた部屋に、指紋錠チャックを掛けたままでヤプーを入れておくと、とても面白いわよ」ドリスが、嗜虐的な目を輝かせながら、口を入れた。「のどから手が出るほど餓えてる御馳走が山とありながら、一舐めすることもできない。狂い廻るわ。それを遠写画面で見物して、発狂するまで何時間かかるか、何日かかるかって、賭けるの」

「もっと面白いのがあるんですよ。嬢クララ。餓鬼用口唇締金具と云いましてね」セシルも負けぬ気で云い出した。「タンタロスが池の中に漬けられていながら、水を飲もうとすると水が逃げて一滴も飲めなかったって伝説がありますね。チャックの引手を飲食物の容器の固有放射波に連動しときまして、飲み食いしようとすると、口に近ずいた瞬間、自動的に引手が締まる、口から遠ざけるとまた開く仕掛になってるんです。……」

「残酷ね」

「……摘み喰いをした黒奴の刑罰は、餓死刑ですが、もし、食物が人間（白人のこと）のものだったら、唯の餓死刑では軽すぎるから、このチャックを附けて、餓鬼道地獄に追い込むのです。……」

「地獄……」

――そんなものが本当にあるのか？

クララはびっくりした。読者諸君にはいずれクララが現場見物する日まで、好奇心を押えて戴くしかないが、仏典にいわゆる八大地獄はすべて現実に存在すること、むしろ、イースの黒奴刑務所の有様が、航時機探険家達を通じて前史古代世界に伝えられたものが、地獄観念の母胎となった推定されること丈は、ここで云っておこう。

金属ゴム輪に身を縛められ、両唇をチャックで閉され、行動も発言も共に封ぜられた麟一郎は、漸く首輪の内側の皮膚の焦烙が止んで、落ち着いて、その会話を耳にすることができたが、聞くほどに、イース人の底知れぬ残酷さに胆を冷した。

それにクララの何と冷淡なこと！　今、チャックの引手を引いて彼の口を閉じた時の平然とした態度は……

――これが昨日迄のあのクララだろうか？

クララへの愛情がなくなったのではない。然し、彼を踏んずけ、彼の背に鞭を揮い、彼の唇を締めあげた目の前のクララへの憎悪が生じて来るのを如何ともすることができなかった。

二　光傘

「尿瓶はまだ？　遅いのね」

とポーリーンが先を急ぐ人らしく云った。

「もうすぐでしょう」

とウイリアムが答えて、黒奴に

「準備は良いのか？　檻仲間は？」

「は、二匹待機させてございます」

「そろそろ、パラソルを飛ばせ」

「畏りました」

B2号は光幕の向う、部屋の隅の方へ消えた。

先刻まで檻の床だった台の上に否応なしに正坐させられている麟

一郎は、周りの白人達を見廻した。台は何時か再び下降して部屋の床に戻り、自分は彼等の足許に坐っている。背中と首筋がヒリヒリ痛む。

――クララとポーリーンと、今朝来たドリスと、昨日クララの部屋で見かけた青年、ウイリアムといったな、それに昨夜俺をだまして去勢部屋に入らせたセシルという女見たいな奴。もう一人いる可愛い子は、一体男の子かしら？　おや、後にいるのは何だ？　ややッ

いくらもがいても甲斐はないし、頼みに思ったクララさえが――本気なのか、お芝居なのか――自分をヤプー扱する方に廻ってる。少しでも自分の置かれた境遇を理解して、事態に善処する方が良い、と決心して、目と耳を働かせる麟一郎であるが、クララの様に諮問器（レフアランサー）で系統的に知識を整理できず、断片的な体験から帰納する丈だから、どうしても不充分だ。尤も、法学生中でも推論の精巧で鳴らした頭脳、円盤内のポーリーンの話、今朝のドリスとの対話等を材料にしてイース畜人制（ヤプーフツド）の概略を把んでいた。然し、それは『人間を、おそらくは日本人を、家畜化し、高度の科学力で生きた道具に変形して使用している文明』という観念的な理解に過ぎず、円盤内で見た畜人犬（ヤツプ・ドツグ）と今朝の河童（カツパ）以外は、矮人（ピケミー）も生体家具（リビング・フアニチヤ）も知らぬのだから、具体的事物に接すれば驚かざるを得ない。

美少年の後方の手提袋（ハンドバツグ）ヤプーは幸か不幸か、外見上の変形度が少なかったにも拘らず、麟一郎は後手錠で、しかも鎖に繋がれて、曳かれている素裸の男の姿に、昨日の自分を観て慄然としたのだが、この時更に驚くべき光景を目にした。

六人の白人達の頭上に後光が射し始めたのだ。ヤプーや黒奴は元の通りである。白人達だけだ。それも唯光るのではない。天国の神様や天使の絵に必ず描かれる頭の上を取り巻く光輪（ニンバス）、正にその光輪

が彼等の頭上に懸ったのだ。

これは光傘（ヘイロ・パラソル）（halo-parasol）という防身装具で、空中矮人（エアロ・ピグミー）（十章三註b）が操縦するヘリコプター（プロペラ）が頭の五糎程上に停止しているのだ。消音廻転翼の両端が発光して光輪と見えている。その光輪の外縁から垂直に床まで、空気幕（エア・カーテン）が出来ていて、この光傘の下に立つと、一見分らないが実は外部の空気とは全然遮断された空気の中にいることになる。

光傘はどんな役に立つか。先ず自動天蓋として雨傘（※）日傘になる。一々手で差さなくても、矮人が常に頭上を去らぬ様に操縦しているから、雨中、炎天中を楽々歩き廻れる。更に、空気幕の効用で、酷暑の戸外でも、常に廻転翼から送られる冷たい空気の中におられる。冬はその逆だ。つまり昔は建物についてのみ観念し得た暖冷房というものが、服装化して一人一人の個人の肉体について可能になったのだ。風も怖れる必要がない。こういう便利な自動装具なのだ（※※）。

（※註）。イース科学にとって、遊星の大気調節は何でもない。だから、気候、天候も支配しうるのだが、一種の風流として、四季の変化や、晴雨風雪の多様性が存置されているのである。（七章一参照）

（※註）。前史時代の天国の絵に描かれた光輪（ニンバス）が、航時機で旅行したイース住民の光傘（ヘイロ）を誤認したものであることは、ここに断るまでもあるまい。

では、今この室内で何故に光傘（ヘイロ・パラソル）を差すのか？　洗礼の時発散される尿の臭を避ける為である。黒奴酒（ネグタール）には、醸造中失われる放出直後の尿臭を蔵出しの際改めて人工合成で附加する位で、黒奴にとっては尿臭は、酒の芳香そのものであるのだが、白人にとっては、排泄物の臭でしかない。所が光傘の下にいれば、室内の空気から隔離されるから、その臭を嗅がずに済むのだ。

クララは先に説明を受けていたから、別に驚きもしなかったが、麟一郎には理解できない。クララの頭上を仰いで、宗教的な畏敬の念を覚えたのも、この時の彼の身になれば無理もなかった。二十世紀の人智を超絶した文明を説明なしで理解できる筈もないが、人間は理解できぬものに原始的な宗教的畏怖を起すものなのだから。この場合でも、一旦は光学現象と見たのだが、では黒人ヤプーには何故現象が起らぬのかと疑える。自分の知らぬイース白人特有の体質と見るには、クララの頭上にも懸ってるのが不可解だ。

――クララは、神様の仲間入りしたのか？　ここは天国か？　まさか！　だが、そう云えば今日彼女が自由に日本語を使うのも不思議……。昨日迄のクララとは別人なんだろうか？

仮借なく鞭を揮ったことでクララに対して憎悪を覚えて来ていた彼は、ここに至って、彼女を怖れ始めたのだ。自分の理解し難い力の存在を知って、既にイース人全体に対して懐いていた驚異と畏怖とが、イース人の仲間入りをしたクララに対して感ぜられて来たのだ。今迄は彼女を自分の方に近い存在として、その故に、愛したり、憎んだりしていたのだが、今や、彼女を自分の方よりイース人の側に立つとして見る気持を起したのだ。

犬が飼主の鞭を受けた時、初めは憤怒し憎悪するだろう。然し、どうしても敵わぬ相手と知り、理解し難い力の所有者と知れば、その憎悪は畏怖に代るだろう。この畏怖があるからこそ、飼主への愛情も許されるのだ。家畜意識の基礎は実に飼主への畏怖にある。麟一郎は、今こそ、家畜化への実質的な第一歩を踏み出したと云えよう。だが、まだまだほんの第一歩である。

三　賭と討論

そんな麟一郎の思惑には、一向無関心に、白き神々は、それぞれの後光を輝かしながら語り合っている。

「姉さん、これLC（慕主性係数）が高いから、じき堅信礼（コンファメーション）できるわね」とドリス。

「そうね。早いわ、きっと」とポーリーン。

「明日じゃどうかしら？」

「そりゃ、無理よ。二日はかかるわ、どんなに早くたって」

「賭ける？」

「良いわよ」

「負けた方の小宇宙球堂（マイクロコスモス・ドーム）を勝った方が自由処分できることにしてどう？」

「よし、挑戦に応じるわ」

賭けごとはアングロサクソンの伝統で、イース貴族の必要的娯楽なのだ。（十章三参照）

ポーリーンは、クララの方を向いて、笑いながら、

「今聞いてたでしょ？」

「ええ、でも、分んなかったわ」

「洗礼と違って、堅信礼の方は、ヤプーが心から主人になっていると分ってから、聖体授受を兼ねてやるってこと、さっきいったわね。祈禱文と讃美歌を少くとも三篇は憶えてなければ駄目なの。それも真心からのものか口先丈かを嘘発見器と下意識顕出器で検査する。これに合格するのに普通早くても十日や二週間はかかるもんだけど、このヤプーは、とても貴女を慕ってる。その数値が高いから、ずっと早く堅信礼できると思うの」

「そうかしら、先刻大分呪ったり恨んだりしてたから……」

「ううん、あんなのは何でもない。あとで又謝ってたじゃない。普通よりおとなしい位だわ。ただ一日じゃどうもね。ドリスは一日で合格すると云うし、妾は二日以上、賭よ。勝ったら面白いもの見せてあげるわ」

「まあ、何かしら？」

その時、ドリスが肩を叩いて

「クララ、お願いがあるの。今日一日、ヤプーを妾に任して呉れなくって……」

「貴女が訓練するの？」とクララ。

「ドリス、貴女が直接訓練するんじゃ賭にならないわ」ポーリーンが横から抗議した。

「そうじゃない」ドリスは説明した。「妾が預るわけじゃなくて、唯妾のお願いする様なやり方で、ヤプーを訓練して欲しいのよ」

「どんな風に？」

「あとで準備してから説明するけど、楽（らく）なこと。貴女の今日の行動の差支えにはちっともならないわ」

「そんな楽（らく）なことで訓練になるの？」

「ううん、楽（らく）ってのは貴女のことよ。奴にとっては猛訓練なの。十時間位かかる。それで結構賭に勝てるつもりよ」

「どうしようかな。余り猛訓練じゃ可哀想だわ」

「でも訓練受けてこそ畜化するんだから、ヤプーにとっては向上なのよ、可哀想がる必要ないわ」

「逆さ吊りなんかお断りよ。妾あんなの嫌……」

「そんなんじゃないの」

「とにかく、妾の訓練する楽しみは減るわけね」とまだ難色を示したが、

「訓練自体は貴女がやるのよ。……もしきいて貰えるなら、先刻の

取引の話の時取り消したニューマも加えて良いわ。進呈するわ」と申し出られて、

「あの古石器代人狩猟犬(ネアンデルタール・ハウンド)を……」

大分心が動いた。――呉れてしまうわけでなし、訓練上人(ひと)の指図を一時(いっとき)受けるだけのこと……

「じゃ、妾の手許におけるのね」と念を押す。

「勿論よ。貴女への信仰の問題ですもの。貴女の傍からは離さない。……唯訓練方法を妾の考え通りに試みさせて欲しいの」

――どうせ、自分自身に訓練法について意見も知識もあるじゃなし、ここは一番ドリスの申出に応じて見よう。

「じゃ、お任せするわ。あの犬が欲しいから」

と笑って云った。ドリスは、気負込んで、

「さあ、姉さん、小宇宙球堂(マイクロコスモス・ドーム)よ」

「貴女こそ注意が肝心」

賭の当事者は、どちらも勝った様なことを云う。小宇宙球堂(micro-cosmos dome)とは何だろう？ドリスはどんな訓練を考えているのだろう？

耳傾けていた麟一郎にも、読者諸君と同様それは分らなかった。分るのは、クララが犬――昨日見た様な人犬だろう――欲しさに自分の訓練をドリスに任せたという確かなる事実だ。

――もう俺のことを、あんな犬並みにしか考えていないんだ。虐待はお芝居でない。本気なのか？

クララは、指輪のことを思い出し、ポケットから取り出して、

「これね、リンに叩

き返してやるつもりだったけど、あれを見てね」とマック少年の背後の手提袋ヤプーの下腹部を指さしながら、「リンのあすこに植え付けてやろうかと思うの」

「ふーん、どれどれ『**永久に汝の所有なる者**』良い文句ね、貴女への関係が良く分るじゃない。それを肉体の一部にするのは妙案だわ」

ドリスは、賭についてのクララの協力が嬉しかったか、お世辞を云った。クララは調子附いて、

「妾の与った指輪ね、『**クララからリンへ**』って彫ってあるのよ。それを曳鎖の先の茄子環にしたいの。細工させられるわね？」

「おやすい御用よ」

麟一郎は、クララには自分への愛情の片鱗さえ残っていないことを悟り、悲痛の思いに満された。だが、全身を拘束され、唇は閉じられ、彼の方からは何をすることも云うこともできぬ。

B2号が近附いて、腰に押し附けられて締められている左手の指から、指輪を抜いてクララの所に持ってゆく。

――ああ、今朝の夢のあと、指輪を形見と信じて、死んだと思った君に祈ったあの時の方が、まだしも幸福だった……。

背後から子供の声が聞える。あの美少年だろう。

「鞭で字を描くのって面白いですね」

――何のことだ？

「そうかい。僕はそうでもない。毎日描いてはいるがね」声はセシルらしい。「夕食前にこの生畜舎に下りて（一五章二）、六匹並べてね。辞書にある六字綴の単語を一つ宛描いて行くのを日課にしてるんだが……」

「そりゃ、又根気の良い」と弾んだ声。

「別に字を描くのが面白いからじゃなく、鞭を空振りするのが詰らんから、ヤプーの背中を利用してる丈さ。目的は全身美容（※）なんだ、それ丈さ」

――鞭で背中に字を描く話なのだ。先刻のあの殺人的な三鞭で、背中に……あッ、Nの字形になっているわけだ……

（※）参考。米女優テリー・ムーアは、胸部に肉を附ける為毎日牛追鞭（長い鞭索のあるもの）を振り廻すそうである。米誌の記事にその写真が出ていたが迫力のあるものだった。（作者）

「洗礼だ、聖信礼だって、光傘を冠らされる毎に思うんですけどね一体何故、手間をかけてまでそんなことするんでしょう。肉便器にやれば黒奴のお酒になるものを、ヤプーにやるなんて勿体ない気がするんですけど」

「それはね、マック郎セシルの声は自信に溢れている。「土着ヤプーが人間意識を持って育って来た猿だからよ。意識の点で黒奴に近い点があるのさ、黒奴を半人間にする為に黒奴酒が使われる様になったのと同じだ。古くからの儀式だよ」

「実際に効果があるのでしょうか？」

「うん、古い実験報告があるよ。ある動物心理学者が、二匹の双生児ヤプーの一方は、洗礼、堅信、聖体と普通に信仰の道に入らせ、他方はそれをやらずに、鞭丈で訓練した。結果は、前者の成績が段違いに良いんだ。そういう実験を数十回やった上で、結論として、古来の儀式は実際的効果あり、と云っているね」

家畜文化史の専門家丈あって、明快な説明だったが、少年はまだ懐疑的だ。

「でも、その実験は、訓練の時にヤプーに白色信仰を持たせるのが損か得かの問題でしょう。私の疑問にしてるのは、そうじゃなく、

勿論、白神（ホワイト・デイティ）への信仰は持たせるとして、その為に私達の身体から出るものを使う必要があるのか、ということなんですよ。現に、土着ヤプー以外のものは、別にそんなものなしでも私達を崇拝してるでしょう。奴等の礼拝は別に不真面目なものじゃありませんからね」

「然し……」

「少々、土着ヤプーを甘かし過ぎないかな、黒奴用の飲食物をやるなんて」

年少に似合わず、鋭い議論だった。

「然し、こういうことがあるよ」セシルが盛り返した。「前史時代の人が旧犬（いぬ）を飼う時にはね、先ず自分の唾を舐めさせたそうだ。ね、それと同じ……」

「でも、旧犬は嗅覚がヤプーより鋭いでしょう。動物園（ズー）にそう説明文がありますよ。だから、旧犬の場合は、『主人の匂いを憶えさせる』って意味があったわけで……」

「チャールズ、矢張り意識の問題だよ」別の声だ。ウイリアム・ドレイパーらしいと麟一郎は聴いた。「唯の洗礼では我々と同じになる。黒奴以上になる。聖尿洗礼（ユーリナリ・バプチズム）だからこそ、人間意識を洗い流せるのさ。下盃（ビスカップ）を飲ませるからこそ、唯の水では溶けない内心の不純な（一次形成の、の謂だ）自尊心がすっかり溶けてしまうのさ。他のヤプーには我々のものは初めから神聖だ。然しこのヤプーにとっては、クララの尿は今はまだ別に神聖なものじゃない。だからこそ自尊心を溶かす力があるのさ。……」

麟一郎は耳を幾度も疑った。

――洗礼とか堅信とか云ってるのは、クララの小便を使うんだ。なんということだ！　彼は、屈辱に心臓の破裂せんばかりの思いだった。いくら最愛の女性のものとはいえ、それを頭からぶっかけられるとは！

――クララ、余り酷いじゃないか。何もそうまで俺を凌辱しなくたって……昨日の僕の乱暴は悪かった。君を殺そうとした。然しあれは一旦の発作だった。今のこの茶番の様に入念に仕組んだ復讐は、あまり残酷すぎるじゃないか……

口がきけるなら、そう訴えたかった。然し厳然として立つクララの頭上を仰いで、周囲が輝いている神々しさを見ると、茶番復讐と云い切る気持もぐらつき、断崖に足踏み外して、深い谷底へ落ちてゆく時の様な不安と絶望に襲われて来るのだった。

この時、神々の私語がぴたりと止んだ。聖水瓶が到着したらしい。

四　聖尿灌頂（ユーリナリ・バプチズム）

径六米位の円周に沿って立ち廻らされた輝く壁面中、中央に坐る麟一郎の正面になる部分が破れて、異様な一行が現れた。

先頭の小男はヤプーだが、頭の上に変り型の帽子の様にして聖水（ホーリー・ユーアの）瓶を戴せていた。どう固定したのか、別に手で支えてもいない。形は既述（二十一章五）の通り、尿瓶（しびん）と同じだ――いや尿瓶そのものなのだ。ガラス様の物質製で中に半分位黄金色の液体が入っているのが透けて見える。広口をビールジョッキ風の自在蓋で蓋してあるのは、その液体の臭の発散を避ける為であろう。このヤプーは聖水専門の運搬畜（ヤップ・ポーター）である。

次いで、読者にもお馴染のクララの従者F1号が現れた。重要使命を帯びて緊張している。彼の左右には三十から四十位の年輩の生ヤプー――全裸で首輪をし額紋はない――が従っている。

人間が救会で洗礼を受ける時には、代父母に列席して貰うが、土着ヤプーの洗礼には――雌のヤプーを立てるのに無理があるので――白色信仰（Albinism）の道の先達たるべき雄ヤプー二匹を代父兄として列席させるのである。この二匹は麟一郎の属すべき八号檻の檻仲間から選ばれて来た優秀ヤプー達であった。F1号は人間の洗礼における牧師ないし司祭にあたり洗礼を施す役である。

麟一郎のすぐ傍まで来ると、聖水瓶運搬畜は両膝ついて畜人坐りをする。頭上の瓶の提手が丁度F1号に握り易い高さに位置した。

代父兄の二匹は麟一郎の両側に坐り、正面に立つ女神クララに向ってY字を切り（クリスチャンが十字を切るのと似て、右手の指で胸にY字を画するのである）、床に平伏して礼拝を始める。

権利宣言に終る畜籍登録の手続は、イース社会の構成員の一人が他の人々に対する自分の所有権を確立する為のものであって、いわば対外的儀式である。この席にあるクララ以外の五人は、イース社会を代表するものとして、クララの宣言を聴き、公に証人となる。

これに反して、畜人洗礼その他の信仰上の手続は、貴族が自己の所有畜に対して神として君臨する為の手段であって、いわば一家の私事であり、対内的儀式である。だから、他の五人も、権利宣言の時と立場が変り、単なる傍観者として、見物しているに過ぎない。クララ丈がこの場面の主宰者である。権利宣言では、一社会人として他の人間との関係を処理した彼女は、今度は女神としてヤプー共に臨み、その信仰の対象となるのだ。

子供の時からヤプー達の礼拝を受けて育って来ているイース貴族にとっては、この二つの役割を演じ分けることは、別に何の苦もない。然し、人間意識丈で育って来たクララにとっては、家畜とは云え人間の形態を具備した連中から礼拝されることは、晴れがましく、くすぐったかった。昨日決斗で倒れた矮人（ピグミー）は切腹の末期に彼女を「白皙の女神（ホワイト・ゴッデス）」と呼んだが、今彼女を拝んでいるのは、あんな人形見たいな小人（こびと）でない。外見は人間と同じ立派な生ヤプーなのだ。生きながら神となる全能感は昨日に幾倍した。

然し、てれながらも、まで学生演劇の舞台で女王役を演ずる時の様に、落ちついてこの女神になり切ることができたのは、相手が本当の人間でないという安心感が心裏に行動の支えなっていたからだった。女神といってもヤプー共の女神である。そこには演劇に通ずる非現実感があった。――にも拘らず、それは決して、お芝居ではなかった。彼女の前には二匹のヤプーが本気で彼女を拝んでいるのだった。この様に彼女を礼拝し信仰する輩がまだ幾百幾千と続く筈だ。今後人間と神との二重生活を、好むと好まざるとに拘らず、送らねばならないクララなのである。

二十四時間前には馬の轡を並べてタウヌス山の山路を登っていた独逸生れの女と日本生れの男、空飛ぶ円盤の墜落に遭遇さえせねば、幸福な結婚生活に終始したであろう相愛婚約の二人が、今は、一人は人間意識を捨てて家畜意識を持つことを強制され、一人は人間意識の外に女神意識を芽生えさせられ、神と畜生となって向い合っているのだった。

黒奴F1号は、最敬礼を終ると、右手に聖水瓶の提手を握った。そのまま、瓶をヤプーの頭上に持って行き、傾けつつ、唱えた。

「母と子と聖霊の御名に依りて（※）聖水もて汝を洗う」

（※）註。ここで母といわれるのは、女神中の女神である大英宇宙帝国の女王陛下であり、子というのは、当該の貴族――平民にはこういう神様生活は許されていないから――、この場合ならクララその人を指す。聖霊というのは、畜人神学（ヤプーナル・シオロジー）上は色々に論ぜられるが、イース社会の構成原理とか畜人制度の象徴化とか考えてよいであろう。これが白色崇拝教（アハビニズム）の三位一体（トリニティ）なのである。

自在蓋が少し開き、光幕の輝きを反映してキラキラ光りながら、黄金色の液体が彼の頭頂に注がれた。丸一日以上櫛らぬ蓬々の髪を濡らすと、額から顔面に下る。胸から腹へと滴ってゆく。どういう物質なのか。軽金属ながら液体を吸い取るらしく、床には殆んど溜らないが、瓶を傾け終る頃には、ヤプーの全身は肌一面に濡れ光った。

麟一郎は額から伝い下る液体から守るために目を瞑じた。液は体内から出たばかりの様に生温かく、又新鮮な尿に特有の豆を煮た様な臭を帯びていた。

と、クララの声が聞えて来た。

「リンよ。TEⅢN24412267号よ。我汝の畜生天（ヤプーダム）（※）における新しき生（ニュー・ライフ）を祝福す。……」

目を開くと、光輪の下で彼女の唇が動いている。女神様の御託宣だ。

「……我を信ぜよ。さらば幸福（しあわせ）あらん」

（※註）。地獄、餓鬼、畜生、人間、阿修羅、天上、この六道輪廻の思想からいえば、畜生天というのは妙に聞えるだろうが、土着ヤプーにとっては、イースの畜籍（ヤプーダム）に入ることは、昇天即ち極楽往生と考えられており、唯それがイース人から見れば畜生（ヤプー）の増加に過ぎぬという二重性格があるのである。だから、結局畜生天への生れ更りと表現するしかない。天上界（イース）の畜生（ヤプー）たるは下界

（ヤプン諸島）の（似而非）人間たるに優るのだ。

健全な常識人だった瀬部麟一郎なる人物を考えると、全く不思議なことだが、こういう状況下におかれたら、誰でもそうなのかも知れぬ。とにかく、全身にクララの尿を浴び、身体は濡れ、鼻にその臭を嗅ぎ、目には後光を放つ彼女の顔を見ながら、このクララの言葉を聴くと、彼は、生れて初めての異様な感情に襲われた。

法悦と呼ぶには、勿論まだ遠かったが、宗教的帰依の感情だった。帰依の対象たる絶対者はクララだった。今迄、彼の彼女に対する愛情は、男の女に対する性愛丈だったのだが、そこに新たに人の神に対する宗教的愛が入って来たのである。

理性は頑強に抵抗していた。人間が神である筈はないのだと。然し、彼の横に二人の黄色人種が後光の射しているクララを礼拝していることは事実だった。更に、クララの尿が聖水として自分の頭に注がれていることも事実だった。断じてお芝居ではなかった。

――ヤプーは白人を神としているのだ。

その認識丈は否定できなかった。そして彼自身の心中にも、その帰依の感情を生じつつあることを、理性に恥じながらも、どうすることもできなかった。

クララの声を聞くまでの、満腔の恨みつらみや、先刻話をきいて尿をかけられることを彼女の復讐と考えたことや、そういう雑念が――全部消えたのではなかったが――減じて、今のこの状態に象徴される様なクララへの関係が至極当然なことに思われて来、先程の底知れぬ顚落の不安が薄らいで、やはりクララに頼っておれば良いのだ、という気がして来た。

――新しき生……今迄の俺じゃない、クララが昨日のクララでない様に……

畜人洗礼がヤプーの意識に及ぼす効果として先程ウイリアムスが力説したのは正にこの心理的変化なのである。

彼はまだ人間意識を捨て去っていない様に見えるが、自分より高い存在価値ある人間――絶対者としてその排泄物さえ神聖化される程の存在――を感じたことが、人格喪失の第一段階なのだ。

人間はすべて平等で人間は他の人間に対して神とはなり得ない。人間を神とするのは人間によって創られた犬や馬の様な家畜丈だ。そしてクララは人間だ。こう彼の理性の告げる所に従えば、クララを神として礼拝しているヤプー達は人間より家畜に近い存在だ。然し、それならば彼女に帰依しようと感じる彼の感情はヤプーと同質であり、従って彼はヤプーだということになる。

彼自身が人間であってクララが女神であるか、クララは人間に止まって彼自身がヤプーという家畜的存在であるか。解決は二つに一つしかないが、前者は彼の理性が「否」と答え、後者は彼の感情が「然り」と応ずるのだった。

TEⅢN241267号は、漸く家畜人としてこの自覚を生じ始めたのである。麟一郎がリンに生れ更りつつあるのである。正に聖尿灌頂（ユーリ・ナリ・バプティズム）の功徳であろう。

所で、クララの方には、別段激しい感動は起らなかった。あらかじめポーリンに教えられた通り喋っている丈のことで、大して実感が湧かなかった。麟一郎と違って、光傘（ヘイロー）の空気幕（エア・カーテン）に保護されている彼女には、嗅覚を脅かす様な臭気が感ぜられなかったことも、一の原因であったろう。

然し、目は見ていた。黄色い液体が、リンの全身を濡らして行くのを。それが床に溜って吸い込まれてゆくのを惜んで、両脇の二匹のヤプーが唇を床につけて少しでも吸い取ろうと夢中になるのを。

赤クリームの性質を聞いてはいたが、本当かどうか半信半疑の所が残っていたのに反し、この液体が先刻自分の身体から出て行ったものだということは、疑がなかった。それだけ赤クリームの舐められるのを見たより印象は強かった。然し、赤クリームの性質を初めて知った時の様な嘔吐感も起らず、平静な気持で眺めておれたのは、ヤプーという動物の畜生性(ビーストリネス)に充分得心が行ったからである。そしてリンはそのヤプーの一匹なのだった。

新畜への処置を一先ず終って、一同はこの予備檻の部屋を出た。クララは一番後迄残って、天井から滝の様な水流が注いで、リンの全身を洗い始めたのを横目に、やっと廊下に歩み出て、動廊(ムービング・コリドー)に跳び乗った。気がつくと頭上の光傘(ヘイロ)は何時か消えていた。

五　半人半馬(セントーア)と飛行下駄(ジェッタ)

生畜舎を出て水晶宮本館一階へ、動廊が皆を運び込んだ時、マック少年が言った。

「じゃ、ここで失礼します。コトウィック嬢(さん)、地球御滞在中に一度是非私共に御寄り下さい。……」

見送ることにして、皆でポーチに出た。

クララはこの時初めて半人半馬(ヒントーア)(Centaur)(※)という動物を見たのである。

客人用厩舎から黒奴馬丁が曳いて来たのは、大きさは丁度馬位だが、印象は全然異る。馬の長い頸にあたる部分がなくて、女体の上半身があるのだ。丈なす黒髪、日焼した黄肌の顔立は整って、黒瞳が大きく、双の乳房もよく発育している。何の畸形的な所もない成熟した女体だ。唯その臍から下が狂って来ている。後から腰を抱く様に廻された二本の腕が双の掌で臍下の腹部を蔽う様に位置しつつ明らかにその女体に癒着しているのだ。そして、その下方には——

馬の脚ではない。たしかに人間の脚であることは、足先の恰好丈でも分るが、問題はその発育で、上半身は普通の人体なのは、腰から下丈が、身長が倍もある巨人——然しそれでも三倍体の畜人馬ほどではない——の下半身と思えるのだ。だから人間の脚でありながら、馬の前脚に負けぬ脚力があるとの印象を与える。

然し、後部は更に奇妙だった。双の後脚は前脚と同じ巨人の脚だった。その巨人の上半身が腰から前に折れて、馬の胴体に当る部分になっているのである。並の人間より倍も大きいが、それでも馬の胴体の豊かさはなく、殊に厚みに缺ける。然し、それでは、拍車など馬並に使えぬではないか、というと、そうではない。巨人の乳房が隆々と発育してそれが丁度鞍の下方、馬で云えば腹帯にあたる胸帯を受ける個所に位置するのだが、鐙(あぶみ)を踏んで内側へ蹴込めば、拍車はこの乳房に当るのだ。この乳房の存在で、後半身も又女体と判明しよう。両肩を前半身女体の大きな腰の上に附け、首は左横に窮屈そうに出し、前半身の腰の上から普通の大きさに変る為胴廻りの一段細くなった所から両腕を前に廻して腰を抱く様にしている。そして、その接続部分は皮膚も肉も完全に癒着しているのだ。

畜体二つを組み合せ、その各部の発育比率を異にすることによって、旧馬(うま)の体型を再現したもの、それが、人為乗用畜(マン・メイド・ホース)の半人半馬(セントーア)(※)であった。先に触れた通り(四章二)、母胎内で一卵性双生児に手術し、こうした癒着を人為的に作って生れさせ、整形薬で身体各部の発育を左右しながら、前部上半身はあくまで美しく、然し四本の脚はあくまで強健に、と丹精こめて育て上げられる。雌畜(めす)が殆どなのは、拍車で乳房を蹴ることができる為であり、又、これが主として男子用の乗用畜(のりしろ)とされている為でもあった。その心理的補償

をこの美女セントーアの騎乗に見出していた。平民に私刑公売により黒奴を売りつけることで（十二章二註）不平不満の抑圧を転荷することを案出した女王セオドラ一世が、女権制擁護の為にこのセントーアを作り出して男性に与えたのだと伝えられる。

（※註）。ギリシャ神話にいわゆる Centauros（ケンタウロス）は、イース世界の Centaur を人馬一体と見て伝説化されたものだ。正確には、半人半馬というより、馬形双体である。

チャールズの愛馬はユッキーという名前だった。実は二匹の個体だが、乗手は一体として意識しているし、彼女等の方でも生れた時からの習慣で、それを怪しまない。主人から可愛がられるのは常に前半身であり、彼女は自由な両手で顔の化粧をすることもできる。

後半身は、主人の身体を背に支え、尻に鞭を、乳房に拍車を受ける損な役廻りであるが、別に反逆心もなく、その運命を甘受している。意志去勢（十三章五）によって服従本能丈になってるからである。尤も乗手には忠実であっても、血の（文字通り）つながる姉妹たる前半身のみが常に良い目を見ることに内心の嫉妬を感じてはいたが…

曳かれて来ると、前のユッキーは、「若様（ほっちゃま）」にっこり笑いかけた。白人の男性に対する有色人女性の本能的媚態がこんな所にも残っている。然しチャールズは別にそんなものは意識しない。彼にはユッキーは「女」ではない、「馬の雌」というに過ぎないのだ。黒髪を左右二本の長い辮髪に編んで先を結び合せたものを手綱代りにして、黒奴の馬丁に支えられつつ、鞍に跨った。股の割れた黄色い乗馬用スカートの下に長靴の拍車が光る。

後のユッキーの脊骨は、主人の身体を受けて一二寸しなった。肋骨の両側に内股が吸い附いた。前のユッキーの髪手綱を執りつつ、見送る五人の方を振り返って笑った少年の顎の下に、例の可愛い靨ができた。片手を振りながら、馬を走らせて去る。

手提袋ヤプーが、後から滑る様に随いて行った。彼は、馬に乗れない代りに、畜人靴（ジェッタ）を穿いていたのである。畜人靴（ヤップ・シューズ）ジェッタは下駄底の歯の間に小型廻転翼を附けて地上僅かに飛揚させ、鼻緒をジェット噴出孔にして推進力を与えた飛走用穿物であって、この仕掛は人間の穿く靴にも仕掛けられぬではなかったが、主にヤプー特に主人の使いやお伴をする従畜（パンティズ）の穿物に利用された。それが畜人靴なのだ（※）。主人が馬や飛車（後述）で疾駆する時、従畜はこの畜人靴でどこへでも随いで行く。便利なものと言えるが、従畜自身の自由行動の為には決して使わないのだから、その便利さはヤプーの為より、主人側即ち人間の為に存するのである。

（※註　二十世紀中葉既に畳半帖位の台座丈で外から廻転翼の見えぬ小型ヘリコプターが発明されていた。これを小型に改良しジェット推進機を附したのがジェッタ（jetter）である。恰好は下駄同様だが、蹄鉄を馬の靴（ホース・シュー）と呼ぶと同様に、この飛行下駄を畜人靴（ヤップ・シューズ）と呼ぶ。これは跣足（はだし）を原則とするヤプーの唯一の例外的穿物だ。（本当の靴を穿くことは決してない）これを jetter と呼ぶのは、ジェット推進から来たが、jeta（ジェタ）となり、更に geta（ジェタ）と綴られ、遂に家畜語としてはゲタと読まれ、飛行性能なき板に鼻緒のみの穿物たる下駄（ゆた）となつたとはディの「家畜語考」（八章二例9）の所説である。

なお、ギリシャ神話のヘルメス（ローマのマーキュリー）の穿く翼の生えた飛行サンダルというのも、このジェッタのことを誤り伝えたのである。ヘルメスが神々の使者として一段地位低いのは従畜の穿物を穿く点に照応している。

少年とヤプーとは、吸い込まれる様に、紅葉の真盛りの木立の中へ消えて行った。

緊縛映画雑記

シナリオとその周囲（その二）

黒河徹也

二月号に引用した猪俣勝人のシナリオ〝北齊〟は、もともと北齊の歩んだ歳月を忠実に再現するよりも、嘗て生きた人間としての北齊の中の真実、謂わば、北齊の全人格を適確に受け止めることに主眼が置かれて居り、そのために歴史的、記録的、若しくは絵画史的な視点と異り、ひたすら人間のドラマとして現代人に訴えようと試みており、セリフも現代調で貫かれています。そして水責のシーンを始め、至る処にズバリ北齊の真骨頂、正に鬼であり絵の鬼である姿を描き切って居ります。――激しい折檻の、まだ余憤のおさまらぬ弥助は、どうかして娘のおそのを弟子の植木職人、丑松に呉れてやりたいと願うのですが、部屋の隅でカイマキにくるまったままボンヤリ考え込んでいるおそのは、切なく俯向いたまま答えない。母親おとくが、熱いお茶を持って来てやり「本当に何て奴なんだろう好きな女があんなに折檻されているのに、洒々として絵なぞ描いてやがって。私や、今日て今日は、本当に……」言葉もなく、我が子いとしさに涙ぐんでしまう。弥助も鼻をすすり上げ「あんな薄情な奴は人間じゃねえ！犬畜生だ！なあ、おその、諦めておくれ。お父っあん頼むからよ、な……」おそのは宙を見詰めたまま、身じろぎもしない。「あんな人情のねえ男に、可愛いい娘をやれる道理がねえじゃねえか。なあ、おとく……」「そうだともよ」その時、始めておそのが顔を上げた。「お父っあん……」思いつめた、その異様に力強い声、弥助はギクッとおそのを見つめる。「……私……きっと……あの人を立派な絵描きにしてみせます」「なんだと！」おどろく弥助。おそのの必死なまなざし。「どうぞ、私を春朗さんの処へやって下さい。お願いです！どんなに辛い目に会っても決して、お父っあんやお母さんに御心配はかけません」母親おとくも、はじかれたように「お、おその、お前は一体、何て娘だい……私や、もう何て云えばいいのか……」「お願いです！おその一生一度の我儘と思って許して……」「そりゃ、私や、お前さえ仕合せになってくれれば、何も云うことはないんだけれど……でもいくら何でも、あんな男とお前を……」「おっ母さん、お願い。お願いです！」「お前は

そんなにまであの男を……」さすがにおとくも、いじらしいおそのの言葉に心を打たれた。それまで、じっと腕を組んで考え込んでいた弥助は、いきなり「おとく、もう云うな！何んにも云うことはねえ！」おとくはハッとして弥助の顔を見る。弥助の顔には、或る澄みきった感動の色が浮んでいた。静かに、おそのを見る。「おその、お父っあんは負けたぜ」息をのむおとく短い沈黙の後弥助の眼にみるみる涙が溢れてくる。「さすがは俺の娘だ。生命をかけて惚れ抜いたお前には、もう歯が立たねえ。どうとも勝手にするがいい」「お父っあん！」泣き崩れるおその。「その代り、ここで判っきり約束して貰いてえんだ。あの気違い絵描きを、きっと日本一の絵描きにするんだぞ！」おそのは、涙の顔を上げて大きく頷く。「いいな、きっとだぜ」「ハイ」おとくも、今は涙で顔をクシャクシャにして嬉しそうだった。「よ、よかったね、おその」

おそのは、ワッと泣き崩れた。おとくも弥助も泣いていた——。

一途な、おそのの刺すように哀しい愛は、こうして父、弥助のかたくな胸底を深くゆすぶって、若い二人の新しい生活が始まります。

律義で頑固な、しかし実は心底から娘を愛して止まない弥助と、夫の云うがままに気弱くそれまで暮して来た母親おとくの二人の姿が、生き生きと描き出されて居り、ここはシナリオ前半の大きな山場になっています。シナリオ作法では、一つのドラマの流れの高揚の後には、小さなクライシスが幾つか続き、やがてより一層、大きなクライマックスへ導かれるのが普通です。シナリオ〝北齊〟ではこの後、春朗（北齊）の勝川派から狩野派、そして遠近法に魅せられての西洋画への遍歴その搾木にかけられるような絵の世界に対する苦悩と焦躁と共に、果てもなく深く、心をこめた妻おそのの献身が描かれてます。

長男、多吉郎の生れた日も、仕事のためには平気で留守にする春朗。ただ絵の成長のために、他人には全く不可解な度重なる引越の模様などが、簡潔に印象的に描かれています。

——粗末な、また別な裏長屋に移り住んだ春朗の家から、赤ん坊の泣き声が続きます。もう三つになった多吉郎が、泣いている赤ん坊

のお栄の傍で無心に遊んでいる。窓外は、しんしんと降り積る雪である。

67　家の表

降る雪の中に、おそのが雪女郎の扮装でポーズをつくって立たされている。それを春朗が写生している。西洋画の下絵が思わしく描けない。

春朗「うん……駄目だ！西洋画じゃ、これは描けないんだ……」

赤ん坊の泣声が一段と高くなる。

その「あの、一寸、お栄を見てきていいかしら。あんなに泣いてますから」

春朗（耳に入らない）「違う、俺の求めてるものは、こんなものじゃない！」

その「ねえ、一寸だけ赤ちゃんを見て来ちゃいけないでしょうか……」

春朗（叫ぶ）「うるさい！　赤ん坊が何だ！俺の画が新しい道を展げるかどうかって時じゃないか。」（焦立つ）「ああ、駄目だ！こんなことをしていたら、俺の絵は駄目になる……」

ぷいっと筆を抛って、表へ飛び出してしまう。

その「あなた……」

春朗は振り向きもしない。おそのは絶望的に立ちつくす。

68　道

雪の中をいらいらと歩いて行く春朗。

69　春朗の家の表

さっさの姿勢のまま、じっと雪の中に立ちつくす、おそのの姿――。

その（家の中へ）「多吉郎さん、もう一寸だけ、お栄を見てて頂戴ね」――。

創造というものが、常に生命の磨滅と人知れぬ苦痛、犠牲の上に構築される範型を、猪俣勝人はその極点で、シナリオの中にたたき込みます。しかし、何という異端なこの愛の姿――。私の脳中に残像をとどめる伊藤晴雨さんの伝説的私生活が今、鮮かに蘇り更新する。

――〝大正九年の秋、私の女房にしていた喜世子が臨月になった。本人に因果をふくめて納得させ、建築中の画室の梁から逆さ吊しの写真を撮影しようとした。それは、月岡芳年描く二枚続きの「一つ家」の図に、私は疑問を持っていた。それは如何に絵空事と雖も、余りに誇張が甚しいので、幸い臨月の女房を試験して、故人の描くものが、想像か写生の謎を解かんとしたのである。島田に結わせた髪をバラバラにほどして、先ず、吊るさるべき梁の下に台を置いた。その上に女の肢体を横たえ、足をロープで縛って梁に結び、縛り上げたL字型になった女の肢体は……。長々しい。〟

読者は、伊藤さん自身の手になる著者肖像とモデル写真入りの無類の自叙伝〝責の研究〟を読まれんことを。

ところで北齊が、真実、水責めの図を描いたかどうか、あまりにも実証主義的な問題は暫く置く。尤も伊藤晴雨さんのものになる〝黒縄記〟の第二十項「責場を好んで描いた人々」の中の画人の中には、北齊の名は見当らないし、北齊を研究してみたこともない私には不明なのだが、少なくとも北齊を語る恰好のエピソード、それが例え架空なものにしても、俗事を振り捨て振り捨て、恐しいほどの執着を以て絵画一筋に生き抜いた北齊の断面を、見事に視覚化しているという事が出来ます。附け加えると作家には、北齊よりも北齊的な体臭を抽出するために、あらゆる自由な発見が可能であり、あらゆる発想が許されているはずです。しかし、そうした虚構に対して、北齊が描く水責めの図が、今日その痕跡を止どめない事実に対しては、また作家として適切な作品的処置の必要なことは云うまでもないことです。ではもう暫く、シナリオの展開のあとを辿ってみます。

――今や、歌麿や春信を凌ぐその版画の売れゆき、だが、依然つづく絵への苦悶、そうして滝沢馬琴の北齊に寄せる激励と友情、馬琴の弓張月の挿絵製作の労苦、遂には眼は烱々と意欲に燃え、絵をにらみ筆を走らせる。眼は深く窪み、髪はのび、ひげは蓬々としてい

る。おそのが、そっと障子をあけて食膳を運んでくるが、見向きもしない。まさに仕事の鬼、北齊の凄まじい生活が鋭く描かれています。更に、成長したお栄の嫁入りとその不幸な結末、また多吉郎のヤクザな無鉄砲な暮しの中に滲み出る愛の哀歓などを織りなして、大詰めに運ばれます。やがて、おそのの死ぬ日がきます。

夫の仕事のために、生涯の一切を捧げたおその、その痛ましい姿も今はなく、ただ位牌が一つ、すっとか細く立ちのぼる線香の煙に見えがくれしている。父、弥助が焼香している。その老い込んだ佗しい姿。傍に多吉郎とお栄が、ポツネンと坐っている。弥助は鼻をすすり上げて、お栄を振り返り、若い時のお母さんの絵でも飾ってやりたいが、と呟くように懇願します。「探してみます」と、お栄は立ち上って父の仕事部屋へ入ります。

127 仕事部屋

入って来たお栄、手文庫やら文机の上の沢山の絵を探してみる。と、一枚の絵が目に止る。手にとって見る。それは、嘗ておそのが井戸端で責められていた時の凄艶な絵である。

128 位牌のある部屋

お栄、弥助にその絵を差し出す。

お栄「ね、おじいさん！ これ何んだか お母さんに似てるようね」

弥助「おっ、こりや、お前……」

お栄「じゃやっぱり……」

弥助「俺はあの頃、おそのを貧乏絵描きのお父さんなんかに、やりたかアなかったんだ。処が、どうしても云うことをきかない。俺は怒ってね。おそのを折檻したんだ」

お栄「まあ、ひどいおじいさん！」

弥助「俺も気が短かったが、お前達のお父さんは、それを止める処か、おそのの姿を絵に描き始めるじゃねえか。俺は、あの男の冷たさが無性に腹が立ってな、おそのが急に可哀想になっちまったんだ！ そんで急いで縄を解いてやろうとしたら、お前、お父さんが何と云ったと思うんだ。絵が描き上るまで、そのままにしてくれと、ぬかしやがるんじゃねえか！」

お栄「まあ……お父さんが、そんなことを！」

弥助「俺は、こんな非人情な男には金輪際おそのは、やるまいと思ったよ。……処が、おそのの奴が、健気なことを吐かしやがってな！。（涙ぐんで鼻をすすり上げる）〝私はきっと、あの人を日本一の絵描きにしてみせます！ どんなつらい目にあっても……〟」

お栄「おじいさん！ やめて……もう、それ以上、とても聞いていられないわ…」

その時、馬琴と北齊が入ってくる。馬琴は恭しく焼香する。それまで黙っていた多吉郎が、つと立って北齊の席へくる。

多吉郎「お父さん！」

北齊、振り向いて多吉郎を見上げる。

多吉郎の眼は、ギラギラと憎悪に燃えている。

多吉郎「お父さんは人殺しだ！」

北齊「何を云うんだ……」

多吉郎「だって、そうじゃないか。お母さんを殺したのは、お父さんなんだ！」

北齊「莫迦を云うな！」

多吉郎「成る程、お父さんは日本一の絵描きになれたけど、それは日本一、可哀想なお母さんがいたからじゃないか！」

北齊「多吉郎！ま、待ってくれ……」

多吉郎（構わず）「お母さんは一生、お父さんのために、お父さんを立派な絵描きにするために、泣いて暮してきたんだ！」

北齊「おい！ 俺の云うことも聞いてくれ！」

多吉郎「今更、何を云ったって、死んだお母さんの生命は戻りやしないんだ！（ぐっと涙をのんで、お栄に）おい、今の絵を貸してみろ！」

お栄「お兄さん！」

多吉郎「いいから見せろ！」

お栄、仕方なく絵を出す。多吉郎、それを叩きつけるように、北齊の面前に突きつ

ける。北齊、一目、見てアッと顔色を変える。

多吉郎「これを見ろ！　これが、お母さんの本当の姿だったんだ！一生、この姿そのままの苦しみに堪えて生きてきたんだ。ただ葛飾北齊の絵を立派にするために！」

お栄「お兄さん！やめて！」

多吉郎「いや、今日は云うだけのことは云うんだ！　お父さんは自分の絵さえ立派にできれば、それでよかったかもしれない。だけど、お母さんは絵の具じゃない。俺たち兄妹だって絵筆じゃなかったんだ。みんな、自分自身の命を持った人間なんだ。お父さんはそれを、ただ絵の道具位にしか扱ってくれなかったんじゃないか。そして到頭、お母さんは生命を枯して死んでしまったんだ。一生、何一つ人間らしい楽みや喜びもなしに……」

さすがにそれ以上、云えない。おそのの絵を、その場にたたきつけると、泣きながら表へ飛び出してしまう。北齊、ソッと、その絵を拾い上げる。

北齊「お栄、この絵を破ってくれ……」

お栄（ハッとして父の顔を見る）「えっ　これを……」

北齊「永い間、お母さんを縛っていた縛しめを解いてやってくれ。そして安らかにやすませてやっておくれ……」

お栄「ハ、ハイ……」

見る見る、お栄の瞳に涙が溢れてくる。そして、おそのの絵を心をこめて破る。

弥助（涙を拭って）「ああ、これでやっと、おそのとの約束が果せますわ」

北齊「約束……？」

弥助「いや、実はね、おそのを嫁にやる時、お前が立派な日本一の絵描きの女房になれたら、そんな時こそ高砂を謡ってやるそれまでは謡わねえと約束したんで……」

北齊「そうでしたか……」

弥助「今は晴れて謡えるよ……お栄、酒を一杯くれ！」

茶碗を出す。お栄、ついでやる。弥助、一息にのんで、

弥助「じゃ、おその、よくきくんだぞ、お父っさんの、一生一代の高砂やだ……」

声張り上げて謡い出す。

北齊（叫ぶ）「やめてくれ、もうたくさんだ!!」

弥助、ハッとしてやめる。

北齊「俺は、そんなに偉い絵描きじゃない。立派な絵なんか、一枚も描けない男なんだ！」

と、位牌の前にうつぶしてしまう。

129　墓標

真新しい、おそのの墓標。北齊とお栄がその前に立って――。

北齊「……俺が、おそのにしてやれたのは、墓をつくってやることだけだったなア……」

お栄（撫然たる思いで）「……」

北齊「……お栄、お前にも随分、苦労をかけてしまったなア」

お栄「そんなこと……私なんとも……（涙ぐんで）お父さん……私、何時までもお父さんのそばにいてよ……」

親と娘は顔見合せて、初めてしみじみと微笑み合う。北齊の眼にキラリと光る涙。

これが、いつも絵画の世界に終始した北齊の、生涯に流すことのできた唯一の感傷だった。

しかし、シナリオはこの後、更に人間、北齊の核心に迫るため息子、多吉郎の処刑シーンを設定して居ります。シナリオの構成から見てみますと、クライマックスを過ぎて、そのまま直ちにラストにつながるよりも、更に味わい深く余韻深いものとするために、クライマックス後、もう一段、小さなクライシスを設定して、一ひねりしてみるのが常道です。

――今日も、鉄火場で手に入れた何がしの金を懐に、丁と半の殺気立った雰囲気を身につけたまま多吉郎は、惚れた吉原の太夫、紫のいる小座敷に颯爽と肩で風切ってやってきま

す。ガラッと障子を開ける多吉郎の眼の前には、ドスのきいた親分風の男に抱かれて、ウットリと眼を閉じている紫の崩れた姿。カッと逆上した多吉郎は、親分を刺殺します。小塚ケ原処刑場。竹矢来が組まれ、敷きつめられた玉砂利が、真夏の太陽にギラギラ照り返っています。後手に縛られた多吉郎が引き据えられている。その遠い一点を見つめるような空虚な瞳。——家では北齊が、珍しく紋付、袴に着更え、悲しみに打ち沈むお栄の引きとめるのにもかまわず、多吉郎にどうしても一言、云ってやりたいことがあるんだと飛び出す。「待って！」と、お栄は必死に「お父さんまさか……兄さんのお仕置される姿を描きに行くんじゃ……」泣きすがるお栄を、北齊はぐっと抱きしめると、何時にない激しい調子で「馬鹿な！いくら何でも、そんな……そんなことが俺にできる道理がないじゃないか！」と顔をそらす。その眼にグッと涙がこみあげてきます。それを隠すように急いで出て行く北齊。お栄はじっと、その後姿を涙の瞳で見送ります。遙かに両手を合わせ合掌、瞑目するお栄。処刑場では刻々、斬首の時刻が近づいてきます。その近くの路を、北齊が急ぐ。役人が多吉郎に、何か云い残すことはないか尋ねます。「何もございません。……ただ、父に、こんなことにめげず、もっともっと立派な絵を描いてくれるよう、お伝え下さい。それからお栄も、仕合せになってくれるように……」父、北齊は、今しも竹矢来を真近にして、懸命に走り寄ります。砂利に足をとられて転び、直ぐ起き上って草履をはき捨て走ります。首切役人が大刀を抜きはなつ。真夏の太陽にギラギラと反射する刀身。漸く辿りついた北齊が、竹矢来にしがみついて叫びます。「待って、待って下さい。た、多吉郎に罪はないのです。私が悪かったんだ！わ、私が……私を代りに殺してくれ！ お願いです。多吉郎の代りに……私を……お願いです……」一瞬、恐ろしいほどの沈黙の中で、空間に振りかぶられた刀身がギラリと停る。が、次の瞬間、サッと振り下される。竹矢来の外で、北齊の膝がガクッと崩折れる。そのまま、砂利の上にへたりこむ北齊。その、身も世もない慟哭の姿——。

空しい時が流れ、絵を描くために捲き起した不幸や犠牲のあまりの大きさに、一層、絵筆を捨てて仏門に帰依しようとさえ考える今日此頃の北齊を、心から励ます馬琴。「それじゃ、お前は負けたことになるぞ。おそのさんや多吉郎さんの尊い犠牲を無にすることになる。一体、今、誰が日本の浮世絵を発展させることが出来るんだ。北齊、お前をおいて他に誰がある。それは、お前が背負わなければならない絵描きとしての義務なんだ。北齊、今になって絵筆を捨てるなどとは卑怯だよ。お前は絵に生き、絵に死ななければならない運命を持った男だ」北齊、力強く頷く。「よし、これから二十年でも三十年でも、命の続く限り描くぞ」二人は、顔を見合せて晴々と笑い合う。傍のお栄も涙を押え、二人を見詰めます。

「俺は前に富士山と取組んでみたことがある。あっさり、はね返されてしまった。今度こそきっと富士を征服してみせる。あの八の字に踏んまえた毅然たる富士！」

こうしてシナリオ〝北齊〟は、見事な幕切れを迎えます。最後のシーンです。

154 赤富士

ドビッシーの〝海〟のハーモニィにつれて、富士の山容が悠然と盛り上ってくる。俗に赤富士と呼ばれる北齊一代の傑作〝凱風快晴〟が、画面一杯にクローズアップされて——。

どうやら私は、本誌に適応した記事から随分と逸脱した事柄を、ぼそぼそと拙く書き続けたようです。そうして私は、シナリオ〝北齊〟の周囲を、うんさ臭そうに嗅ぎ廻り乍ら何を得たのだろう。妻おそのを掠め、おそのを糧として成長し、おそのの生命を賭して築いた北齊の歩みは、恐らく独得の煌めきを彼の芸術に与えた事と思われるのだが、北齊こそ、実は私たちの同類だっただろうか。また妻おそのの人間像はそのまま、私たちの懇願する女性の姿だろうか。思索貧しい、これは私の宿題である。

（未完）

美容病院

◇木村愛子の経験

（会食会の巻）

その九

久留木栄

入院してから、ちょうど一週間たった。この日、愛子には思いもかけないことがもちあがった。それは、当初から愛子には全く知らされていなかったことだけに、非常に愛子の心を戸惑わせた。驚き――驚きという現象は、ここでは常に目新しい出来事ではなかったので、愛子はなれっこになっていた。そこに抜け目があった。その抜け目をうまく摑まえて、計算し、利用することが河野らにとっては、一種いうにいわれない愉快な遊戯となるのである。

この日、愛子は朝から何かしら多少違った空気を感じていた。そこで愛子は、すぐこう思った。

――やっと最初の一週間が終ったので、こんどこそ本格的に責められるのだ。序曲が、あの程度だから、ひよっとすると生命がけかもしれないぞ。まさかとは思うが……とにかく第二週目を迎えたのだ。従って責めの方式が変ることには違いない。それに、あの厭な生活に必要な基礎訓練にもやっとなれたので、このさい、もっとわずらわしい制限を考案してくるに違いない。そして自分は、その拘束具の新たな犠牲にされる――今日は、そのための準備なんだ。……と。

しかし、この考えは誤まりであった。いや、決して誤まりではなかった。それどころか九分九厘まで正しいものであったが、今日はそのための準備と考えたところに誤まりがあった。木村愛子が考えるところに行きつくまでに、まだかなりの迂余曲折があった。迂余曲折、これは、愛子の考えのタイミングを狂わすものである。しかもその方法が、大胆にも愛子を束縛から解放し、束の間の自由を満喫させる……というのであっては、完全に愛子を戸惑わせるに充分だ。河野は、木村愛子へのこれからの訓練のためにも、このさい自

由の貴重さというものをしみじみ満喫させる必要があると考えたのだ。そうとも知らず木村愛子は、朝早くから押寄せて、しきりに動きまわり、何かしら画策中らしい河野副院長や、池田フジ、小野茂夫山形光蔵、桑野ミチ等の人影を見ると妙におびえ、その一挙手一倒足に神経をとがらせていた。

木村愛子は朝起きると、まず池田フジから、

「木村さん、いよいよ二週間目ね。覚悟よくって、これから、貴女の悲鳴の罐詰を作るのよ」

といって、小型のテープレコーダーを見せつけられて驚かされた。それから目まぐるしい程の人の動きである。このため愛子は、例の自由のきかない洗面や食事の最中でさえ、妙に落着かなかった。いつものように小野茂夫から受ける美容体操もそわそわ、小野茂夫がしきりに愁波を送って、落着けと合図をするのが少しも通じない。そんなていたらくである。美容体操が終ると、愛子はすぐトルコ風呂に入れられた。こういう経験は、この一週間に一度もなかった。風呂とマッサージは疲れた後に限られていたのだ。それからあがると、もちろんマッサージが行われた。その横で桑野ミチが助手を指揮して、なにやら次の美容の準備に忙しそうであった。肌や爪の手入が始まる。すると、山形光蔵が助手の河上三登里を連れて、一かかえもある下着類をもってきた。

「先生、これがいいでしょ。あとでいくらいじめても型が乱れないわ」

「どれ、どれ」

「鴨居羊子のスキャンティをちょっと当院風に改良したのよ」

「素晴しい、全く、じゃそれにしようか」

そういう会話もきこえてきた。このため木村愛子の神経は、ますます鋭くすまされてきた。愛子はそういう不安の中で、いつもの皮製のオールインワンのかわりに、トリコットのショーツらしいものか、薄い絹のブラジャー、コルセットなどを着せられた。着せられた肌着はすべて新品だった。それだけに、人身御供にあがる犠牲のように不安さがいやましてきた。もちろん愛子も女である。だから美しい着物を着せられて悪い気はしない。だが、その後がこわいのだ。ちょっと四周を見回すと、手錠だの足枷だの、愛子の自由を奪える道具が目の前に置かれている。それだけに、人が浮々しているのと反対に、愛子の気持は次第に沈んで行く。それをできるだけ引立てようとする動作が、いじらしいくらい哀しくみえる。声が出ないので「また、そんなの……私うれしいわ」とか

「素晴しいのね。そんな下着、見たこともない。生まれてはじめての経験よ」とはしゃいでみたが……不思議に誰も見返らない。それは彼女の動作は声の代りにならないからだ。そればかりか、それと反対に

「これで縛りあげたら、さぞ綺麗だろうな」

「おめかしをしたら、なおきれいだよ」

「そうかしら、でも彼女のことだからきっと目を細くして喜ぶよ」

「フフフフフ、泣きながら、もっときつくきつくというかもしれないぜ」

「それよりどう、ブルーのカクテルドレスに、金のクサリというのは。きっと素晴しいわよ」

という二、三の者の会話さえ耳に入ってくる。それを聞くともなしに聞くと、愛子は思わず肌身がそそけ立つ。愛子の信頼する小野は一切無表情で出入りが激しく、殆んどチラリとしか姿を見せない。愛子の体に責任を持っている河野も今日は珍らしく無言だ。それで愛子の気持をさらにいらだてる。

愛子は下着を着せられると、そのふくよかな体を、すっぽりと真白な大きな布でつつまれた。木綿の敷布のような布で、すっぽり頭からかぶせられるような形になっていたが、背中は二つに割れるよ

うにチャックで止めてあった。手の出るところはない。それを着せられると、いよいよ始まるなと愛子は緊張した。そしてその袋をきたまま、手どり足どり隣室に連れこまれ椅子にかけさせられ、膝と乳の上にバンドをかけられた時、彼女は思わず観念の眼をとじた。しかし始まったのは責ではなく髪のセットだった。ドライヤーを頭にかぶせられながら、彼女はそのドライヤーをドライヤーと思えないほどおびえていたが、その半面、ドライヤーと知ったとき、そのおびえる心の底で、木村愛子は少なからぬ落胆があることを発見して、自らの心情にほろ苦いものを覚えた。すると幾分、落着きが取戻せるような気がしたが……いよいよ髪のセットから解放され、白いシーツをとられ、まるで貴重品を扱うようなドレスの着付けがはじまると、木村愛子は再び落付かなくなった。大きく首から胸にかけて開けた水色のドレスの上に、レースやフリルのいっぱいついたエレガントな真白な、下地のすけて見える薄いナイロンのイブニングを着せられると、愛子はもう自分であることを疑わずにはいられない程の外貌に変化していた。美しいまるで花嫁姿のように美しい。こんな美しい衣裳は一生に一度も着れないと思っていたのに。愛子はそれだけで満足である筈であったのに、逆に不安がつのるというのは……愛子は女という人間の哀れさで急に胸一ぱいに涙が溢れるところであった。それを、やっとのことで彼女は怺えているのだ。

ホッと彼女の口から溜息が出た。

と着付けを手伝っていた池田フジがその手をやめ、しげ〳〵と木村愛子の顔を眺めこんだ。愛子の顔にチラと羞恥の影が走る。池田フジはその影を見た。そして肩を叩いて、同情ともつかない嘆声をあげた。

「木村さん素晴しいわねえ。本当に一週間の効果よ。私うらやましい。嫉けて嫉けて仕方がな

い。あとでうんと泪をしぼらせてもらうわ。どうこの手錠……」
池田フジは、わざと傍の壁にかけてある古風な、首と両の手を一直線に止める手錠を指さしてみせた。
木村愛子は、それを見ただけで戦慄が走った。思わず手で池田フジを拝むような恰好をして断わった。
「おや、好きなの！」
彼女が愛子の動作を、わざと反対にとり皮肉くった途端、河野副院長の鋭い叱声がとんできた。
「こら！ 冗談よさんか！」
それを聞くと、池田フジは思わず肩をすくめた。そして愛子の目をにらみ、口を耳によせて
「貴女があんまり美しいからよ」
といった。それでさえおびえていた木村愛子は、この池田フジの一言でさらにおびえた。
美しすぎる！そんなことが……そう思っても事実なのだ、だとすると美しすぎる為の苦しみを、これから味あわなければいけないだろうか。木村愛子はそんなところまで気を回しているのだ。
河野副院長がニコ〳〵笑いながら近くにやってきた。彼は、池田フジと愛子をつらつら見くらべながら
「まるでフグと鯛だな！」
とやじった。
「まあ先生！」と池田フジが、河野の顔をにらんだ。
「どうせ私は、フグなんですもの」
「そう、トラフグってところかな。池田さん、よかったら君にあの首枷をはめてあげようかな。すると君も鯛になれる」
「わあ、いやあ！先生、私そんないたずらした覚えないわよ…。」
「しましたよ。もっとも、フグは毒があるから、あんなチャチな首枷じゃ、首枷の方がとけるかもしれない…」
「いやよ、先生。でも本当にそんなことなさるんだったら、首枷に当らずに先生に毒をあてる……」
「オ、桑原、桑原だ。だから女は苦手というんだ。女をいじめると百年たたる。女の嫉妬はなおこわい。昔、支那の漢の国の文王は部下のヤキモチ女房に極刑を課したそうだね」
さすがに河野副院長は、文句の上でも役者が一枚上である。巧みに池田フジを操っている。愛子はそれを見てはらはらしていた。
「極刑のかわりにどう、手錠ぐらい……」
河野がニヤ〳〵笑いながら池田に一歩迫ると、池田フジは
「ヒヤー」と奇妙な声をあげた。「イヤ先生、冗談よ！」と彼女は思わず部屋の戸をあけて外に出ていった。するとその影がなくなると同時に、河野のうしろから爆笑がおきた。愛子と河野がふりかえってみると、山形光蔵と桑野ミチと小桜美智代が立っていた。
「やあ、君たち見ていたのか」
「そうよ。余り君が楽しそうにしているんでね。それより君の自慢する傑作がもうできあがる頃だからと、小桜君を誘って仕上りを見にきたんだよ。三登ちゃんが呼びにきたので、そしたらとんだ茶番劇さ。副院長。こりゃあとでコーヒー一杯ぐらいだな」
山形光蔵はそういって赤ら顔を変に歪めて笑った。桑野ミチや小桜たちは、二人のやりとりを面白そうにみていた。しかし二人は、すぐ木村愛子の方を見返して、思わずホウと嘆声をあげた。
「先生！ これが張本人なのね」
小桜美智代が桑野ミチに話しかけた。「そう、私たちの傑作なのよ」
桑野ミチは両眼をしょぼつかせながら、私たちというところに力を入れた。こうして話合っているうに、河上三登里も小野茂夫も部屋に入ってきた。
「いようお嬢さん、美しくなったなあ。皆さん、この人は僕の恋人

です」

と小野は愛子の肩をたたいてふざけてみせた。しかしその声にはどこかふざけとはみえない真剣さがあるように愛子には思えた。愛子は、わざと寄添ったふりをしてみた。すると三登里が

「あら、あんなことをいって、小野さんの恋人なんかになったら責め殺されるわよ、木村さん、それより私の妹にならない」

と提案した。その提案に一同は再びどっと爆笑した。そうこうするうちに時間がすぎていった。かれこれ一時間もそんな談笑が続いたときであろうか。さきほど逃げ出した池田フジが再び顔を出し、

「皆さん、準備ができました」と叫んだ。それから彼女は再び木村愛子の近くにやってきて

「覚悟はよくって」

とつぶやいた。木村愛子はそれによって、さつきの談笑の間にやっとほぐれかけた心を、再び不安の谷底におとす破目となった。

皆は池田フジの言葉を聞き終ると、ぞろぞろと部屋を出て行った。木村愛子も河野副院長にうながされて一番最後から出た。皆は廊下を右に折れた広間の方に入って行った。それにたいし河野は愛子を連れて廊下を左に折れ自分の研究室に連れこんだ。愛子が最初に連れこまれた部屋である。河野はそこに入ると、無言で愛子を例の歯科治療台にこしかけさせ、金槌やペンチの類をとりあげて何やら細工をはじめた。愛子は一体何をするのか?と危んだ。どうせいいことはないのだから……と思っていても、気が気ではなかった。そうこうするうちに大きな衝撃がして、彼女は軽い目まいを覚えた。彼女はチョットの間自失した。その途端

「ウガイしてごらん」

という河野副院長の声をきいた。

「ハイ」

愛子は無意識的に返事をし、水を一ぱい含んで思わず驚いた。

自由になっているのだ!自由に、口が、愛子は思わず水をこぼしそうになった。河野副院長はそんな愛子の様子をしげ〳〵と観察しながら、

「どうです御感想は、少しは口が軽くなりましたかな。いやはや、綺麗な歯型になりましたよ。ほら鏡をみてごらん」

といって、小さな手鏡をとりよせた。

「はい」と素直に返事をしながら、思い切り口をあけて鏡を見ると思いなしか歯並びのいいように見えた。

気のせいなんだワ——

と思ってみても、なんだかそんな気もする。愛子は奇妙な感じだった。それに顎の骨がなんとなくこそばゆい感じがする。愛子は軽く下顎を動かしながら、しばし漫然と鏡に見とれていた。

「さ、木村さん、おくれないように僕達も行こうよ」

「え、どこへ、何、何があるのですか」

「ハハハハハハ、何も知らなかったのねえ。でもいいさ。一週間たったんだもの。当然、何かあるさ。貴女の歓迎会ぐらいに考えたらどう」

「歓迎会?」

「そう、貴女がやっと一人前の協力者になれた祝い!だから偉い人が皆集って貴女をなぶる……ハハハハハハ、そうおびえなくてもいいよ。実はね、この美容病院では一週間毎に院長の会食会があるんだよ。病院中の幹部をあつめて会食会を開くんだ。それに君を出席させることを、前から僕は提案していたんだ。もちろん僕は〝急速に効果をあげるための心理的美容法としての苦痛の効果〟と題してかるいテーブルスピーチを打つがね、その試験を受けた張本人がいないことには、真相がつかめないからね。そのさい、もちろん木村さんにも感想を述べてもらいたいね。たとえば、もう苦痛はこりこりだとか、協力者となるのは一週間で御免だとか。悲しいとか、く

やしいとか、うれしいとか。全く自由に結構と思うんだ。さ、皆が待っているよ。協力者というのは幹部じゃないけど幹部の影武者みたいなものだからねえ！　感想は席についてからでも結構だよ」

「はい、でも」

木村愛子は、そういわれても信じかねるという風だった。呆然として部屋の片すみを眺めていた。

「さ、心配するなよ。煮て喰おうとも、焼いて喰おうともいってない！」

「ええ、それはわかりますけど」

「心配なのか。信じられんというのだね。貴女が心配なら、手枷足枷にプラスチックの猿轡という姿でもいいよ。それにしようか」

「とんでもない！そればっかしは」

思わず愛子は、河野を拝むまねをした。物をいえない時の慣習がつい出てしまったのだ。

「ハハハハハ、そう心配せんでもいい。今のは冗談だ、さ、行こう。」

河野は重ねて愛子をうながした。愛子は仕方なく腰をあげた。そして、本当に自由にしてもいいのかなと思った。

広間の中は、もう賑やかであった。コの字型に並べられた四角なテーブルを前に、桑野ミチや山形光蔵など顔見知りの人たちにまじって、木村愛子には初めての人達が、さも気心のわかった人達のように歓談していた。木村愛子が這入って行くと、一齊にそれらの着飾った人たちが、視線を合せて彼女を見た。そのため愛子は顔が、急に真赤になった。愛子は最初この美容病院に入院したとき、態良く、……といっても強引に、裸にされた経験があったが、その時とは別に、今度はそれ以上に激しい羞恥を覚えた。しかし、今度の羞恥は、いわゆる恥かしいのではなく、照れくさいという感じであった。従って愛子は、それらの人達に混って、中央に腰掛けた、どっしりした、見るからに重役タイプの、偉丈夫がいるのを、見付けることはいとたやすかった。――あの人が院長先生かしら、そうとすると好感がもてるわ――

愛子はふと、そう思った。そして誰かに、合点を求めたい気持で四方を眺め回すうちに、ふと斜前方にいる小野茂夫と視線があうと……愛子は急にまた別の羞恥に見舞われるのであった。

そんな愛子の気持を知ってか知らずにか、愛子の席は、その小野茂夫と愛子を案内した河野副院長の席との間に設けてあった。愛子が河野に案内され、その席につくと、河野は愛子とは別の側、すなわち右隣にすわっている例の重役タイプの男に声をかけた。

「院長、それでは、これから会食をはじめましょうか」

愛子は、その河野の声を聞きながら、やはり、あの人が院長先生に間違いなかったかと思った。河野が立上ってしゃべりはじめた。

「それでは皆さん、これから、当、美容病院恒例の会食をいたします。それに先立ち今日から、新たに私の研究協力者となった令嬢、丸石デパート勤務の木村愛子さんを御紹介いたします。木村さんは私の新美容法研究の良い理解者として、あと一カ月近く、生活をともにして戴くわけで、この会食会の仲間には、いわばゲストというわけですが……将来は、いずれ小桜さんや河上さんのようにゲストではなく常連として、美容病院の発展に協力されるであろうことを信じて疑いません。すでに木村さんを御存じの方もありましょうが、美容博物館の石橋渡さんや、各部の幹部でも私の仕事に直接関係のない方は、まだ御存じない方も多いと思われますので、これを機会に宜敷、御指導お願いしておきます。それから今日のテーブルスピーチは、小野君と桑野さんの番で、両人とも面白い話題を胸一杯詰込んでいらっしゃるそうですから、どうか、御馳走に舌鼓を打ちながら、静に聞いて下さい。また、テーブルスピーチが終りまし

たら、今日のゲストの木村さんに、来院一週間の感想をお聞きしてみたいと思います。なにしろ木村さんはこの一週間、苦痛の美容に及ぼす効果という大変な難題ととりくんで、私はじめ、担当の人たちから、大そう痛めつけられていますので、数々の御意見や御感想がおありのことと思います。」

河野は、そこで一息ついた。そしてちょっと愛子の方を振返り目で愛子に、皆に挨拶するように合図をした。愛子は黙って立上ると、蚊の泣くような声で

「宜敷お願いします」

といって坐った。

それから河野は再び全員をながめ、厳かに言い渡した。

「それでは皆さん、会食をはじめます」

その声につれ池田フジが席を立って、出入口の扉のかげに何やら

合図を送った。するとそこから白のコック服に身を固めたボーイたちが一齊に部屋に入って来て、皿や、フォークなどを並べ、オードブルをくばりはじめた。木村愛子は、そんなボーイたちの姿をぼんやりと見ていた。彼女の前のコップにビールがつがれ、小さなフリントグラスの容器にペパーミントがみたされ、その酒の青いイメージが、彼女の胸をキュッとしめつけた。音もなくたたえられる酒の動き、酒の姿をみつめていると……不意に感想を聞くという河野の声がよみがえり……これは大変なことになった、と感じたり、こう追いつめられたからにはどうにかなるさと、持前の楽天気質が顔を出したりして、静な時の流れの中で彼女の心は思いは激しく渦を巻き、音を立てていた。しかし、そういう愛子の感情も、おいしそうな芳番を放つスープの一掬で、無残に打消されてしまった。そのドロりとしたスープに浮かぶパン屑のような、固型物の姿が……一週間という間全然、固型食糧の姿さえみさせられなかった愛子に…

…異状な食慾を湧きおこさせたのである。毎日、味わされたフレキシブルによる強制的な食事にくらべ……何という恵まれた食事……と愛子は思った。愛子はそれでも、はしたないといわれたくないという気がしないではなかった。しかし、そういうことも忽ち脳中から消えた。愛子は松井院長がスプーンをとりあげるのを見ると、我を忘れて、食べることに専念した。右手に銀のスプーンをにぎり、最初にすくった、スープのおいしさ、愛子は本当に、これが人間の作った食物であるのか疑わしいほどであった。

さじでスープを掬う、たったそれだけの行為が……一週間欠けた。それだけの理由で、こんなにも味が違うものだろうか。愛子は人間の食生活に、慣習となった動作……視聴覚や嗅覚がこんなに大切だとは、つい今の今まで、切実に感じたことはなかったのだ。それが今判った。愛子は食事をしながら、今日程私の幸せはないと思ったが、半面、また今日程、自分自身を浅ましいと思い、みじめに感じたことはなかった。

しかし食事は、愛子のそういう気持を無視して、次から次に運ばれてくる。雛肉のフライ、豚肉の蒸し焼き、野菜サラダ、グラタンなど、愛子の好物で、しかも家庭生活ではちょっと程遠い贅沢なものばかりであった。ただでさえおいしく感ぜられるものばかしだから……愛子の味覚を魅了せずにはおられない。そんな代物がひっきりなしに現われるので、愛子は目の色を変えて、新しい食物をめまぐるしく追い廻す。すっかりのぼせあがった愛子は、このため小野茂夫の美容体操論や、桑野ミチのネイルプッシャーについての失敗談など、ユーモアあり理論ありのテープルスピーチがいつ始まり、いつ終ったのか殆んど気がつかないくらいであった。そして愛子が食べつかれ、ほっと一息ついた時は、もう愛子が感想をしゃべらなければならない瀬戸際に立たされていた。拍手に送られ、河野にうながされ席に立上ったものの……愛子はキヨトンとして、まるで魂を失った人のように見えた。事実、愛子は何の心の用意もできていなかった。

愛子は立上ったものの、そのままの姿勢で、ちょっと目を落し、うつむいて、さて一体どうしたらよいのだろうかと迷って一息ついた。すると横の小野茂夫の手がのび〳〵愛子のふとももあたりをドレスの上からギュッとつねった。飛上る程痛かった。いや普通なら——そう感じる筈であるのに、愛子はチョットさわられたくらいの感じにしか思えなかった。しかしそのすきに、小野が小声で愛子を励ました。

「落着けよ。ギュッと酒でものんで話せ。でないとまた今夜は拷問だ！」

愛子はそれを聞くとハッとした。そして、思わずペパミントのグラスをにぎると、一気にあおった。それから、やおら皆を見廻した。すると不思議に興奮がおさまった。それでも愛子は少し上ずった言葉で話しはじめた。

「私はちょうど今から一週間前に、はじめてこの美容病院にやってきました。私がまず希望したのは、もう少しやせたいということでした。ところがそれは非常に困難なことで、それには新しい研究中の方法がある……と河野先生にすすめられて私は河野先生の研究協力者になったわけです。で、一週間たった今、考えてみて一番感じたことは、最初やせたいと思っていた考えが、今では多少変ってきたということです。やせたいという希望は私にとってはもう少し美しくなりたい。もっと美しくなりたいということと同じだったわけで。ところが今は美しくなりたいという希望以上のものが出てきたのです。それはどんなことかというと、生きていてよかったということ、こんな抽象的な言葉ではよくわからないと思いますが、どうもそういう以外に余り適切な表現を使いえないので……困っているのですが、なんといいますか、とにかく、もっとよりよく生きたい

という欲望なのです。いわば欲深くなったわけです。たとえば今日の会食でも……私はこれまでこんなおいしいものがあるということを知りませんでした。……というのは、会食の内容が素晴しいのはもちろんですが……それ以上にここ一週間の生活が、思いもよらぬ経験の連続であったがため……人並らしい姿で食事を戴くということが、実に一週間ぶりであるということによります。自由な姿での食事が、いかにおいしく楽しいかということ、そういうことをつくずく思い知らされたのです。これでおわかりのことと思いますが、実にこの一週間の経験は、私がこれまで約二十年間かかって築いてきた生活を、完全に叩きこわしたものでした。私のこれまで味い、感じた感覚を、完全に覆えしたものでした。従って一日一日が、本当に逃げ出したい毎日でした。でもその逃げだしたい時が、一日一日と重って行くうちに私は自分自身の中に新たな感情が――或いは知性――そう呼んでいいものですのなら――そんなものが生まれてきたわけです。というのは、どんなことかと申しあげますと、今まで私が送ってきた人生が果して本当の人間生活であったかどうか……いいかえれば、人間の苦しみや浅ましさや、弱さや、そんなものに目をくれず、見逃して、いわゆる平和な中に毎日を送ってきた生活が、はたして人間らしい生活、真に幸福な生活であったかどうかということです。私のこれまで過してきた生活に比べると此処での生活は、私という人間の弱さや、浅ましさや、悲しさを、いやという程に露骨にみせつけられ、味わされました。それだけに、この食事のように喜びもまた人一倍大きく、深かったわけです。そういうわけで、私はやはり勇気をふるって、新しい生活に飛込み、泪を流して苦しんだ甲斐があったと思っています。その上こんなに美しくなったのですから、本当に何も文句をいう必要はないくらいです。とはいうものの、河野先生はじめ、私を訓練して下さった皆さんが御承知のように、私が人間らしく口がきけるというのは、実に、丸一週間ぶりのことです。一日中、自由に口のきけない生活なぞというものは、やはり、決してのぞんでするものではない。死んでも厭だと思いました。」

愛子はしゃべるのに夢中だった。夢中というより、愛子の一語一語にうなずく松井院長の表情や、時たま左手をきつく握ってくれる小野茂夫の激励にこたえたといってよい。愛子が話し終ると同時に拍手が起った。拍手は、小野や桑野ミチのテーブルスピーチの時にも起ったが、それにもまして派手な、豊かな拍手であった。愛子はその拍手で完全にあがっていた。腰をいつ下したのか、いつ皆におじきをしたのか、それすら自覚がなかった。愛子がふと気をとり直すと、河野が給仕に命じ愛子のために蒸タオルを取寄せるところであった。小野はしきりにペパミントを飲むようにすすめていた。愛子は、蒸タオルで手や口の端を軽く拭いながら、やっと人心地がつくのを覚えた。そして心のそこで、どこかでふと、これは夢ではなかろうかと思うのだった。

だが夢ではなかった、夢ではない証拠に、愛子は生きているのだ。そして生きているために、愛子はその翌朝から、いやその晩から再び苦痛の時を迎えねばならなかったのだ。

会食後、幾分、酔った体を小野や河野たちに支えられながら、松井博士から握手を求められるまま愛子は博士の両手をにぎった。愛子はそのさい、思わず泪を一しずく落した。そんな愛子の肩をたたいて松井博士は愛子を勇気ずけるのだ、愛子にはその姿が、その白い口端のヒゲが、まるで今はなき実父のようにさえ感ぜられるのだった。

（つづく）

× × ×

千恵子から泰子さんへの手紙より

変ないたずら

三隅千恵子

泰子様、

失礼をもかえりみず、突然、お手紙を差上げるぶしつけを悪しからずおゆるし下さいませね。私、日頃から一度貴女にお目にかかりたいと思っていました所、数日前、思いがけもなく貴女のお姿を拝見することが出来まして、ほんとに嬉しく存じましたわ。其の時、余程声をおかけしようかと思いましたが、貴女はお仕事中でしたし、お忙しそうにお見受けしましたので態と遠慮しましたの。でも私ーが想像していたよりも、貴女がずっとずっとお美しいのにびっくりしましたわ。いいえ、おせじではなく、色がお白くて整ったお顔をしていらっしゃいますし、その上、すんなりとしたお見事なスタイルで、私うらやましくなりましたのよ。でも人は見かけによらないって云いますが本当じゃないかじら。お淑かでお優しそうな貴女が実は大変なおてんばさんなんですってね。あら今更おかくしになってもだめですわ。ほら、貴女もよく御存知の桂子さんに貴女のお噂は何度もお聞きしましたから、すっかり存じあげていますのよ。

もう大分以前のことでしょうけれど、貴女は桂子さんに

『レスリングしましょうよ』

と仰云って、いきなり組みついておいでになったんですってね。桂子さんは恥しがって

『いやよ、およしになって』

と振り放そうとしたけれど、貴女はお聞き入れにならず、とうとう脚をすくわれて捻じ倒されたのですって。私は、まさかと思って半信半疑でしたが、桂子さんが御自分で本気になって仰云るんですから、全然作り話でもないらしいわね。私も貴女のお勇ましいのにびっくりしましたが、それからが、もっとすごかったのですってね。だって貴女は桂子さんを投げ転がすと、

『今度は寝技よ』

と仰云って、桂子さんの上にのしかかり、

うむを云わせず両脚をふんばって、馬乗りにお跨りになったのでしょう。桂子さんは、くやしかったから脚をじたばたさせて跳ね起きようとしたけれど、貴女がとってもお強いのでどうにもならなかったと云っていましたわ。すると、いい気におなりになった貴女は、桂子さんの細くくびれた首の上にぺったり跨って顔をあらわな太ももの間にぎゅっとおはさみになったのですって。おかげで桂子さんは、貴女の股でいやと云う位、喉首を絞められるし、ズロースが口の上にかぶさって来て、あんな苦しかったことは初めてだったそうですわ。それでも両手は貴女の丸い膝頭に踏みつけられて、桂子さんは身動き一つ出来なかったのですって。

お見受けした所、虫も殺さない様にお綺麗な貴女が、そんなあられもないことをなさる等とは、とても想像もつきませんわ。でも、お美しい貴女が桂子さんの首の上にお跨りになって、股で喉首を絞め上げていらっしゃる光景は、さぞお見事だったでしょうね。

貴女も桂子さんも、すっかりスカートがめくれて白い均整のとれた素足が、むっちりした太ももの付け根までむき出しになっていたことでしょう。桂子さんはきっとくやしさに眉をしかめ歯を食いしばって、悲壮な顔をしていたでしょうし、美しい貴女は同性を力づくで征服しきった優越感に、御満足の微笑を浮べていらしたかも知れませんわ。でも桂子さんを組み敷かれた時のお気持は如何でしたかしら。きっと得も云われない程の優越感を満喫なすったことでしょうね。女は同性を負かして悪い気持がするはずはありませんし、貴女が桂子さんを組み伏せて快くお思いになったのも当然なことですわ。勿論、今でも貴女は其の時のことをお忘れではないでしょう。ですから、今でも誰かを組み敷いて、いじめていらっしゃるものと想像していますのよ。誰かよい相手がみつかりましたかしら？矢張り女でしょうか。それとも同性では物足りなくて、男の方に行っていらっしゃるのでしょうか。今度貴女にお会いしたら、是非最近の御体験談をお聞きしたいわ。どんなにか面白いでしょうね。

何やかやと貴女の秘密をあばき立てる様なことばかり書きまして御免なさいね。それと申しますのも、本

当を云いますと、私も貴女と同じく女性を組み敷くことに異常な興味があるものですから貴女に大変な親しみを感じますのよ。ですから、とうとうだまっていられなくなり、こうして失礼なおたよりを差上るのですわ。

私、貴女に折入って一つお願がありますがお聞き入れ下さいませんでしょうか。恥しいのを我まんして申し上げるのですから、『いやだわ』等と仰云らないで下さいませね。

私貴女と一度レスリングの試合をして、どちらが勝つか思い切り争ってみたいのです。殊に貴女のお美しいお姿をお見受けしてからは、私の願は一層強くなって、貴女に申上げて見なくてはと思いつめる様になりましたのよ。是非近い内に機会をお作りになって、私とお手合わせをお願しますわ。

レフェリーは要りませんから、二人だけの方がよいでしょうね。ルールは何もないことにして、何んなことをしても関わないことにしましょうよ。そして、どちらかが完全に降参したら勝負がついたことにしましょうね。試合の時、私は細いブラジャーに短いパンティーだけになりますが、貴女はどうなさいます？裸におなりになるのがおいやでしたら、無論お洋服のままで結構ですわ。私は靴は黒のハイヒールを用いるつもりなの。そして始めはお相撲の様に腕を伸ばして、がっちりと組み合うのでしょうね。そして満身の力をこめて、お互に相手を投げ転そうと争うことでしょう。

貴女は勿論、私に負けまいと白い頬を上気させながら頑張られるでしょうけれど、私は絶対貴女には負けないつもりなの。

『えいっ！』

とばかり腰をひねって、腰車でどしーんと貴女を床の上に投げ出して差上げますわ。其の時、貴女がお洋服を召していらしたら、スカートがぱあーっとめくれて、お美しい貴女の脚があられもなく剝出しになるでしょう。それでも貴女はひるまずに、すぐ様はね起きてくやしそうな表情で再び私にかかって来られるでしょうね。私は、すかさず貴女の腕をつかんで、今度は背負い投げで

『やあーっ！』

とばかりに、投げ飛ばしてお目にかけますわ。貴女のお見事な肢体が半円を画いて、ドターンと大きな音を立てて床にたたきつけられるのです。その時、私はどんなに気がせいせいするでしょうね。

『うっ！』

貴女はくやしさに真赤におなりになって、跳ね起きようとなさるでしょうけれど、したたか床で腰を打った痛さにそうすぐには起きられません。貴女が顔をしかめ乍ら、やっとのことで四つんばいにおなりの所を素早く躍りかかった私が、ぎゅっと首筋を押えて、えいっと力一ぱい仰向けにひっくりかえしてしまいます。

『ああっ』

貴女はあわてて、のがれようとなさいますが、私はもう容赦しません。仰向けに転った貴女のおなかの上に、むんずと脚を拡げて馬乗りに跨った私は、否応なしに貴女をお尻の下敷きにして、ずっしりと組み敷いてしまうでしょう。

『まあ！　くやしいっ！』

貴女は眉をつり上げ必死になって、なおも跳ね反そうと、抵抗をお続けになるでしょうね。でも、そんなこと位でびくともする私ではありませんわ。私はぴったりと貴女を押え込んだまま、少しづつお尻をずらせて上の方にのし上って行きますわ。貴女のふっくりしたお乳の上を乗り越えて、まだ上の方までなの。そうしますとついには、私が貴女の首の上に跨ることになりますわね。

勿論、其の時には、丁度貴女が桂子さんになさったのと同じ様に、今度は貴女が顔を私の太ももの間にきっちりとはさまれた上、両腕は私の膝頭にしっかり組み敷かれているでしょう。自然に私の全身の体重が股にかかりますから、パンティー一枚の股が貴女の喉首にぐっぐっと食い込んで行きますわ。そうなれば貴女は何んなお顔をなさるかしら。貴女の様にお綺麗な方が、苦痛に顔を歪められる

光景は、きっと素晴らしいだろうと思いますのよ。いくら貴女が脚だけばたばたなすっても、上半身はびくともしませんから何にもなりません。貴女が苦しまぎれに顔を動かそうとなさったり、腕をひくっひくっと動かされる度に、私は膝や股のあたりが、ひどくくすぐったくなるでしょうけれど、絶対にいい気持だろうと想像しますわ。

『どう？いくら、じたばたしたってだめだわ降参なら降参と仰云い』

私が勝誇って云いますと、貴女はそれでも

『まあっ、くやしい、降参なんかしないわ』

と仰云るでしょう。

そこで私は、両手で貴女の髪をわしづかみにしてぎゅっと押え付け、頭を動かせないようにしてから、お尻を一寸浮かせます。何うするのかお分りでしょうか？　お分りでなかったら次をお読み下さいませね。

お尻を浮かせてから、もう少し上の方にずり上りますから、私のお尻は仰向きになった貴女のお顔の丁度真上に来ることになりますわ。それからが面白いのよ。私はそのまま、ぺたっとお尻を落としてしまうのです。勿論お綺麗な貴女のお顔の上にですわ。つまり、私は貴女のお顔の上にペッタリお尻をのせて馬乗りに跨り、貴女のお可愛らしいお口と、細そりしたお鼻を、全然呼吸も出来ない様にぴったりパンティー一枚のお尻でふさいで差上げるつもりですわ。そうなれば、貴女は何うなさるかしら。鼻から下は完全に私のお尻の下敷きになりますから、貴女は、やっと眼から上だけを、私の股の間からのぞかせて、見るもあわれな恰好でしょうね。

貴女はきっと首を捻じ曲げて、私のお尻の下から顔をそむけようとなさるでしょうけれど、始めに私が髪をつかんで押えつけていますので、どうにもなりません。

『うううう、うっ！』

と、貴女は苦しまぎれに呻こうとなさいますが、それすら思う様になりません。

貴女が命よりも大切にしていらっしゃる綺麗なお顔を、私のお尻で思い切り押しつぶされるのですもの、ほんとに死ぬよりつらい思いをなさるのではないかしら。でも、私にとっては、此の瞬間程美しい貴女に対して優越を感じることはありませんもの、全くすごいばかりの快感でしょうね。貴女は殆んど息が出来ませんし、苦しさに耐えかねて、最後の力を振りしぼって、どたんばたんおもがきになるでしょう。

貴女のお顔は、忽ち火の様に真赤になり、じっとり脂汗をにじませた貴女の額には、青い静脈がぷっくりふくれ上るでしょうね。そして貴女のつぶらな瞳からは、くやし涙があふれて来るのではないでしょうかしら。

それでも私は、貴女を許してなんか上げませんわ。貴女が世にも悲痛なお顔になればなる程、私はますますいい気になって、

『これでもか、これでもか』

とばかり、全身の重味をかけて身体を上下にゆすって見たいのよ。貴女のお口と、お鼻は私のお尻の下に、ごりごりっと、はまり込むでしょうね。勿論、息は出来ませんし、苦しさと、いやらしさに気も遠くなる位でしょう。その時の気持って、どんなかしら。きっと私は、頭の先から足のつま先きまでじーんとしびれて、全身の血が凍ってしまうんじゃないかと心配していますのよ。ついに貴女は

『う……うっ！あわ……あっ！』

断末魔の形相すさまじく、わけの分らない呻き声を出された末、力尽きて、

『こ、こうさんっ！　た、たすけてっ！』

息も絶えだえに叫ばれることでしょう。そうなれば、私は意気揚々と勝ち誇って、やっと貴女を許して差上げますわ。でも貴女は私に散々やっつけられたのですから、すっかりグロッキーにおなりになって、ふらふらでしょうね。そして思うさま私に力づくで征服された屈辱感に、きっと顔も上げられず、半泣きにおなりになって、しばらくは

『ハッ！　ハッ！　ハッ！』

苦しそうに喘ぎ乍ら、身体を起すことも出来ないと思うのよ。

そうなったら、どんなに素晴らしいでしょ

うね。此んなことを空想していますと、私、お尻のあたりがむずむずしてきますわ。一日も早く貴女のお綺麗なお顔を、ぺったりとお尻の下敷きにしてみたい。貴女も楽しみにしていて下さいませね。今度お会いしましたら試合の予定日を御相談しましょうよ。私に負かされるのがこわくて、お逃げになってはいやですわ。貴女は桂子さんが弱いのをいいことにして、捻じ倒して組み敷かれたのですもの、桂子さんの仇打ちに、私が今度は貴女をギューギュー、やっつけても関わないわけですわ。私も首を長くして楽しみにしていますのよ。

何かと、勝手なことばかり申上げて御免なさいね。あまり失礼を重ねて、お怒りではないでしょうか。でも私は、お美しい貴女が私と同じ趣味を持っていらっしゃることが分って、飛び立つ程嬉しく、ついとりのぼせて失礼なことを申上げたのですから、悪くお思いにならないで下さいませ。

では、いずれ、近い内にお目にかかりますわ、お元気で。

それから、此のお手紙お読みになったら、必ずやぶりすてて下さいませ。こんなあられもないことを、他の方に読まれては、私だってたまりませんわ。貴女と私だけの秘密にして置きましょうよ、念の為め。

御免なさいね。さようなら。

泰子様　　三隅千恵子

此の手紙を態と筆跡が似ない様に、長い時間かかって書き上げた私は、丁寧に封筒に入れ切手をはって、こともあろうに同じ職場に勤めている泰子さん宛に送ったのは、今から丁度半月位前のことなのです。勿論、私の方は変名を用いていますから、私が書いた等とは夢にも分りっこありません。

泰子さんは、もうとっくに受け取って読んだはずですが、其の時、どんな顔をしたかしらと想像するだけでも、愉快でなりません。泰子さんが桂子さんを捻じ伏せて組み敷いたというのは、私の勝手な作り話ですから、泰子さんにはまるで身におぼえのないことでしょうけれど、余程気味悪くぞっとしたことだろうと思いますわ。きっと青くなったり赤くなったりして、恐しさに身体をがたがたふるわせ乍ら、それでも珍しいもの見たさに最後まで読んだことでしょう。殊に泰子さんは、普段から淑かで純情な大人しい女性ですからほんとに気絶する程びっくりしたかも知れませんわ。それでも誰に打ちあけることも出来ず、びくびくしながら毎日を送ったことでしょう。

でも、私は決して日頃から、泰子さんに悪意を持っているわけではありません。唯、彼女が少し美し過ぎるのが一寸シャクですけれど、平生は泰子さんとは、随分親しい方ですし、本気になっていやがらせをするつもりはありませんが、私が少しアブノーマルなものですから、此んな飛んでもない、いたずらを思いついて、やって見ただけなのです。

其の後も、泰子さんとは殆ど毎日顔を合わせますし、お昼休み等、おしゃべりをすることだってありますが、私は勿論、手紙については何にも云いませんし、泰子さんだって全然おくびにも出さず、知らんふりを装っています。

でも、心の中ではどんなかしら？　と私は泰子さんの顔を見る度に、思い出して、笑い出しそうになるのを、やっと我まんしていますわ。

時には、あの手紙の続きを書いて、もう一度出して見ようかしら、と考えたり、どうかすると

『貴女、変な手紙もらわなかった？』

と、泰子さんに云ってやりたい衝動にかられるのですが、そんなことをして、もしものことが、と思っては危く呑み込んでいます。

ほんとに、何うして私はこんなに、変な女なのでしょう。　（おわり）

《註》　次号には「続・変ないたずら」の手紙を発表いたしますから、御期待下さいますように――。

魔教圏

No. 8

土路草一

（その二）

(一) 味覚のデパート

東京では昨年末、インフルエンザが猖獗を極めていたが、年が改まると今度は原因不明の奇病が、急に蔓延しだした。

この病気は死亡率が極めて高く、それに症状が千変万化と云ってよいくらい多変の徴候を示し、單なる臨床の診断だけでは発見することは殆ど不可能に近く、死体の解剖に依って初めて結論が出せる有様だった。又結論が出たとしても治療法は未だ不明で、その伝播力の強さは人類が今迄知ったどの伝染病菌より物凄く、発生以来三カ月にして東京人口の八分の一が罹病していた。

自然、会社、工場の欠勤が多くなり、或る職場では部署全部の隔離が命ぜられる有様だった。従って生産は急カーブで低下を招き、輸送部門は滞貨を招来し、各種産業活動は麻痺状態を呈し始める。

議会では特別対策委員会が設けられ、衛生局の防疫部では治療活動に狂奔した。

その恐慌に便乗してか、各所に犯罪が頻発し、特に殺人、強盗、放火、婦女誘拐等の凶悪犯人に属する事件が多かった。

奇病の流行は人々の心をすさませデカダンスに追いやるのは必然的帰結だった。歓楽場は喧燥が支配し、風紀は乱れて警視庁の躍起の取締りに拘らず犯罪は増える一方だった。

正に一九五×年は史上最悪の年と思わせた。

この頃、渋谷に最近、凄く繁昌する料理店ができた。

チベット料理の提供がこの店の触書だったが、賑わう原因は他にあった。と云うのは、この店の血潰料理を食べると奇病に罹らないと云う噂だ。最初、藁をも摑みたい思いの人々は、半信半疑で暖簾を潜った。

だが、奇妙と血潰料理を週に一、二度食べている間は罹病しなかった。噂は噂を呼んで門前市をなす盛況となり、近郷近在からも閑と金のある連中が押し寄せる仕末となった。

四角い丼に、たっぷり血の汁が盛られてい

る。箸を入れると紅い汁の中から真赤に染った獣肉が出てくる。添物として、これも毒々しい色の豆腐が小皿に盛られている。

混和されている故か、血の匂いは滅殺されているが、舌を通したこの料理の味は何とも云えない気味悪いもので、一口含むと吐き出したくなり、最初は、とても咽喉を通る代物でなかった。

ところが二度、三度、薬だと思い眼を瞑り無理をして食べている内に、不思議と、この奇妙な味に憑りつかれてしまう。

ぬるぬるとした軟体動物のような舌触りも、少しの塩で調理された血の味も、咽喉を通る汁の感触も、たまらない上味となって舌を捉えてしまうのだ。この味に憑れた人々はとくとくとこの料理の素晴しさを吹聴し、更に足繁く通うようになる。

だから、いつも此処は人の波が渦を巻き、人々は奇病の圧迫感から開放されて、よく喋り、よく遊んだ。

今迄の建物は客を収容しきれなくなって、増築に増築をかさね、遂に六階の豪荘なビルを築き、キャバレー、ナイトクラブ、純喫茶、レストランを包含した味覚と歓楽の一大不夜城を現出するに至った。

政党の領袖達も新橋築地等、且っての花柳界を捨てて此処に集り、文化人達はセミ・マードのバアで赤い酒を酌む。若人達は地下の唄声喫茶で発刺たる声帯を震わせ、紳士淑女達は高級レストランで食事しながら甘い恋の囁きを交す。

まさに、東京の中心は此処、料理のデパート『エンゼル』に移った感があった。

そのエンゼルの地下喫茶に、先刻からねばっている一人の男がある。年令は四十才くらいだ。瀟洒なグリーンの背広をぱりっと着こなし、毛深い手から、ゆるやかに紫煙を立ちのぼらせている。筋肉質のスタイ

リストの割に、その浅黒い顔は決して美男とは云えなかった。垂れている眦、部厚い唇、顎にある火傷の痕。どちらかと云えば下品の相があるが、しかし、又その反面、押しのきかない気弱な線が俯向き加減の肩先に見せていた。

その男が先刻から時々、眼を挙げて凝視する視線を辿って行くと、女一人を囲んで三人のグループが何やら、さざめいているのにぶつかる。

女は二十一、二才。プレーンなオーバーコートに包まれた姿体は伸びやかに発育して明るい近代的な美貌である。

くるっと廻る眼をコケットリーに動かしながら男友達と笑声をたてている。そして、時々嫋やかな手首をあげて腕時計を覗きこむ。

「なんだ、さっきから時計ばかり見て……」
「だって、みっちやん遅いんだもの」
「みっちやんって、誰だい？」
「貴方とは、ちょっと違う、深窓のお嬢さんよ」
「来るんなら、紹介を頼むよ」
「駄目々々。不良なんかに紹介出来るもんですか」
「それ、俺達のことを云ってるのかい」
「そうよ」
「ひでえなあ、そう云う君はズベ公か？」
「レディに向って失礼よ」
「ちえっ、しよってるよ。そうすると俺達は待合せに使われたダシって訳だね」
「呑みこみが早くて結構、だけどつまみくらいにしてあげるわよ」
「ちえっ！」
「でも、今日は何かこみ入った話があるって呼び出されたのよ」
「ふうん、相手は君の？」
「学生時代から何でも打明ける親友。才色兼備の御令嬢よ」
「君と同じにか？」
「よしてよ、私とは月と叢雲、頭は良いし、綺麗だし、しとやかな癖に、きっぱり通った芯がある」
「ふうん、智勇兼備の君が、それ程云うのなら確かだろう」
「確かよ。だから逢わせてあげる。だけど、今日は逢うだけで帰ってね、談合の機会は、いずれ、ゆっくり作ってあげてよ」
「据膳を眼の前に引退るのか……」
「下劣よ、そんな比喩は……」
「ごめん」

屈托ない表情で話合っているグループの様子を、グリーンの背広の男は一種妬ましそうな顔付で眺めている。そして、その視線は女の横顔から離れない。

(二) 大使館員の取引

「もし……もし」

男の耳許で囁く声がして振返えると、いつの間に坐ったか、横の椅子に黒いジャンパーを着た眼の鋭い、いかつい顔の男がテーブルに向っていた。

「旦那はT国大使館の一等書記官、タツーマさんでしたね」

男はちらっと狼狽の翳を示したが、すぐ落着を取り戻して、

「そう云う君は？」と問返す。
「名無しの権兵衛、と云うと怒られちまいますが、或るブローカーとだけ申上げて置きましょう」

男は不敵な笑を頬に浮べながら云った。

「そのブローカーの君が、私に何か？」

書記官は気の無さそうに煙草を咥える。

「へえ。アソコにいる女に思召しがあると拝見しましたが……」

ずばり云う。

「な、なに……を言う、君は！」

一等書記官は、今迄の態度を崩して急にしどもどした。

「いえ、お隠しにならなくとも結構なんで、アソコにいる女の名は城美加子、東桜学園卒の才媛で本年二十一才。東亜工業の常務、城界次郎の愛娘で、現在ラジオ帝都の渉外部勤務。貴男とは〝T国女性の生活〟の録音の際、知り合った……。」

黒ジャンパーはぬけぬけと云う。
「君！ど、どこでそれ……を……」
タツーマは吃驚して、煙草を口から落す。
男は構わず続けた。
「貴男は一目見て好ましい女性だと思った。その日、食事に誘った。銀座のレストラン・ブルー・スカイへね。貴男は物怯じしない朗かなタイプの娘がとても気に入った。それに商売柄、話題も豊富で並々ならぬ才気が言葉の端々に含まれていて貴男を喜ばした。次に有楽町の喫茶店ヤナギへ呼び出した。その次は数寄屋橋のグリルへ――。その度に現われる明るい美貌、シックな洋服に包まれたぴちぴちした容姿を見ると、貴男は胸の中に灯が点いたように自分の年令を忘れた。中年の恋って奴ですかね。ところが彼女は二回に一度は貴男の誘いを断るようになった。貴男は贈物をした。併し彼女は金持の娘の上に女としては小遣に困らぬだけの高給を貰っている。体よく突返されるその中、貴男と逢うのを避けるようになった。そうなると益々燃え立つのが男心ってものでさ、貴男は放送局へ用を拵えては出掛けて女を捉えようとした。だが、するっすると躱されて、躍起になったが、丁度その頃、故国から来た妻と子の手紙に、はっと我に返った。大使館員としてのプライドと体面もある。貴男はきっぱりと諦めた。否、諦めたつもりだった。爾来三カ月、職務に身を入れて嫌われた女とは逢わなかった。ところが今日、偶然街で見かけた女はあの頃よりずっと美しくなっているように写った。胸に又、灯が点り、激しい恋情が炎となって、とうとう此処迄ついて来てしまった。」
タツーマは黙然と首を垂れて聴いていた。
「どうです？　間違ってないでしょう」
黒ジャンパーは、落着きはらってシガレットをくゆらす。
「よく調べたものだな」
自棄糞に吐き出すと手許の赤いジュースをあけた。
「恋情と私は今云いました。併し、貴男には故国に妻子があり、その妻子を捨ててまで美加子を妻にする考えは無さそうだ。そうすると、恋情じゃなくて、情欲と訂正しなければならないですかな」
男はニヤッと笑う。
「何を云ってるんだ、僕は美加子さんに清い恋……」
「ちょって待った。清い恋なんてのは大使館員として各国の女を渉り歩いた者の云うセリフじゃありませんぜ。はっきり欲情なんだと仰言ったほうが男らしいですよ」
「き、きみ……は……！」
一等書記館は赧くなって舌を縺した。
「どうです、旦那、御世話しましょうか？」
いかつい男は低声になって覗きこんだ。
「えっ？」
タフーマはぎくっと見上げる。
「口説きでも、金でも、陥ちない女を貴男のものにしてあげましょうかと云うのですよ。それも、貴男の体面を傷つけることなくね」
「そ、そんなことが出来るというのかい？」
「出来ますよ、私達の組織を動かせばね」
大使館員はごくりと唾を呑みこんだ。東京は魔の都会と云うが大がかりな地下組織の犯罪団体があるに違いない。
「金はいくら払えばいい？」
タフーマは出来るかもしれないと臍を決めて訊いてみた。
「そう来なくっちゃね。でもね、旦那。私の欲しいのは金ではないんで……」
「金じゃない？　じゃ、何だい？」
タフマーは怪訝そうに眉を寄せた。
「これから話すことを胸にしまって置けますか？　誰にも話さないと約束しますか？」
男は凄みのある言葉を押しつける。
「うん、云わない」
「絶対に？」
「絶対に云わない」
「よかった、そうじゃなかったら、貴男の命は無くなる処だった」
男は頬を綻ばす。
「何だって？」
「貴男は先刻」　と手許のコップを指さしな

から
「そのジュースを飲んだ。ジュースの中には或る毒薬が入っていて、一時間以内にこの解毒剤を服まないとあの世行きなんですよ。承諾しなけりや、これは出さないつもりだった」
とポケットから小さな薬瓶を出してテーブルの上に置く
「えっ！」
書記官はさっと色を失って相手の顔を凝視するのだった。
「冗談じゃないのか？」
「いささかも嘘偽わりはありませんよ」
書記官の手が慌てて、テーブルの薬瓶を取ろうとする。
「おっと、まだ、薬の時間は大分残っていますよ」
さっと小瓶を攫って、口辺をにやっと歪める。
「まあ、落着いて話を聴きなさい」
書記官は蒼褪めて、俯垂れる。
「貴男は美加子の肉体を自由に出来る。素晴しいことじゃありませんか……いえね、斯って置きますが、私の云う肉体の自由っては、貴男の考えていることとは違う。美加子のすべすべした彼女の肉体全部が貴男の思いの儘だと云うことなんです。そら、ごらんなさい」
と書記官の視線を、談笑している美加子のジャケットに蔽われた肉体へ誘って
「あのふっくり盛り上った乳房に鞭を当てようと、あの豊かな臀部を蹴飛ばそうと貴男の気儘なんですぜ」
美加子は自分の躰を傷ぶられる相談が直ぐ近くでなされているとも知らず、朗かに語っている。
「まあ、云いかえれば、貴男は中世紀ヨーロッパの侵略王、彼奴は貴男に征服された国の貴族の娘、だが、今は貴男に所有される女奴隷。気に喰わなかったら責殺してもよい品物なんです」
タツーマの眼が、はっと輝く、彼にも嗜虐的な傾向があるのか、相手の口許をぎらっと見ながら、
「間違いないんだね！」
「嘘は申上げません。貴男にこれからお願いすることは、二十一才の瑞々しい肉体を貴男の手中に納め、貴男の足下に転がしてから実行して貰えばいいんですよ」
「よし！　その条件を聴こうじゃないか」
大使館員は妖しい期待に胸をときめかしながら促した。
「船の国籍を借りたいんだ」
「えっ？」
男の言葉は突飛もないことだった。
「某月某日、或貨物船が東京港へ入港する。その船の国籍をT国のものとして貰いたいんです」
「君、そんなことは私の管轄外だ。船が入港する時に採る手続きじゃないか」
「まあ、聴いて下さい。船員の上陸手続、入国許可に就いてもお願いしたいんです。此処じゃ、話難い。席を変えましょう。さあ、解毒剤はちゃんと持ってますから……」
男は笑いながら立上る。T国人も一瞥を華やかな微笑で話合っている美加子の横顔に投げながら続いて席を立って特別個室（スペシャル・ルーム）のほうへ歩いて行った。

(三) 美女購入通告

比奈地路子は喫茶エンゼルに素敵な容姿を現わす。
「みっちゃん、遅かったわね」
美加子は待ち兼ねて立上る。
「帰りがけに急に仕事が出来ちゃったものだから、お待たせして、ごめんなさい」
路子は二人のボーイ・フレンドに軽く会釈すると素直に親友に詫びた。
二人の若者は話にたがわぬ美女に、改めてガール・フレンドへ頷きを返す。
比奈地路子程、恵まれた女性はいないであろう。
広い額、なだらかに下っている濃い眉、黒水晶のように澄んだ瞳、一際優れた暖かい美

貌で、唇から流れ出る声は清く甘く、清楚な魅力を響かせる。そしてその清楚さは、その成熟期の躰にも表われ、爽やかな白肌の肢体は世界三位のファッション・モデルも及ばぬ美しい曲線を描いている。

社長令嬢と云う豊かな家庭に育った彼女は物質的な考え方をせず、気だてのやさしい思いやりのある清らかな乙女でもあり、生れながらの才智聰明に加えて、一通りの学問教養を身につけて、それを誇示しない慎しみ深さと洗練された明朗さを持合せている。

幸福な娘、と云う言葉は、彼女の為に作られたと云っても過言ではないであろう。

その彼女も箱入りと呼ばれることの嫌な近代娘である。学校を出ると親の反対を押切って、芝にある西和化学工業株式会社の研究室へ勤めている。

「彼氏と話をしてたんじゃないの？」

美加子は探りを入れる。

「彼氏？　誰のこと？」

にっこり小首を傾ける仕ぐさが、今日は何だか、とってつけたように元気がない。

「ちえっ、とぼけてるよ」

と揶揄ったが、ふと気になって

「不良達は退散してよ」

と若者達を追立てる

「あら、失礼じゃないの」

路子が恐縮そうに言葉を入れる。

「いいえ、いいんですよ。ミー坊はいつもこうなんですから……おい！……野獣は引下るとしようよ」

友人を促して二人は手を挙げて、ふざけてバイバイをすると出て行った。

「何の話？」

女同志になると美加子は訊いた。

「怖い電話がかかったのよ」

「会社へ？」

「ううん、家へよ、規子のことで……」

「規子？、ああ、パリ

に留学して行方不明になった貴女の従妹の兼見規子さんね」
「そう、その規子が今、ハレムに囚らわれて王様に侍(カシズ)いているのだって」
「何だって？、ハレム？　話が馬鹿に現代離れして来たわね」
美加子は好奇心を唆られて頬杖をついた。
「サウジアラビアにはサウド国王と云うのがいるけど、部下に大小の土侯が沢山いるのだって……」
路子は註釈を加える。
「思い出したわ、雑誌で読んだけど、未だにハレムがあって美女達が養われ、奴隷商人がいて売買が行われているんだって？　又、この間、アメリカへ四十何番目かの妻を買いに行った王様があったとか……」
「ええ、それなのよ、そのハレムに奴隷として飼われているのだけど、規子を通して見た日本女の素質がとても良かったものだから、急に日本の女を集めることになったのですって、それで、美しく健康的な女を云えって規子を責めたのだそうよ。そしたら、私の名を知らせたと云うの」
「へえ！　それで貴女を……」
「買いたいのだが、幾何出したら来てくれるかって」
「何だって！　もう一度云ってよ」
美加子は跳び上るように肩を揺すぶると、くるくる廻る眸をむいた。
「比奈地路子を女奴隷として購入したいと云うのよ」
清純な令嬢は、わざと投げやりに云った。
「そんな……馬鹿な！……」
美加子は呆れて手を振った。
「だから私も此処は独立国日本で御座いますわ。アランビアナイトでしたら小学校へでも行かれてお話しになったら、と皮肉ったの」
「今月は二月か、陽気の加減とも云えないわね」
と茶化す美加子へ路子は真剣な眼差を向け
「そうしたら相手が云うのよ。お信じになるならないは貴女の御勝手ですが、そうなれば貴女の身辺に悲しいことが起ることを予言します」
「脅迫ね」
美加子も真顔になって耳を傾けた。
「この話が事実であること、私達の力がどのようなものであるか、と云うことを納得して戴く為、明朝、二つのものをお目に掛けましょう。その一つは貴女の処へ規子の手持品を送り届けます。もう一つは規子の父親、兼見通徳氏が怪我をしますと云うの」
「それで、どうだったの？」
美加子は息を詰めていた。
「私は本気にしなかったけど、処が今朝、小包が届いたの、中には規子が欧州へ発つ時に私が贈った腕時計が入っていたのよ」
「扮(ナク)夫したのかもしれないわ。兼見の叔父さんは？」
美加子は乗り出して訊いた。路子はバラ色の頬を曇らせ、苦しそうに眉を翳らして云った。
「会社の入口で車を降りた処を、近くの食料品店のスクーターに跳ねられ、左腕骨折と腰底打撲よ」
「えっ！　本当だったのね」
と溜った息を戻して
「でも、知合のスクーターじゃや、間違いってこともあるわね」
「私が直接訊いてみたわ、そしたら、事故現場の前迄来たら急に強い光で眼を射られたんですって、反射的にハンドルを左へきって鋪道に寄せたら叔父を引掛けてしまったと云う次第よ」
路子が美しい眉根を悲しそうに締めながら答えた。美加子は何とも云えず口を噤んだ。
「今朝、又、電話があったの」
黒水昌の瞳が愁わしげに語り継ぐ。
「貴女に一週間の猶予期間を与えましょう。若しその時、承諾の返事を下さらなかったら、私達は貴女のお母さんの命を戴きます。それでも来て戴けないのなら、お父さんの命を奪います」
「えっ！」

親友は驚いて、紙のように顔色を変えた。
「その際、持参願いたいものがある。西和化学の研究室金庫に保管してあるロケット燃料の分折表です。この持参が無い場合は貴女だけ来駕されても御両親の命は頂戴致します」
「何よ、分折表って？」
「社の直口技師が研究発見したロケットの固体燃料の成分表よ、ICBMでも人工衛星でも複液式液体推進薬ロケットという型を採用しているの、酸素と燃料を別々にして置いて必要なだけエンジンへ送りこむ方式なの。処がこれはタービン・ポンプの調節が非常に困難なのよ。アメリカの第一回打上げ失敗もこれなの。それで固体推進薬が着目されているのだけど、燃料と酸化剤を混ぜてしまうので燃焼速度の加減が出来なかったのよ、云い換えれば、飛び放しで、ロケットの三段調節が出来ないし、従って軌道に乗らないと云う訳、それを直口さんが研究して、燃焼加減の出来る固体薬を創出したの。でも、これは会社でも二、三人しか知らない極秘なのよ。分折表を蔵つてある金庫だって、私が鍵を保管し、研究所長がダイヤル・ナンバーを知っているの、だから二人が協力しなければ開かないのよ」
「へえ、そんな厳重なの、それを持って来いと云うのなら、相手はスパイだわ、きっとそれで……」
美加子を息ごんで先を促した。
「お出で願う場所は、一週間後にお電話します。云わなくともお解りでしょうが警察にお知らせになれば一家総てが墓石の下になりますよ。貴女一人が美しいハレムの生活を承諾なされば済むことなのです。お淋しいようでしたら貴女のお友達を私達が都合してもいいって云うの」
路子は話し終って、ふうっと胸底に凝っていた吐息を洩した。
二人の麗わしい近代娘は暫く顔を伏せて、ぎこちなくコップを口へ運んでいた。
静まりかえったテーブルの上をミュージック・ボックスの熱情的なジャズが狂ったように流れてゆく。
美加子がぽつりと云う。
「実行するかしら？」
「すると思うわ、あの言葉の落着いた調子では、――恐いの、私、とても恐いのよ」
「誰かに話した？」
「ううん」
路子は強くかぶりを振った。
「私のとこへよく来るV新聞の津田さんって記者がいるの、相談してみたいの？」
「どんな人？」
「云い難いんだけど好きなの」
「今迄隠していたの？」
「ごめんね、今日云うつもりだったのよ。あの人の気持がはっきりわかったから貴女に一度逢って貰いたかったの。でも、こんな時に惚気けて申訳ないわ」
「ううん、いいの、ミー坊の彼氏なら大丈夫ね、いつ逢わせてくれる？」
「明日、昼休みに電話するわ」
二人は微笑んで見交す。一人は淋しそうな瞳だったが……
「ねえ、気晴らしに映画でも見ない？」
美加子は友達の気を引立たせようと云った。
「ええ、でも、仕事の残りがあるの。明日朝迄間に合わさないと……」
と風呂敷包の書類を見せる。
「会社の仕事を家でやらなくたって……」
「今日は特別なのよ、明日、急に防衛庁の査察があるものだから、だけど仕事をしていたほうがいいの、気が紛れるから、どうせ、眠れそうもないもの」
「しっかりするのよ。きっと津田さんが捌いてくれるから」
美加子は沈んでいる親友の肩をぽんと叩く
「ええ、有難う、じゃ私、これで帰るわ」
二人は立上って、出口へ歩いて行った。その時、特別個室の扉が開いて、黒いジャンパーが姿を見せた。

四　生娘専門販売業者

店先で車を拾って帰宅する路子を見送ってから、美加子は渋谷駅の方へ足を向ける。
「お客様！」
呼び止める声がして白い制服のボーイが立っている。
「なあに？」
「お友達の方がお待ちになってらっしゃいますが……」
「二人でしょう？」
「はい」
美加子は先刻のボーイ・フレンドを思い出す。さては、帰らずボーイに見張らせていたのだなと想像して、
「何処？」
「御案内します」
ボーイは慇懃に腰をかがめると先に立って正面通路のエレベーターを停めた。
「どうぞ」
エレベーターは上らず下って行く。
この建物は地下一階が高級喫茶エンゼルと唄声喫茶に挿まれて、家庭料理の材料の売場がある。地下二階が駐車場、地下三階がナイトクラブで深夜営業をやっている。
〝あの人達、ナイト・クラブへ行くとは豪勢だな〟
エレベーターの階段表示ランプは点かなかったが、時間を判断してそう思った。
エレベーター・ボックスを出ると紅いカーペットを敷いた細長い廊下だった。
「此処は？」
美加子は不審に思って訊いた。ナイトクラブらしくなかったからだ。
「はい、特別室で御座います」
ボーイは叮寧に答えた。
「アベック用？」
「はい、御利用される方に依っていろいろ」

「ふうん、洒落れたところを選んだわね」
彼女は職業柄、きわどい場所も覗いたこともあるし、相手が気心の知れた若者達だと思っているから、それ程警戒もせず白服に蹤いて行った。
「こちらで御座います」
NO・13の部屋の前で立止る。壁のベルを押してから、ボーイはドアを開ける。
「お連れ様を御案内致しました」
「御苦労さん」
仕切カーテンの奥で犒う声がした。
美加子はカーテンを分けて室へ入りかけて
「あらっ！」
と足を停めた。
朱の間である。悩しげな朱色が天井、壁、床、テーブルやソファの類に迄及んでいる。
その中央のソエアに腰を下しているのは、ボーイ・フレンドではなくて、執拗なので余り快く思っていないT国の一等書記官だった。
「タツマーさんでしたの」
「おかけなさい。ボーイが私と云いませんでしたか？」
書記官はソファを勧める。
「お友達が二人と云っただけでしたわ」
美加子は鼻白んで云い返す。その言葉を、やはりカーテン仕切りになっている隅の小部屋から出て来た黒ジャンパーの男が引取って
「私も含めて二人と云ったのでしょう」
と脇へ廻る。背後には立去らぬボーイが居る。美加子は男三人に挟撃されるような態勢でクッションに腰を下す。
「お見かけしたので、お茶でも差上げようと思って」
タツーマは紳士らしく穏やかに云った。
「ええ、でも友達が二人待っていますから」
美加子は三人に計画的な圧迫を感じて去ろうとする。
「まあ、お茶ぐらい飲んでいったら、どうです？　それとも私達の誘いでは飲めないとでも云うのですか？」
傍から黒ジャンパーが開き直った口調で凄む。
「いえ、そんな訳では……」
美加子は打消したが、お嬢さんらしい気丈さで男を見返す。青年達と違って、不逞な男は小娘のいきみなど何の痛痒も感じない様子だ。
「此処は個室だ。まあ、オーバーでも脱ぐんですな」
叱られるように先手をとられて、美加子は変り織のコートを壁のハンガーに掛ける。そして不気嫌そうにむっつり坐ると手拍子でテーブルの上のコーヒーに手を伸した。
そのジャケットを膨ませている胸の隆起にじろじろ無遠慮な眼を走らせた男は
「いいおっぱいしてるね。バストは何糎？」
美加子はかっと頬が照った。
「失礼よ、馬鹿にしないで下さい」
いきり立つのを笑って
「でもね、私にとっちゃ売物だからね」
「えっ！　何ですって？」
美加子は、はっと頬を固張らせて問うた。
「お嬢さん、お嬢さんなんて呼び方は、これが最後だがね。よくお聴きなさい。私はアルバイトに女の売り買いをやっている男ですよ。お客の註文する女を拐って来て売りつける商売をね、だから俺にとっては女は商品なんだ。差詰、あんたは今日のオーダー品と云う訳だよ」
男は淫猥な笑を浮べながら、ずばずばと云ってのける。
「何をおっしゃるのです！　私は売笑婦ではありません、歴としたラジオ帝都の社員です」
立上った乙女は真赤になると席をけって帰ろうとオーバーに手を伸した。その手を男の手が素早く掴む。
「でも女だろう。東亜工業の専務の娘であろうと女には変りないさ」
男はその手を引寄せる。
「何をなさるんです、お離し下さい」
構わず男は嫋やかな手をぐいと捻って後へ

締め上げる。
「あっ痛！あっ！大きな声出しますよ」
乙女は思いもよらなかった男の暴行に悲鳴を挙げた。
「いいよ、出しても、此処は防音装置で客の睦言は聴えないようになってるのだよ」
ボーイが寄って来て、女の残っている手を捻じ上げる。美加子は前のめりになって顔をソフアに押しつけた。腕の附根がきりきりと痛んだ。
「いた！痛い！あっ！」
細く白い手首が腰の上でパチンと合わさった。手錠が嵌められたのだ。
「あっ！」
端麗な乙女は動顛して必死に身を跪き足をばたつかせた。男は、女の背に膝を突いてぐりっと押しつける。美加子は胸を潰されて
「う、うっ！」
呻いて突張った形よい足首にかちっとボーイは足錠を嵌める。
美加子は自由が利かなくなるとすうと全身から力が萎えて、涙がほろっと零れ出た。
「俺は、お前のような生娘専門の販売人なんだ。この弾んでいる肌が高く売れるんでな」
男は抱きかかえるように仰向けにさせると片手で髪を掴んで押え、片手で厭がって背けようとしているふっくりした頬から顎へ、咽喉へと手を摺らしながら云う。
乙女の抵抗等、毛程にも感じていない圧倒的な無頼の動作に、お嬢さんは気勢いも衒いも雲霧と消し散らせて
「許して、許して下さい」
と懇願する。黙って男は苺のような唇をひねりあげる。
「あ、あっ！　お…か…ね…なら…」
懸命に耐えながら云う哀願も皆まで云わせず、男の手は、可細く透けた咽喉仏を掴む。
「う！　うっ！」
息が詰って女は声帯を激しく収斂させた。
「後は云わなくともいい、俺はお前の躰を金で取引したのじゃないんだ。併し、タツーマさんだって、この躰なら金と引換えないだろうぜ。特別上質の肉当りだものな」
男はシンプルなジヤケットの衿を押し開けて馥郁たる肌を撫でる。
「あっ！　タツーマさん、た…す…け…て」
美加子は瞼全部を涙で濡らしながら、書記官を見ようとした。だが、男は許さない。女のぴくっく咽喉を締めたり、緩めたり、弄びながら、片手で乳房を探る。
「うん、こりやあ張りがある。タツーマさん、貴男は仲々目が高いや、私もこんな代物とぶつかるのは久しぶりでさ、剝いて調べたくなりましたよ」
男は熱っぽくなっていた。
「併し、君！　此処で裸にしなくたって…」
展開された非道の盛宴に圧伏されて、書記官はしどもどした。
「任せておきなさい。運ぶのはトランクがありますよ」
男の手が畝編のボタンを挽ぎとるように脱して、ジヤケットを後に廻っている二の腕へ毟り下げる。丸い艶やかな肩が露出する。スリップの吊紐を食卓のナイフで切り裂いて、剝き下す。そして、ブラジヤーの留ゴムが弾ねとんだ。雪のような凝脂のある陵線に、こんもりと二つの清らかな丘が表れる。傷ぶられている苦しさを激しい息で起伏している。武骨な手がダーク・グリーンのスカートのホックを脱す。ガーターが取り捨てられ、ナイロンストッキングが薄皮のように丸まって脱げてゆく。
乙女心は羞恥で火となってくるめいた。不自由な中で、必死に背をかがめ、腰を折り曲げ、腿を合わせた。併し、二人がかりの男の力には、拘束された身では到底抗すべくもなかった。男達は巧みに腋の下を擽ったりして、上手に女の抵抗を外らしながら手早く衣服を剝いで行くのだった。
そして、ピンクの絹のスリップがぐいと一引きされたかと思うと、ああ、ふくよかな汚れを知らぬ処女の柔肌が三人の男の眼前に露呈する。
ジヤンパーの男は豊かに充ち張った腰や腿

をぴしやぴしや面白半分に叩いてから、床へ突き落し、靴先でごろっと押し転がす。美女の身体は一廻転して、異国の外交官の足下に素晴らしい肌色を展覧する。

「約束を果しましたよ、取引代金としては安いくらいな良い肉づきですよ、ほら！」

男は書記官に淫蕩な笑いを移して、純白に伸びている腿を靴で踏んだ。

書記官はおずおずと途惑っていたが促されると意を決したように屈んで女の乳房をつまんだ。女はぴくっと身を締めた。温く、ぷりぷりした手触りだった。三カ月間、求めてやまなかった女の身体、それが今此処にある。自分の心を躍起にさせた美貌と香りが、今、目の前に横たわっている。この通り自分は好き勝手なことが出来るのだ、タツーマの手が延びて女へ迫ってゆく。女は全身を固くする。書記官はぎらぎら光る眼で宝石でも見るように二十一才の裸像を凝視めた。

「さあ、これはもう貴男の清い恋の相手じゃない。犬ころと同じ愛玩動物なんですよ」

美加子は羞恥と恐怖でわなわなと唇を震わしながらタツーマから顔を背けた。冷い手だった。這い廻るごとに嫌悪感が背筋を走る、無情な手がやがて顎にかかった。ぐいと向き直される。異常な迄に情欲に燃えた男の眼があった。胸が真黒に塗り潰される。

「許して、タツーマさん、勘忍して…」

美加子は処女の本能から、悲啾を咽喉でしやくりながら哀願した。

白桃の肌が屈辱で固張っている。だが、何と美しい肌であろう。円い肩、桃色の蕾をつけた膨み、細い胴、そしてむっちり張っている腰、それが悲しみで竦んでいる。

「生意気云うな！」

傍から黒ジャンパーが怒鳴った。

「よく覚えとけよ、お前は品物に過ぎないんだ。タツマーさんはお前を所有されたんだ。云わば飼主さ、その飼主さんが飼育動物であるその躰を、煮ようと焼こうと勝手なんだぜ。云うことをきかなけりや、牛馬並みに鞭で打たれるか、鶏並みに首をひねられるんだ。今晩から仕こんでやるぜ、今迄にタツーマさんの親切を受けたら妾ぐらいにはして貰えたのに、馬鹿な牝だ。これからは飽きられて扼(クビ)られて鞣皮にされる迄、力の限り飼主様に尽すのだ、わかったな！」

美加子は嗟耳で聴いていた。信じられなかったからだ。怖くはあったがそんな馬鹿なことが、と胸底では反撥していた。併し、はっと路子の話に思い当ると、嵐が吹き荒ぶに似た激しい恐怖が全身を貫き、腋の下から冷い汗が滴り落ちた。

いきなり、ひん毟られた靴下が口の中へ突こまれる。破れたスリップがその上にぐるぐる捲きついた。

「さあ、暫く、ねんねして貰うぜ、お前の住むに相応しい檻のある処へ連れてってやるからな、其処には鞭や焼鏝や鎖があって、お前を従順な動物に仕込んでくれることになっているんだ、楽しみに眠ってればいいよ」

なおやかな腕をゴムで絞られる。浮き上ってきた血管へぷすりと針が刺さって、注射筒の液体が注ぎこまれた。

二つ、三つ、五つ、　数える。間もなく美加子は魔の眠りに入って行く……あられもなく清純な肌を曝しながら四肢はゼンマイがもどけたようにのびてしまった。

男達は人形のように意識の失くなった女体を、器用に折り曲げてトランクへ詰める。

ボーイが先に出て、人気がないのを見済ますと三人は廊下をエレベーターと反対の方角へ歩いた。

狭い非常用階段があった。上りきって、扉をあけると其処は地下駐車場だった。

ボーイを残して、二人は五十×年型ダッヂに乗りこむ。荷物は車の後部トランクに放りこまれた。車は軽いエンヂンの音をあとに残して辷るように走り出す。

地上へ出てやがてネオンのつき初めた夜の街を道玄坂の方向に消えていった。

（未完）

× × ×

現代マゾヒスム芸術時評

原　忠　正

復刊　第四十六項

新東宝映画　「女の防波堤」

珍らしく本項に日本映画が登場した。これは筆者の方針や趣味の変針を示すものではない。筆者の鑑賞に耐え、充分な感動を同好の人々に呼び起すに違いないという確信を抱かせるに足る邦画の一場面が現れたことを示すのに他ならない。

本映画は筋書きらしい筋書きは、あるとはいえない程お粗末なキワモノ映画である。併し戦争の持ち込んだ異常なサド・マゾヒスティークな心理下地を背景とし、又主要な媒体として構成された一種の風俗劇として見た場合に、一九四五年から五五年に至る十年間、青春を謳歌するに至らず、乏しい生活の中に戦争が奪い忘れて行って多くのロマネスクというには余りにレアルな真実、愛、信頼、享受、交感などを見つけ出し乍ら、只管にフィヒテにのみ思いを馳せざるを得なかった真面目な戦中派の刺激的な夢想と余りにも相似していることに驚かされる。

ここに語られる有機的な結合力を欠除した多くのエピソオドは、夫々独立して、私達がかって光熱にも乏しかった時代にまことともに嘘ともつかず語り交された話題と軌を一にしている。従って、信憑性から云うならば、この作品の原作である同名の小説風ルポルタアジュが真実の体験記ではないと云う可能性が甚だ多いのである。残念乍ら、この原作はすでに発禁となって現在市中で入手することは出来ないが、当世の才女ブームと反動ルポルタアジュを担いだジャーナリズムの生んだ創作といって過言ではないと思われる。

戦災で肉身を失った女学生二人が、特殊慰安婦として応募、つぎつぎに試練に遭い乍らそれぞれ不幸な死と、幸福の影を示す生涯へと入ってゆくのであるが、本項は、映写開始後約五十分より始まる二つの場面を特に紹介する。第一は大森附近と思われるRAA施設を、女主人公が訪れて、其処に働く女達に袋叩きに会う場面、次に更に十分位後に現れる麻薬商人の地下室に於ける私刑場面である。前者は其の慰安施設の女達四人が女主人公を地上に蹴ころがして皮バンド風の革紐で横面を引っぱたき、踏んだり蹴ったりするもので第二の場面は、長い革鞭で二人の中国人女と覚しい二人の女性が床に縛られて転がっている無抵抗の女を打ち据える場面である。前回に触れた「風雲アジアの女王」の匪賊達の私刑などは足許にも及ばない迫真力を持つた部分である。

其の他、前述の様な心理的背景も勿論実際的な場合には問題となるのであるが、この映画の中にその雰囲気が殆んどにじみ出ていないので特に触れない。

作品としてポーランド作品の既述「アウシュヴイッツの女囚」位のまとまりがあったとしたら、此の作品はもっと緊迫した凄絶なものとなったに違いない。惜しむべきである。

復刊　第四十七項
ソ連映画　「勇敢なる人々」
モスフィルム

旧作に属するこの作品が、最近都内で上映されている（新宿内外ニュース）ので敢えて採択した。内容はソ連の牧畜地方の一九三〇年から第二次大戦の終るまでのいろいろな事件で、作品全体として「若き親衛隊」等の系列に属する。可成映写時間も長く、且余り起伏のない筋立てでもあり、テクニカラア全盛の当今旧式なシネカラア方式である為に大変によい題材を択び乍ら、感動性に乏しい。只、場面的に馬の強制的な調教場面と数カット乍ら女性乗馬の場面があるので、ここに時機を失しない為に紹介する次第である。

復刊　第四十八項
出版物　「苦　力」

インドの作家による作品は甚だ少ししか我国に紹介されない。況して、現代文学については、殆んど皆無に近い状態と云わねばならぬ有様である。哲学として甚だ深いものを持ち、且、自我意識の進究にその奥底を極めたとも思われる宗教を持ち乍ら、又尨大な経典と文学的遺産とを持ち乍ら、現代に彼等の誇るべきものを示し得なかったインドが、娯楽映画の物量と一部の文学によって、新しい発言を始めたことは注目に価することである。この作者は、西欧的教養と西欧的な考え方によって律せられている様に思われる。この作品が小説として、決して新しい形式や内容を持っていないことは一読、明らかなことである。併し、この作品の中には、埃及、イラン等に起った民族意識と、其れを煽動する為とも思われる嘗っての圧制の時代の描写が長々と綴られている。其の叙述の方法はユウゴオのレ・ミゼラブルなどに見られる貧困や病気などの後天的理由による圧迫でなく、むしろ先天的ともいえる階級による圧迫、忍従と反撥とが描かれる。ここに、沼氏などが頻りと宣伝せられる「現代の奴隷制度」の一つの具象がある。場面的に勿論上位階級の女主人に主人公が虐待される部分等があるが、此の作品は、むしろその底流をなしている階級制度や社会制度の憎悪――これは特殊な意識の下で礼讃と変化することを注意すべきであるが――を読みとるべきであろう。

復刊　第四十九項
「二つのサーカス」

（A）ゴールド・サーカス12月20日～1月26日（多摩川園遊園地にて）
（B）コグレ・サーカス1月中（池袋西口広場にて）

サーカスについては私は屢々書いた。従って曲芸と曲馬とに分けて、本欄がむしろ曲馬に重点的であることは判って頂けると思う。我が国には元フアッション・モデルの某嬢がライオンを使っている他本当の女猛獣使いはいないらしい。併し、前記の何れにも女調教師は登場する。僅かに慰めて頂き度い。但し我国のサーカスが、昔日のジンタ調と人買いの連想から幾分遠ざかったとはいえ、ロシアの国立サーカスやリングリング・ノースの大サーカス、若しくは、ハムブルグの名門ハーゲンベック、大サーカス等の十分の一も魅力的ではない。太い短い足、生活のにじみ出た顔、ブッツケ仕事の粗悪なテント、其等には寸分の豪華さも魅惑もない。常設館による完璧な演出、正しい万国共通の音楽、安全感の充実、より開放的な舞台、これらは我国のこの種興行物にとって必須の改良条件である。極言するならば、コグレ・サーカスの如き一応高名な曲馬団がこの程度に満足するとすれば、印度映画にチラリと出た（灼熱の決斗）田舎廻りのサーカスの方が何倍も魅力的であるといえよう。

只、付言しておくべき事は、このコグレ・サーカスが「曲馬団の娘」という邦画（未封切）に出演していることである。すべてを安直に美化する映画界によって、この曲馬団がどの程度に特殊の魅力をマゾヒストに与えるかは十分期待されてよいと思う。

ジャーナリズムに見るコプロ趣味

――街で見つけたフェチシズム――

とやま・かづひこ

毎日見る新聞に、時々ドキリとするような記事がある。

コプロ派たる私は、そのような記事にぶつかると、つくずく人生の生きる楽しみを感ぜさせられる。

人間の身体から出るもろもろのもの、見方ではこれを不浄という。

しかし私はそう思わない。

グラスに取った、美しいひとの身体から出た『そのもの』は、私にとってはダイヤモンドよりも貴重だ『そのもの』を手に入れるためなら、私は命をかけても悔いない。では、私の切抜帖から同信の方々に捧げよう――。

美人の腫物をたべる

見出しはモノスゴいが、テーマはロマンチシズムそのもの。

人喰人種というのはあるが、これは殺人罪に問われるオソレがあろう。

それが堂々と、美しいひとの肉をたべても罪にならず、人格もうたがわれない。

美しいひとのお尻の肉は、どんな味がするだろうか。その味をおもえば、私は、ゾクゾクするほどのスリルをおぼえる。

以下は内外タイムスより抜き書き。

筆者がいまだ青年の頃、学友が大森の外科病院で代診をしていた時、某日訪問した私に『きようは変った肴で一杯呑もうという。彼の私室へおさまってから取出したものは、ガラスのシャーレにのせられた小指の先ほどの肉塊であった。

『さっき君が来た時、入れ違いに出て行ったモダンガールがいたろう』

『うん、あれか。大森山王の三羽烏、別の名フローラインと呼ぶズベ公の一人だろう』

『そうだ、その彼女のお尻にフルンケルが出来てね』

ははあ、その手術の副産物かと、その肉塊をつま揚子で刺して、砂糖醤油につけ、火鉢にかざしたが、チリチリと焼け縮んで半分くらいの大きさになってしまった。

気味が悪いので、何度もつけて焼いたので意を決して口に入れた時は、醤油のこげたホロにがさだけであった。

その後この肉塊の所有者だった麗人と駅な

どで出会うと妙な近親感を覚えたものだった……。

以上の通り原文のまま、ここに御紹介してみた。

医者の特権とあって、美人のシリに出来たハレモノを切り取って、そのままツケ焼きにして喰べるとはいかにもありそうな、又うらやましい話だが、私は更に思う。

この特権を利用して、彼女の体から出た、いろいろのもの、たとえば、生理の水、固形物、タンとかそのほかの排泄されたものを、堂々と、舌にのせて賞味出来るとは、何ともうらやましい次第で、私だったら月給など要らないから、医者になってみたいと思う。

お風呂の湯を

これも、十一月下旬発表の週刊誌『シンニチ』から借用したスクラップ、原文のままお目にかける。

女風呂の湯を飲むツワモノ。

精力をつける飲食物もいろいろあるが、変ったところでは、女風呂の湯がある。飲むわけにはいかないが若い女の体内から排泄される汗脂垢は一種のホルモン剤といわれている（筆者註　この記者は、飲むわけにいかないと云っているが、女性の汗や垢くらい呑むのはワケない話だ。）

群馬県のある風呂屋の番頭でこの女湯の汚れ切った廃水を好んで飲む男がいる。

彼の話では『毎日終い風呂の湯を五合ぐらい飲んでモウ三年になりますが、カゼひとつひかず元気です。

味はちょっと塩ッ気がありますが、なれてしまうと普通の湯よりずっとおいしいものです』というコリ方（以下は関係なくなるので省略）である。

風呂というもの、若く美しい女性が入るばかりとは限らず、こどもや、おばあさんも入るので、吾々の審美眼はいささか困らせられるが、風呂の湯をうまいと感ずるのは同好の士ここにありと云えよう。

ついでに云うと、女性は風呂の中で十人中六人までは放尿するそうで、本文に出てくる番頭さんの言をかりれば間接的には女性の尿を呑む結果となるのである。

排出されたダイヤ事件

これは、朝日新聞の海外ニュースより。

（UPサン）去る三十二年三月のこと、イタリアはミラノのあるレストラントで、二十二才になる女給仕のミラニーさんが、お客のアンドレアという宝石商が見せた二百五十ドル（九万円）もするダイヤモンドを口にもってゆき、のみ込んでしまった事件が起きた。

驚いた宝石商は、彼女を訴えたので、彼女は警官により病院に連れてゆかれ、二、三日してダイヤモンドは彼女の体内から排出されて無事宝石商の手にもどった。さて彼女が宝石を取った罪に問われるか、どうかで、このほど裁判がはじまった。彼女は法廷で、『ダイヤモンドが本物だというので、その石を歯でかもうとしたら、ゴクッとそのまま石がのどの奥におちこみました』と陳述した。その結果、法廷はダイヤモンドをしらずにのみこんだことは宝石をぬすんだことにならぬ、彼女は無罪ということになった。

この種の事件は、たしか以前日本にもあったと思う。私がこのニュースを見て興味をもつのは九万円のダイヤモンドなんかではなく、その排出された光景だ。おそらく浣腸もされたであろうし、排出のときは警官が立合い排出された固形物は、数人の人々により、こまかくいじくり廻され、白日のもとにその姿をさらしたことであろう。彼女の身体から出された、香り高きモノの中から、光りかがやくダイヤモンドが顔を出したその時の状景をおもうと私の胸はおどるのである。二十二才の若き女性も排出する。

この当り前のことが、私には、とても強く印象づけられるのだ。

尿買います

これも同じく内外タイムス誌から。

『ふし穴』という思わせぶりのコラムにあっ

たもの。

これは廃物利用の最たるもの。尿がハゲの薬になる。昭和薬品という製薬会社では、二カ月から四カ月ぐらいまでの妊産婦の宅に外交員をまわして一日分の尿を五十円で買っている。容器やジョーゴなど用具セットを置いてゆき翌日とりにゆくという仕組みだが、妊産婦の尿には女性ホルモンがタップリ含まれているので、これからハゲの特効薬をつくっているのだそうな。

右の記事から、私は三つの感想を引き出した。そのひとつは、尊い尿を一日タッタ五十円とはあまりにも安すぎる。私だったら、一滴に千円を投じても、尚惜しくないという思い。そして今一つは、相手が年若く美しいひとであったなら、別にした容器にこれを取って頂き、人知れず、これを賞味するであろうことを。そして今一つは、一見面倒な加工などせずとも、そのものズバリで、容器に買上げたものそのものを口にした方が、効力は更に何倍かになるのではないかと私は思うのである。

あのほのかな香り、快よい苦味、その嗜虐感。美酒に通うその酔心地。

車中にて

電車の中で、誰かが鼻をかんでいる。それとなく私はその方を見る。

果して！美しく若き女性だ！

そのときから、私の神経はめまぐるしく動く。音の主の方へ一歩一歩近づく。

彼女は、足許へ『白い落し物』をソッとおとす。

終点まで、そのまま私は目をつぶって車にゆられている。

全神経をその白い包みに集中して——。

車が終着駅について、下りるしゆん間、私は目に止まらぬ早業でそれをひろい上げる。

その『白い落し物』は、私にとっては又とない贈り物なのだ。

ある落書

国電中央線『三鷹駅』のWCの落書に曰く

『エリザベス女王の〝固形物〟を思い切り食べたい。』

近来これほど、ソノモノズバリの、ショッキングな落書を私は知らない。

麻生保氏の生活と意見

麻生保

「雪のように白い馬に跨って、美しいお姫さまが並木道を行く。

馬が軽やかに駆けて行く道、その上に私の撒いた砂は金のように輝いている。

お姫さまのばら色の帽子は上下にゆれている。おお！（その帽子についた）羽毛を一つ私に投げ与えて下さい。その代りに、私が丹精して咲かせた花を一つ捧げましょう。いや、一つでなく千でも。いいえ、全部差しあげましようとも。」

これは、シューベルトの流れを汲む、ドイツリード最後の天才、クーゴー・ヴォルフに

よって作曲され有名になったメーリケの詩、「DER GATNER」である。普通、園丁、又は庭師と訳されるが、少しくだけて云うなら「じいや」であろう。彼は、この彼が崇拝して止まない美しいお姫様の住む城（シャトー）にやとわれて、乗馬道に砂を撒いたり、芝を刈ったり、植木の手入をしたりしているのだ。そして、たまにこのお姫様を、かいま見る事が、彼にとっては非常な楽しみなのである。勿論、彼女は、賤しい彼に一顧だに与えない。また、彼が彼女に口をきくなどは、思いもよらない事である。然し、彼は、そのお姫様の帽子についている羽毛の一つでも手に入れる事が出来たら、と、はかない望みを持っているのである。

この気持に共鳴したのであろう、ヴオルフは、詩を一読するや、あっと云う間に曲を書きあげてしまったと云う。そして、これは数多いヴオルフの作品中の最大傑作の一つである。なお、ヴオルフが、ザッヘル・マゾッホにゆかりの多い、グラーツの生れである事も奇しき因縁である。

新東宝映画「戦雲アジアの女王」

期待が過ぎたせいか、麻生氏はガッカリ。まず、山野少尉が芳子に抱く崇拝にも似た献身的な、マゾヒスティックとも云える愛情が中途ハンパにしか描かれていない。芳子に扮する高倉みゆきは、線が弱々しく、もろく、気品も、凛々しさもなく、結局、出来のよくない宝塚に終ってしまったのは何とも残念だった。そして、彼女が見得を切ったり、部下を叱りつけたりするあたりは、いつもギゴチなく、力みかえってばかりいて、むしろ、こっけいな程だった。こういったポーズを、自然にそなわった気品と、威厳と、優雅さを以て演じる女優はいないのだろうか。遠藤氏の「女王」を主演した東恵美子は、高倉みゆきよりは少しましだったが、矢張り、気張ってばかり居た。

然し、部分的には語るに足るところもある。特に、最後の西部劇まがいの追っかけっこの場面。芳子は、二頭だての馬車の馭車台に坐り、山野は、後を向いて追手を、ピストルでねらいうちするが、山野はすでに深傷を負っている。芳子は、「山野、山野、しっかり」と叫びながら二頭の馬の臀に鞭の雨を降らせる。山野は芳子の声に、馬は芳子の鞭に励まされ乍ら走り続ける場面がつづくが、麻生氏は、ここを見乍ら、山野と馬が、そして「山野、山野」という芳子の声と、ピシリ、ピシリと鳴る鞭の音とが奇妙に交錯し、山野が芳子に鞭打たれ乍ら走らされているような錯覚を起し、一種異様な興奮を感じた。

なお、この一寸前に、短いカットだが、乗馬の芳子が、馬に鞭をあてて速足に移るところがある。上半身、即ち鞍の上だけであるが、鞭を持った右手の動きが割によく捕えられている。

×　×　×　×

敬愛する沼大兄（これならいいですか？）

長文の御返事いただき、有難うございました。いろいろ御教示いただいた事、心から感謝いたします。事実二月号の僕の「生活と意見」は、少し雑なところや、脱線が過ぎたところもあったと反省しております。また、新年号の「手帖」を、誤解したところも、確かにありました。「意見の相違を来したのは、年令の相違ではない」と、「VOUSSOYER の事」の二点では、僕は、ほとんど全面的に僕が不用意であった事を認め、大兄の御意見に敬服いたします。尤も「ジョジアヌ」は、やや擬古文体ですね。MAITRESSE などという言葉がああいう風に生きているのですから——。が、二月号の「生活と意見」の一五八頁二段五行目からあと、同段終から六行目までは大兄が承認して下さった御様子なので、とっても嬉しく、この上もなく心強く思います。何故なら、僕の云いたい事は、要するにこれだけなので、これが昨年十二月号と、この二月号に書いた事の結論であり、要約なのですから。

大兄の貴重な御教示に感謝し、今後の後輩への暖い御指導を重ねてお願いいたします。

麻生　保

縛られ女優二十花選

南方佳男

十二月号の「緊縛映画一覧表」、また新年号の「映画女優緊縛に関する一考察」を読んでるうちに、ヒョンと思いついて筆をとってみた。何の準備もなく、思い出すまにまに綴ったものだから、もっと適材を書き落していたり、あるいは当方の研究不足もあるかも知れないが、それはまた補足することとして、①若くて美しい独身の女優②時代劇専門またはそれに準じたもの③縛られる回数が多い④縛られ演技の上手い⑤最近半ケ年間に第一線で活躍している、などの諸条件をパスした優秀女優？ を二十名選んでみた。題して「縛られ女優二十花選」。

さて、誰から書きはじめようか、と思案して見たが、やっぱり時代劇は東映から女優三羽烏をとりあげてみた。

千原しのぶ（東映）浮世絵美人を想像させる柳腰の可細い体。最近では演技派に移りはじめて、ウバ桜役、年増役にかかわりかかっているが、町娘、武家娘、姫君、鉄火な芸者芸人など、あらゆる役柄をこなしているだけに縛られる機会が非常に多い。「**水戸黄門**」シリーズの当り役、女賊のお蝶などでは、必ずといって良いほど縛られており、「**七つの誓**」では磔に縛られ、「**怪傑黒頭巾・マゲナの瞳**」では双手吊りの拷問など大掛りな縛られ方にもあっている。豪華な衣装をまとったまま縛られる場面が多いが、ウブな娘の所作の形である腰を引き胸をつき出す座り方に、独特の色気があり、縛りを活かすのに役立っている。印象に残った作品にはデビュー間もないころの「**青空大名**」で振袖、袴、白足袋、束髪の姿で後手に縛られ、馬上にゆられて行くシーンが、いたましくも美しかった。

長谷川裕見子（東映）下ぶくれの美人といった顔ではないが、不思議に美しいのはメイキャップ技術もさることながら、その素晴しい演技力に買うところ大である。実際、この人くらい、どんなつまらない縛られ方をしても、いたましく感じる女優は他に例がない。娘役から人妻役まで、年令相応の役は何でもこなしそれだけに、よく縛られもする。最近では、大掛りな縛られ方には会っていないが「**大菩薩峠**」の納屋の中での緊縛シーンの迫力、また「**黄金の伏魔殿**」での囚衣姿の本縄縛りによる晒者など、すっかり魅らせられてしまった。常に縛りに対して恐怖の印象を与えるところにこの人のよさが有る。また白無垢の衣装がよく似合うことでも彼女の右に出るものは当代にいない。

丘　さとみ（東映）愛くるしというか、可憐というか、まだあどけない顔、小柄な体、そこらが無性に可愛いく、縛られた時には思わず同情したくなる。最近はスランプな

のか田舎娘の役が多く、男達の毒牙におびやかされるような役についても、縛られる機会がまったく無いが、デビュー当時はよく縛られた。姫君役が多く、したがって随分と惨い縛れ方にも会っている。印象に残っているのは「**日輪太郎**」で樹の枝に後手に吊され、煙いぶしの責めを受けるシーン。反抗的な表現力に特異性を持っており、勿論これからの人だから楽しみが多い。

東映三羽烏が出たので、ついでといっては悪いが昨年まで東映で縛られ役の看板だった二大スターを挙げる。

田代百合子（フリー）庶民的な顔に、いつもどことなく淋しい印象を与える。この淋しさが、縛られた時に一層ひきたって、悲愴にうつる。フリーになってから現代劇ばかりだが、東映時代は時代劇専門で、それも武家娘の役が多かった。「**怪傑黒頭巾**」と「**笛吹童子**」で二度も磔にされたり、とかく拐わかされては縛られていた。上目づかいに眉の間にしわを寄せて悲しそうな表情をするのが、この人の縛られ演技。最も優れていた作品としては「**里見八犬伝・完結編**」での柱縛りを挙げよう。柱に後手に重い姫君衣裳のまま、胸を七重八重にグルグル巻きにされ、邪神のイケニエにたてられて、もだえ苦しみ、顔一面にあぶら汗にひたっていた姿は、けだし圧巻だった。

高千穂ひずる（フリー）東映の姫君スターのNO・1だった昔は、田代百合子と同様に必ずに近いほど縛られたが、ついに一本の傑作も出していない。年令の割に可憐すぎるマスクが禍いして、少しも悲惨な感じを与えなかったためだろう。「**霧の小次郎**」の立樹縛り、「**追撃三十騎**」の後手中縄縛りの連行、「**若君逆襲す**」の後手グルグル巻き猿ぐつわ。数えればつきないが、これら作品の一連の共通点として、彼女の縛られ方は常に緊縛度に不足があった。さて松竹系の映画に出演する機会の多くなった今後、どのような縛られ方をするか新しい興味。さしずめ新年度の作品に企画されている「**七人の女スリ**」のお駒の役など、こういった面で期待をかけている。

また、ついでの言葉で松竹の看板スターから、最近、サド・シーンにめきめき腕をふるっている松竹五人女優を挙げてみる。

瑳峨三智子（松竹）すっかり大物になって縛られる機会が少くなった感じだ。もともと可愛らしい顔で、ハキハキしたテンポの演技だけに、ネッチリした縛りのシーンには不向きのようなところも有ったが「**唄祭り佐太郎三度笠**」「**赤穂浪士**」・**女間諜秘聞**」「**ひよどり草紙**」など、ただ単に後手の中縄といった程度の軽い縛り方ではあるけれども、数量的にはかなり多い。マスクの点でも高千穂ひずると共通したようなところも有るが、まずまず新東宝作品で「**逆襲大蛇丸**」に利根はる恵と背中合せの吊し責めに、両手首を揃えて縛られたポーズは、少い佳作のうちの一つとしてとりあげておこう。

紫　千代（松竹）このところ松竹女優陣のイジメられ役旗頭。冷いツンと澄した顔は、ついイジメたくなる縛られ女優向き。さて、最近の作品では「**銀蛇呪文**」の釘付けの磔は例の少いもの。表情に苦悶のあとがなかったのが演技の不足だが、凄惨な感じは現われていた。「**酔いどれ牡丹**」「**大忠臣蔵**」など新東宝時代を一掃するかのように縛られ役に廻るのは、自らの希望のようにも受けとれる。

山鳩くるみ（松竹）東映の丘さとみと似かよった愛くるしさのある顔。時代劇に出演している時は明るい顔にかかわらず、しめりっぽい役柄が多い。実のところ縛られた作品は時代劇では「**乱れ白菊**」の磔縛り一本きりしか観ていないのだが、その縛られ方が印象的だったので将来を期待して特に挙げたま

で。磔に縛られた女優の一つの形として手を握り肱を曲げる所作があるが、山鳩くるみの場合これが全然みられなかった。この大胆な？　演技が十字架上で観念した役柄をよく表現していた。現代物で「**この女に手を出すな**」に、後手手首だけ縛られ、ワンピースの隆起もアリアリと原形を示すように胸を張って地下室へ連れて来られるシーンも印象に残る出来だった。

水原真知子（松竹）ぐっと年増どころの演技巧者で忘れられない人。鉄火肌女の役、人妻役ばかりだが、可細い体が幸いして、気丈な役柄にいかしている。フテクサル時の微笑に男の感情を猛りたたせる魅力を持っているようだ。傑作の多い中から選ばせていただくならば「**のん気侍大暴れ**」での吊り責。頭上で両手を組合せて太い荒縄で縛られての吊りに、ザンバラ髪で苦しみもだえながらも、白状しない気強いところの表現巧み。また「**浪人街**」での牛裂の刑。観念して後手に縛られたまま静かに仰向けに横たわり両足首に縄をかけられて刑を待つ、あわれな姿も忘れることの出来ない美しいシーンだった。この人のホツレ髪は、サド・シーンの重要な役割をはたしている。

浅茅しのぶ（松竹）最近すっかり姿をみないが水原真知子に対抗する同じ役柄の縛られ女優の双璧。水原より、やや、もの柔らかさがあり、訴るような眼ざしに魅力がある。傑作というものはないが「**悲剣乙女桜**」「**素浪人日和**」「**酔いどれ牡丹**」などの中縄後手縛り。しかし、縛られても反抗して行く気強い性格といった役柄の演技には、ずば抜けた巧味をみせる。もう一つ、自ら縛りを要求する例えば「**風雲日月草紙**」のような役の多いことも特異な存在ではなかろうか。

ここまでスラスラと半数の十人は浮んで来たが、さて続きは年増役の出たところで東映と新東宝に欠くことの出来ない妖婦役から選んでみた。

浦里はるみ（東映）二十四才という年令にはとても思えない重厚なマスク。ボリユーム豊かな体軀。時代劇スターとしては確かに特異な存在である。細く長い柳葉のようなコビるような眼ざしに魅力を蓄えている。縛られシーンの大胆な演技は、どちらかといえば地味だが恵まれた体から受ける印象で、迫力に富んでいる。傍役だから特筆するような縛りはないが、この人くらい強烈な縛られ方をする人は他にない。出演映画の題名をすっかり忘れているので省略させていただく。

若杉嘉津子（新東宝）一寸悪のきくマスク、側室様とかアバズレ女の役が多いが、痛々しい表情を表わすのが上手い。最近の傑作で「**天下の鬼夜叉姫**」の吊しなど迫力をみせている。最近めっきり売り出して傍役から主役にうつりつつあり、本年度には「**高橋お伝**」の主役が約束されているのも楽しみの一つ。「**毒婦夜嵐お絹と義賊天人お玉**」の夜嵐お絹の役で縛られたこともおなじみ。この毒婦役でシリーズ物をつくってもらいたい人だ。

新東宝が出たので、近ごろ縛りシーンに熱心な新東宝から三人ばかり選んでみた。

宇治みさ子（新東宝）千原しのぶと一緒に東映に入社して、冷く淋しい小なまいきに感じる美貌をお姫様役や武家娘役で出演、その都度縛られていた。新東宝に移ってからも同じような役柄で縛りには恵まれている。しかし東映時代の「**朝焼け富士**」、新東宝に移っての「**里見快拳伝**」などのように、縛られ方に特色のない後手中縛の座りシーンばかりなのが残念。せめて「**謎の紫頭巾**」での男装の縛りだけが類の少いものでとりあげられよう。縛られ回数において本年の筆頭といえるほど多いことを参考までに。

北沢　典子（新東宝）可憐なマスクで縛

られ女優の第一線に浮び上った新人。武家娘、町娘役が得意。デビューの「**里見快拳伝**」こそ縛られなかったが「**関八州大利根の対決**」では猿ぐつわをかまされて拐わかされ「**伏見稲荷の大仇討**」では中縄に縛られて入牢、「**白蠟城の妖鬼**」でも同様に縛られ、「**金比羅利生剣**」でも後手とほとんど十割の縛られよう。まだ演技というところまで行かぬが、大人しく縛られてしょんぼり座っている姿は、お雛様のように可愛いらしい。

筑紫あけみ（新東宝）演技は極めてウエットな印象をうけるが随分荒っぽく取扱われる人だ。ひきたつ美貌でないことが残念だが縛られ方は上手い。代表作として「**美女決斗**」での樹の枝への後手吊し責めのシーンをあげる。夜景で薄暗く見にくかったが強烈な印象をうけた。最近では「**風雲天満動乱**」の柱しばりの火焙りは、悲現な表現力に富んでいた。どんな役でもこなすことが縛られる機会を多くしている様子。汚れ役で縛られる女優として貴重な存在である。

大映がまだ出ていないので大映から三人ばかり選んでみる。

近藤美恵子（大映）ミス・ニッポンの美貌は御承知のこと。勿論、スタイルも良し。どことなく悲劇のヒロイン向きな淋しい感じが縛りに適している割合に縛られる回数は少く、筆者は実のところ「**女狐屋敷**」で巫女姿の縛りだけ一本しか観ていない。しかし、このたった一本が薄着物で、ことに豊満な胸部を半分近くも露出、その上をグイと締めつけた迫力のある縛りをみせてくれたので、すっかりまいってしまったわけ。今後、時代劇出演の数も増えるとみて、期待したいところだが。

山本富士子（大映）同類のミス・ニッポンとして美人縛られ女優の例。傑作として平次シリーズ「**人肌蜘蛛**」の後手の吊しをあげておく。大スターとして珍しい痛々しい場面だった。吊しは普通の場合、体に巻きつける縛をモッコ形にしてバランスをとるものだがこのシーンでは胸を巻いたきりだったから、さだめし手首が痛かったと思う。美人過ぎて縛りに同情がわかない。したがって縛られ演技も枯れて魅力に不足するのが残念。

浦路　洋子（大映）大映時代劇のホープとしてメキメキ売り出している。マスクは千原しのぶの繊細な感じと、淡路恵子の愛敬という、まったく正反対同志の二つの感覚を与えて来れるような特色をもっている。各種の娘役を演じているが町娘の弱々しい役柄の方が適しているようだ。「**凸凹巌窟王**」で後手に縛られて連行され、「**弥太郎笠**」で同じ後手縛りで引きづり廻され、動く縛りにばかり会っているようだ。

最後に演技派女優から二人を選んでみた。

久我　美子（フリー）「**柳生武芸帳**」のリアルな縛りがあまりにも印象的だったため、随分とむごく荒縄で本格的に縛られていたが、可細い体だけに可哀想だった。縛られてもなおかつ弱味をみせまいとする気丈な役柄を、さすが演技派らしい巧味でこなしていた。

香川　京子（東宝）最近こそ縛りに関係薄いが「**青銅の基督**」と「**近松物語**」の二大傑作で縛られ女優の資格は十分にあろう。神祕的な美しさを示した「青銅の基督」での、磔姿の痛々しさ。まして「近松物語」での、馬上本縄に縛られて引廻しになるラストシーンの魅力は忘れられない。ことにあの晴々しい快心の笑みはさも満足げにおぼえマゾヒスチックな場面だった。

以上で自選の「縛られ女優二十花選」を終るが、御異議ある方は申し出ていただきたい。

ある夢想家の手帖から

沼　正　三

第百二十七　サド女性とレスボス愛

前項の症例N・L夫人を分析治療したシュテケルによると、彼女は、少女時代に女子同性愛者で、女の友人達と長い間レスボス関係にあった。ある誇り高い女友達は、長いこと彼女に冷淡で近寄り難かったが、遂にある日許されて接吻できた。彼女は今だにこの接吻が忘れられず、どんな男の接吻よりも甘美と思えるのである。一方、彼女は男の服を着歩くことを好み、軍隊に入って従軍したいと思う位男性的な所がある。

つまり、彼女は、同性愛的特徴の強い（精神的）両性具有者（ビセクシュエレ）であって、唯それが現在は全く抑圧されているのである。普通の女になりたいという決心で、結婚生活に入ったのだ。この自分内部の男性との斗争こそ、彼女が繰返し演じたあの場面の隠された意味だった。彼女は男を懲らし、気の遠くなるばかりの情欲に焦れさせたが、彼女が懲らし、抑圧し、焦れさせていたのは、実は彼女の内なる男であったのだ。外なる男達に向けられている様に見えたのは仮象に過ぎない。彼女のサディズムは内から外へ投射されたもので、根源的には彼女は男性の分身に対して嗜虐（サディ）的に振舞い、男性として被虐（マソ）的なのである。つまり、内なる女は、男を抑圧せねばならぬ故に嗜虐的であり、内なる男は被虐的動機からその昂奮を生み出したのである。……

シュテケルの分析は明快だ。然し、これを読んで、前項の文からの嗜虐女性たる彼女へのイメージを破られた様に感じた方も多かろうと思う。手品の種明しをする奴は馬鹿者である。嗜虐女性の偶像の裏面が同性愛的女性の姿をしていることを示すのも、その意味では愚の骨頂であろう。私は、今迄性的科学者の文献を屢々引用しながら、症状の説明に止めて、その分析的解釈を紹介しなかったのは、そういう見地からであった。

その恒例を破って、一部の人の幻滅を顧みず、種明し的説明を紹

介する気になったのは、実は、奇ク誌上に活躍せられるある女性に触れたかったからである。

三二年九月号に『鞭の線に描かれて』、同十二月号に『男奴隷のことども』を書かれた皆川のぶ子女史は、極めて同性の明確なサド女性といえる。森山美歌女史の文（例えば三一年六月号の「奴隷に与える手紙」）が下卑た表現で（こういう下品な物言いを却って喜ぶ人もあるのだろうと思われるから、私は良い悪いの判断をするのではない。好悪の問題である）且つ類型的な内容に止まり、読みながらそのひとの像を描き出し難い空疎感を免れないのに反し、この皆川女史の文は可成りよく自己を語っていて現実感がある。

断っておくが、私は森山女史も皆川女史も――総じて誌上に名の出たどのサド女性も――個人的には存じ上げない。両女史はそれぞれグループ活動をお持ちの様だが、私は全く関係ない。唯誌上の文字を媒介して、想像を逞しうする丈なのだが、その点では、皆川女史は、今迄のサド女性の発言に比して、一番生身（ナマミ）の声を聞かせてくれている。といった印象があることは事実である。女名前で書かれている本誌の文章の中に、時々男ではないかと思わせるものの混入しているのに気付くことがよくある――尤も、サド女性の文章では、だから男の文だと早急に結論する気にはなれない。何故なら、そういう男性的資質こそが正にサド女性を生んだ根本素因となっている場合があり得るからだ。――けれども、皆川女史の文章からは、私は文字通りのサド女性を感じ取る。そして女史の存在を貴重なものと考える。色々な問題が伏在している様であるが、その一つとして、女史のレスボス愛をあげよう。

女史が『鞭の線』を以てサド女性として登場される以前、私は読者通信欄によってその名を知り、興味ある女性として注目していた。三二年七月号一七五頁から参照して三一年十月号一七〇頁R・D子投書を読むと編集部にレスボスのものについて注文しておられる。唯前者で、皆川という名を憶えてから読み直すと、後者一七六頁の皆川夫人宛の山口氏（これが後に皆川女史によってB生として書かれた人かと思われる）の文が目に止る。三一年七月号で氏はマゾ派として通信を求めているから、この皆川夫人はサド女性ということが分る。〝レスボス女性の皆川のぶ子とこの人とは同人か？〟そう思案すると、三二年七月号の文でサド女性鷹野めぐみ女史宛に同好者と名乗っていること、三一年十月号の文で、自分は積極派であること等に思い当った。

――この両皆川は、同一のひとに違いない。レスボスでありながらサディズムに興味あるひとなのだ。すると、例の……

私はこの時既に本項冒頭のシュテケルの説明を想起したのだった。その後『鞭の線』が出た。私の推測通り、レスボス女性の皆川のぶ子女史はサド女性でもあったのである。

女史自体は、レスボスとサディズムの関係について説明しておられない。然しシュテケルの例を読んだ上で、サド女性たる女史から

「結婚前レスボスの経験があって忘れられないのです。その後、妻であり二人の子供の母となってさえも、この性質だけはどうしようもなく、日夜悩んでいるのです…」

という告白を聞けば、誰しも、N・L夫人との類似に想倒せずには居ないだろう。（レスボスを完全に抑圧していたN・L夫人に比較すると、皆川女史のは、医家の分析を待たずしてこの告白が出る丈、抑圧が不充分なわけだが、これは、社会的環境の相違から仕方あるまい。貴婦人たる為の教養の重圧が此方にはないのだ。）

類似を意識して読むと、比較に堪える所はまだまだある。年が同じ二十八歳というのは偶然に過ぎぬが、夫と子供の許では「家庭のオカミさん」という平凡な印象しか与えぬ（『男奴隷』）女性が内

面に火を蔵しているばかりか、マゾヒストを呼び出して、ホテルで火遊びをするのは、N・L夫人と同じではないか。

ホテルでも、男を裸にしておきながら自分は裸とならず、男を鞭つ場面（『鞭の線』）など、不思議な位似ている。――こんな文章で、もし「妾の方も裸になって……」あれば、私は、それ丈で、一応その文が実は男（それも私達の様な正統本格派でないマゾヒスト）の手になるものではないか、という疑をもつのだが、皆川女史のはその点私のマゾ的審美眼に対し合格である。

裸にならない女史は、だから、男の方が、通常の男女関係をギめるのを許さない。彼は「男奴隷であって男性ではない」のだから（『男奴隷』）。これ又N・L夫人と同様である。

「私は改めて真のMとは存在しないのではないだろうかと考えこんでしまったのです。ああ、正常な性欲に全然興味のない真のMはいないものかしら。」

鞭撻その他を単に前戯扱いして、最後には男との結合を許す似而非嗜虐女性と、真の嗜虐女性との差異は全くこの嘆息の有無に存するともいえるのだが、その原因の一つを抑圧されたレスボス愛に求める学者の説明が、女性の発言自体から裏付される点、興味ある例であると思うので、敢て一項を費し、前項の種明しに堕することを恐れずに、喋々した次第である。

附記第一　N・L夫人は、結合を迫り求める男達を拒否し、嘲笑することに快感を覚えたのに対し、皆川女史は、結合を迫られたという丈で、怒って奴隷を解雇しておられるが、この点は両女性の嗜虐性の深さの相違であろう。私としては、女史がN・L夫人の境地に進まれることを希望すると同時に、世には、決して女主人との遊びを望まぬ真のマゾヒストも存在しています。ということをはっきり申し上げておきたいと思う。

附記第二　レスボスと女性サディズムの関係は決してシュテケルの創見ではなく、むしろ性学者の通説といってよい。然し、余りその見解を固執して、サド女性をすべてレスボス女性と見ること、更には職業的女主人と同棲する女性が、レスボス関係のみに基くと解するのが行き過ぎであることは、手帖第九十九項で、私見として述べたところを参照されたい。

手帖雑報欄

一八九谷崎潤一郎「残虐記」（婦人公論二月号より連載）　自殺するのだが、女にそれを見守って貰いたい――つまり、現代の法制下に、女を殺人者としない様に充分の配慮をしつつ、しかも彼女に殺されるとの意識を満喫しつつ死んでゆこうという、手の込んだ自殺をした男、このマゾヒストを巡って展開する今後の成行は、大いに期待できると思われる。この人のマゾヒズムが老境に入っても、一向昇華し去ってしまわない点、敬服する。

一九〇　中河与一『探美の夜』　谷崎の半生の伝記を小説化したもの。婦人雑誌に連載されていたが、単行本で講談社（本誌三月号一一〇頁参照）から出た。「天の夕顔」の作者の名誉になる様な作場ではないし、マゾヒストとしても、特に惹かれる所はない。唯、ナミオのモデルだった義妹との痴戯――愛の馬――などに多少のマゾ味を見るのみである。然し、谷崎という作家を知る上では、一読に値しよう。

一九一　谷崎潤一郎全集　第二十八巻及び第一巻これは既に一八〇号番外で注目しておいた。まだ首尾の二冊を出した丈であるが、完全な意味での全集ではないので、――佐藤訳の「毛皮を着たヴエ

ヌス」にもあきたりぬといった高度の標準から評すれば――物足らない。然し、今迄の全集より良いことは無論なので――佐藤訳でも結構だから「毛皮を着たヴエヌス」は是非読んで欲しいといった程度に要求のレヴエルを引き下げれば――およそマゾヒストと自覚される方は是非この全集に親しまれることをお勧めする。（奇ク読者に関する限り、乱歩と谷崎とは既に常識的な共通財と思っていたが、近頃奇ク誌上に乱歩物のこと新しい紹介もされていることだから、敢てこうお勧めしておく）

一九二　大江健三郎「人間の羊」（新潮二月号）　GIがバスの中で日本人乗客の尻を露出させ、這わせて「人間の羊」にして、尻を叩いて玩弄する……

一九三　鈴木二郎『黒いアメリカ人』　黒人問題に興味ある向きに。但し内容は雑駁である。なお『アメリカの断面』という写真集も黒人地帯に関心を持っている。人種差別と言えば、一月二八日附朝日に米国ノースカロライナ州（奴隷制の盛だった地方）のマックストンで、神父が先頭に立ったK・K・K（クー・クルックス・クラン、森本氏の時評にも扱われた秘密結社の現代版）がインデアン排斥をして、インデアンが怒って襲撃したという報道があった。

一九四　アランド作・中村保男訳『苦力』　これも、植民地人とか人種問題とかにマゾ的意味を読み込める人には面白い。戦前『**触るべからず**』という不可触賤民を描いた作が、**前田河広一郎訳**で出ていた。

一九五　アフリカ遠征隊の女子隊員　一月二六日附新聞によると、早大の赤道アフリカ遠征隊は無事六〇〇〇余メートルのキリマンジャロ登頂に一月十九日成功した。この隊には後藤董子さん（二五）と鈴木耿子さん（二一）という二人のお嬢さんが参加していたが、両女性共登頂隊員になった。女性進出の一例。彼女と遠征隊の探検予定にあるときく小人族との出合など想像して思をやるのも、マゾ派の特権であろう。

一九六　漫画映画「火星人襲来」（Jerrors from Mans）　久しぶりに映画を見たところ、面白い漫画映画にぶつかった。デイズニー物かと思うがはっきりしない。この火星人は体長一〇糎足らずの蟻人なのだが、宇宙船に乗って大挙来襲し、森に着陸して、石でも金属でもない強い歯で喰い破ろうとする。擬人化されたきつつきが、セロテープの粘着力を利用してこれを全員捕獲してしまい、蟻管理局を開いて、捕虜の火星人を利用した道具を作り出す。この生体道具が面白いのである。棒の先に一匹宛セロテープで固定する。罐詰の蓋にあてると強い歯で蓋を咬み切る――生きた罐切具だ。同様に鉛筆の先を咬えさせると、生きた鉛筆削器としても使える。鼠穴の入口に緩い紐で繋いで置くと、鼠を見付ければ喰い付く、生きた捕鼠器。同様に、盗賊の忍び込みそうな窓縁などに仕掛けて、撃退用としても有効だ。歯は光って鋭いから、一匹を蓄音器の部品にしておけば、レコード針の代りになる。猛烈な咀嚼力と消化力とを利用すべく、漏斗と組み合せて、塵取器にすると何でも喰べてしまう。掃除能力は素晴らしい。……多くの人には荒唐な漫画的アイデアの羅列に過ぎぬだろうが、私の様に、生きた儘道具化されることへの固定観念あるものには、この生体家具のアイデアの一つ一つが、――イース世界の矮人共にふさわしいものにも思えて――魅力的であった。

沼正三だより

（一）（マゾヒズム画廊について）　滝れい子氏画くマゾ画廊十

枚を見ました。旧号で森本氏が紹介されたシュリヒテルやヘーグマンの名画、ああいった一級品を標準にして見ると、動きの描写や気魄の点で未だしの感はありますが、題材に充分変化を持たせた十枚の組合せ（もっともふんどしをあしらったものは皆感じが似ている様ですが、これは、ふんどしフェチシストに言わせれば又別かも知れません）は、画廊の称にふさわしいものがあり、広告中の説明文と合せ読んで興趣があります。マゾ派の読者は、サド派ほど視覚に依存せず、文章から空想を走らせる度合が高いのではないか、と自分自身に顧みて考えていますが、この滝氏の画廊を第一集として更に読者から各場面の案を募り、他の諸画伯を動員して、第二集、第三集……と「大画廊」の建設にまで進むことを、編集部にお願いしておきます。

（二）（**杉本真三氏に**）　二月号、三月号で一番失望させられたのは、あなたの「犬の生態」が掲載されていなかったことでした。三月号で黒田史朗氏もいわれた様に、あなたの文章からは、真実マゾヒストとして悩んだものの悩みが溢れています。――手帖を改稿した分の原稿にも、一月号で「犬の生態」を読んで、附記をいくつか書き加えた位共感しました。――この小説（告白か小説か知りませんが、根本にその悩みをもっておられる以上、虚構は少しもマイナスでありません）は、是非とも完成させて下さい。

（三）（**土路草一に・その他**）　「魔教圏No8」は、サド派の諸君の他に、私の様なマゾ派の読者も、眼を光らせ、胸をドキドキさせて事件の展開をまっていることを忘れないで下さい。（前作のリーレ・レホルターに当る様な）白人美女（ユーマ女性）が加虐者側に登場するといいがなあと思っています。緑川百合子やリーレを創造されたあなたに、こう申しても、別に押しつけがましくはなるまいと思いますので、敢て希望する次第。――なお、サド派のものながら**南時夫氏**の異色ある研究には、マゾを離れ、一読者としての立場から、大いに注目しました。

（四）（**とやまかづひこ氏に**）　二月号三月号の「街で見つけたフェチシズム」、まことにユニークなもので、今後の継続を期待しております。「ロマンチック・マゾヒズム」の項など、空想的（私の表現を以てすれば、微視的）マゾヒズムの真髄ですね（手帖新稿第二十九項参照）。――厳密には、あなたの場合は、フェチシズムではなく、マゾヒズムの一分野としてのコプロラグニー（汚物愛好）というべきでしょう。異性への屈辱感を伴わずに汚物に性的魅力を感じる場合のみを学者は汚物のフェチシズムと称している様です。私自身あなたと全く同様の汚物愛好者ですが、自分をフェチシストとして意識したことはありません。汚物も靴も屈辱のシンボル――私達はマゾヒストであり、それに止まるのですね。

（五）（**休載についてのお断り**）　止むを得ぬ身辺の事情から、手帖は第百二十八項（五月号）迄、ヤプーは第二十三章（四月号）で、暫らく休載させて貰います。――「雑報」「たより」はできれば休まぬつもりですが――。手帖など、二十八年六月号以来（復刊を知らなかった時は別として）一号も欠けず継続して来た丈に、一寸心残りですが、半年程まって下さい。中絶ではなく休載なので、必ずまた続けて書きます。手帖増刊も、秋迄延期して貰うことになりました。――真木不二夫さん、ヤプー休載中、オラミを読ませて戴けませんか？

×　×　×　×　×　×

日本印象記

―外人の見た女はらきり―

南方純

明治の中頃、品川に海軍教官で、ゼームス某というアメリカ人が住んでいた。日本海軍の発展に大いに功労のあった人で、しかも無類の日本びいきで、夫人は日本人を迎えるという風であったので、土地の人も彼を敬慕して、住んでいたところをゼームス坂と名付けるようになった。日本の風習やそのうらに存在する日本人の精神生活というものに興味を持ち、果ては法華経の研究まで始めるといったまことに奇特な人物であった。わたくしの知人で菅野某という老婆が先般、物故したが彼女は常に若い時ゼームス家の女ボーイをしていたことを自慢していた。大体女ボーイなどという奇妙な言葉が果してあったのかどうか疑わしく思っていたのであるが、彼女がなくなって遺品の中に「だんなさまのかきもの」と表に書いた古びた和紙に包まれたこれ又古ぼけたフールズキャップ状の書き物を見るに及んで彼女のいっていたことが満更そうではなかったと思うようになった。

その書き物はきれいな細字で綴られた原稿で枚数は五十三枚あり、綴込はしていない。記事の内容は日本で見聞した珍奇な事柄を備忘的に書き綴ったという程度のもので、特に文飾に心掛けた様子も見えない。一読してはっきりするのは、この記録はゼームス自身の書いたものではないということだ。即ち明治になって来朝した彼の見聞するはずのないことが記録されている。原稿には表題も著者名も記載されていないが、あえてわたくしが臆測をたくましくすれば、著者はタウンゼントハリスなどの随員として来朝した好事家で、ゼームスはその記録を見て、参考として書き写しておいたのではないだろうか。内容は四部にわかれ、第一は吉原のこと、第二はちょんまげのこと、第三は入墨のこと、そして第四は、はらきりのことが書いてある。今回はその第四部を訳出することにした。

イギリス公使の秘書レディスデイルが著し

た旧日本物語は日本武士のはらきり実見記をのせた誠に貴重な文献であるが、本文もそれと並んで極めて特殊な場合の記録として珍重すべきものと信ずる。同時代人が当り前のこととして記録しなかったことや、いまわしいこととして書くのを憚ったことがらが、外国人の好奇心の対象として精密に記録されたことは、時代を隔てた我々には有難いことである。外国人にありがちな誤解や偏見については読者の側で取捨すべきものであろう。

（一）のぞき見とはいかに困難なものであるかということ

この国における滞在が長びくにつれて、最初極めて珍しく思われたことも、さほど興味をひかれなくなってきた。われわれの生れた国とはあきらかに異質なこの国の生活形式（それは衣食住のどれ一つをとって見ても似ていることより違っていることの多い）には最初当惑を感じたものであるが、それも慣れるに従ってやはりこの国の人々も人類の一部であるという共通面の認識が出来るようになり同時に当初ほど好奇心を刺戟されることが少くなった。

しかしそれにもかかわらずこの国独自の風習で是非見たいことが二、三あった。はらきりもその一つである。ある日、堀に（訳者註 Horry と綴ってあるが堀、又は堀井であろう。幕府が世話をやく為につけた役人と思われる。以下堀と書くことにする）はらきりが見たいと申入れると、市内の劇場に案内してくれた。そこでは昔この国で行われた有名な復讐物語が上演されていた。言葉が判らない上に動作がひどくのろのろしているのでこの見物は苦痛であった。その中で大名がはらきりする場面と浪人がはらきりする場面とがあった。堀に「現在行われるはらきりはこれと同じか。」と聞くと、彼は「これは演劇であり真実とは相当な差違がある。」と答えた。

そこでわたくしは「実際のはらきりを見る機会を与えてもらいたい。」と要求した。彼はあきらかに当惑を顔にあらわして、「それは極めて困難である。第一にそれはそうしばしば行われるものではない。わたくしさえまだ見たことがないのである。その上行われる場所は邸の中とか、寺の中とかで立会う人数がごく制限されるのである。だからあなたの要求を満足させるのは困難であると遺憾ながら申し上げざるを得ない。」しかし、わたくしはあきらめなかった。何度もその要求を繰り返した。そして人のよいさむらいに、ついに何とかしようと承知させてしまった。

それから大分日がたち、秋も深まった或日堀が来て、約束をかなえることが出来るであろうといった。「しかし、それには」と彼はいいにくそうにつづけた「あなたを正式に客として招くわけにはいかない。変装して、こっそりのぞき見をする形をとらなくてはならないが、それでも差支えなかろうか。」

今から考えれば軽率であったと思うが、その時は好奇心が何よりも先に立っていたので体面のそこなわれる行為についての反省もなく、彼の申し出をすぐ受入れてしまった。はらきりは今夜行われることになっていた。

彼の話を綜合すると今夜のはらきりは男ではなく、まだ若い女性であり、極めて珍しいケースだそうである。ある大名の妻の侍女でその大名の妾の一人をうらんで殺害しようとした処、仕損じて傷を負わせてしまった。大名は大いに怒って彼女を自ら斬り殺そうと思ったが、妻は自分に忠義をつくした彼女をかばって殺すことに同意しない。事件の原因は東洋の一夫多妻制の家庭内でおこりがちな妻妾間の権力争いにあると思われる。しかし封建的なこの国で家長たる者の意志がくじかれたままで終結することは許されない。重役達のはからいで負傷した妾は役を免ぜられることで正妻の意志を立て、その侍女は仮にナイトの位に置き、はらきりさせることで、大名の意志を立てさせることにしたそうである。（訳者註、ナイトの位云々は士分としての意味であろう）

この国では、はらきりは、さむらいのみに許された名誉ある刑罰とされている。故に破

廉恥な罪の場合はさむらいでもはらきりは出来ないし、又賞讃されるような行為の結果受けなければならない刑罰（奇妙な事だが多くの例がある）の場合でも女ははらきりが許されないそうである。だから彼女の場合、仮にナイトの位に置き、はらきりすることになったのである。

堀の説明によると、はらきりの当日大名の任命する使者が大名の命令を文書で本人に伝えることになっており、その死刑宣言文を読むと罪人は感謝して受諾の意を表明するならわしだという。われわれの考からすれば死刑は生を奪い去るものであり、一向に感謝すべきものではないが、この国のさむらいにとっては、はらきりは名誉ある死を与えられるものであり、光栄として有難く受取るべきものであるらしい。

堀は奇妙な日本服と帽子を出し、これを着てもらいたいといった。大名の侍医の服装で背丈が短く着心地はよくなかったが、堀の苦心も了解出来たのでこの申出に従うことになった。堀は夕方駕籠をよこすから、それに乗ってもらいたい、自分は先方で待合すからといって帰った。落着かない気持で夕方を待っていると立派な塗駕籠が迎えに来た。例の珍妙な変装をして行先もわからない駕籠に乗込んでこの不思議な冒険に出発した。駕籠は見かけが立派な程乗心地のよいものではない。

長さ僅に四呎、高さ三呎半の狭さで、しかも取ることの出来る位置としては日本式にかかとの上に尻をのせるか、さもなければあぐらをかくかしなければならない。そこでつくずくのぞき見とはいかに困難なものであるかを痛感した。

（十一）儀式とはいかに退屈なものであるかということ

不安な、そしてかなり長い道中であった。駕

籠がおろされたのは大名の邸の門の中であった。堀は先に来ていて、こちらに来いと、わたくしを奥の方に案内した。邸のさむらい達も数人見受けられたが既に堀から話が通じてあるらしく知らぬ顔で通してくれた。日はすでに全く暮れて澄み切った夜空には星が美しく輝いていた。宏荘な玄関を右に見て進むと内庭に通じる入口があって両側に一つずつ大きな提灯が竿の先にさげられ、その下に裃袴のさむらいが二人日本風のいすに腰をかけて見張りをしていた。堀はことさらその入口から入らず、ずっと土塀にそって南の奥へ進んでいった。土塀の切れる所は大きな欅のかげになっており身をかがめてやっと入れる位の入口があった。ふだんは使用していないらしく野草がすっかり道をふさいでいた。その中に二人ではいって行って草むらの中を音を立てないように進んだ。

木の間がくれに観察すると、そこは大名の多くの部屋に面した庭で手入れの行きとどいた砂利が所々に立てられた例の大きな提灯や全部開けはなされた部屋の灯で、まるで白浜のように光って見えた。座敷の上や庭にはさむらい達が盛んに往き来しており、ものものしい気配が感ぜられた。草むらをなお進んで行くと、座敷とわれわれのいる所の丁度最中の位置に新しい小屋が建っているのが見られた。高さ八呎位の柱をじかに立てた簡単な小屋で四方各々六嗎程度の広さである。前後に二嗎位の入口を設け、その他の所は白い幕をはりめぐらし、屋根も又布で作ってある。中でさむらい達が二人で白い紙製のスクリーン（訳者註、屏風のことであろう）を立て桶や柩やその他の品物の位置をあれこれと直しているのが見えた。

説明をまたないでもこれが今日はらきりの行われる場所であろうと想像出来た。ここでかくれてのぞき見をすることになるのかと思ったら堀はまだ先に進んで行く。結局広い庭の奥を大廻りして座敷と同じ方向即ち小屋の正面と（やや斜からではあるが）向い合う場所に進むことが出来た。そこには優美な石の灯籠が立っており、その上、枝のまがった松の樹のかげになっているので、座敷の方からも小屋の方からも容易に見えない位置にあった。そこから小屋まで二十嗎もあり、細い動作を見るには遠すぎると思ったがこれで満足するより仕方がなかった。

日本人程緩漫な動作を楽む国民はないと自分は思う。先日の演劇でもその感を深くしたが、あれは下層階級向の演劇で上流階級が愛好する能と称する一種の演劇の如きは緩漫なること全くその比ではないという。世界の進歩から目をそむけ小さい殻にとじ籠った消極性がこの緩漫性を招いたのだと自分は解釈している。今夜のはらきりもなかなか行われないので少々腹がたってきた。一つには蚊にすねをさされたむずがゆさがわたくしの怒を助長したのかも知れない。しかし考えて見ればわたくしの希望が早くとげられるということはそれだけ早く一人の女性がこの世界から永遠に姿を消し去ることである。人間の心とはこんな矛盾を含んだものらしい。

（三）闇に白蛾が羽ばたいたということ

白い布で作られた大変簡素で奇妙な小屋には、見なれない多くの附属物があって、それぞれ宗教的な意義をもっていると説明された。小屋の四隅に立てた細長い旗や正面の屋根の下に張られた白紙には支那の文字が太く書かれている。白紙には「研究の為の門」（訳者註、修道門の意）と書かれ、ここからはかくれていて見えないが、後にも同じく白紙がさがっており「極楽の為の門」（訳者註、涅槃門の意）と書いてあるそうである。罪人は前の口から入り死体となって後の口から出て行くのでこれを仏教の入学と卒業になぞらえたそうである。小屋の中には目の荒いわらを編んだものがしきつめてあり、その上に白い布でつつまれたマット（部屋に使うのと同じ物という）が逆のT型におかれている。マットの両側には木蘭科の植物（訳者註、しきみ）が竹の花立にさして供えてある。これも仏教に関係

の深い植物ということである。その左右に竹で作った燭台が二つ立って太い蠟燭が輝いている。マットの後にはさっき見た白いスクリーンが後をかくしている。

いよいよ時刻がせまったと見え座敷には立会のさむらい達が二三十人も並んで座った。ふと後を振り返ると遠い奥の方から二人のさむらいに附添われた若い女性が静かにこちらに向って歩いてくるのが見えた。白い着物白い帯、そして白い緒をすげた草履を履いた彼女は闇に、はばたく白蛾を連想させた。まだ二十二才だというが、何という落着き方であろう。この国の婦人は髪を極めて技巧的に、一見巨大なかぶり物を思わせるように編んでいる。しかもそれが身分、職業、長幼、既婚、未婚の別によって細くわかれている。大名の侍女も当然常には髪を結っているのであるが今日は長い髪をそのままたらし、よく櫛けずってその先を束ねただけである。心をこめて化粧した顔にはいささか恐怖のかげも発見出来ない。二十代の女性がソクテスのような死生観を抱いているのであろうか。

萩野ーこれが彼女の名であるーはしずしずと自分達のいるわきを通り、小屋の正面より入り草履を脱ぎ白いマットに上り、正面に向って座った。その動作はあくまで堂々として少しもわるびれた処が見えなかった。

（以下次号へ続く）

臨時増刊号『責小説特集号』目下発売中！

売切れぬうち即刻お申込を！　定価一部二百円（送料八円）

大好評！　（表紙色刷、本文中質紙使用）

「責小説特集号」は主として昭和二十七年度に発行しました本誌の中から悦虐作品として好評を得ました作品二十篇を選び出し全部新しく挿画を描いて再録したものであります。いずれも力作揃いばかりで、この特集号一冊によって昭和二十七年度発行の本誌の主要な作品を網羅していることになります。八葉の口絵は内容から取材して、滝れい子氏、北原純子氏の二人を煩して描いて頂いた力作ばかりですから、これだけ独立しても十分に観賞価値のあるものと思います

巻頭口絵
拷問（片矢薫・作）　滝れい子画
吸血女流画家（岡田咲子・作）　北原純子画
ある奇術師の恋（吉丘垣根・作）　滝れい子画
鬼兵衛刺青異譚（二俱志津子作）　滝れい子画
遊女葬水の最期（片矢薫・作）　北原純子画
縛られた妻（早川新二郎・作）　滝れい子画
巫女屋敷の責絵巻（岡田咲子作）　滝れい子画

読切傑作責小説
拷問（特高刑事の惨虐行為）　片矢　薫
賭犠（淫奔マダム狂騒曲）　二俱志津子
巫女屋敷の責絵巻　岡田　咲子
老いらくの恋異聞　榛ノ木参一
復讐のドラマ　片矢　薫
鬼兵街刺青異譚　二俱志津子
吸血女流画家　岡田　咲子
ある奇術師の恋　吉丘　垣根
惨虐戦慄の徴用女工　片矢　薫
遊女葬水の最期　片矢　薫
囚　衣　古川　裕子
奴　隷　妻　片矢　薫
悪魔と口紅　桂　牧次郎
悪　女　岡田　咲子
縛られた妻　早川新二郎
廊の灯影　片矢　薫
M　と　S　岡田　咲子
責　苦　竹谷　十三
記　録　係　岡田　咲子
赤に憑かれた男　上村久秀雄

『忙中閑お慰み読本』

―縛り舞踊放談の巻―

牧　高　志
文・画

同好者連中の中に活動家が居って納得ずくめで娘さんを三人借りるから演って見ないかと誘い水を掛けられた。それもよかろうはいいが舞台がない。衣裳だってポケットマネーで一寸と云う訳にも行くまい。それよりも何を踊らせられるか皆目判らない娘さんに取ってはそれこそ災難だろう。二流会社の庶務は余程閑と見えて年中妙なことばかり考えている。川辺徹仙居士が、どうせ観賞する奴は五六人位だろうから筋が通ってりや、娘さんもああそうかと踊るに定まってる。演れよ、演れよで、ここにいとも怪し気な非公開の日本舞踊が私演された訳である――。

「君は衣裳学が専門だから身の振り、裾さばきを観賞し給え、俺は縛り専門だ。でね――今晩は大して道具は要らんのだ。棒切れと、うちわ太鼓の出来損い見たいなものがあればあとはそちこち探すと小道具の二つ三つは出て来るから楽さ。そうそう衣裳もあらかた揃ってるんだ。おまけに公休日で娘さんも……一人は生理休暇かな？兎に角出られるし、舞台は君――杵屋師匠の離れに小っちやな踊り場があるだろう。そこをちょいと借りたんだ。どうだい、フラッシュでも閃光するか。いい写真が出来るぜ、アハハハ……」

斯う云う奴等に掛かって妙なことにならんから娘さんもいいようなものの、ターミナルデパート勤務の琴江嬢（二十二才）、銀座某店事務員ひとみ嬢（二十三才）それに花屋勤務の多喜子さん（自称二十五才）といずれも脂の乗ったと申しては失礼な云い分だが、女性としての花盛り。しかも驚くべきことは、どんな動機か知らぬが、こぞって日本舞踊を志していられるから殊勝なもの、こう云う娘さんの一人を貰ったら、さぞかし永久に愉快な家庭が出来るだろうなあ――

「オイオイ、何を感心してるんだッ、もう皆んなお待ち兼ねだぞ、最初の棒縛りのひとみ君、帯が結べんって手助けを求めてるぜ。盛装して踊るんだって……その包みの中に赤の蹴出しなかったかい？次の琴江嬢の桃割れに要るんだ、頼みまっせ！」

原作がなくて筋のあるのもおかしいが、レコードをならすと気分が壊れると云うんで肝心の踊りなるものが、初稽古ですぐさま幕に

なる誠に奇妙奇てれつな三幕物。

「じや、ひとみさん、この棒を挿しはさんだまま舞台へ出て下さい。要するにですな、あなたは後手に縛られてるでしよ、田んぼの案山子ですよ。

〈今日も一日、立ち通し暮らし、歩るけないのか山田のかかし……

テンでからすを追っぱらう、顔を振って——観てる連中には僕が説明しますよ。二間しかない踊り場ですから、あんまり見得を切ると落っこちいますが精々活潑に願います。じや飛び出て下さい！」

これだけで踊りの恰好になる処を見ると素養はまた怖ろしいもの。淡いふじ色に今流行の柄を染め出した一越の訪問着を着て白地に銀と黄の市松模様の帯も高々に、それでただ身振りをせよと宣まわられちやあ、ちと酷じやないのかい——。

「まあ黙って彼女の妖艶な肉体美を観るんだよ。ハイッ、こちら、あなたの頭にカラスが二、三羽とまりましたよ

〈歩けないのか山田の……

そう上半身をゆすぶって腰から下をクニヤクニヤさせて、うまい！いい案配にカラスは飛び立ちました。何んだ今度は犬公か、しかも山犬だ驚きましたね、あなたのそばへ怖しく牙を出して吠えて来ましたよ。しかし大丈夫、何のこれしき、足元に転ってる棒を足先きでゴロゴロ転ろばせて、いや足袋の先へはさんで持ち上げてうんと身構えて下さい！時にはキッと力んで空のカラスも睨んで下さいよ。もっと脚が拡がりませんか？」

「オイオイ、演出するのもいいが操つり人形じやないんだよ。ひとみ君に自由に踊らしたらどうだ？見ろ！谷口の野郎、君が舞台をアチコチするもんだからブープー云ってるぜ。奴さん、さいぜんからカメラを構えてるじやないか……」

「かかしは男のお百姓さんだから男になったつもりで——いいですね。あとはお委せします……」

テンで川辺居士幕間に飛び込んだ。要するに田んぼの案山子なんだから、そのつもりでと、ひとみ嬢は面白おかしく踊り出す。とんとんとんと片足でつま立ちながら片足を膝の処まで上げてクルリと廻る。後手に縛られたあたりは例の川辺が念入りに手首の紐を本縛りに肉に喰い込ましてちゝ酷い仕業だが、足先を降ろすと、パッと両の脚を開いてカラスを見上げる。朱の縮緬物の長襦袢に絹物光りするデシンまがいの赤の裾除けがからんで、かぶりつきならぬ香水とお化粧の匂いは流石は踊りの女性——と云ううちに閃光を放つ奴が出て来た……。初鼻からの私演は仲々の盛況だ。

「じや——ねえカラスもワン公もみんな逃げちやった。お代りに昔の十円札、いや猪がワンサやって来た！」

い図

…また出て来やがった。一杯ひっかけたような赤鼻をこずり上げながら川辺の奴、

「鍾馗様！お鍾馗さまになるんですぞ」と転ってる今一本の白木の棒（それも三角柱に似ている）を、ひとみ嬢の裏に廻ってX型に挿し通した。たださえ紐や帯で締めつけられた女の身に、もう一本突込むんだからいとも可哀そうな話。これじゃいくら中国渡来の魔除けの神さま、お鍾馗さまも堪ったもんじゃない。〝花冠〟に結んだ帯の上半身をこごめて棒を通すひとみ嬢も顔をゆがめての苦悶振り。抜ける抜けないでひざ小僧の裾が震えている。飛んだ責折檻だ。

「さあ、通りました、挿し込み終り。さあ正面向いて、お鍾馗さまだぞ、猪めら、それッ退れ、とっとと逃げ失せろ、消え失せろ！そこで最後にホホホのフフフで——御愛嬌に両股を開いて、笑って見て下さい。

そうです。ハイ、どうも御苦労さまでした。題して山田の案山子、踊るは名花ひとみ嬢、

ろ図

一分間の幕間を頂きまあーす……」で一応縛られた案山子（い図）なるものが終了したのである。

化粧部屋（と云っても女中部屋らしいが）を見ると次の出を待つ琴江嬢が裾を捲くられてふくら脛の上まで真白にお白粉を塗られている。

「その腰巻につきませんか？」と尋ねたら年配の仕度女史が「大丈夫ですの、乾きが早いんですから……」と澄まし顔だ。

「ええ…と、第二場は切支丹教徒の受難踊りであります。御承知の通り九州は島原の——いいですか？前説明は。それじゃ、ブラックメンお二人に出て頂いての結城孫三郎の弟子のまた弟子による人形操つりの巻、さあ、どうぞ……」

成程、今度は本衣裳まがいの古典物を召していらっしゃる。適当に渡りをつけて借りて来たらしい頭のカツラ、きらきら光るかんざしが場違いに綺麗である。裾をからげて後手に縛られピンクの無地の長繻袢を出したまま、トットット黒衣氏に小突かれて舞台の中央へ。

「ここであの——浄瑠璃と合せて所作事になるんですが……」

「いいよ、もう判ってる。註釈無用、規定方針通り実施！」と労働組合言葉が観覧席から出て大笑い、こいつアブ組合の書記長かも知れない。

三人のうちで一番年も若いせいか胸と帯にひっかけた二巻きの荒縄は（古いささくれたものでない処を見ると特別調製か？）痛々しく小脂りの身体に喰い込んで

「さあ、さあ、それなる踏み絵を思い切って踏むか踏めないか。もう一寸足先を出して見ろ！ぐっと絵板の真ん中を踏みつける。つければよし、踏めないとあらば即刻磔だ。どうじゃ、どうじゃ……で自然と吟味場の踊りに

なって下さい。前へ行っては思い直し、後へ下っては小突れ押され、右足元左足元力なくよろめいて――」

「講釈はそれでいいぞ、あとは委せろよキリシタン嬢頑張れ！」の声援でお琴さんクスリの忍び笑いが顔に出た。

ろ図は吟味の最中〝思い切って踏め！〟と後に女の身体を曳いては、また前へ押しやる哀れな姿を操つり振りよろしく繰り返えす処なんだが、それッと黒人氏が琴江君の身体を離すとそのまま踊りになると云う寸法である。

そそくさと小走りに踏絵のそばへ行っては膝まずいてじっと見る瞳、ハッと思入れよろしく後手を見せて空を仰ぐ慟哭、踊り歩く毎に曳きずられる荒縄の縄尻――を

「さあ、どうじや娘御、所詮踏めぬとあらば是非もない。その身お改めの上即刻柱じや、磔じや。この帯を解いて湯文字一つになるかこのままお赦し放免か、いずれか、いずれ、二つに一つ、さあ、さあ、さあ――との定め付けの一番で踏み押さえて今一段と詮議する御同役、こいつはどうでも湯文字一つの磔縛り……に。」

「待った、待った、まだ早えぞ！もうちっと吟味して見ろヤーイー」はいけません。

黒人共も馬鹿だよ、折角真白に塗ったくった琴江嬢の足先を見忘れている。本当に女が踏んだかどうかは、長襦袢から湯文字を捲くり上げてから踏ませば裁判がすぐつくじやねえか――と来るが一寸しんみりした受難舞踊は可憐な琴江嬢の熱演で幕となった。

さて競演ラストは年配？者、脂の乗り切った、花ならば白蓮か牡丹に類する多喜子女史（女史は可哀いそうだ）時代を今風ながら半世紀戻しての潮干狩とは川辺の奴また考えやがった。筋のない筋とはこうである――。

おー、深水描く美しき潮干狩かな、空は霞み潮干いてどっと繰り出す綺麗どこアレそこに蟹が……アラ大きな蛤よ、お姉さまお尻の下にこんな蜆がかたまってるわ……テナ事で裳裾からげての大狩小狩。

その――うちに…合の手は本日は休演か、一天俄かにかき曇っての空模様、あーら大変！いつの間にやらぐるりと潮満ちての蒼海とはなりにけり。

岸に避難は無用ぞえ、さりとてこのまま龍宮詣では、なお酷と……ええ、そんならいっそのこと――どうなさいます？そうじやそうじやと工面はおろか、救いの手すら渡されませぬぞえ……。

「そこで、いいですか、大潮さまの捕虜となるんです。まあ悪玉にとっつかまったと思って下さい。オイッ、君！助演者は、そのおお潮柱を持つんだよ。多喜嬢の縄尻がくくってある、たるまんように――引張ってな。で……多喜子さんは兼ねて怨みの蜆や蛤がこの

仇打たんと、まといつく、そのからげた長繻袢からお腰の裾を右左前後よろしく振るうんです。蛤は取り分けしつこいですよ。ハイッ処が残念、蟹の精が乗り移っちゃいました。しかも雄蟹です。つまり野郎蟹。もう姿は女でも蟹になり切らなければなりません。横に横にと横滑り歩き、そうそうそう……。ふん張って思い切りふん張って……」

といつの間にか女史を後手に縛り上げた紐に手を添えて川辺師匠、大張切りに蟹だ、蟹だ、と音頭を取っている。蟹殿にさせられた多喜子女史も白いももあらわにトントントンと右にいざっては顔を振り、左に飛んでは爪ならぬ縛られた両肩をピクピク上下、もともと色が白いから胴裏、裾廻しの朱色に緋色の縮緬蹴出しの鮮やかさ。谷口カメラマンが熱狂するのも無理もない。

「いいとこ、うまいぞ、いや失礼、お上手」って女剣劇じゃないだぞ。

男の心理から云うと、およそ女体にからみつく衣裳のチラリズムはいいに定まってる。洋舞にせよ、日本舞踊に、このおチラさんがなければ半減ものだが、本日特別私演の娘さんは別として、舞台一面、真赤なお腰一つのストリッパーの総踊りは、それはそれなりに妖艶さをただよわせているものだが、白い肉体を持つ女性の特典に相違ない。

「おい、牧、幕を持って呉れッ。本日の千秋

私のアイデア

磔縛り七態

奈加多須磨尾

くだらない事を、何時も考えている男の案。奈加多須磨尾、いったい何と読むんだいこのネームは？「ナカタスマオ」と読みますから変った名前だと御記憶願います。変っているのは名前ばかりじゃあ有りません。極めて幼稚な智能程度のくせに、人一倍残忍な根性を持った醜い男です。大好物は花恥しい娘達を磔に縛って楽しむこと。ああ、こう書いている間に血が猛って来たようだ。早速に本題へ入ります。

例によって例のごとく磔刑のアイデアを七種ばかり。最初の四種は時代物で、ねらいを残虐な処刑にかけた刑罰の図。後の三種は、おもむきを変えて現代物から同じ磔縛りで責めの型。いずれ自己の満足の代物ですが、磔マニヤの方々だったら、きっとこれだけの説明で空想をたくましゆう願えることでしょう。勿論、どなたかの筆に乗って図形にあらわれることは提案者の本懐とするところ。念のためにモデルの顔をあげておきます。

【時代モノ】

①姫君の磔＝落城の憤煙まだ消えやらぬ城内の庭にて、正面に一段高く座席をもうけ敵将達が勝戦の酒宴をはっている。その前で、肴に供される姫君は、年頃十八、九才覚悟の白帷衣にて十字の磔柱に縛られた側面の姿。ザンバラの長い黒髪を風になびかせて、顔は真直におこし、眼はみひらき、唇をキュッとしめている。左右水平に拡げた両手は手首、肱のあたり、二の腕の三カ所を横木に縛り、縦の柱にはキチンと揃えた素足の足首、膝頭、太ももの三カ所を縛って胴には縄目をかけていない。そのかわり白帷子は腋下から腰のあたりまで縦に引裂き、それを体の前で束ねているため姫の白磁の乳房、脇腹、下腹部近くまで露出した恥しい姿になっている。いましも雑兵の槍が姫の脇腹へくり出されようとしているが、姫は塑像のごとく身動一つせずに成行を待っている。雄々しくもまた美しく、悲惨な光景である。モデルの顔は、大川恵子（東映）に似せてもらいたい。

②女隠密の磔＝竹矢来にかこまれた川原の刑場。捕われた女隠密が逆磔の極刑にされている。斜め前方からの姿。白木十字型の

楽だ。ハイッ多喜さん両脚をふん張ったまま赤い襷を振って、

〜おお潮だおお潮だ、仇打った俺等の勝ち大蟹さまのお通りじや——撮るなら今だよ——トットットッ、ハイ、あちらへ、トットットッと、またこちらへ……ハイ、そのまま幕に飛び込んで下さい。おいッ幕を曳いた——」

演って見れば馬鹿見たいなもの、撮って引伸したって、ろくなモチーフにはならんだろう。が——そこは同好仲間である。何処かにいい意味のセンターが狂ってるんだから終演批評は相当なもんである。

高尚なものを観賞させねえのか、明鳥の浦里の鈴ケ森行だの、お七の潮干狩だの、は図なら何も柱を背負わずに刀を持たせろ、女剣劇踊りでいいじやないかと、うるさいことは覚悟の上だから

「じやねえ、今度から脚本募集だ。ただし再上演を許さず、場合によっちやストリップも妨たげない。その事の由をお嬢達に云いふくめるであろう」と殿様めいて川辺師匠、一段と誇らしげに一同の面々を見渡した次第である——。

愚や愚や汝を如何んせん、きらめく衣裳が仇となり、よしみに落ちた同じ穴、忙中閑の読本のおあとは、いずれ改めて——。題して縛り舞踊の巻、お退屈さま。（この項終り）

磔柱に薄灰色の囚衣をきた二十六、七の年増女が足を上、頭を下にした縛り、キッチリ揃えた足首、膝頭、腰、胴を縦柱に縛り両手は横木に手首、肱のあたりを縛られ胸に縄目なし。眼を閉じ口をつむって観念した顔。束髪は長々とたれ下っている。ややはだかった胸から乳房がのぞいて艶をふくんでいる。さも憎々しげに見あげている刑吏達は、この重罪人を一おもいに殺さず、時間をかけて苦しめようと手裏剣磔（吉川英治作〝隠密七生記〟参照）の趣向。彼方から腕におぼえの若侍数人のくり出す手裏剣は、すでに囚衣のところどころを紅にそめている。気丈な女隠密は苦痛のいろも示さず、この惨刑にあまんじている。モデルの顔は日比野恵子（新東宝）に似せてもらいたい。

③女武者の磔＝定紋を染抜いた敵陣の幔幕の中。捕えられた二十才ばかりの女武者が前髪だちの男装をはぎとられ、腰にわずかに白い褌一つの姿にて、白木キの字型磔柱に大の字縛のハリツケ。斜め前方より描いて、両手は手首、二の腕を横木に縛られ、胸は肩から腋下へX型にタスキに縛ってある。左右にグッと一杯に開かされた両足は足首を縛り、腹部には縄目なし。その何の覆いもない鳩尾のあたりへ、敵将のくり出した槍が柄も貫けとばかりに突き刺っている。舌を噛みきらぬよう猿ぐつわされた顔は眼をカッとみ開き、ややのけぞり加減。傷口からしたたる血潮が臍のあたりまで紅に染めて凄惨な姿である。モデルの顔は、近藤美恵子（大映）に似せていただきたい。

④野性の女の磔＝袖なしの胴衣に腰巻姿といういたって軽装の野性の十八、九の娘、髪は長くたらしたカリプソ型。仲間の私刑で丸太棒を無雑作に十字型に組んだ磔柱に縛られて、これから火焙りの刑が執行されようとしている。文字通り雁字搦目に両腕を横木へ、手首、肱のあたり、二の腕と三カ所、縦木には腋下と乳房の下と胸を三カ所、臍上のくびれのあたり、腰部、太ももの膝頭、足首と総合計で十カ所もぐる〳〵と巻かれている。あらわな胴衣の胸もとに上下から締め出された豊かな乳房がのぞいている。水平に開いた両腋に腋毛のみえるもよし。これを正面より描いて、まだ足もとに山積みされた薪束に火がつけられていないが、さすがの山の娘もこの残酷な刑罰には、悲しげな顔で絶叫している。いさいかまわず仲間達の酒宴たけなわ。いましも磔娘と同年配の娘が心持よげな顔で松脂の火をふりかざしている。モデルは、北原三枝（日活）に似せてもらいたい。

（続）

縄恋草紙

海野築朗

時は、元祿と云う頽廃の時代も過ぎたとはいえ、享保三年の秋。江戸文化もいまや爛熟期。

吉野は、両国河岸の廻漕問屋河総の一人娘で、浮世絵にまでなったと云う評判の器量良しだったが、あまりの美しさに、やや親や本人の自尊心が禍して、選り好みするうちに二十一の秋を迎えていたのだ。

その吉野が、白昼の衆目環視の、浅草雷門の境内からさらわれたのだから、観音様にお詣りの善男善女は、もう煮えくり返る騒ぎだった。ここで、絵草紙や、芝居で見る様な、二枚目の若侍が出てくれれば大衆小説の筋書としては良いんだが、現実はそうはいかない。

さらわれた美女

「あッー。」

と、云う間もなかった。

濡れ手拭が、ピタッと唇をふさいだのである。

はじめての経験であったが、吉野には、それが猿ぐつわと云うものである事は判った。

（助けてー）

果して、必死に叫んだ声も出ない。

その息苦しさと、そら恐ろしさに身跪えすれば、忽ち両腕は後へ捻じ上げられ、ふくよかな胸を廻って縄がキリキリと絡みついてくる。

おまけに相手が悪い。

いずれ相手は、どこその悪旗本が、組んでやった仕事だろうが、吉野を横抱きにした深編笠。それを護る様に取り囲んだ、これも深編笠の武士が三人、本気で白刃を振り廻せばと思えば、美女の運命を気遣い乍らも、命を投げ出して追いすがる勇者もなかった——

落花狼籍

かねて用意の駕籠で、とある屋敷に担ぎ込まれ、奥座敷の畳の上に転がされた吉野は、身も世にあらぬ思いだった。

「吉野。驚いたか、」

淫らな笑いを青髭の頬に浮かべて、深編笠

をとった男は、前々から吉野の美貌に目を付け、人橋かけて奉公に上らぬかと、執拗に申込んでいた安祥旗本で、二千石の高祿を食む大河内主膳だった。

吉野の父が、なんとか穏便に、その申込みを断るのに大骨を折った相手だった。

「つい手荒な事をして仕舞ったが、身共とて身分も名もあるれっきとした旗本だ。お前を手籠めにして突っ放す積りではないぞゆくゆくは然るべき仮親を立てて宿の妻にする所存じゃ。どうだ吉野、斯くまで思い詰めた男は、満更憎いものではあるまい。」

と、丸い顎へ手を掛けて、型通り凝っと見入れば、巾広い猿轡の下から、僅かに残された黒い瞳が、恐怖と混迷に大きく見開いて必死の険を籠めている。

「フフフ、折角のお前のその美しい顔が猿ぐつわで拝めぬが、その手拭は、滅多にはとれぬぞ。屋敷の外には、問屋の手代や、出入りの鳶職共が、うろうろしているから喃、それに美女の猿ぐつわとは、又、乙なものじゃ、フフフ、」

などと、勝手な熱を吹いて、眼は、乱れた襟元から、くびれた腰、腰から裾へと舐める様に這い下る。

（いや、いやです）

吉野は、せい一杯、不自由な身体を捻じって、少しでも主膳の眼から遠ざかろうとする

が、その度に二枚重ねの振袖の裳は、益々割れて、緋鹿の子の長襦袢の裾や、真紅の腰のものが、白い脛にからまるばかり……。

その妖しい迄の艶かしさに、主膳は鼻を鳴らした様子――「う、う――」

猿ぐつわの下から、吉野の呻きが洩れた。

主膳が、突然、吉野を抱き起すと、その襟元から手を滑り込まそうとしたからだ。
ジワジワ、首筋の肌を、脂ぎった男の掌が虫のように這って、ふっくらとした胸元へ迫ってくる。
（いや、いや！たすけて！そのようなッ！）
必死に身をのぞけって、叫んでも、いたずらに不明瞭な呻きが猿ぐつわから洩れるばかりだった。
「これ、おとなしくせぬか。宿の妻にすると申して居るではないか……」
主膳の顔は、醜く引歪んでいる。
「フフフ、こ、これが女の帯と云うものか、……」
妙に上ずった声と共に、吉野の体から、紅地に黒の昼夜帯が、絹地の触れあう音を残して、蛇の様にくねくねと畳の上にほどけて落ちた。
「う！う！」
あらん限りの全身の力を込めて、身をあがくが乱れた裾は、その度に男心をそそる花模様を描くばかりだった。
「さあ、おとなしくせぬか、どのみち、身共の妻になれば、毎夜、このようにされるお前だ、おとなしうせい……」
次々と、乱暴な手が、吉野の体についている紐を解きほぐして、その度に、はなやかな色彩と香ぐわしい匂いが、畳の上に撒き散っていった。
ビリビリ――
と、絹が裂けた。
縛しめの縄の下から、色とりどりの衣類が無理矢理に剝がれていく。
「うーッ。」
やがて、吉野の絶望の悲鳴が洩れた。
緋鹿の子の長襦袢も引きはだけられ、上半身が露わになったのだ。
盛り上った白桃の様な乳房を隠すすべもなく、思わず、うつぶせになる吉野の身体を、邪慳に主膳の手が、荒々しく引起した。
そしてゆるんだ縛しめを、再び、素肌に、――捻じ上げられた手首に――しっかりと搦めつけてキュッと括り上げると、膚に乳房に喰い込む縄目の痛さに吉野は今にも悶絶せんばかりである。
「フフフ、たまらぬ眺めじゃ……」
喘ぐ様な声。血走った眼。
主膳は、ゴクッと喉を鳴らした。
「どうじや、もういい加減に観念して、身共の情に従うか？」
白い胸に喰い込む縄目に身をよじらせながら
「う、うッ」
と、尚も強情に首を振る吉野。
島田の髷もがっくり、鬢はほつれて、長い睫毛を堅く閉じて必死にこらえている。
「まだ、うんと云わぬか、強情な女め、」
然し、主膳の声は楽しそうだった。

女体開眼

檜造りの広々とした風呂。
今、吉野は、裸身をこんこんと溢れる湯に埋めて、自分自身どうなったのか……ただ茫然としていた。
透き通る様に白く、豊かに肉づいて伸び切った四肢。
解いた黒髪は、肩に乱れて艶やかだった。
（あ、私はどうしたんだろう……）
頭が混濁している。
つい、先刻の事が思い出された。
あの、奥座敷での事が……。
――はじめての経験が吉野の身体を襲った。
混濁とした意識の中で、吉野は、何故、自分は、この屋敷を今逃げ出さないのだろうと、思った。
それを思い出すと
「ああ、」
吉野は、やる瀬なくホッと息を吐いた。悲しみの中に、甘い疼きがあるのだ――
「お召替えを……」
侍女が待っている。
夢うつつの間に、艶かしい緋縮緬の湯文字が腰に巻かれ、華やかな長襦袢が肩にかかり

扱帯が衣摺れの音を立てる。
一人が髪をとり上げ、一人が顔を刷く。
そして、手をとって連れていく。
吉野を待っていたのは、絹行燈に明々と照らし出された部屋である。
友禅の夜具、そして極彩色の屏風。
そして、眼を細くしている、脂切った大河内主膳の顔であった。
吉野は、その側へ坐らされた。
侍女が去ると、主膳の顔はとたんにほころびた。
「おう一段と美しいぞ。身共をいたわってくれれば、必ず悪い様にはせぬ。妻として生涯の寵愛を約束するぞ……」
主膳は、湯上りの肌の匂いと、長襦袢に炊き込められた伽羅の香りを、鼻一杯に吸い込んだ。
手を伸ばして羽二重の様な、吉野の手首をむずと摑んだ。
「あッ！」
思わず、吉野は声を上げて、つと身を退こうとした。
「なぜだ、まだ嫌いか？」
さっと主膳の顔から、笑いの影が消えて、こめかみのあたりへ血管が太く隆起してくるのだ。
「吉野、その化粧は誰の為にしたのだ。身共の為ではないのか……」
主膳の手は、引こうとする吉野の手首を摑んだまま、ずるずると引き寄せていた。
「あ、あれ！」
長襦袢の裾が割れて、膝小僧が主膳の膝の上に引き上げられた。
「な、何を遊ばします。あれッー」
忍びやかであった吉野の声が、突然、悲鳴に変って高くなったが、それも一声だった。
又、猿ぐつわを嵌められたのだ。あがく手には縄——
長襦袢の裾は、押しひろげられ、白い脛は緋縮緬の湯文字を伴って宙に躍った。
又、絹の裂ける音がした。

逃げた女

吉野はソッと友禅の布団より起き上った。
身も骨も、粉になる様な激しい責折檻を思い出すと、まだ軽い眩暈がするのだった。
見ると、自分の横に、白い歯を醜く開いて他愛なく眠りこけている主膳の姿。
思わず、嘔吐を催す様な気持になって、フラフラと立上ると、手早く辺りに散っている着物を身に着けた。
幸い軽い衣摺れの音などに、眼を覚ましそうもない主膳だ。
（逃げるなら今……）
吉野は、襖を開けると、其儘縁側から雨戸を開けて外へ——夢遊病者の様に飛び出して行った。
「おう、お嬢様」
闇の中から、走りよって来たのは、手代の吉松と、出入りの駕職共だった。
吉野が、主膳の座敷に担ぎ込まれたらしいと知って、一日中、此の屋敷の外を、うろうろしていたのだ。
数日後、訴えにより、主膳は江戸追放を仰せつかった。吉野誘拐に加担した仲間も、それぞれ相応の処罰を受けた。いかに風紀頽廃した世の中でも、天下の直参旗本が、町家の娘を手籠めにして、その儘で済まされる訳はない。
勿論、此の事件は瓦版となって、江戸中に拡がった。
然し、傷ものになったとは云え、吉野はあまりにも美し過ぎた。
輝くばかりの容貌。成熟し切った四肢・脂の乗りようから、香ばしい体臭までも男にとっては限りない魅力であった。
人の噂も七十五日——
そろそろほとぼりがさめかけて梅の花もチラチラほころびる頃、吉野は縁ずいた。
日本橋の呉服屋の一人息子世之助の所だった。色の生白い、見るからに弱々しそうな男だったが、吉野の両親は、こ躍りせんばかりに喜んで、贅を凝らした嫁入道具と共に嫁がせたのだった。

遠山霞の行燈の灯が、チロチロと夢の様に這う初夜の床の中で、世之助は吉野の手をそッと握った。

「ああ、やっと吉野様は私のものになった……」

吐息にも似たひめやかな声で囁くと、おずおずと、身体をすり寄せて来た世之助だった。

それは何という弱々しい愛情であったろうか、

一度、主膳の屋敷で受けた嵐のような洗礼を思うと吉野には余りにも腑甲斐なく思われるのであった。

その腑甲斐ない夜が幾つか続いた。

昼は、人目も羨む程の仲であったが…。

蘇返った恋

吉野はふと眼を覚ました。

春雨の降りしきる夜。何か、甘美な夢から揺り起された心持だった。

（夢だったのか……）

自分の全身が荒縄によって雁字搦目に縛りつけられ、のたうち回っている夢だった。

あの忌わしかった主膳の屋敷での一夜が斯くも、甘く痺れて蘇返ってくるとは、どういう訳だろう。

我にもあらず、少し汗ばんだ双腕を浅く抜いて、絹夜具の上へ投げても、傍の世之助は正体ない有様。

そのだらしなくあかれた口許を見ると、過し夜の満たされぬ思いに何とも云えぬ嫌悪と憤怒が吉野の胸にこみ上げてくるのだった。

と、誰か人の気配――。

漠然と物思いに沈んでいた気持が、一瞬冴えて、胸の鼓動が高鳴った。

片肱を枕に突いて、気配のある方をきっと

見ると、二枚折屏風の影から、覆面の武士が凝っと此方を見詰めているのだ。
「あれッ！」
思わず、出た悲鳴に、飛起きた世之助も、身を顫わせて
「だ、誰だい！」
と、せい一ぱいの口を切った。
「騒ぐなッ」
凄味のある声。
蒼白くギラリと光った白刃が、行燈の灯を受けて無気味に近寄ると、それがサッと世之助の肩へ落ちて、にぶい音がした。
「あッ！」
はじかれた様に世之助ははね起きたが、すぐ、くたくたッと夜具の上に崩折れた。
血が流れないのは峯打だろう。
覆面は、無言の儘白刃をおさめると、恐怖にわなないている吉野を見据えた。
燃える様な紅の長襦袢に浅黄縮緬のしごきを前結びにした寝乱れ姿。
「吉野、逢いたかったぞ、」
「あッ」
その声、その眼は忘れもせぬ大河内主膳だ。
「江戸追放の旅の空で、余計にお前の事が思い出されてな、今一度逢いにきたのだ」
と、懐中から出したのは手拭と小布れだ。
「たかが町娘の貞操と、二千石の家をとり替えた、とんだ心中者だ。さあ口を開けろ」
「な、何をなさいます」
と抗う吉野。
夢中で、かぶりを振ったが、何んの苦もなく猿ぐつわが頬に喰い込んだ。
「次は、その手だ。その手を背中へ廻すんだ……」
乱れた長襦袢の裾を押える吉野の手を、ぐいぐいと、捻じ上げると、これも用意の細縄が、犇々と搦みついた。
「う、う、う、う、」
猿ぐつわからの呻き声は、絶え入る様であった。しかし、それは、被虐に目覚めた吉野の声でもあった。
一刻後——
主膳はものうげに立上った。
縛しめの縄と、猿ぐつわの手拭を懐中に仕舞うと
「またいつか、参るぞ」
吉野を、一べつすると、そのまま去ろうとした。
と、
「待って！」
思いつめた声が、吉野の唇から漏れた。
不思議な力に引摺られて行く、女心の神秘と云おうか、女体のかなしさと云うか、それとも縄の楽しさか……。
暁けの護持院の鐘が響く中を手に手をとって、春雨に煙る日本橋を駆け去っていく一組の男女があった。
それは恋に生き、縄の喜びを知った吉野と、主膳であった。
（完）

◆新版マゾフォト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮影した本格的なマゾフォト。

第一組　凌辱篇　大中判印画紙焼付、五枚一組　七百円　（略号　ま1）

第二組　屈伏篇　大中判印画紙焼付　五枚一組　七百円　（略号　ま2）

第一組、第二組共、いずれも特に春日ルミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、第一組（凌辱篇）では足を舐めさせられたり、足で踏みつけられたり、足を洗わせられたり、大の男が精神的に凌辱させられているポーズ、或は後手猿轡に苛められているもの等を選びました。第二組（屈伏篇）では、尻の下敷になって屈伏している奴隷の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の上に尻を乗せられているもの等に狙いをつけて選んでみました。（都合により第二組屈伏篇の分譲を中止します）

マゾヒズムへのいざない（第七回）

黒田史郎

新宿二丁目の青線に、小町園という店、それにさくらという店がある。小町園には「栄子さん」という三十位のしっとり落着いた女がいて親切だ。マゾへの理解もよく行届き仰々しく、がさつなサドぶりは発揮しないが、清潔で我々フアンには喜ばれる相手だと思う。「さくら」には、千代さんという子、これは二十四才位のすこしオキヤンだが、痴人の愛の「なおみ」くらいの魅力は具えている。足なめフアンにいい相手で、洗顔した後のミルクを飲むこと位平気で命令する。もう一人、同じく新宿だが、花園神社傍の赤線「いろは」という店の由美子という女、昭和十二年生れで一番若い。最近までヌードモデルをしていたらしく、挽歌スタイルの一寸した小妖婦だ。あたしはすこし残忍性があるの、と御本人仰言る。彼女の平手打が三人のうちで一番こたえる。

とにかく、三人とも三様の持味で、一寸したマスクの所有者であることと合せ、マゾフアンの方達への御参考にでもなればと御紹介した次第。

原忠正氏が二月号の『芸術時評』で「ヤプー」をとりあげられ、「東方見聞録」を引合いに出して今世紀最大の作品であると讃えておられたのは誠に時宜を得た言葉であると首肯する。「家畜人ヤプー」のその妖異な構想とその拡がりは、けだし未曽有のものであり元祖マゾッホを片隅に押しやって、マゾの正統まさにここにこそありとばかり、たからかにうたいあげたこの壮大な交響詩について人皆只暗然と声を呑むばかりで、やっと二月号において原氏のこのような発言を見たのは、寧ろおそきに失した感さえ抱かせられるのである。

説明のつかない衝動に苦しめられてきたマゾヒストの人達に、その衝動の微細な襞の一つ一つにまで思索の手をのばし、このような明快な輪郭のもとに、その極点を形象化し得たということは、おそらく絶後のものであろうと私は確信する。マゾヒズムというものの行きつくところ、色情とか肉感とかを越えた地点、形象化に成功することによって逆に象徴化されたイース国の諸制度のなかにすべて解消昇華されてしまったのではないかと。

マゾヒストと自称する人達に、子供があったとすると私は失望する。マゾヒストは不能者であるにちがいないからだ。それを営むとき、それはマゾの堕落である。根本的にはマゾも一種の性の変型であるにちがいないが、その意識の発展過程に於て、既にマゾは性の引力圏を飛び出してしまった。マゾは異端の子である。正常をてらうことによって陥る深みこそ最も警戒せねばならぬところのものであろう。

私はその点、いわゆるお色気の全くない「家畜人ヤプー」に不満はない。そういう意味での肉感とマゾヒズムは既に関係がなくなってしまっている筈なんだ。肉感もなにもかも雲散霧消せしめてしまうほどの強大な制度のなかにこそ、始めてマゾヒズムを生かし得るからだ。

それでいながら、しかも私はイース国の人物が非肉感的であることに不満を感じる。というより残念だと思う。マゾヒスティックな感興をそそられることにかけては数等上であるにもかかわらず、私は「ヤプー」より「手帖」の方がすぐれていると思う。批判の次元が両者においては違うのかもしれぬが、「手帖」に引用される何気なしの人物や言葉は実に肉感的であることは否めない。肉感という言葉を生命という風におきかえてみよう。イース人の人物に生命感が欠けるのを残念に思うのは、「家畜ヤプー」の意味するものを大いにたかく評するが為である。頼みのつなとするものはクララとリンである。完全に図式化されたイース国の大模様のなかで、生命らしき片鱗をみせるのはクララとリンである。願わくば、両者を一つの突破口として、目もあやな生き生きとしたイース国の大展望の今後ひらかれんことを誰よりも強く期待するものである。

もう一つふれてみたい。「毛皮を着たヴィナス」の治洲訳と佐藤訳の優劣をめぐっての沼氏及び麻生氏の発言である。私は私なりの感想を一言、といっても私は治洲嘉明氏の訳しか読んでいないので資格にかけるのだが、それだけの手がかりなりにも、やはり一言申し述べてみたいので……。二月号の麻生氏の生活と意見（五）主旨に大体賛成です。麻生氏が、日頃尊敬する沼氏に、ためらいがちでも、やっとこれだけの自分としての意見を開陳したことは、余程の勇気を要したことと思う。ちらちらと遠慮がちに沼先輩の目許をうかがいながら、でも、私は、というふうに半ばビクビクしながら、しかしはっきりと自分の所信に筋目を通そうとしたのは見ていて気持がよいものだと思う。治洲氏の訳で私が「ヴィナス」を読んだときは、その文章のキメの荒さがどうにも気になり、もっと書きようがあったろうものにと当時思ったことがあったので、麻生氏もおそらく私と同じように思ったのだなと推察したまでで、その上の感興は別にない。沼氏が学徒出陣でフイリッピンに渡り、その地の司令官夫人からマゾヒストとしての洗礼を受けたという一事は、もはや私共の間では一つの伝説となるまでに行きわたっている事実だが、学徒出陣をした沼氏が、麻生氏自身が思うように親子程にも年が開こう筈はなく、せいぜい開いても十年以内の兄と弟の間位ではなかろうか。麻生氏のこの重大な誤解に沼氏もきっと苦笑なさってるにちがいなかろうが……。それに麻生氏は私ともそれほどの年代の開きはない筈で、しかも私も鷗外や漱石、或いは紫式部を昔々のお話とは思わないので。むしろ挽歌や氷壁の方が昔々のお話のように思えてならないので。

それでは又「暗い欲望」の中の一節から…

映画館の暗がりで、見知らぬ少年にお尻をかしてくれと言いよった青年の心情を誰しも理解しようとはしない。例え理解したとしても、ただケガらわしいの一言で否定しさるだけだ。そしてこのケガらわしいという一言は、紳士又は淑女であるためのとっておきの言葉でもあるのだ時機に応じて彼等は眉をひそませ、なんてケガらわしい男だろう、と肩をすくめてみせる必要がある。でなければ彼等はたちどころに正当な人間としての資格を

失うことになる。
青年の手をのがれ、一散に走り出た私の意識のなかに、しかしこうしたケガらわしさを感じることは出来なかった。私はおそらくそのとき以前から正当な人間としての資格を失ってしまっていたのだろう。私は自分のお尻という滑稽な持物を更めて確認させられただけで、それはケガらわしいというのとは余程遠い感じだった。それは人間の複雑さである。理智と本能、原始と近代、神と悪魔の相剋の場としての人間の実態である。私はその青年をさげすみなぞしなかった。むしろ私は彼をのぞんだ。のぞむ心が瞬間に私を走らせたのだ。映写幕のてりかえしにほの白く浮き出ていた青年の横顔は決してみにくくなかった。おそらくは日頃謹直な青年として誰からも認められ愛されてもいるのだろう。

神社の境内の中で私は少年の液滴を顔に浴びた。この不潔さが不潔であるほどより強く私にそれをのぞませた。私はあの時のかがやける気分の高潮を思い出す度、私の内部に生き続けるあのときの青年の息吹きを感じる。

〝トルストイの小説を読んだ者は、その肉体的感受性に変化を与えられ、ドストエフスキーの読者は、それによって精神的感受性に変化を受けて、この世界にかえってくる〟

とこれはメレジュコフスキーの言葉だがこうした大小説によって変化をうける人

責められる男性、虐められる男性十態十場面

滝れい子画「マゾヒズム画廊」〈分譲〉

大中判印画紙（タテ十八糎ヨコ十三糎）焼付　十枚一組　千二百円　略号（ろう）

意識するのであった。

三、御寮さんと丁稚

今日は籔入りで店には誰もいない。御寮さんの部屋へたった一人で呼ばれた丁稚の定吉は下帯一本の裸にされると、後手に縛り上げられて仰向けに転がされた。

「そのままで一寸待っててや」

御寮さんの派手な浴衣が美しい肩をすべって、定吉の顔にふわりと移り香が漂ってきた。

四、女学生と中学教師

「はいし、どうどう、はい、右へ廻って」

セーラー服のスカートを股のつけ根までまくり上げてストッキングも脱いで素足となった女学生悦子は美しい瞳を上げて、馬になった教師の佐島に指図するのだった。教え子の美貌に身も心もとろけてしまった佐島は馬になって部屋中を這い廻るばかりか鼻の障子に穴を開けられ、そこへ鉄環を通して引っぱられるのであった。

五、褌かつぎの受難

支那服の美女は、手にした乗馬鞭をふり

一、屋根裏の妖女

中二階の屋根は、さすがに人が住んでいるだけあって綺麗に掃除はしてあったが板敷の上に薄いゴザが一枚敷いてあるだけだった。僕は黙って巾広のゴムで胸から廻して後手に縛られ、うっとりと豊満な女の人の膝の上にもたれた。芳しい息が僕の耳もとに触れて、彼女はジットリと濡れたハンカチを僕の口に押し込もうとした。

二、黒帯と雪の足

俊介は柔道三段の猛者、今迄どんな強敵にもヒケを取らなかった菅沼道場四天王の一人である。しかし、その彼にも苦手があったのだ。それは菅沼八段の一人娘奈々子嬢である。彼は十八歳、親譲りの男勝りから女ながらも猛古着姿で道場に姿を現わすのだった。俊介は彼女の雪のように白い足を見る度に眼がくらくらして、いつも彼女のよい弄り者になるのだった。今日も又、彼女のぽってりと肉づいた白い足で口を押えられ、左手を逆にとられて「ううう…」と呻きながら美女の足下に陶酔する自分を

上げるなり**褌一丁**で後手に縛られた取てきの背中に打ち下した。背、腕、尻と忽ち血のにじんで赤黒い鞭痕が縞模様を作った。

「う、う、うう、うううう」

流石、肉体自慢の彼も、喰いしばった歯の間から呻き声を洩らした。

「殺そうとは云わないからね、せいぜい苦しんでから白状するがいいよ。その身体じや、土俵にも上れないだろうからね」

六、二号さんと重役

「こりや、禿茶瓶、私の云うことが聞けないというの、従順にしないと、このゴルフのクラブで叩きのすよ」

「その猿又はなんだね。そんなものは、とっておしまい。どうだい、私のお尻は重たいかい。しっかり這わないと、煙草のシを禿頭の上に落っことすよ」

年若い美人の二号を持ったばかりに、堂々たる体軀の重役さんも、哀れな奴隷として愛妾の云うがままになるのだった。

七、従姉と中学生

「お姉さん、苦しいよ、勘忍して！」

女子大を出て相手に選り好みしたばかりに婚期を逸した朝子は、大柄で派手な顔だちの三十娘だった。従弟の和夫の顔を巨大な尻の下に敷いて両手首を背中で縛り上げてしまった。年夫は朝子をはねのけようと一生懸命あばれ廻るが、十六貫以上もある朝子の全体重で押さえつけられては、潰された蛙のように身動きも出来なかった。年夫の目の前には、朝子の脂ぎった足の踵があった。

八、愉しい苦行

雪は次第に激しく吹きつのってきた。防寒具にリュックサック、それだけでも雪の山道を登って行くのは至難であるが、彼の首にはスポーツで鍛えた弾力のある美少女を乗せているのだ。「やっほ！やっほ！」彼は、その重味に喘いで、思わず額の汗を拭う。しかしこの難行苦行もマゾヒストの彼にとっては何ものにも替え難い愉快さでもあるのだ。

九、衣桁の陰に舞う鞭

「ああ姐御、一寸待っておくんなさい」

チャリンコの房は、手首と肘を前で合わせて縛り上げられ離れの六帖に転がされていた。姐御は衣桁に着物を脱ぎかけ派手なトキ色の長襦袢一枚に、真赤な腰巻を太腿もあらわに着こなし、房にリンチを加えるところだった。

「お前も仲間の掟ぐらい知っているだろうさあ、潔く、この鞭を受けておしまい」

姐御の白い蹠は少年の踵を踏みつけ、手にした鞭は空を切って唸り出すのだった。

十、土牢の女王とスパイ

「いくらお前がうまく変装したって、その六尺褌が日本人という、れっきとした証拠なんだよ。どうだ、スパイということを白状するか、それとも、この私の奴隷にでもなるというのかい？」

残置諜報網の一人として敵地に止まった憲兵中尉の溝川は、烱眼の女スパイにその変装を見皮られ、地下牢へ放り込まれ、六尺褌一本のまま革手錠、革紐縛りに固定されて、彼女の訊問を受けるのだった。

（以上、十ポーズ十枚）

間の多面的な肉体とそして精神の繁雑さあらゆる可能性の複雑さを私は考える。……（中略）

その日、場末の映画館だった。……（中略）

最初私は何かのはずみでそうなるようによそおいながら、椅子の肘の上の手を彼の腿の方へとすべらした。……私は出した手をひっこめ、訳もなく鼻の頭をこすったり耳たぶをいじったり、そして首筋をなでたりした。うんと息を吸い、揚句が又彼の方に手を差しのべるのである……

私はしばらくそうしていた。私の全神経は右の掌に集中されていた。……（中略……）

その血の暖かみと共に伝わってきた。私はカッと顔がホテるのを感じながら、その手をすこしずつ、すこしずつすべらした。……（中略）

少年は不意に私の方を見た。そして私の手をじっとおさえた。

ほの白い少年の顔が、ぼんやりと闇の中にういて私を見つめた。少年はだまっていた。……彼の沈黙と変に落着いたその所作は聊か不気味でさえあった。……（中略）

（未完）

彦造の家庭は、京子が寄寓するようになって、少し様子が違って来た、

京子は、数年前、彦造の弟信一郎が、瀬戸内海沿いのT町の小さな工場に勤めている頃町のお好み焼屋で知り合い、簡単に結婚した。

一、二年の間は二人共幸福に暮していたが昨年の春から信一郎は風邪が原因で床につき色々療養に手を尽したがその効もなく、年明けの或る寒い晩に、遂にこの世を去ってしまった。

それ以前に京子の両親は、彼女が結婚すると間もなく相次いで亡くなっているので、信一郎の葬式には備後と出雲の国境いに近い山の村から出て来た彦造が、ただ一人の身寄りとして世話をした。

葬らいの諸片付けが済んで、林檎箱の上に白布をかけた仮りの祭壇に安置した信一郎の小さな骨箱の前で京子は全く途方に暮れてしまった。

というのは、彼女はこれから生活をしてゆくための資金も技術もなく、あるものは信一郎の療養のために費した借金だけであったから。

「困ったこったなあ」

と彦造は太い腕を組んで考え込んだが、別に良い知慧が出る訳もなかった。そこで

「わしの家へでも来れば、食うだけ位なら何とかなるが——その代り、猿が友達のような暮しで、とても町の様な便利な訳には行かんがの」

と提言した。京子も彦造の家へ、たとえ一時的にでも身を寄せるより外、どうにも仕方がないのであった。

それから二三日の後、小払の借金は彦造が支払い、医師への治療費は事情を話して暫らく猶予して貰うように頼み、山峡を縫うて走

る汽車の人となった。

彦造の家は、広島から百キロ余りの東北に入った山峡の町の、駅から更に十キロ余り奥に入った俗称かぶと山の中腹にあった。

彦造は、妻のおたねと二人で畠をつくり、炭を焼き、鶏を飼ったりなどして、裕福とは行かないまでも、かなり気楽な生活をしていた。勿論仕事は力仕事や根気のいる仕事が多く、町で育った京子には、最初はとても耐えられぬ位の重労働と思われたが、おたねは平気で重い袋や籠を肩へ担いで畠へ行ったり来たりした。

京子が困った事は昼間の不馴れな仕事による苦労もあったが夜の数刻であった。

彦造の家は荒壁造りの二間しかない小さな家なので、彦造の部屋の物音が彼女の耳を悩ませた。といっても、京子は彦造夫婦と襖越しの部屋に寝ていたわけではない。

彦造は京子がこの家に来た翌日、囲炉裏のある板の間（普通台所に使っている）から土間を隔てた隅に、急ごしらえに座を上げて厚莚を敷き、枕屏風を立て廻して京子の寝所を造ったのである。したがって彼女の寝ている所から彦造の部屋までは一寸離れている上に家の周囲の雑木に風が吹いて木の葉が鳴る音で、あまり聞えない筈のが、兎もすると宵寝の京子のまどろみの間に、おたねの悲鳴のような、何かを訴えるような声が、断続して京子の耳を掠める事があった。

京子は毎日奥の時計が五時を打つと床から起きる。この家には電灯がないので暗がりで襦袢の上に下着を着、その上へ伴纏をきてモンペを袴く。かまどの上の提ランプに火を灯して裏へ出て深い井戸から傍の四斗樽へ水を汲み上げて米を洗う。御飯を仕掛けておいて桶風呂の水を抜いて洗い、更に新しい水を汲み込む。家の横の畠から葉ッ葉を抜いて来て味噌汁の支度をする。夜がしらじら明ける頃には表の庭へ出て二十羽程の鶏に餌をやる。そのうち、おたねと彦造が起きて来て今日の仕事の支度をする。その間に京子は家の中を掃除して庭を掃く。ざっとこれが朝飯前の仕事である。

或る朝、京子は食器の洗い物をしている時過っておたねの茶碗を割ってしまった。町ならば近所の陶器店へ走って行って四五十円も出せば簡単に買えるのだが、ここではそうは行かない。たとえマッチ一箱でも二キロも離れた麓の部落まで行かなければ買えない。茶碗は駅のある町でなければ売っていないのである。だから彦造たちは、そうした道具をとても大切にする。京子とてわざと壊したわけではないのだが、

「どうも済みません」

と早速謝ったが、傍にいたおたねは不機嫌な顔して、

「済みませんではすまないじゃないの、あたしや何で御飯を食べるんだい？」

と向きなおった。京子はおどおどしながら

「これから気をつけますから……」

というのに冠せるように

「早く洗い物を片付けておしまい。そして今夜は罰があるよ」

といって家へ入ってしまった。

京子が彦造とおたねの異常な性格を知ったのは、この夜からであった。

その晩の食事に、おたねは汁椀で飯を食った。それを見ると。京子は心が疼いた。

「片付けが済んだら、お風呂は後で良いからあちらの部屋へ来るんだよ」

おたねは、そういって一寸、彦造の顔を見た。彦造は素知らぬ顔をして漬物を嚙んでいた。しばらく経って、京子がおそるおそる彦造の部屋の襖を開けると、彦造は蒲団の中で古い講談雑誌を読んでいた。おたねはランプを引寄せて、膝の上に古い着物を拡げて縫っていたが、京子を見ると、

「襖をしめて、ここへお出で」

といいながら縫いかけの着物と針箱を部屋の隅に押しやった。そして

「ここへ来て着物をお脱ぎ」

と厳しい眼付でいった。京子は思わずビクッとなって顔を紅くした。

「何をぐずぐずしてるんだよ。裸になるのが

恥かしいのかい？　いいかい罰だよ。さア、早くおしよ」

京子はおたねの烈しい言葉に、思わず眼を瞑ってモンペの紐の結び目に手をかけた。

やがて伴纒や襦袢が京子の肩から、又モンペが彼の腰からずり落ちて、白々とした肌がランプの光に照らし出された。

おたねは京子の両腕を頭の上へ伸ばして細紐で縛ると、その鴨居に取付けてある頑丈な鐶に結い付けた。

「こんな生ッ白い躰をしていて、男と遊ぶには良いかも知らんが、山の仕事はてんで出来やしないよ」

そういいながら、おたねは針山から木綿針を持って来て、京子の乳房をつッ突いた。

「ああッ、かんにんして……もうしません……」

京子は思わず悲鳴をあげて飛び上ろうとした。そして子供がいたずらをして叱られた時のように叫んだ。身体がカーッとなって来てブル〳〵と震えた。

「おや、京さんはそんなに嬉しいのかい？それじゃアこういらは如何……」

と、今度は真上に吊り上げられて、皮膚の張り切っている腋の下へぷつ〳〵と突き立てると京子は堪らず

「ああッ、ゆるしてッ……アッ、アッ」

と泣き声をあげてたたらを踏み、全身を上下に激しく揺り動かして悶えた。

おたねは、眼を輝やかせながら容赦なく京子の腹や尻や太股へ木綿針の注射をした。痛さにバタバタする京子の脚を自分の両股で動かない様にしっかりと挟み、左手で京子の腰を固く抱きしめて、臍のまわりから腋の下へと点線を綴るように突きまくっていった。

「もう許してやれや」

何時の間にか雑誌を伏せて、揺れる灯火に照らされて針責めの苦痛に悶える京子の姿態を見凝めていた彦造が、おたねにそう言った時には、京子はもうぐったりとなって、半ば気を失いかけていた。

翌る朝、京子がいつもの様に朝の支度をしている時、起き出して来たおたねは、

「どう、昨夜はよく眠れた？」

と言ってくすッと笑った。昨夜の物に憑かれたような形相とは打って変った、柔和な田舎の女である。京子はおたねが彼女を憎んでいるのか、不幸な女といとしんでいて呉れるのか、その心理が分らなかった。

「済みません」

京子は咄嗟に又謝った。

「ふふふ、そんなに謝らなくてもいいよ。それより、今日は天気が良さそうだから、東谷の畠の、甘藷の種付けをしなくちゃならないから、食事の支度を急いでお呉れ。おや、ちよっと、こっちをお向き――」

おたねが京子の頭へ手を掛けて、ぐっと引寄せたので、京子は瞬間〝又責められる？〟とハッとなった。

「ほら、こんな所に鍋墨をつけて、せっかくの器量良しの京ちゃんの顔が台無しじゃないか」

そう言うと、おたねは自分の提げていたタオルを唇でしめして、京子の顔を抱える様にして頬に付いている汚れを拭いた。

〝こんなに優しい義姉さんが、昨夜はなぜあんなひどい事をしたんだろう？〟

京子にはそれが不思議でならなかった。

それから数日は事もなく過ぎた。

彦造は新しい畠を開墾するのだと言って毎日北の山へ分け入って行った。おたねと京子は豆畠の草を取ったり、炭俵を編んだり、野菜の手入れなど可成り忙がしい日を暮した。

或る日、

「今日は組合へ卵を持って行くから」

と彦造が云うので、おたねは木箱へ鶏卵を詰めた。京子は土間の隅に莚を敷いて炭俵を編んでいた。少し馴れてこの仕事も余り苦にならなくなっていた。

「帰りに忘れない様に黒の木綿糸を買って来て下さいよ。」

おたねの、そう云う声を後にして、大きな木箱を二つ背負った彦造は、ずん〳〵山を下って行った。彦造の姿が見えなくなると、

「京さん、ちょっとこっちへお出で」

と言って自分の居間へ入っていった。

朝の陽光が障子越しに、眩しい位部屋を明るくしていた。

「京さん、よくお聞き。あんたも信一郎さんと暮して、夫婦生活はどんなものだと分っているつもりだろうけれど、世の中にはまだまだ変った生活があるのだよ。たとえばわたしと彦造との事でもね。彦造は、女を責めて責めて責め抜くのさ、一緒になった頃は、そうでもなかった。ただ一寸、手を後にして縛ったり、わたしの肌を鉛筆の先でちょいちょいとつ突いたりして、ほんの悪戯程度だった。そして、それは私にとっても変った刺戟で後手に縛られて彦造の膝へ抱き上げられたりすると、思わず、ぞくッと身体が震えたものだよ。それが度重なってくる内に次第に刺戟が少なくなって、だんだん責め方が激しくなって来る。この間の晩は京さんも大分こたえたらしいが、私に対する彦造の責めは、まだまだあんな生やさしいものではない。ご覧よ、この天井にも柱にも、鴨井にも鉄の鐶が取付けてあるだろう。これ等はみんなわたしを責める道具なのさ。いろんな変った方法で彦造に責められて、苦しくて、身も世もない思いの中に因果と云うか、その痛さ、苦しさの底にうっとりとする気分があって、暫らく経つと自分

から責められたい気持になって来る。この間の晩、わたしがあんたを責めたのは、わたしのそうした気持を彦造が満たして呉れない時反射的に起った仕草だよ。彦造が私を責めて呉れないなら、わたしが誰かを責めてやろうそう思ったのサ。私と彦造との事は兎も角として、京さんも此所へ居る間、私は時々あんたを責めるかも知れない。いいえ、ひょっとすると、しまいには彦造があんたを責めるかも知れない。わたしやそれが心配だ。そうなれば彦造の関心が京さんに移って、私は彦造に捨てられるかも分らない。でも、もう今となっては、私は彦造の傍から離れる事はできない。私の気持を一番よく知っていて呉れる男、いいや、私を斯う云う女に仕込んだ男。私はどうしても離れない……私のこの気持分って呉れるだろう。ねえ京さん」

京子は、初めて聞くおたねの打明話に思わず息を呑んだ。そう言えば、おたねの手首や首筋に赤いあざの様な線が入っていたのを見た日もあった。夜更けの妖しい呻き声や不思議な物音も、漸やく彼女には諒解がいく様な気がした。

だが、それにしても、何と変った夫婦であろう。京子には彦造とおたねのことを想像して思わず耳朶を紅く染めたが、ふッとおたねの瞳を見て、急にギョッと身を竦めた。

おたねの眼が、まる獲物を狙う雌豹のように、じッと京子を見凝めていた。

「ああッ」

と京子が小さく叫んで、後へ退ろうとした

と殆んど同時に、ぐッとおたねの腕が伸びて京子の襟を摑んでいた。そして京子をその場へ抱えるようにして押し伏せると、その上に覆い被さる様に乗りかかって

「京さん、じッとしているんだよ。お前さんと話しているうちに、私しゃたまらなくなったんだもの」

・と小さな声で言った。

十分程の後、京子は腰巻一枚の姿でおたねの膝の上に仰向けに寝かされていた。両手は腰紐で後手に固く縛られ、盛り上った両の乳房の上と下を二本の紐がそれを挾むように緊め付けている。

「ねえ京さん、私しゃ彦造にこうして仕込まれたんだよ」そう云いながら、

おたねは京子の仰向いた顔を、右の腋で挾むようにして、衣紋竹を両手で持って京子の乳房の下に当て、身体にぴったり押し付けながらぐッと手許の方へ引くと、双つの乳首がきゆッと下方に向きを変えて、乳房は今にもはち切れるかと思われる程、緊張した。

「ああッ、く、くるしいッ、……やめて、やめて……」

京子はおたねの袖の下から、そう叫んで身をよじらせたが、それは却っておたねの妖しい情炎を掻き立たせた。

おたねは今度は京子の上体を膝から畳の上に降すと、彼女の後手を解いて、衣紋竹を首の下に通し、その手首を竹の両端にきっちりと括り付けた。そして京子の頭を両膝でぐッと押えつけて

「京さん、さア両足を踏ん張って、お尻を持ち上げるんだよ」

と言いながら、物指を胸の方から腰巻と肌

最近の時代劇の縛り映画から（承前）

嵯峨美也子

東映の作品には、ワイド映画一週年記念の大友柳太朗の「**丹下左膳**」がある。

長谷川裕見子の櫛巻お藤、**美空ひばり**の萩野、**喜多川千鶴**のお蓮と多彩な女優陣である。

ひばりの柳生源三郎の許嫁萩野は、父の弟子の峰丹波や義母のお蓮のために、かどわかされ、猿ぐつわ、後手縛りで、源三郎の人質となる。そして松島トモ子のちょび安とともに、源三郎が刀を捨てねば殺すぞと白刃を胸にさしつけられる。一寸いただけるシーンになるのでないだろう。かって花井蘭子の萩野が、柱にしばりつけられてお蓮にゴウモンされる美しいシーンを思い出す。

チョビ安のさらわれるシーンで、長谷川裕見子のお藤が猿ぐつわで、後手に縛られてもがいている。そこへ左膳がどうしたと帰ってくるのだが……。ワイド第一作「鳳城の花嫁」で縛られているのだから、縛られねばすまぬだろう。「**少年猿飛佐助**」では、**山東昭子**の百合姫、丘さとみの佐助の

姉おマアが徳川に捕えられ。十字架に縛られ火責めにあう。

東映の正月映画は、さすが時代劇の東映だけあって、縛りシーンが多かった。

まず第一陣の右太衛門の「**旗本退屈男・蛇姫屋敷**」では、近ごろ若手のピカ一の**大川恵子**の浅茅が、柳沢吉保の手の者に捕えられ、道場に引出されて、これも縛られた岩井半四郎の兄と一緒に、後手縛りで、ピシピシと竹刀で打たれる。きっちりと後手縛りに緊縛され、打たれる姿は雨に悩むカイドウの風情で大いによかった。この作品で**勝浦千浪**の葛城太夫が楽屋で縛られ、身もだえした姿を見せるが、中年女の色気を見せ、さすがに立派である。

吉川英治の「**神変麝香猫**」でも**大川恵子**の由美は天草残党のキリシタン一味のために人質となり、さらわれる。大友柳太朗の夢想小天治が救いに現われると、猿ぐつわで柱に縛られた由美の姿が見える。長い縛りシーンだった。危うく火事の中で由美は小天治に救われるが……。

千原しのぶの麝香猫のお林も捕えられるが縛り姿は見せない。**市川春代**のお林は縛られ最後に後手縛りで引かれていくよい姿を見せてくれたのだが……。

また東映の「**忍術水滸伝・稲妻小天狗**」では**浦里はるみ**の女術者雲切りおえんと阿部九州男の熊形頼豪院は珍らしい背中合せの縛り姿を見せる。稲妻通人の術のために……。

最後に、大河内伝次郎、松浦築枝、丘さとみの衛守左衛門親娘は悪人白井縫殿助のためにハリツケで処刑されようとするが、千代之助の太馬之介らに救われるが、ハリツケ姿はセイソウ味がなく一考を要する。

最近、新東宝映画に見るべきゴウモンシーンが多い。

嵐寛寿郎の初の悪役という、原田甲斐の「**危うし伊達六十二万石**」でスパイとなって入った**北沢典子**の腰元お糸が見付かり、ついに松の枝の吊し責めにあう。本当の吊し責めで、その上、棒で「白状せよ」とたたかれ、カットも長く充分たんのうさせてくれたが、吊られている北沢典子は痛かったことだろう。

吊し責の秀逸である。

また「**人形佐七捕物帖・花嫁殺人魔**」では新人の**野々村律子**のお加代と中村龍三郎の新之助が殺人のケンギで岡っ引に捕えられ「殺したことを白状せよ」と責められる。きっちりと後手縛りで緊縛され、たたかれるが、キレイな後手縛りで、グッと前へ倒れたところなどヨキものだった。

との間に突込んで、ぐっと上へ持ち上げた。

京子は踵に力を入れて、やっと尻を浮かしたが、こうした恰好では、ものの一分間も尻を畳から離している訳にはゆかなかった。

「それ、お尻を上げて、上げて……」

京子が尻を畳へ落す度に、おたねは眼を輝やかせながら、物指で京子の背中や太腿をピシ〳〵と叩いた。尻を上げ下げする度に、腰巻の裾が割れて、白い腿が脛の上まで剝き出しになったが、両腕を衣紋竹に逆手に真一文字に縛られている京子には、焦っても藻掻いても、どうする事も出来なかった。

「京さんはなか〳〵素直でかわいい子だよ、そら、もっと上げて、上げて」

障子越しの明るい陽射しの中で、赤い布と白い艶やかに緊張した肢体が、おたねの上ずった声につれて波打った。おたねの両膝に圧しつけられて、悩ましい幻想に呻きながら、息をはずませていた京子の鼻に、ぐぐッとむせるようなおたねの体臭が匂って来た。

「チーッ」

と何の鳥か、障子に影を斜めに切って飛んだ。

——未完——

× × × × × ×

アイデア

（棒を使用した女体拘束のアイデア）

久留木　栄

32年十一月号で「口責めと幾何学的図形」と題し棒を縦に使った口責めを述べたので、ここでは従来からよく行われた棒を横に使った猿轡に理屈をこじつけ、さらに棒を縦に使った猿轡と横の猿轡のやや進んだ形のものについて述べてみよう。まず棒を横に使った猿轡から

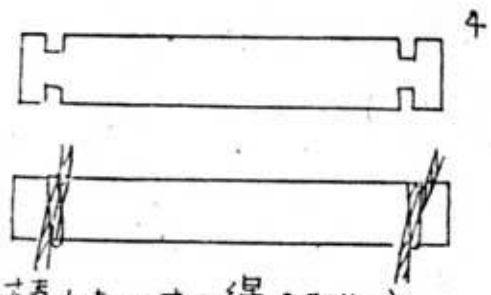
△単純な棒を横に使つた猿轡

①基本型

棒は丸棒、竹、角棒など、どれでもよいが強さからいえばカシ丸太、興味からいえば竹そして見た目の変化からいえば、不規則な曲り方をした松の枝が面白い。

棒のかけ方は、棒をかませ、棒の両端に縄をかけて後で括るだけである。図のように、①→⑤の順序でやると良い。②のように口の中に物を詰める必要はないが相手がマゾヒストである場合は好適だから、図解には入れておいた。棒には鉄など金属のパイプを使うのも新鮮味があって西洋風の猿轡ともいえる。この形は従来、警察で犯人逮捕などのときによく利用された形である。そのときは言葉を止めるというより舌を噛み切って自殺を企てる犯人の保護という意味が含まれている。

私は実際に犯人逮捕の場に出合せ、この光



棒にたいする縄のかけ方

でき上り

口をあけ物を詰める

棒をくわえさせる

景を眼のあたりに見たことがある。近所の駐在所の巡査を殺した犯人がその裏山に逃げ込んでつかまったときのことである。犯人が舌を嚙んで自殺を図ったため逮捕に向った巡査が口をこじあけて松の小枝を口に嚙ましてしまった。

その時の嚙ませ方が、この棒のかけ方であった。松の小枝には捕縄を巻きつけ、口にひどく緊縛してあったので、小枝が頬に喰いこんで顔がいびつになっていた。そして犯人は口から血を吹き出し、その血がもちろん犯人の胸やワイシャツを染め、逮捕に向った巡査の衣服を濡らしたので、非常に凄惨な感じがした。犯人の言葉は悲鳴にならずゴボゴボといった。私はそれを見たとき、極度に相手を痛める必要のない限り、これほど凄惨な棒のかけ方は必要でないのではないかと考えてみた。経験によるとこの猿轡は普通にかけても、棒の材質が固いときにはかなりの苦痛をともなうものである

②単純な繋留

このような棒のかけ方によると縦棒の人間斗鶏のように遊戯としてのバリエイションよりも、繋留（さらし責め）としての意味の方が強くなる。美女をポニイ式の馬に仕立てるさいの轡のかけ方も、この横棒のくわえさせ方の応用と考えることができるが、そのさいの本当の意義も繋留にあると思う。

横棒を使った繋留には完全繋留と不完全繋留がある。

棒が地面に平行のとき、垂直のときは図のとおりである。説明の必要もないと思うが①の棒が地面に平行のときは棒の高さによって体をのばし切ったり、かがめたりできる特色がある。②の地面に垂直の棒の場合は、繋留されるものは①よりさらに不自然な不自由な体位を要求される。従って常に体の状態は不安定で、繋留される美人の苦痛は①の場合よりさらに大きい。斜の場合や棒の形がカーブしたり不整形であったりする場合は①と②の変化した形と考えられ、ちょっとエキセントリックな魅力がある点がこの繋留のミソといえよう。

㋑完全繋留

（A）両端固定の場合

①棒が地面に平行のとき
②棒が地面に垂直のとき
③棒が地面に対し斜のとき
④棒がカーブしているときの四つの場合がある。

竹のふしまるふしを抜く

繋留用のヒモを通す

竹はヒモにそって左右に自由に動く

（B）一端固定

これは、（A）の両端固定とはほとんど同じだが（A）にくらべて、多少余計変化を持たせることができる。というのは、固定する一端が、天井であり、床である場合、繋留される美人の恰好が非常に異ってくるからである。この場合、写真撮影にあたって、棒の長さによって繋留される美人の恥らいが巧みに現わされる。

また棒の他の一端に花をさしこんだり、飾りをつけたりするのも面白い。図はパイプを使った高度の一端繋留である。床の間の「生きたアクセッサリー」、または洋間の「生きている彫刻」というところである。（やや自由のきくさらし責め）

㋺不完全繋留（やや自由のきくさらし責め）

（A）紐を使った不完全繋留

（a）紐が直線のように張り切っているとき

①棒と紐が地面に平行のとき

②棒と紐が地面に垂直のとき

③棒と紐が地面に斜めの角度をもっているとき

以上三つの場合はほとんど完全繋留の（A）の場合と変らない。しかし、紐を棒の中に通したとき被縛者の美人はヒモの長さだけ自由に歩いたり動いたりできる。紐を両端に固定したときは全く（A）と同じ完全繋留である。

ヒモを使ったときの縛り方は竹のときは図のようにする。

（b）紐がたるんでいるとき

①紐が竹などの棒の穴に通されているとき

②紐が木の棒の両端にとりつけられているとき

③紐の一端が木の一端に固定されているとき。

以上の三つにわけられ①、②はポニイ式に美人を縛ったときのクツワの代用になる。また天井に③の縄の一端を固定したと考えるとちょっと愉快な繋留方法になる。

一例をあげると図のとおりで「この馬一万円」というところ。

この繋留方法を利用した遊戯には、ヒモに重しをつないだ重量物運搬や人間馬車が考えられる。この人間馬車は昔から責めの遊戯にはつきもののようだ。

（B）紐以外の不完全繋留

これにはパイプの一端を自由に動く回転軸受けに固定したとき、パイプの一端を常に回転する回転軸に固定したときなどが考えられる。前者は一端固定繋留の不完全繋留、後者はたえず体を移動させねばならないので一見不完全繋留のようではあるが実際は厳密な意

味の、或いは広義の完全緊留を考えることができる。私はこの責めを美容病院の美容体操の一つにとりあげて書いてみた。とくに後者の責めは強制的に行う体操として面白味がある。というのは古代欧州で行われていた奴隷によるコナひきを連想させるからである。その上、この回転する軸受けの速度を変化させることによって、これに緊留された美人の体力、歩行能力、駈け足の持久力のテストができる。綿のように疲れた体を口にひきずられて走り回る姿は無残というより滑稽である。ドイツのナチ時代の拷問王シュトロハイムは捕虜を円形にしてたえず走らせたという。それにくらべると、それを機械化したこの責めは大人の遊戯というには少しハード・トレイニングの感なきにしもあらずというところ。

③複雑な緊留

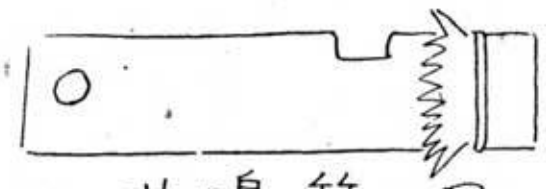
これは縦に棒を用いた責め方、その他の緊縛と併用した責め方といった方が良い。もちろん前述の単純な緊留の応用と考えることもできる。従って、ここでは一本の棒を使って多勢の人を緊留する場合や、二、三の場合を述べて、〝棒を使った猿轡を利用した緊縛法〟の項であれこれ述べてみよう。

まず一本の棒に多勢を組合せる場合、代表的なものとして、一本三人、一本四人が考えられ残りはその応用となる。また、円型なパイプを利用した場合は幾人でも自由だ。パイプの口にくわえさせ方は基本型と全く同じなので、その図は省略する。

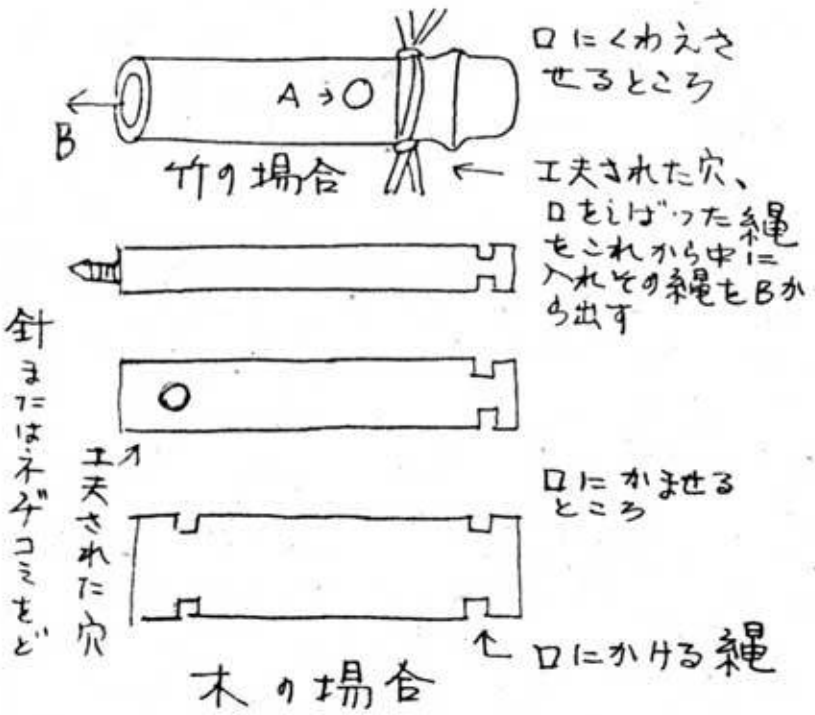
④横棒を使った口責めによる単純な遊戯の一例

これは不完全緊留か、紐を使った不完全緊留の場合のヒモをはずして全然緊留しない方が良い。前述した人間馬車重量運搬も遊戯にはちがいないが仕掛が大変で家庭ではちょっとでき難い。しかしハーモニカ責めは家庭的と思う。

まず準備としてハーモニカの両端に止め金又は釘を打って、紐または縄をとりつけられるようにし、これを横棒式の猿轡の棒の代りに口にはめこむのである。鼻にツメ物をするか、洗濯バサミではさむと呼吸につれてハーモニカが鳴る。二、三人このような美人を作れば吹きくらべというのも考えられる。足を自由にさせて家の中を逃げ回らせ、ムチで追いかければ奇妙な音楽会が生れる。楽器はハーモニカのほか笛の類が良いと思うが、本式の横笛や、尺八はこれだけではならないので注意が大切。子供のときに作った一種の共鳴



共鳴箱の図



箱（図参照）を工夫しても面白いと思う。凹んだ部分を口にあててとりつけるのである。

このような遊戯を家庭で行うさい逃げる被虐者に兎の耳をつけさせればさしずめ兎狩りというところ。芸者をあげた宴席でシャミの音にあわせ、きれいどころをこの恰好をし、しりふりだんすさせるのも一興だ。

△棒を使った猿轡を利用した複雑な繋縛法の二、三の例

①棒を縦に使ったとき

（十一月号所載参照）

棒のくわえさせ方（單純なときとの相違）くわえさせ方は十一月号と全く同じだが、棒に一工夫が必要である。でその二、三工夫したあとを書くとつぎのようになる。

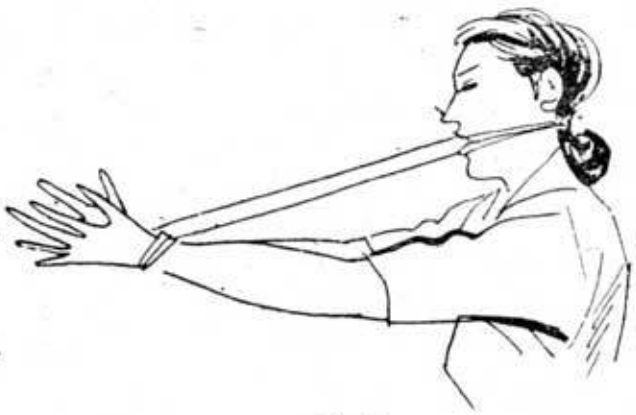
竹の棒を使うときは前図のようにするかわり節のない竹を使ってもよい。そのときは口につめ物をし、その上に紐をかけて歯と歯の間に入れて止め、さらにその上広巾の布をかけた一応完全な猿轡をした上を麻縄を二巻きして口の上で結び、その縄の余りに竹を通す。

この場合前述の棒のハメ方より猿轡は完全かもしれないが、もがくとズレる恐れがあるしズレないように緊縛すると苦痛すぎる。従って竹や棒のかけ方は図のとおりの方が良い。

このように用意したら竹から出た余分の縄をしごいて体のいろんな部分に括りつけることができる。たとえば図のような形になり、写真のモデルとして一興の価値がある。

このようにした固定法は、このほかいろんな場合が考えられる。

手首固定



足首固定

ヒザに固定したとき、これ自身大して苦痛を伴わないようだが、このポーズで放任されるときは、不安定だけに次第に苦痛を感じてくるようになる。ヒザ固定の変形は、左膝と右足首であるが、前者よりは楽のように思われる。股間固定と腹部固定は一層屈曲されて苦痛を伴うだろうと想像される。

然し、右のいずれの場合に於ても、モデル嬢のポーズのとり方如何によっては、写真としても効果的のものが出来るだろうと思う。

手首を前で伸して固定するもの。これはポーズとしても平凡であり、写真にはならないと思うが、足首固定のものは、どうであろうか。両足首と口を連結した棒に別のナワで上から吊すのである。後手は縛っても縛らなくとも、どちらでもよいが、やはり簡単でも縛った方がしまりがあってよいかもしれぬ。

②横棒を使ったとき

縦棒同様、ヒモのカケ方、口にかけ方などに多少変化はあっても本質はかわらない。

棒の固定の仕方も同様である。

例えば、長い棒一本利用してその中央を口に　わえさせて固定し、両端に両足首をそれぞれ八の字に十分開かして括りつけて固定したとき。両手は後手に縛っておくと、丁度逆大の字型の恰好になる。これは両足を使った方法であるが、長い棒を同じく利用して両手を首と肩の線と平行に伸ばさせ、口にくわえさせた棒の両端に両手首をそれぞれ括りつけて固定したとき。足は自由にしておいても、一応拘束の効果はあらわせることになる。

右の二つの型も図解で示すのは容易であるが、ヒザに棒をかけた時の図よりも更に簡単なので省略した。読者の方で、更に各種の場面を類推して頂ければ幸甚である。（以上）

ヒザを棒にかけさした場合

悦虐クラブ定例会報告

泉　か　よ　子

編集長様

御無沙汰いたしました。あの流行の風邪をこじらせて寝込みました。でも、もうすっかりよくなりましたから御安心下さい。

正月には元気で、またあの愉しい遊びの集りに参加しました。昨年『あらびあの奴隷市』の題で御誌に発表されましたことが、会員の間で問題となり一時は、かよ子を閉出し、紹介者の良子さんにも迷惑がかかるような気配がありましたが、私が病気で寝ているうちに段々に理解されまして再び遊びの仲間に入れていただくことになりました。その上、再びこうした御便りを差上げることも許されました。

但し会員の方の名誉保持のため日時、場所等を少し変えますからその点、御承知下さいませ。

○

はじめにこの会のあらましを申上げます。此の会は真面目な紳士淑女のあつまりでありまして皆様それぞれ立派な職業をもち、家庭をもち社会的にも尊敬されているお方ばかりであります。人には種々様々の趣味や楽しみがあるもので、英国の紳士が犯罪小説を愛読することは奇妙のようですが一面、日常行儀正しく謹厳な英国紳士にとって道徳や法律の垣根から飛出した犯罪物語の主人公に身をおいて奔放に空想をたのしむことが気分転換であり、一種の安全弁であると思います。

世の男性の方々が、美しくかよわい女性を苛めることに喜びを覚えることは、時代映画の半数には女の縛られる場面があることでもわかります。男性は剣士として敵を薙倒すことに快感を覚えると同時に、悪漢として美女を拐かすことにも快感をもつのでしょう。

と同様に女性もまたひそかに自分を劇中の美女に擬して、我身もまた縛られたような切ない昂奮を覚える人が少くないと思います。然し実際問題として男性が遊戯に婦人を縛るということは容易にできるものではありません。それにも増して婦人が男性に縛ってもらうことは不可能といってもよいでしょう。本当に縛られた婦人に男性が淫らな行為にでた場合には防ぐすべもありませんし、また初めは絶対にそんな行為はしない約束で始めても、眼前に縛られた女の姿をみるうちに、どのように心変りしないとも保証できません。それにまた人によっては鞭を使ったり、刃物で傷つけたり、色々な方法で女の肌に傷をつけることも考えられます。従って本能的に縛られることを喜び、希望する女性でも、実際に縛られることは警戒し避けるものであります。

結局、愛人又は夫婦の趣味が、共通する場合のみ可能でありますが、必ずしも同趣味の人ばかり結ばれませんので、立派な男性の方がひそかに空想だけで物足りないとき、他にひそかに悶えている女性もあるわけであります。

この会は、そうした趣味を同じくする紳士淑女の集りで、次のような規律が厳重に守られて居ります。

一、会員は趣味の集りのとき以外は真面目な社会人として働き決して耽溺しないこと。
二、会員男女間で接吻乃至それ以上の行為をしてはならないこと。
三、身体に障害を加えてはならないこと。
四、相互に秘密を守ること。
五、新会員は会員の紹介により、審査の上で入会を許すこと。

現在男子十名婦人は私を含めて四名で、全部真面目な職業をもった人ばかりです。私が一番貧しいサラリーガールです。あとでわかった事ですが、御夫婦が一組いらっしゃいます。美しいおとなしそうな奥様ですが、ここで一緒になって楽しく遊んで仲良く一緒にお帰りになります。勿論奥様を他の男性が縛ったり色々することもあるわけですが、却ってそれが御夫婦の刺戟になるらしいのです。会員同志恋愛することも自由ですが、その場合でも相手を独占してはならない。一緒に楽しく遊ぶ義務があります。いわば社交ダンスで他処の奥様と踊るようなものです。

男子に比べて婦人が少いのは、どうしても婦人の入会する機会が滅多にないこと、それに婦人の年令、姿態、容貌等にも条件があるためです。皆さん、お美しい方ばかりです。かよ子なんか本当は入れていただけないのでしょうが、婦人が足らないので入れてもらったのだと考えています。

編集長様

あなたの御知合にこのような条件に合う同好の女性がございましたら、どうぞ御紹介下さいませ。尚男子は目下定員一杯でこれ以上増加すると会場、統制、連絡上差支えるそうで欠員があるまで補充しないそうです。

お互に耽溺しないことになって居りますので散会後は、それぞれ家庭に帰ります。会員同志でそれ以上に別個に会合をもつことはタブウとなっています。

次に遊戯の際にはいろいろのストリイを設けて遊びますが実際に唇を奪ったり、それ以上の行動に出てはなりません。現在は映画の撮影の際に本当に接吻するそうですが、ここではその場合は仮面に接吻するだけで唇に触わることは禁じてあります。婦人の純潔を守

るためです。ましてや、それ以上の行動はできません。これが男女一対一ならば前に申しました通り制止することが不可能ですが、こちらは大勢の群舞？　でありますので制止できるわけであります。

またひどいサジズムで女性の肌に傷をつけたりすることも行き過ぎとして禁じられています。鞭うち、刃物はすべてお芝居です。縛るのは本当ですが、縄目で婦人の身体に傷をつけてはなりません。

すべては演技であり遊戯であります。色々のタブウがあって窮屈のようですが、いわばお芝居や映画の登場人物になるようなもので楽しい遊びであります。

しかし公然と人前でする遊びではありませんので、会員同志秘密を守ることになっています。

会場は主に豪荘なR邸でありまして、召使の方々はよく知っているのかどうか私にはわかりません。

会場の設営や衣裳道具は演劇関係のQ氏が準備されます。その外に医者や画家作家、弁護士、会社員等の職業をもった方のようですがたしかめて居りません。会費は男子の方のみが分担し、婦人は却ってお化粧品等をいただいているようです。少いので優遇されるのでしょう。

○

私と良子さんはクリスマスプレゼントに贈られた揃いのイヴニングドレスを着て迎えの自動車にのりました。良子さんの特別命令？で、前髪を少し垂らし二十才前後の娘のような若い髪にしました。他人が顔をみるようで恥しく美容院を逃げるようにして自動車にかくれました。良子さんは長いまつげの大きい瞳、深みのある美貌がお化粧に冴えて夢の国のお姫様のようでした。

「ねえ、今日はどんな遊びかしら？」
「さあ、わかんないわ。この前のとき、よつこ素晴しかったわね。名演技よ」
「あらいやな良子さん。あなたこそ素敵よ。皆さん酔ったように浮き浮きしていらしたじゃない」
「よつこ、お遊び好き？」
「あらいやな良子さん、知らない」

私達は鼠のひく馬車にのって御殿にゆくシンデレラ姫のように浮き浮きはずんでいました。

R邸に着くと、もう皆様おまちかねでした。黄金の仮面をつけてホールに入りますと、紳士十名婦人四人が揃いまして先ず新年の挨拶をかわしました。

今日の紳士方は胸に白いリボンをつけて、それぞれに「ラット」「オックス」「タイガー」「ラビット」「ドラゴン」「スネーク」「ホース」「シープ」「モンキー」「ドッグ」と仮名が記してあります。今日一夜は、本名を離れて仮名で呼びあい遊ぶわけであります。

婦人には名札をつけず、私は真珠のネックレース、良子さんは水晶、それにもう二人の美しい方は夫々エメロードと紅玉のネックレースをつけました。そしてミス・パール、ミス・ダイヤモンド、ミス・エメロード、ミス・ルビイと名づけられました。これからは本名は呼びません。

まず、「ドラゴン」氏の司会で一同で会の規律を守ることを宣誓しました。その時新入会員である私と「ドッグ」氏は真中正面に立たせられまして皆様に宣誓いたしました。「ドッグ」氏は紹介者「シープ」氏と「モンキイ」氏の介添で、私は「ダイヤモンド」嬢と

「ホース」氏の介添で厳粛なものでありました。

おわって一同食卓につき正月らしい豪華な食事でした。私はイヴニングを着てぴっちりコルセットで締めつけていますので日頃喰いシンボウですが、あまりいただけませんでした。

「ミス・パール、食事が軽いですね。大いに召上がれ、お嫌いですか？」

「ホース」氏が隣席からささやきました。

「イイエ、でも私あまりいただけませんの」

「召上っておかんと、おなかがすきますよ」

「スネーク」氏が大声で云います。私は恥しそうにうつむきました。皆様の視線が私にあつまります。

「ミス・パールは恥しがりやさんだから、そんなこといっちゃ駄目よ、一層喰べられなくなっちゃうわ」明るいお嬢さん、ミス・ダイヤモンドが声をかけました。

紳士方は食事の間、これからの美しい獲物の姿を眼前にして愉しみ観賞していらっしゃる風でした。私は良子さんから注意された通り、出来るだけ初々しく、紳士方と眼があうと急いで眼を伏せて恥かしそうにしていました。本当にいけないカマトトかよ子です。ごめんなさい。

食事の後、コーヒーをいただき乍ら歌舞伎座の金閣寺の雪姫や最

近封切映画の中の縛られる女優さんの話、次回はどこか温泉に旅行しよう等という話がかわされました。また外国美人が半裸体で縛られている写真を持参して回覧する方も居ました。

○

突然、本当に突然電灯が消えました。真暗やみ。私は思わず隣の「ホース」氏の手を握って立上りました。

ピカリ

懐中電灯の光が照しました。続いてもうひとつ。

ピカリ

懐中電灯が本人の右手を照しました――鈍く光る拳銃の銃口がこちらを睨んでいます。もう一人が同様に右手を照しました――これも拳銃が！

「ホールド・アップ！」

紳士達は両手をあげて立上りました。婦人は紳士達にすがるようにして立ちすくみました。

二人の怪漢は近づくと紳士達を室の一隅に追いつめました。婦人達が一緒にゆこうとしますと、

「レディス・ステイヒヤ」

と拳銃を擬して寄せつけません。四人手を握りあって反対側の隅に追いつめられました。

扉が開いて紳士達は室外に連れ出されました。真暗な室内です。先刻から厚い、カーテンがひきめぐらしてあることに気がつきました。

四人が手探りで扉に辿りつき把手をまわすと扉は開きました。同時に私共を押返すようにして先程の怪漢が二人、つづいてあとから数人が或は懐中電灯或は拳銃を擬して闖入してきました。

四人の婦人達は手をとりあって室の片隅に立ちすくみます。その顔を、その髪を、その襟を、その背を或はまたハイセールの足もとを交る交る懐中電灯が嘗めるように照らすのです。

怪漢達は金色の仮面ではなくて頭からすっぽりと黒い頭巾をかぶり眼だけがあいているようです。また服装も黒い作業衣のようなものをつけています。暗いのでよくわかりませんが通常の服装ではないようです。

「ゲッタウト！」

首領らしい男が号令しました。つかつかと二、三人の覆面が近づくと

「アレー」悲鳴をあげたのはミス・ルビイのようです。でもその声はつづきませんでした。ミス・ルビイの白い顔の下半部は怪漢の大きい手でふさがれているのです。しかも両手はそれぞれ怪漢二人に摑まれて彼女は下半身のみを悶えています。

別の一人に拳銃を擬せられて女三人は凝然とミス・ルビイを見守るばかりでした。

もがく程もなく彼女の両手は後にねじあげられました。後手にして縛られました。口には猿轡の布が喰まされました。懐中電灯が或は彼女の手首、顔を照らし別の光は恐怖に慄きつつ見める三人の女を楽しむように照らすのです。

ミス・ルビイを縛り了えると次はミス・ダイヤモンドが両手を摑んで引き出されました。私は彼女と手をかたく握って居ましたが強引に引き離されました。私は背後から大きな男につかまえられて男の片手は私の右手の腕と胸を抱きしめ、もう一方の手は私の口に蓋をしていました。私は自由な左手で男の手をほどこうとし足をばたばたしましたが堅くしめつけられた鉄の腕は解けません。ミス・ダイヤモンドが後手に縛られ猿轡をはめられ了るまで、私は鉄の腕の中でもがいていました。これは私としては始めての経験でございます。

ミス・ダイヤモンドがすむと数人の怪漢が私に近より先ず猿轡を

喰まされました。左手もしっかり摑まれています。胸が締付けられていたのが楽になったトタンに右手は他愛なく後にねじあげられていました。続いて左手も後にねじあげられます。猿轡に悲鳴も漏れません。三人の覆面の為なすがままであります。背にまわして重ねた手首に紐がからみます——冷たい柔かいなめし革の感触です——二巻三巻、私は縛られてゆきます。縛り了えると放されました。私は歩くともなく既に縛られているミス・ダイヤモンドのそばに近よりました。彼女も私にイヴニングドレスの露わな二の腕をすりよせます。

最後の獲物—ミス・エメロードが縛られています。いつのまにか猿轡を喰まされていて悲しげに首を振るばかりです。その白い首筋から胸のあたりを照らす淡い懐中電灯の光。遂に四人共縛りあげられました。

「マスク」低く命ずる声がしますと背後からすっぽり顔に袋のようなものをかぶせられました。黒い布で何も見えません。他の三人も同様にかぶせられた模様です。

「ゴウ」

私の二の腕は左右から二人の男に摑まれました。イヴニングを着ているので二の腕もむき出しです。怪漢は手袋をはめています。左右から引き立てられながら歩かせられます。両手を縛られ顔を包まれ、ハイヒールをはいていますので足が前に出ません。ともするとつまずきそうになるのを左右から支えられてそろそろ歩きます。他の人達も同様に引立てられて一体どこへ連れてゆかれるのか、恐怖の歩みをつづけていることでしょう。

歩みがとまりました。両腕を摑んでいた手が離れたと思うとすぐ足に触るではありませんか。急いで振りはなそうとする足音をしっかり揃えてつかまえられました。あ、足首に革紐がまきつきます。二巻三巻、足首を揃えて縛られました。直立しているのも危かしく倒れそうです。

あ、抱きあげられました。私の身体は軽々と抱きあげられ肩と足を二人の男に担がれているのです。男は無言で歩き出しました。

縛られて担がれてどこかへ運ばれてゆくのです。イヴニングのスカートが拡がりそうになるのを包んで担いで居られるのがせめてもの救いです。

行進はいつまでも続きます。途中で肩をかつぐ男と足をかつぐ男と交替しました。担ぎ運びつつ女の身体の重さを楽しんで居るようです。

長い行進が終ると椅子に腰かけさせられました。他の婦人達も一緒で身体をくっつけて一列に並んでいるようです。

暫くしてから「マスク・オフ」と声がかかりました。黒い頭巾がとり去られました。同時に猿轡も外されました。私達は互に顔を見合せそして周囲を見廻しました。

青白い電灯の下、それは海底のような感じの室です。奇妙な黒色の覆面をして奇妙な制服を着た怪人が十名、真黒い手袋をはめています。胸にドクロを白く描いてあるのが唯一の飾りです。首領は黒色の大きいマントを着て杖を携えています。

私達は、どこか恐ろしいところに拉致されてきたようです。

怪人一号が首領の前に進み出ました。怪人達は全部同じ服装をして居り、リボンの字は暗くて読めませんので、どれがどれかわかりません。暫く怪人一号二号とよびます。

一号「日本の若い女四人捕獲、生きたまま運んできました」

首領「運搬中、キズをつけてないか？」

二号「全く無キズであります」

首領は一号二号を従えて私達の方に近づいてきました。そして前に立って順々に眺め見下します。私がうつむきますと首領の杖で顔をあげさせられました。私はされるままに顔をあげ声も立て得ませんでした。

首領「動物は全部日本人か？」

二号「日本の女であります」

首領「どれも年令が若いな」

一号「左の側より順に生後二十三年、十九年、十九年、二十三年であります」

私とミス・ダイヤは十九才ということになります。初めに申しましたように少女らしいお化粧をしていますので、つとめて可憐に振舞います。

首領「みな処女か」

二号「全部処女であります」

首領「先日のフランスの動物のように処女を失った者は実験の役にたたん。フームどれも可愛らしい顔をしているのう」

やがて首領が杖をあげて厳かに宣言しました。

「皆の者よく聞け、今日此処に送られてきた四人の実験動物は日本産の処女で実験に最適である。これより適性検査を施し最も適性な動物を選び人工衛星に入れて二十四時間以内に宇宙に放つ。美しく若く柔かい動物の身体は人工衛星に乗って永久に地球を廻るであろう。世界最初の宇宙旅行をする人間である。宇宙科学研究所は世界最初の人工衛星に人間を打上げる栄誉を担うものである。犬を打上げたソビエトも、猿を打上げようとするアメリカもすべて我が技術の前に平伏し、サルタン国は地球を征服するであろう」

「おーサルタン国万才、首領万才！」

四女の女は縛られたままで顔を見合せました。

「エメロードさん、どうしましょう」

「私達人工衛星に入れられるのよ」

「こわいわ」

「逃げられないかしら」

「誰か助けてくれないかしら」

「だってこんな所に連れてこられてしまったのよ」

「ああダイヤさん」

「ルビイさん」

「パールさん」

女達は縛られた身体をよせあってなげきました。

「ハハハハ」首領の高笑いです。

「聞け美しい動物達！　ここは貴様等の国から一万キロも離れているのじゃ。無音ロケットにのせて運んできたのじゃ。この研究所は砂漠の中心にあって城壁で厳重に外部と遮断されている。この研究所から逃げ出すどころか、この地下室から出ることもできないのじゃ。ハハハハ美しい動物達！　素直に観念して我々の実験に協力せよ、ハハハハ」

女達は身を寄せて悲しみます。

怪人三号「動物テスト準備完了」

首領「よし、テスト左の側ダイヤの首飾りをした動物より」

怪人二名私共に近づくとミス・ダイヤを担ぎあげて奥のカーテンの中に入りました。

暫くするとカーテンの奥からミス・ダイヤの悲鳴です。

「アレーイ、ヤイヤ、ユルシテ、アレー」

私達三人は顔を見合わせました。

「イヤイヤ」

悲鳴と共にカーテンの中から逃げ出したミス・ダイヤモンド！

見れば無残！私達は息をのみました。

あの華やかなイヴニングドレスはぬがされシュミーズも剝がれてコルセットとストッキングと靴をはいたのみの姿です。ミス・ダイヤはスリーインワンを着けているのでブラジャーはコルセットについているのです。

広門の中央にまで駆け出したミス・ダイヤは怪人首領に向きあって立ちすくみました。

「ハハハハ、美しい身体をしているな。それ宇宙服を着せよ」

怪人二人が進みよると両側からミス・ダイヤの両手をしっかりつかまえました。怪人三号が革具に金属のついた防毒マスクのようなものをミス・ダイヤの口に嵌めました。猿轡の役もするとみえて声が出ません。次に胸の上に金具のついた革の乳バンドのようなものを捲き背中で締金具でとめました。

それからこれも革と金属で出来たパンツのようなものを腰に嵌め金具で締めました。

「実験台に固定せよ」

哀れなミス・ダイヤはその姿で中央の四角い枠に両手を拡げて固定されました。両手首と腰と足首を尾錠で枠に固定されたのです。両手は水平に腰には奇妙な腰バンドを嵌められているため膝はぴったりつかず足先は二十糎程離して固定してあります。ミス・ダイヤは悲しげに私共の方をみました。

「ダイヤ！」

「……」彼女は声も出ません。私達は声こそ出ますが両手首、両足首は縛られたままなのです。

怪人は更にミス・ダイヤの肩、二の腕、手首、太ももに様々の測

定器具をバンドで取りつけました。
「実験動物第十九号、人間、女、固定おわり」
「実験開始、心臓測定器操作始め！」首領の命令が宣せられました。
「心臓測定器操作始めました」
「上搏測定器操作始め！」
「上搏測定器操作始めました」
「下搏測定器操作始め」
「下搏測定器操作始めました。」一つ一つ復唱し乍ら怪人が機械のスイッチを入れました。機械が奇妙なウナリ声をたて始めました。何の機械か知れませんが、口と腰に嵌めた器具にはビニールパイプで接続してあります。彼女の胸や手元に捲きついた器具からはコードがメーターにつながっています。
「自動注入食注入始め」
「自動注入食注入始めました」
「排泄吸収始め」
「排泄吸収始めました」
「栄養食注入状況よろし、排泄状況よろし」

ライカ犬は人工衛星の中で自動的に口中に流動食を注入されたと発表されています。ミス・ダイヤもあの口を覆う器具で栄養分を注入されているのでしょうか？　そしてあの腰の器具は？ミス・ダイヤは悲しそうに首を少し振るばかりです。ナイロンストッキングに包まれた形のよい足が震えています。

怪人四号五号は冷やかに各種のメーターの目盛をよんで記録しています。怪人六号は聴診器を彼女の肌の露出した部分にあてます。これが人工衛星の中に閉じ込められる実験用女体の姿でしょうか。先程の首領の言葉ではこのテストの結果で本当の実験用犠牲者がひとり選ばれるのでしょうか。私達三人は、かたずをのんでみつめていました。
「テスト止め、実験台より取外せ」
「テスト止め、実験台より取外します」
固定枠より解放され、数々の測定器具や実験器具を外されて自由になったミス・ダイヤモンドは恐怖と疲労にグッタリと倒れそうになりました。怪人二人が抱きかかえて奥の室へ連び去りました。
「次、二番目、ルビイの首飾りをした動物！」

ミス・ルビイが怪人二名に担がれてカーテンの中へ、途端に聞える悲鳴！
やがて怪人二人に両手をとって連れ出されたミス・ルビイは純白のブラジャー、ブリーフ、桃色のガーターベルト、薄いナイロンストッキング、踵の高い華奢な靴、それだけが身にまとうもので半裸の姿です。
「実験具を嵌めよ」冷やかな号令一下、柔かい彼女の胸に腰に、次々と恐ろしい器具が嵌められます。美しい顔の下半部を覆って自動栄養注入器兼嵌口具がとりつけられます。
「実験台に固定せよ」
「実験動物第二十号、人間、女、固定おわり」
「テスト始め！」

ミス・ルビイのもだえる姿は、ミス・ダイヤよりも肌があらわのため一層悩ましく痛ましい見せ物でした。彼女のまとっているブラジャーもブリーフも幅が狭いので胸と腰にまとった実験用革具にかくれて見えず、そのため全裸で靴下と靴だけしか、はいていないような錯覚を覚えさせます。

怪人たちの測定報告、もだえ苦しむ姿を十数分鑑賞！
「テスト止め、実験台より取外せ！」
彼女もまた解放されると正気を失い、怪人二人に奥の室に運び去られました。
「三番、真珠の首飾をした動物！」

遂に私です。怪人二名に担がれて、カーテンの中へ入れられました。静かに手足の縛しめを解いてくれます。
怪人二号がささやきました。
「さ、急いでドレスをぬいで下さい。悲鳴をあげながら着がえるのですよ」
早口に命令的に云うと怪人二人はくるりと奥に入りました。
私は急いでイヴニングのスナップを外そうとしましたが、うまく外せません。不意にミス・ダイヤが半裸の姿のままあらわれてスナップを外しぬぐことを手伝ってくれました。
「悲鳴をあげるのよ、あなたは暴力でぬがされているよ」ミス・ダイヤがささやきます。
「アレー　イヤ、ゴメンナサイ、イヤイヤ」
私は叫びました。ミスダイヤが次々とぬがせてくれます。私はそれが怪人から衣裳剝がれているような感じがして悲鳴をあげました。ブラジヤーとコルセットの姿になると再び怪人二人があらわれて両手を左右からつかまえました。そして広間に連れだされました。
「実験動物第二十一号、人間女！」私の腕をつかまえている怪人が叫びました。
「実験台に固定せよ」
口に胸に腰にあの恐しい器具を装着されます。

「待て、その動物のコルセットを外せ！」
「コルセットを外します」
怪人は私の腰を締めているコルセットを外しにかかります。コルセットを外れても別にブラジヤーをつけていますし、ストッキングはガーターベルトで吊っていますのでかまいませんがブラジヤーからブリーフの間の肌がおへそまで全部露出するのですから恥しくてたまりません。さっきのミス・ルビイと同じ姿にされました。
怪人達は瞳をこらして私の身体を鑑賞しているのです。視線が針のように肌をさします。

左右の手を水平に延ばして実験用固定枠に固定されました。足は二十糎程拡げて足首を尾錠で固定されています。数々測定器具が肌に取りつけられます。金属の冷たいかたい感触です。口にはパイプ押しこまれふさがれて泣声もだせません。じっと眼を伏せて恐怖と羞恥におののく可憐な少女を御想像下さい。
「実験動物第二十一号人間女、固定おわり」
「実験始め！」
残酷な実験が始められました。私は口から自動的に流動食を注入され、腰からは自動的に排泄吸収されて生きているのです。同時に酸素発生装置から呼吸用酸素を供給されます。手足の自由もきかずまったく動物としての生活機能の最低を営むのです。若い女が選ばれるのは人間の中では最も適当しているのでしょうか？
呼吸、脈搏、発汗、血圧等がメーターに刻まれてゆきます。ああ私達のうち一人は人工衛星の中にこのように固定されて打上げられ永遠に地球を廻るのでしょうか？　自動栄養注入装置は数日後には空になって、哀れな実験用女性は餓死するか、毒殺されるか。そしてなきがらは半裸体の姿のままで地球の表面を周軌を描いて永久に廻る――ああ。

（以下次号）

〈告白〉

私の生い立ち

（黒髪礼讃、女装生活、生首鑑賞）

杉江美津子

男性として生れた私が、十年余りもの間を娘として暮し、色々な事を経験し、幾人かの男の方と交際じ、果ては結婚さえ申込まれましたのも、又、長く伸していたこの髪を、桃割れに島田に結綿に、そしてポニーテールに結つて見たりして、女の衣裳を身につけ化粧したり、女学校にまで通いましたのも、思えば深い因縁があったからでしょう。

現在男姿に還ってからも、特定の方とは女名前で交際願っているのですが、その時だけは、いつも長い髪を掻き上げ乍ら物想いにふけったあの頃のことを思い出し、今も尚、この肩に冷んやりと重く垂れ下る黒髪を感じるのです。頭を後に反らせて左右に振れば、あの頃のようにゆさゆさと髪が揺れるように思えるのです。こう書いてきただけでも、もう男性の私はこの世から消えて、十年前の自分（女性）だけが残っているのです。こういっても私は、男娼でもゲイボーイでもありません。文字通りの中堅として、自他共に認められる某省の青年事務官なのです。でも三十才に近い現在でも、五、六才若く見られるような顔の持主ですが……（少し頭が足りないせいでしょうが）

私が、この様な生活に入る第一歩は、幼い時に始まりました。それは、私が六才の夏の夕方のことでした。その頃、隣の家に居た百合子という二十二才になる娘が、いつも私を可愛がってくれていたのですが、その百合子さんが、自宅の風呂へ私を入れてくれた時のことでした。タイル張りの美しい湯槽の青味がかったお湯に浸っていますと、それまでジッと湯に浸っていた百合子さんが、バラ色に染った美しい裸身を洗場に運ぶと、

「さあ、美津ちゃん、出なさいよ。洗うたげよ」

「うん」

真赤に上気した私の全身に石鹸の泡が一杯に拡がって、せっせと洗ってくれている中に彼女の態度がだんだん変って来ました。潤んだような瞳がギラッと光ると、「パッ」とタオルを私に投げつけると、

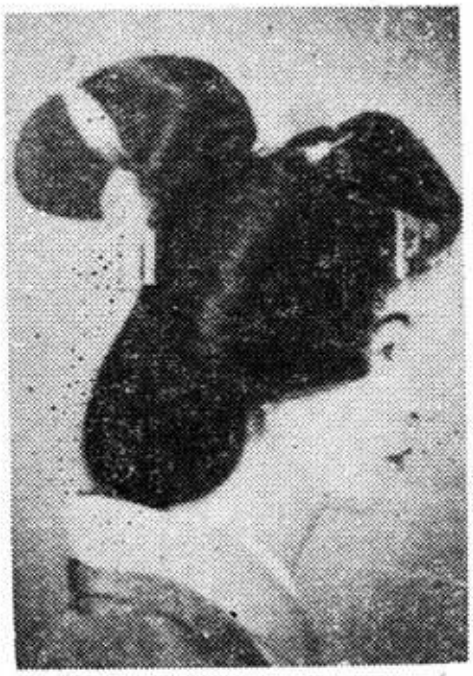
「さ、今度はうち洗うてんか」

くるっと向うを向いてしまいました。いつも優しい百合子姉ちゃんが今日は何だか変な

ので、少しおびえ乍ら背中を流してタオルを渡すと、怖い顔して押し返し乍ら、

「髪洗うてんか」

おずおずと彼女の頭に手を押して、ヘヤーピンを取ってクルクル巻いてある髷を解いて行きました。頭を下げてじっとしている彼女の頭から、豊かな長い髪を前に繰り越し乍ら握ります。湯の香りと髪油の匂いを嗅ぎ乍ら自分の背より長い彼女の髪を手にして、私は悪い気がしませんでした。何故って日頃、髪自慢の彼女が、どれ程この髪を大切にしているかをよく知っているだけに、ずっしりと重く艶やかな香ぐわしい髪を手にして、貴重なものをこの手に握ったという喜びと、この髪を摑むことによって彼女の頭や体の動きを支配できるということの快感も、無意識のうちに感じていたのでしたが……気がついてみると、私は、髪を握った両手をぐいぐい後に引いており、彼女は弓なりに体を反らして心地よさそうに微笑みを浮べて、両眼を軽く閉じているのでした。それが何を意味しているのか知らぬ乍ら、怒っている表情ではないのを知ると、ほっとすると同時に、もっと手荒く扱ってやれという気持が湧いて来るのでした。彼女は眼を閉じたまま体を前に少しだけ倒してタオルを前に当てて俯向いています。私はもう一度、彼女の頭に手を載せてその顔をのぞいてから、大急ぎでその頭の髪を上に掻き上げると、両手で



〈筆者近影〉

た。洗髪用に置いてある大きな洗面器に温湯を入れシャンプ剤を溶かし込むと、まだ弓なりに体を後に反らして髪をだらりとさせている百合子さんの大柄な体に、小さな手をかけると力一杯、押しまし扱いかねる程、豊なその黒髪を摑んで力一杯前に引張りました。白く泡立ったシャンプ液の中に長い髪の半分足らずが浸りましたが、それでは全体が洗えません。私は思い切ってうつむいてしやがんだ彼女の頸にまたがるとその頭を両手で洗面器の中へ押え込みました。外に溢れた髪を入れると、両手で頭をこすったり揉んだりして長い間苦労した後、ゆすぎにかかったのですが、一つにまとめて水の中で髪をゆすぐのは、とても楽しいことでした。水分を含んで重さを増した冷い黒髪の感触と黒光りのする頭、そして水の中から溢れ出る美しい黒髪、でも、彼女の気には入らなかったのです。濡れ髪を顔の前に垂れたままで摘んで見乍ら、

「なんや、ちょっとも綺麗になってへん。もうええわ。うち自分で洗うわ」

今から思えば、まだ六才の私の小さな手で近所でも評判の、長さ三尺を遙かに越える豊な女の髪が満足に洗える筈もなく、只、自分の髪を利用して彼女自身が遊んだに過ぎなかったのです。それにしても何という見事な髪だったでしょうか。ゆすぎの水をかける度に黒髪の滝が水と共に頭

の頂から落下する様に見えるあの美しさが、今日の私を作ったのでした。黒髪の美しさこそ、日本女性の持つ独得の美と私は思っております。彼女亡き今でも黒髪の長い女性には、たとえ顔はどうでも美人と感じ、又、如何に顔立がよくても、チリチリ髪の女性には少しも美を感じないのです。女湯に入ることのできた時分にも、百合子さんと匹敵する髪の持主には出会いませんでした。でも他人の洗髪姿には、いつまでも見入っていました。女の洗髪姿は二度と見られないだけに、私の網膜に焼きついた数多い女性の洗髪姿は、貴重な無形の財産として残っておりますが、今日に至るまで黒髪礼讃の念は少しも衰えないのです。これ程強く私の心を引きつけた彼女の髪の美しさを、どうしたら表現できるでしょう。坐って首筋を伸したままで体の大部分が隠れるその黒髪を左手で纏めると、丁寧に櫛を入れるその姿は画に描いた人魚の髪のようでした。その美しい髪を手にして思う存分扱うことが出来た、あの頃が懐しくてなりません。そしてその日から、髪の毛を思うがままに伸せる女性に憧れたのでした。女姿になれたらという私の夢が、間もなく実現するとは、まさか思って見ないこでした。

それから数日の後、百合子さんは花嫁姿で隣町に住む巡業役者をしている人の処へ嫁いでしまいました。近くの町にまで知られた腕白小僧の私が、その日一日しょんぼり過しました。角隠しの下の高島田の髪を見ながら、いい知れぬ淋しさに一人、その後を見送るのでした。しかし、それから数日の後、私は彼女の家へ迎えられ、そこで一人前になるまで育てられたのです。これには深い事情があるのですが、この話とは関係ありませんので省かせて頂きますが、杉江氏（百合子さんの夫）には、前妻の残していった女の子の美津子さんという私と同年の子がいたのですが、この子が色黒く目鼻立ちが悪かった為、男の子として育てられていたので、その身代りに女性的な顔立と声の持主であった私が選ばれたのでした。オカッパのかつらをつけ花模様の浴衣を着せられ、帯も赤いのを締めて薄化粧した私と、男姿の美津子さんは夫妻に連れられて、その日一日を天王寺の動物園で過し、楽しい夕食の後、寝床に入りました。

「美津子ちゃん」

「美津夫ちゃん」

先刻までの自分の名前で相手を呼んで、クスクン笑って蒲団に顔を埋めたのも、昨夜ように思い出されます。翌朝からは、物の云い方からあらゆることを女として躾られる毎日が続いて、次の年には小学校に入り、そして女学校に入る頃には学業、体育共に断然優れた女生徒となって、背中まで垂れた髪をなびかせて自転車で通学する姿を、道行く人々から注目されるようになってしまいました。

女学校の一年生の大晦日の夜の事でした。杉江氏は私の髪を結ってやろうといって、一座の床山をしている人を呼んで来ました。その人は髪結道具や、かもじ、髪飾り等を拡げると、

「さあ、お嬢ちゃん、どうぞ」

と鏡台の前へ招くのでした。恥しいやら嬉しいやらで、でも、いそいそと鏡台の前に坐りますと、その人は私の後に廻り私の髪をほどくと、蒸しタオルで髪を蒸してから丁寧に梳いて幾つかに分けると（根、前髪、たぼ、左右のびん）鬘をあてたり、火箸で掻き出したり、固油を叩きつけるようにしてつけたりして、くせ直しが済むと、いよいよ結い上げです。元結を揃えたり使う櫛を順に並べたりしている間、私は自分の髪油の香りに、うっとりとなり乍ら待っていますと、床山さんは先ず根の毛をとって、かもじを入れると右手で根を持ち右手と口で根を結ぶと、それを上にのせますから顔には前髪と根の毛がかぶさって来ます。鏡を見たいなあ、と思っているとそれまでせっせと整えていたたぼを根にくくりつけたので、根の毛が後にさばかれて両びんを作っているのがちらちらと見えます。髪を結うのは、このびんが一番難しいのではないでしょうか。平らに梳いた毛を、人差指と中指に挟んで捻って根に結んでから、びん

出しで掻き出して行きますが、この間に何度も油をつけ乍ら梳いて器用に形造られて行くのです。右が出来、左が出来ます。きわ出しが済むと前髪です。かもじを加えて後へ引き乍ら梳くとき、前髪押えを私が持って梳いて貰い、根と一緒に結ばれると手を離します。芯を入れ毛すじを出して前髪が出来ると髷にかかります。髷の部分はよく見えませんでしたが、出来上った髪を合わせて鏡を見て自然に微笑が湧いた程、美しい桃割れに結って下さったのでした。私が、このように結髪の様子を詳しく書きましたのも、当時のことをより懐しみたいためでしたので、悪しからずお許し下さいませ。眼が引きつる程にきつく結ばれた髪を鏡で見乍ら、嬉しさにはずんだ声でお礼をいいますと、額についた油を拭いて下さり乍ら、

「本当に美しいお嬢さんで、杉江さんもお楽しみですなあ。私がもう少し若けりや、誰が何といっても、無理にでも女房に貰うんですがなあ。残念ですよ」

と、お世辞をおしやるのでした、生れて始めての本式の化粧が始りました。杉江氏は床山さんと次の部屋で酒を酌みかわし、私の傍に坐ったのは百合子さんでした。嬉しげに鏡に写る自分の髪を見つめている私の顎に手をかけて仰向けると、コールドクリームで拭いてアストリンゼンで肌を引きしめてから、冷んやりとした感じの白粉が顔から頸、襟足まで塗られます。毛穴にまでしみ込む白粉に、改めて女になり切った自分に驚き乍ら、眉をひき口紅をさし頬紅をぼかされて段々美しくなって行く姿を、只ぼんやりと見つめるのでした。

肌襦袢を着て腰巻をし、緋縮緬の長襦袢の冷い袖に手を通して腰紐をしめ伊達巻をしめると、振袖を着て帯をしめて頂いてから、かんざしのくす玉の房を気にし乍ら頂いた、おそばの味が判らない程の嬉しさや、器を口紅で汚すまいと苦心したこと、いつもなら睡くてならない夜を、只、わくわくしていたために睡気も感じなかったこと等、今日のことのようにはっきりと思い出されます。元旦の朝踵の高い銀色の草履をはいて街へ出た私は、丸髷姿の百合子さん、美津夫さんと連れだって出かけました。道で酔っぱらいに抱きつかれたり、満員電車で手を握られたり、でもそれが余り気にならなかった程に、私の心はうきうきしていました。年は、まだ数え年の十四才ながら女性にしては大柄な体が、成人した娘の姿態に見せたのでしょうか。その日は方々で色んな男の方から悪戯され、杉江氏夫妻の間に私を挾んで歩かざるを得ないようになってしまいました。附近を行くどの娘よりも注視の的になったのは、この美しい髪形や衣裳のためとは気付かずにスター気取りで一日を過した私には後から嫉妬の火を燃え立たせ乍らついてくる美津夫さんには気もつきませんでした。その日も暮れて、一人ではしやぎ乍ら夕食を終えて楽しい一刻を過してから床につきましたが、慣れない箱枕が痛く髪が気になって中々寝つかれず、暫くもそもそしていますと、それまで黙って向うを向いて寝ていた美津夫さんが、

「おい、ごそごそするな。ねられへんやないか、静かにせんか」

「そやかて、うち髷が重うて……それにこの枕、固いもんやさかい、ねられへんのや」

「そんなに重い髷やったら、ほどいてねたらええやないか」

「ふん―何云うてんの。ほっといてんか」

すねて背中を向けた私をじっと見ていた彼は、机のひきだしから安全剃刀の刃を出していましたが（でも私は気がつきませんでした）暗闇の中でそっと手を出して来ているのも知らず、

「何してんのや、あんたこそ、早よ寝んかいな」

私が云ったのと殆んど同時に、彼の手が私の髷を鷲掴みにして、ずるずると引きずる「ザクッ」と云う鈍い音がして、何かで髷の根を引き切って行くのです。

「きやーっ」

と云う私の悲鳴を聞いた杉江氏夫妻が駈け

つけた時には、美津夫さんは切りとった髷を左手に提げ、右手の毛だらけになった刃をみつめて居ましたし、私はザンバラ髪になって泣き崩れていました。その翌日から私は、切られた根の部分を隠すために、髪を一つに束ね銀の丈長で飾った髪に結う他に仕方がありませんでした。一尺ばかりになった髪をポニーテールに垂し乍ら、根の部分が頭の一部分に過ぎなかったことを不幸中の幸としながら真は女である美津夫さんが本来、男の私が女姿で男達にちやほやされるのを見て、どんな気持で見ていたかを思うと、髪を切られたことが少しも恨みには思えませんでしたし、美津夫さんも平静に返ってから済まなかったと詫びて来たので一切を水に流して、美津夫さんと二人きりの時だけは本来の男と女になろうと約束したのでした。二人きりで留守番をする時など、先ず出入口に鍵をかけてから、お互の衣裳を交換するのです。彼は私の振袖を着て化粧して島田の鬘（杉江氏の一座から私用に借りてあります）をかぶって、私は髪を出来るだけ小さくまとめて、彼の学帽をかぶり服を着るのです。でも普段はそうも行きませんから、女姿の私が男姿の彼女を胸に抱いて慰める奇妙な光景が、この夜から消燈した二人の部屋で見られるようになりました。その結果、彼女が私にある種の感情を抱いて訴えるようになったのでしたが、未だ子供の二人が、お互いの手を握り合い抱き合う以上の愛情の表現しかなかったのは、二人にとって倖せでした。（現在、彼女は幸福な家庭の主婦となり二児の母となっていますが、あの時切りとった私の髷をそのまま大切に仕舞ってありますとのことです）それから三年経ち私は女学校を二年で中退して杉江氏について巡業に出ていたのですが、大阪の家が焼けた

緊縛映画速報欄

阿部秀

松竹「**七人の女掏摸**」

足を洗おうとした為、掏摸の親分に連れ去られた、おすみを助け出さんと、おこま（高千穂ひづる）を先頭として多数の女掏摸達は親分の家へ押しかける。しかし反っておどかされ座敷牢へ監禁されてしまい、牢の格子にすがりつき「おすみちやん」と悲しく叫ぶ。ここで、細引で後手に括られ手拭の猿ぐつわをされた、おすみ（中川姿子）がスクリーンに写し出される。B級

大映「**空飛ぶ若武者**」

新式銃の秘密を探らんと、都の使者に化け敵方の砦に乗り込んだ天馬小太郎（梅若正二）は、新式銃の完成の日、試射を頼まれ銃を構えて庭に立つ。そこへ引出されて来た的とは、頭へ鈴を乗せられ手足を縛られた久美（三田登喜子）である。さしずめ日本版、ウイリアム・テルと云ったところ。C級

大映「**八人の花嫁**」

恋女房を拐わかされた銭形平次（長谷川一夫）は、道に落ちている一文銭を頼りにお静が連れて行かれたと思われる怪屋敷の裏手まで来た時、浪人達の奸計にかかり捕われ地下牢へ放り込まれる。中には既に前手に縛られた、お静（阿井美千子）が捕われている。C級

大映「**おけさ鴉**」

浅吉（勝新太郎）のかっての恋人、お小夜を人質として拐わかした親分は、お小夜を囮として海辺の松林に浅吉を待伏せる。一人の子分が心配げに「親分、浅の奴は来ますかね」「女をこっちに摑まえてありや浅も来ない訳にはいくめえ。女は逃げねえようにしてあるんだろうな」「へえ、ふん縛った上、轡まで嚙ましてありますから」……ここで場面が変り、後手に縛られ手拭の猿ぐつわをされたお小夜（近藤美恵子）の姿。A級

大映「**遊侠五人男**」

開巻劈頭、深い霧に包まれた林の中を、振分合羽に三度笠の旅人が一人、河ノ方へ歩いて行く。その河岸には、今しも一個の大きな菰包を積み込んだ一雙の小舟が着き乗っていたやくざ風の三人の男達が「毀物だから気をつけろよ」と、その菰包を下そうとする。そこへ現われたのが先刻の旅人「その菰包はこっちに戴こう」と小舟に飛び移り、パッと菰をはね除けると、下から手拭の猿ぐつわをされた女の顔、お千枝（中村玉緒）である。B級

東映「**神変麝香猫**」

画猫道人に月見堂に呼び出された夢想小天治（大友柳太郎）は拐われた由美を救い出さんと單身、道人と対決する。「約束通り一人で参った。由美殿を返して頂こう」「もう一つの約束、黒縄巻は如何したな。それと引替えに娘の身体は渡して進ぜよう」「黒縄巻は江戸城築城秘図、渡すわけには参らぬ……と申したら」「フフあれを見よ」道人の指差す中二階の柱には、後手に縛りつけられ青い布を口に嚙ませられている由美（大川恵子）が、胸に白刃を突きつけられて跪いている。B級

東映「**花吹雪鉄火纏**」

大詰近く、真暗な夜の江戸の町を、数人のやくざ風体の男達に囲まれた一丁の駕籠が飛ばして行く。やがて大戸を下ろしてある或る油屋の店先に止まる。中から木戸が開き、後手に縛られ殆んど顔全体を覆うような大きな手拭で猿ぐつわをされたお花（中原ひとみ）が引立てられてくる。C級

今月は、スクリーンより復写をしたいと考えて居られる読者のために、カメラを構える箇処をお知せする。前記の場面が出たらシャッターをかけて頂きたい。一分以内に縛りのシーンがスクリーンに写し出される。カメラの位置は勿論、真中の最後列。カメラの高さは出来るだけ高く。でないと写真が上っぼまりになる恐れがある。二階のある映画館ならば二階の最前列、映写室が二階にある関係でスクリーンにも傾斜があるので、ここが一番よい場所である。そこで、F$^{2.8}$ S $\frac{1}{25}$で切れれば十分である。早いシャッターであると、フイルムとフイルムの間が写ってしまうことを留意せられたい。

（以上）

と聞いて、杉江氏と二人で大急ぎで引返しました。大阪に着くと同時に猛烈な昼間爆撃。爆発音を初めて聞いて生きた心持もなく待避していた私達は、漸く警報が解除されて焼跡をあちらこちらと歩いていますと、爆弾で破壊された私達の女学校が見える処まで来ました。懐しさに立寄れば、宏壮を誇った校舎は見るかげもありません。暗涙にむせび乍ら講堂跡に来てギョッとなりました。瓦礫の山の下に、頭が二つと右手が一本見えるではありませんか。思わず駈け寄って見ますと、巨大なコンクリートの壁に押し潰されて息絶えた二少女。顔を見て驚きました。同級生だった博子さんと恵美子さんの姉妹ではありませんか。何としても片付けられそうもないコンクリート壁、間断なく続く警報を思うと死体を引き出すことも出来ず、その足で博子さんの家の焼跡へ行って見ました。只一つ残った土蔵の中に、腰の立たない老婆が一人居るきりでしたが仔細を聞くと、

「せめての事に、あの子達の死顔だけでも見てやりたい……でも、この体ではそれも…」

と身をもんで泣く老婆をいたわって、私達は月の出ている戸外に出ました。

「なあ美津子、俺はこう思うんや。あのままじゃ余り可愛想だから、あの子達の死顔を、あのお婆さんに見せてやろうかなと」

「でも、あのお婆さん、体が動かないのにどうして……」

話ながら二人は、いつの間にか講堂の場所に来ていました。死体のそばに歩みよった杉江氏は云いました。

「美津子、その袋をもっといで」

そして袋から大型のジャックナイフを取り出した彼の姿を見てハッとしました。彼の心が判ったからです。そうです。二人の少女を

首にして持って行き、老婆に対面させようと云うのです。先ず博子さんの頭に手を伸ばして、その三つ編みの髪をほどいて一つにまとめて左手でぐっと握ると、右手のナイフを咽喉に深く突き立てました。何度も何度も掻き切り掻り切りして、やっとの事で博子さんの可憐な首は胴を離れて、側にいた私の手に提げられました。ずっしりと重い、血と泥と硝煙で真黒に汚れたその首を、校庭に残っていた水呑場で丁寧に洗って上げました。洗い終って髪をしぼって水をとると、両手に捧げた博子さんの首は、眼を閉じて頬は血の気を失って石のように固く、ありし日の紅く柔い頬と同じものとは思われません。いつも艶やかに濡れていた紅い唇も、今は土色の固い冷い唇となり、半開きになったその奥の白い歯だけがあの日のままです。じっと見つめている中に堪まらなくなり、胸にしっかり抱いて、

「可愛想な博子さん」

と我を忘れて泣いていますと、肩をたたかれました。振り返ると、杉江氏が黒い丸いものを抱いて立っています。勿論、恵美子さんの首です。断末魔の苦しみを現わすように、彼女は両眼をカッと見開き口を開いたままでその奥から青黒い舌がのぞいています。二つの首の髪を一つにまとめて結えると腰にぶら下げて、杉江氏は老婆の許へと引き返すのでした。密柑箱で作った台の上に二つの生首が並べて置かれ、線香の煙がか細くゆれて、薄暗いローソクの光の下で黒く艶やかに光る二尺に余る黒髪を土間に拡げていた二つの生首の凄惨な有様は、今でも瞼の上にありありと浮んで来ます。老婆の手に博子さんの首を持たせてあげますと、老婆はじっとその死顔を眺めていましたがやがてその首の黒髪を掻き上げ掻き撫で乍ら涙にむせぶのでした。その哀れな姿を見て私は居たたまれず、立ち上って涙を押えて走り出、杉江氏もその後に続いて飛び出すと同時に、老婆の号泣が聞えてくるのでした。……その夜から、私達二人の心には生首、特に女の生首に対する異常な憧憬の火が燃え上ったのでしたが、お互にあの夜のことは故意に避けるようになりました。

そして間もなく、滋賀県の山中に疎開先を定めて私達は引き移り一時、農業に従事することになりました。しかし、ここで始めて杉江氏夫妻の秘密を知ったのでした。杉江氏はサジスト、百合子さんはマゾと云う宿命だったのです。ですから、杉江氏はプレイの相手としての百合子、美津子と云う二人が必要だったのです。道具類や小道具類は芝居をしていた時のものを使いました。杉江氏と美津夫さんは夫々かつらをつけ、私と百合子さんは地髪でした。

時は戦国時代。某大名の息女が敵に捕えられたと云う想定です。髪を振り乱した百合姫と妹、美津姫が高手小手に縛り上げられます。男装の百合姫は、無念の歯噛みをするばかり、

「こりや百合姫、その方共の父や兄はどこへ参った。有ていに白状せい」

「何を申す。そのようなことは申されぬわ」

「ふん、申さずば体に聞いて来れるわ」

敵将は、姫を蹴倒し胸を足で踏みにじり、

「申せ、これでも申さぬか」

二、三度、蹴ってから髪を掴んで引き起して鞭打ちます。

「むゝう、むう」

と身をもだえる百合姫の様を見て、美津姫は身も世もなく、

「お願いです。姉上さまの代りに私を打って下さいませ。お願いでございます」

敵将は耳をかさず責め続けます。

「強情な女め、それ裸にせい」

「はい」

と答えて小姓が姫の縄を解いて、裸にしてから縛り直しますと、敵将は憎々しげに乳房を掴んだり刀の緒で打ったりしますが、失神しそうになり乍らも、じっと堪えて口を割りません。

「えゝい、この女め」

今度はローソクに火を点して、彼女の膝に近づけます。溶けた蠟がポトリポトリと膝の上に滴り落ちます。

「あっ、あっゝう、むうゝ」
と、体をよじり乍ら堪えていると、今度は大刀を抜いて美津姫のそばに歩みよると、
「百合姫、お身が口を割らずば、美津姫の首は打ち落して呉れるぞ」
「姉上様、おっしゃらないで、美津姫はここで死にます。どうか、おっしゃらないで」
「おお美津どの、お許し下さい。何事もお家の為、死んで下され。姉も直に参りますぞ」
怒り立った敵将の太刀が、美津姫の首を打ち落します。小姫が首を一段高い台の上の三宝に据えます。敵将は狂ったようになって百合姫を打ち、段に駈け寄っては首に辱しめを加えるのでした。そこへ、姫達の父や兄が救けに来て百合姫が救出され、美津姫の首を丁寧に首桶に入れ念仏合唱して終ります。
しかし、私は、この時になって気付いたのですが、今まで私に出演させた芝居は、いずれも女の生首の出るものばかりでした。袈裟と盛遠の袈裟御前、五大力の小万、玉藻前の桂姫、妹背山の雛鳥、箱根霊験記の初花、三人吉三のおとせとお嬢吉三、一の谷の敦盛、もっとも、これは入場無料の村芝居の時に限っていましたけれど。でも、この中、袈裟御前と桂姫とだけは、小さい乍ら劇場の舞台で演じ、また私の名前も相当な大きさでポスターに書かれていたのです。ですから懸命に熱演しました。実際、袈裟の首（張子）を白布に包んで現われる盛遠の姿を見たときは、自分の首が包まれているような錯覚を覚えました。次の場で簀の子の上に首を置いての演技では、やはり首を下から出して生首の役を喜んでつとめるのでした。例によって自分の髪を簀子に拡げて、私は生きた袈裟の役より死首の役の方が、ずっと遣り甲斐があるようでした。
その後、百合子さんがふとしたことから病死してからは、杉江氏の行動があやしくなり恐ろしくなった私は間もなく家出をしてしまいました。しばらくして戦争は終りました。そして私は、街で知り合った元陸軍中尉玉木進氏の工場で女子工員として働くことになりました。こうして暫しの間、何事もなく過ぎましたが、或日の事、玉木氏が私を映画に誘ってくれました。その帰途、通りかかった天王寺公園の木立の中で歩みを止めて、
「美津子さん、僕は君に聞いて貰いたいことがある。実は、僕はずっと前から君を知っていた。桃割れに髪を結った君を、ふと見た時は夢にまで見たものだった。そして召集を受けてからも、君のことは忘れられなかった。美津子さん、僕は君が好きだ……」
「私もあなたが嫌でないわ、でも」
「なぜ、なぜだ」
「……私、本当は男なんです」
「なんだって、そんな馬鹿な」
仕方がありません。ようやく彼を納得させましたが、その時の彼の言葉は意外なものでした。男でもよいから恋人になってくれと頼むのです。
その夜、私は彼に一切を告白しました。そして生首のことを話し出すと、彼は私の言葉をさえぎり乍ら、
「そうか、君を同好の人だったのか。実は私もそうなんだ。二回兵隊に行ったが、その一

◎女体切腹フォト◎　（略号こし）
「腰元自刃」　村井知可子嬢
大中判印画紙焼付六枚一組　八百円
お家の重宝を扮失した美貌の腰元が激しい責折檻の末、遂に敵方から忍び込んだ間諜であることを白状する。そして今は、せめて武士の娘らしく潔く切腹して果てることを願う。彼女に秘かな好意を寄せていた御側の若侍は彼女の介錯を願って出て許される。今迄の折檻の場は忽ち凄惨な美女切腹の場と変る。という構想のもとに六枚連続の切腹フォト（全場面切腹）六枚の中、二枚は若侍介錯の場面。女体切腹マニアの方は是非一度ごらん下さい。日本髪をふり乱して苦悶するさまは、必ずや皆様を魅了せずにはおかないでしょう。（女性モデルの外、美男男性モデル登場）

回目のことだった。〝中国のある街で、名門らしい人の家へ入ったときのことだった。二人の女が自殺していたのだったが、二人とも死に切れずに苦しんでいた。まだ息はあるけれども、とても助からぬことは一目で判ったので、一思いに殺してやるのが情だと思ったので、思い切って軍刀を抜いて一人の女の首を切り落したんだが、何しろ倒れている相手だからなあ、石畳で刀に瑕でもつけちゃと思ってね。後の一人の方は、兵隊に髪を掴んで引き起こさせておいて打ち落したんだが、大変な血でね。切口から水鉄砲で弾いたように血が飛んで、その兵隊は女の首を持ったままで後へひっくり返っちゃって、胸から血を浴びて可愛想だったよ。自分の部屋へ二つの生首を持ち込んで冥福を祈ってやったんだが、その魂なき二つの個体にすぎない青白い生首が、不思議と可愛く思えてね。私は血と塵で汚れた生首を水で洗い清め、美しい黒髪を指で撫でつけてやった。それからの私は、若い女の死体を見つけると、こっそりと首を切り取って来て夜になるのを待つのだった……〟君が同好の人と知ったからには猶更離れられない。一緒に暮そう」

語る彼の声は、上わずり語尾は震えています。そしてしっかり私の手を握りました。その夜は一晩中、彼の手で生首プレイが行われました。頭の毛を全部上に掻き上げて掴むと握った方はそれで、女の生首を切り取ったような気分になり又、掴まれた方はそのことだけで自分の首が胴を離れたような錯覚に陥るという簡単な方法も、この時初めて体験したのでした。しばらくして彼は、手を離して乱れた髪を梳かせると、何もかも仮定だと前置きして、

「美津子、お前は実にけしからん女だ。もう我慢がならん。お前の命は貰った、覚悟して首の座に直れ」

と云うと、襟髪をとって坐らせ、首を斬りやすいように髪を前に掻き出してから、

「えいっ」

ぴゅうと音がして太刀が閃いて、私の首は前にコロりと落ちます。すると彼は、地に落ちた美津子の首の髪を右手で掴み、左手を切口にそえてつくづく眺め、

「憎い女だったが、こうして首になってしまうと、このまま投げ捨てるのも惜しい気がする。おゝ、そうだ。たとえ暫くの間でもこの首と一緒に暮そう」

そう云うと、彼は生首の髪毛を鴨居にかけ吊り下げて眺めるのでした。（この方法は、この誌面では書かない方が私にはイメージが壊れないので）眼を閉じて物云わぬ首を肴に酒をくむ彼。ややあって、鴨居から髪を解いて首を下すと、今度は棚の上に置いて眺めるのです。（これは以前の杉江氏と同じ趣向の梟首で乱れた髪を長く垂した形のものです）

その後、私達は近所の人達も誰一人疑う者もなく夫婦として暮して居りましたが、ふとした事から私が男であるという噂が立ち、私は居たたまれず姿を消しました。あれから杉江氏は、どうして居ることですかしら。一度お逢いしたいと思いますが、そうもいきますまい。

生れて始めてかけたパーマにピンクのドレスを着た私が大阪でも名の通った『美人座』のダンサーとなって姿を現したのは、それから三日目のことでした。ダンサー生活七カ月不良少年達の仲間入りして今弁天の仇名をうけて顔を売った一年余りの間のことや、男姿に還ってから最近迄の間にも、度々行った女装の楽しみ、それも男装から女装迄の時間をかけずに数分でするスリル、奇クで知り合った某氏とのプレイのこと等、書きたいことは沢山ありますが、余り長くなりますので、又の機会に致します。

（終り）

同封の写真は三十二年四月二十二日、二十六才の私が島田髪をつけたときのものです。若し、この写真に疑問がありましたら御問合下さい。私自身御社まで出向いて参りますし以前御誌に寄稿されました加沢天恩様とは親しくお逢いしたりして御交際願っているのですから、この写真の証明もして下さることでしょう。

（おわり）

読者通信

ですが、少女を見るとサド的興味にかられます。しかし、年上の女の方にいじめられたいと思い、日夜それのみを念じています。一昨年春に嫁いで来た姉が、やはりK・Kの愛読者でしたが、幸福に暮しているので、敢て幸福を破壊することは出来ません。姉のような方で私を苦しめてくれる方が居られませんか。

（神奈川　佐々木浩）

○

ある大型外航船（主にヨーロッパ方面の航海です）の乗組員ですサド関係の女性緊縛写真及び書籍類を御持ちの方、御譲り受けたく思います。（高額にて）又、その方面に興味を持たれる方、文通したし、男女を問いません。御一報下さい。ただし永続性のある方に限ります。（神戸市生田区海岸通五　針間厚皓）

○

皆様の御便りを拝見し、心から嬉しく思って居ります。私共、同性の筑紫美弥子様や三角クラブの皆様と御会い出来たら、どんなに嬉しいことでございましょう。私もこの頃、自家製の黒レースのパタフライを締めて居りますが、この方がパンティ等よりずっと穿き心持がよく素敵でございます。其他、名古屋や岐阜に出掛けて色々美しい下着等を集めて居りますが皆様のコレクションも御見せ下されば嬉しいのでございますが、名古屋近郊の皆様と一度、どこかで御会い出来ないでしょうか。皆様の元気な御話を承れば幸です。

（尾張一宮市　真砂美弓子）

○

初めてお便り致します。小生、奇クを愛読する二十八才の男です。特に褌に興味を持ち愛用しています最近、松坂屋で「屁と褌」と題する随筆を発見して買って参りました。著者は福富織部と云う人です。若しかしたら、すでにお持ちの本かも知れませんが、そうでなかったら贈りたいと思います。御一報下されば早速、送ります。勿論無料で差上げたいと思っています。

山口幸一様　（A生）

○

はじめてお便りを差上げます。小生、二枚目には聊か遠いけれど独身寄宿中の二十五才の男子、軽度のサジストで、若い女性を縛ることに興味と憧れを抱いております。二月号、服部氏、Y・M氏の言に共感、ついでに誘われて筆をとりました。奇クは二十九年来の読者で、この道の映画に関しては嵯峨さん達には及ばずとも、多少の年季を入れたつもりです。私も見たり聞いたりに飽き足らず、これまで、たった一度、女性を縛ったことはありますが、イザ、実行の段になると、幼稚で我ながらぎこちなく、冷汗三斗の思いを致しました。奇ク愛読者の皆さんも、その大半は小生に準ずる軽いアブ愛好者なのではないでしょうか。同好同憂の皆さんの中に、初心者同志でプレーを楽しんでみたいという勇気のある方はいらっしゃいませんか。勿論貴女の秘密は守りますし一切、紳士的行動をとることを誓います。女性を傷つけるのではなく、縛るだけが楽しいのです。そのような写真のモデルになって下さる方があれば、出来るだけの御礼はしたいと思っています。東京

○

私は、女性が身につけた金属、例えばスカートのホック、ブラウスのホック、きらきら光るイヤリング、金歯、腕環等にあこがれを持っています。先日、デパートでナイロンパンツを買い求め、ホックを六個ぐらいつけてはいて見ました。そして鏡台の前でそのホックをはずして眺めるのが、私の癖のようになってしまいました。どなたか私と同じ趣味の方の誌上での出現をお待ちします。

（茨城　大曽根恒夫）

○

木村よし子様、十一月号の貴女様の記事拝見しました。是非、お便り頂きたいものです。私は二十四才のマゾに興味を持っている者

◎写真特写引受◎

特別に変つた着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。

（返信料同封下さい）

のK・H子さん、よろしければ同じ夢と悩みを語りたいものですね小生の目下の仕事は、映画やら放送やら、一応、時代の尖端をゆくサラリーマンと自負致しております。もともと、名古屋の生れなので、たまには国へも帰ります。M・Mさん、弓子さん、杉さん、T・Yさん、浦野さん、それに九月号の記事と、人材の揃った名古屋勢に、小生も一枚加えて下さいませんか。そして是非、お便りお願い致します。では、貴女との夢の実現を願って筆をおきます。

（東京桂）

○

安田由美子様。お便りありがとうございます。しかし、おやめになった方がよいでしょう。何しても私は一度、馬に跨がれば三時間や四時間は平気と云うほど強くなっているのですから。乗馬による快味を味わった女性は、恐らく一生、忘れられない思い出が残るものです。鞍の味、手綱の味、拍車の味、長靴の味、鞭打の味、いずれも口舌では味わえず全身で味わう味です。どれをとってみても、口では云い現わせぬ風合を持った快味です。Mの人も時間と環境を調整すればSに変ります。あなたも女性です。新憲法下らしく女権を主張し、性格改造を行い洗脳して乗られることでなく、跨ることを覚えては如何ですか。幾ら乗馬に励んでも、全く気分の高揚を見ないのであれば致し方ありませんが、私の処へくる前に取りあえず練習して見て下さい。便りによれば女子大生の身、世に出れば主動的に動かねばならぬ身で始めから馬になりたいとはいささか心得違い。それなら、競馬の掃除婦か乗馬クラブで楽しむ令嬢の下穿洗でも志願した方が適切でしょう。あなたと同年輩の女性中にも鍛錬を行い精神の強化に余念のない女性が、最近は多くなりました。乗馬クラブに出かけ、拍車使い、鞭使いの荒い美しい女性に懇願すればひょっとすると汗ばんだショーツぐらい頂けるかも知れません。

（乗杉貴代子）

○

神戸、八潮三枝子様。二月号にて貴文を拝見し、大変感激しています。小生は既に三年にわたって誌上に寄稿もして来た、かくれもない「女性の鼻マニア」であります。去年は殆んど米国に赴いていたので、暫く遠ざかっていましたが、昨年末に帰国、K誌各号を見て（特に貴文を見て）大いに吾意を得、喜こんでいる次第です。小生は四十八才、独身主義者、少しくサジストの傾向がありますが、強度のものではなく、自分では耽美主義者を以て任じています。女性の鼻については、強烈な興味を持っていますが、それも審美的な観点に於てであり、醜い鼻や傷つけたりすることには全然、意慾を感じません。そんな訳で、丁度あなたの御希望にピッタリと云う処でしょう。器具としては、ゴムバンド、ビニールテープ、ポリエチレン・ツール等を使用していますが、決して傷つけたり或は形に影響を与えたりすることは絶対に致しません。それは本来の私の好みに反することですから。唯、写真は是非、撮らして戴きたいと思う

女体緊縛フォト

G組　大中判印紙画焼付

各組1枚　一枚　一三〇円
一組　五枚　六〇〇円
十枚　一〇〇〇円
（送共）

G1　鉄鎖と柔肌（高瀬　忍）
G2　股間縛正面（高瀬　忍）
G3　海老晒し（萩千恵子）
G4　羞紅の椅子（菅登紀子）
G5　最感の帯（伊吹真佐子）
G6　アイデア（萩千恵子）
G7　叫喚の森（伊吹真佐子）
G8　全裸目隠し（村田那美子）
G9　優すがた（花坂道子）
G10　開股一番（萩千恵子）

E組（9×13cm印画紙焼付）

ES1　ヌード緊縛集（佐賀）　三枚一組　二〇〇円
ES2　全裸悦虐集（須川）　四枚一組　二五〇円
ES3　臀羞（佐賀）　三枚一組　二〇〇円
ES4　酒宴の弄者（佐賀）　二枚一組　一五〇円
ES5　脱がされる娘（須川）　五枚一組　三〇〇円
ES6　あわや寸前（佐賀）　二組一枚　一五〇円
ES7　剝れたズロース（佐賀）　五枚一組　三〇〇円
ES8　乙女のすべて（花坂）　七枚一組　四〇〇円
ES9　女学生の縛り（須川）　二枚一組　一五〇円
ES10　緊縛のベッド・シーン（佐賀美智子）　六枚一組　三五〇円

女体切腹構成案図譜
中康弘通氏案　北原純子女史画
キャビネ版印画紙密着焼付　八枚一組　千円（送共）

のです。勿論、鼻の部分の大写しであり、しかも変型された鼻の穴と、それに伴う唇、その他が写される訳ですから、絶対にあなたと云うことは分りません。このことは、過去十数人の鼻について写し、又その一部分をKK誌上に発表していますから、参考に御覧下さい。猶、あなた以外にも多数の「女性の鼻被虐マニア」の方が、居られると思いますが、ぜひ、この機会に、そうした友人が得られれば、忘外の幸いと思って居ります。（マナベ・四十八）

○

責愛好者が多くなったのは非常にたのもしく嬉しく思います。静岡の北沢氏が云われる男性の責に興味をもっている方に新東宝映画の「戦雲アジアの女王」を御薦めします。高島忠夫の扮する山野中尉が馬賊の巣窟に捕えられ恋人川島芳子の面前に鞭打たれて責められる場面がありますが仲々よく撮れています。高島は上半身裸にされて台の上に腹這わされ四肢を緊縛されて背を太い革鞭で打たれるのですが、一打ち毎に苦しそうにうめく声が効果的でした。五つ六つ打たれても女の素性を白状しないので、今度は髪の毛を掴んで引起されて炭火の中に入れてある焼鏝で眼を焼き潰されようとする。鏝の熱気が目に近ずくと苦痛のために「うーむ」とうめく声が素晴しく、あの一カットを見るだけでも入場料を払って損はしません。高島は一寸子供っぽいので川島芳子に愛される日本将校の男らしさや逞しさが欠けていますが、美貌なので効果はありました。難を言えば頭髪が長いため軍人らしさを失くしているのが残念です。軍事物の映画ではどうしても頭髪が丸刈でないと効果は半減するという事を映画製作者は認識してもらいたいと思いました。シネスコでカラーだったので高島の背中についた鞭の跡など生々しく男性責ファンを充分に堪能させました。「憲兵とバラバラ死美人」の下士官の責とともに近頃新東宝の映画製作者はKKを目を通しているのかかなりコクのある責場面を見せてくれて嬉しいと思いました。次に製作される「天皇・皇后と日清戦争」でも日本軍人の探偵が弁髪の支那兵に捕えられて鞭打ちや火責の拷問に遭う場面を挿入してくれたらどんなに嬉しいかと思います。（東京　R・S）

責められる女、責められる場面八態
北原純子画『風流女体アラベスク』略号（ふう）
大中判印画紙（タテ十八糎ヨコ十三糎）焼付　八枚一組　八百円

○

東京の菅様。お手紙有難うございました。御連絡先がきまらないそうで、取敢えず誌上を借りて御返事申上げます。貴兄の対象が年令的には青年・壮年層に限られ、所謂美少年を好まない事や、職業的に軍人・警官等を理想とされる点、又軍人のタイプとして、頭は五分刈で口髭のある中、大尉級というのまで余りに私の好みと一致するので驚いたり喜んだりです。貴兄の描かれた責絵と、私の撮った責写真との交換御希望は、私の方こそお願いしたい位で、大いに期待しています。小説の資料の交換も面白いと思いますが、やはり作品を見て戴いた方がいいのではないでしょうか。それにしても貴兄の創作を是非誌上で拝見したいものです。その他、驚く程多数の同好者からお便りを戴きました。〝奇ク〟の読者の中で、ソドミアのしめる率も案外馬鹿にならないと思います。私も今回絶対に意を強くしました。（青葉）

○

私は女性の鼻を嬲る事につき最大の女性サドを満足する青年ですまだ奇クを知らない以前から女性の鼻をいじめることに色々な空想を求めていました。ところが、はからずも今度奇クを愛読するようになってから鼻責めに関する文章が見られ、こんな嬉しいことはありません。女性の両手両足をしばり上げ、彼女の顔を自分の膝の上に仰むきに乗せ、顔を左右に動かそうとするのを押えつけ、日頃高慢ちきなツンとした鼻を、思い切りいじめてみたいと思います。親

指と人さし指との間に女性の柔かい鼻がつまみ上げられ、上の方にねじられたり左右にひねり曲げられたり、その度に彼女の鼻の穴がちじんだり拡がったりする鼻腔の形や、鼻をひねられたり、いじられたりする時に発する女性の鼻声や苦しそうな口許等、女性の鼻責めを想像すると私のサドは大変に興奮します。又ちよっとした器具での鼻責め、たとえば左手の指で鼻腔を拡げ、右の手に耳かきをもって女性の鼻の中をくすぐるのも鼻責めの一つの方法だと思います。その点、三十二年八月号の口絵に書かれた四馬孝氏の「美への冒瀆」は、とても素晴らしいものでした。後手に縛られた若い女性が、彼女の鼻を皮の手袋をはめた指先で無残にもつまみ上げられていましたが、細くなった苦しそうな目つきや塞がった鼻腔描写は絶讃すべきものでした。（私はこの絵によって奇クの愛読者になったのです）神戸の八潮三枝子様、二月号で貴女の御通信を拝見しまして貴女のような女性こそ私の鼻責めマニヤのお相手としてこの上もない方だと思います。出来ますれば是非ともお逢いしてお互のサド、マゾを満喫しようではありませんか貴女の自由を失わせておいて貴女の鼻を思う存分いぢめて涙と鼻液で顔中がびっしよりになる位責めてみたいと存じます。多少遠隔の地ですが是非ともお逢いしたいのでお便り下さい。又、九州の方、特に福岡県在住の女性の方で自分の鼻を嬲られることを希まれる方が居られましたら、どしどしお便り下さい。勿論、緊縛、猿轡のマゾ希望の方も、大いにお手紙下さい。必ず御返事申上げます。

（福岡　木村友彦）

○

小生も、ずつと以前からの愛読者の一人ですが、この欄に投稿するのは今回が始めてです。最近、つづけて小生の願いを満たしてくれそうな記事や、口絵が掲載されましたので勇気を得て一文を認めた次第です。さて、小生も〝少女ファン〟で、兵庫のYM氏と同様に中学三年位の美少女に魅力を感じます。今までの写真や、口絵、記事等は殆んどが成熟し切った女性ばかりで失望しておりました。所が、新年号早々、女学生の緊縛口絵が載り、幸先よしと喜んだわけですが、慾をいうなら、セーラー服を半分位脱がせて可愛いい乳房をのぞかせて頂きたかったですね。第一、制服をきちんと着たままおとなしく縛られるのは不自然です。抵抗のあとも痛々しく縛られてこそ魅力も増し、少女らしさを味わえたのですが思春期の少女を半裸、又は全裸にして縛ったり写真を撮ることは事実上困難でしようが、今までのようなパーマをかけた乳房の大きい大人びた肢態のモデルでは、いくら制服を着ても感じが出ません。細っそりと裸にむかれた小さな乳房にお下げ髪が恥かしそうにゆれる光景や、オカッパ頭の女学生が制服や下着を

新作切腹写真『女体自決悦虐図』略号（えつ）
＜血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真＞
大中判印画紙（タテ十八糎ヨコ十二糎）焼付　七枚一組　千　円

最新作
女体緊縛写真
花坂道子嬢全裸緊縛集
大中判印画紙焼付
十枚一組　八百円
可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。（略号はな1）

◎花坂道子嬢
股間縛り集
大中判印画紙焼付
十枚一組　八百円
数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。（略号はな2）
◎以上二集二十枚にて　千五百円

散り乱された側で、全裸でふるえている場面を何度か夢みたことでしょう。せめて、少女のヌード写真でも手にすることができれば、飛びついて筆の力で縛ることができるのですが、地方都市ではその望みもなく、貴誌や同好者におすがりするばかりです。青森のYT様、東京の東一郎様、兵庫のYM様、他愛読者の皆様小生の夢を叶えて下さるような資料又は、お知恵をお恵み下さい。小生も当地でできる限りの努力をして皆様と喜びや悩みを分ちたいと思います。

（福岡　けいえむ生）

○

始めてお便りいたします。私は奇クの大版の頃からの愛読者で女を責める小説や絵に云い知れぬ魅力を感じます。古川裕子様の「長期刑」「囚衣」等にひかれ、その後は「潰滅の前夜」「淫火」「呪い塚縁起」等又一連の魔女裁判に関する読物等々そして四馬孝様の絵は毎月待ちこがれて二十日を過ぎると、もう来ているかと本屋へ足を運びます。毎月本誌の読者通信欄を見てお互いに楽しんで居られる方々の幸福をうらやみながらも、性来の気弱さから、お便りを出す事も出来ず淋しく手製のサルグツワで自分を責めて本を見るだけで不満ながら満足しています。二月号のこの欄で神戸の八潮三枝子様のお便りを見て三十一年六月号の「美貌の屈辱」を思い出し早速御返事をと心では思いながらも例の気弱さからとうとうお便りが出来ず残念でしたが八潮様に啓発されて意を決してこの便りを書きました。市内か近在の方で御交際願える女性の方はありませんでしょうか。こんな私にでもお便り下さる方があればどんなに楽しい日々が送れる事でしょう。お便り誌上に発表される日をお待ちしています。

（明石　萩原敏夫）

○

愛読者の皆様、早速沢山のお手紙を頂き有難う存じました。それぞれ方達には必ずお返事を差上げておりますが重ねて誌上よりも御礼申し上げます。なお鈴木さん宅へ御訪問下さった方も二、三ありましたが、小生の住居は別にあり鈴木さんには単に手紙の取扱いのみを依頼してあるだけですので無駄足をおかけしましたが悪しからず御諒承下さい。また皆様の御希望の復刊以前の奇クやスチールその他参考書類などの余分にある物は贈呈もしておりますが、それについて金銭の御礼云々とのお手紙を下さる方もありますが、然しそのような一切の御礼など絶対に御断りいたします。却って迷惑になりますから御心配などなさいませんように。小生は愛好者同志としての純粋な気持で御便宜をはかっているのですから。

（千葉　阿部秀）

○

四馬孝氏といえば、すぐに素晴しい皮革の「光沢」とその悩ましい「しわ」の生みだす冷酷にして深刻なエロチシズムを思い浮かべます。かように四馬氏と革とは密接な不可分関係をもっておりますわが愛する奇ク誌上に牛革拘束服や革責具をふんだんに駆使した責め絵を毎号味わえますよう切にお願い致します。女体を締めつける革囚衣が発散する汗を含んだ動物臭やギュウギュウ、ギチギチとき鳴る、その音までが直接にアート

花坂道子嬢　優美姿態緊縛選

純黒調大中判印画紙焼付（タテ十八糎ヨコ十三糎）

花坂道子嬢全裸緊縛集（はな1）花坂道子嬢股間縛り集（はな2）の大好評により更に素晴しい作品の発表を強く要望されていましたので、ここに前二作とは変った新しい観点から狙いをつけた作品を提供いたします。

★ヌード縛り（略号はな3）二枚一組　三百円

★股間縛り（略号はな4）二枚一組　三百円

北原純子責画傑作選

〔女学生の羞恥責め〕（略号女学生）
大中判印画紙焼付　四枚一組　五百円

〔ハートの的女体洗滌室〕（略号はあと）
大中判印画紙焼付　二枚一組　三百円

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕（略号ぬうと）
大中判印画紙焼付　二枚一組　三百円

頁から匂い聞えてくるような、強烈なタッチの画面を待ちこがれております。次にお願いしたいことは、今まで殆どが、拷問や拘禁場面に限られていました情景を、更に一歩踏み切って女性の「死刑執行」をテーマにとりあげていただきたいのです。絞首刑（現代の落下式や又明治初年の分銅懸垂式）斬首、（刀、斧、ギロチン）十字架、ハリツケ、火焙り、等々いずれも受刑者は革衣又は革具で拘束されて処刑されることが望ましいのです。「革」と「死」を結びつけることによって一層陰惨な冷酷なエロチシズムがかもし出されることと思います。同時にヒロインの選択分野を時代的にも場所的にも、もっと拡大して下さい。洋の東西を問わず少女から豊満な中年婦人に至る各種階層の女性を登場させて下さるよう切に希望いたします。（四馬氏礼讃の一愛読者より）

○

「耳環」、「耳朶にあけた耳環の孔」なんと素晴しい魅力のある飾りと孔であろう。私は好きで好きで堪らない。近年流行のイヤベンダトは単にネジやクリップではさんであるだけで感じが出ないから駄目です。外国婦人の耳朶に孔をあけてそれに通した金環や飾りの重味で二分三分と孔が大きくなって貫通した孔がつきぬけに見えてゆらゆら揺れる動揺が堪らなく好きです。私は二月号にも書いた通り右耳朶に四カ所左耳朶に二カ所の孔へ二十匁から五十匁程の錘りをぶら下げて動感と耳朶の自虐を楽しんでおります。私の耳は大耳で八センチ余りで錘りを下げると十センチ程となります。又耳環と鼻環とを連結して楽しみます。三十年五月特大号の伊吹嬢の桃源境の鼻環は孔をあけられたのでしょうか。一度伊吹嬢の美しい小指を鼻環の孔へ根元迄通してゲイゲイと引張ってほしいと思います。二十九年七月号の吾妻新氏の耳環の手術以後耳いじめの記事がないので心淋しい限りですが、何か耳環鼻環の文献がありましたら是非載せて下さい。KK愛読の女装マニアの諸嬢（あえて諸君といわず諸嬢と呼ぶ）及び全女性の方々御願いします。耳朶へ孔へあけて下さい。（京都　佐々木耳環生）

○

M・H子様へ。小生二十五才の男子。軽いサディストで、KK誌上に掲載される告白文などを読むと、皆様が可成りのプレイを試みておられる様子なので、少々おじけづき、小生などの出る幕ではないと遠慮しておりました。ところへ貴女の文が掲載され、或は小生同様の気持を持っておられる方なのではないかと推測して筆をとりました。貴女は未だ経験がないと仰有る。小生も経験がないけれど女性を縛ってみたいとは常々思っておりました。同じ東京に貴女という同好者を知って、「コイツアはるから縁起がいい」と喜んでおります。プレイ云々はさておいて一度話しあう機会をもってはみませんか。お互に未経験者同志ですが、小生、僅かながらも書籍は持っておりますので、それらを参照しつつ研究するのも面白いのではないかと思っております。小生に対する種々の御懸念――就中不徳義漢等――は一切お持ちにならないで下さい。

（東京　A・R生）

○

三月号拝見、大塚啓子嬢の緊縛写真の口絵はただただ素晴しいの一語に尽きます。責写真マニアの小生にとっては誠に得難いものでした。一月号よりずっとニューガールのシリーズが始まり若く美しいモデルが三人も加ったことは有難い極みです。それに代理部便りでは責写真集を企画中とのこと、今から楽しみにして居ります。出来ますれば写真集にもモデル諸嬢

◎浣腸連続フオト◎　略号（ちよ）

（9×13センチ）印画紙焼付　十二枚一組　九百円

長らく浣腸フオトの作成を中止しておりましたが、同好者有志の御希望により、ここに久方ぶりに十二枚連続フオトを完成分譲することになりました。マニア垂涎の硝子製浣腸器、エネマシリンジ、イルリガートル、いちじく浣腸等を駆使して女体浣腸の雰囲気を十二分に醸し出しました。何卒絶版にならぬうち御申込のほどを。

◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙（9センチ×13センチ）焼付

新人モデル嬢の中、三人の得意のポーズを選んでここに提供いたします。

愛川悦子嬢の巻

★ベッド変型縛り（略号しん1）
四枚一組　三〇〇円
ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクションをふりまいてゆく。

★全裸強烈縛り（略号しん2）
四枚一組　三〇〇円
山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖しくゆらめく。

大塚啓子嬢の巻

★股間縛り（略号しん3）
六枚一組　四〇〇円
その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

★全裸縛り（略号しん4）
五枚一組　三五〇円
豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

田中芳代嬢の巻

★セーラー服縛り（略号しん5）
五枚一組　三五〇円
可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとって縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

★股間しばり（略号しん6）
四枚一組　三〇〇円
ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。

の職業、身長、体重、年令等をLT商会式に商品と見たてて紹介して頂きたいと思いますが如何でございましょうか、勿論、値段はこちらで適当につけて悦に入るという趣向です。それから静岡市の北沢孝司様御便り拝見しました。親しく御交際下さいます様。外にかくれた女性マゾの方御便り下さい名古屋MM様、青森YT様、同意見ですので今後御指導下さる様御願いします。

（静岡　平林要助　三十一才）

○

小生は会社員です。貴誌の愛読者の一人です。ここに自作の責画二葉同封しました。貴誌の口絵にでものせて頂ければ幸いです。小生の絵の特徴を申し上げますと絵をごらんになれば想像できるように、一、後手（高手小手首縄）に縛る。二、足をも縛る。三、猿ぐつわをはめる。の三つを揃えて女の自由を全部奪うのが原則ですが時には二、が省けても、一、と三は必ず揃えます。特に猿ぐつわですが、これは口だけにして鼻の穴を露出させ、女性特有の鼻の穴の美を強調したいと思います。さて絵の説明ですが、㈠女将の甘言にのせられて若い娘が料亭の離れの一室に引っぱりこまれるや、どらんの通り自由を奪われて好色な男の前でおそれおののいております それでも必死にもがく手首のあたりと声を出せないのを諦めたようになよなよした細い鼻の穴との対照的なのを画いたつもりです。㈡若くて美しいプライドをもった女が滅多に覗いてみたこともない自分の鼻の穴の奥と隅、――そこにはかくしておかねばならない鼻毛や鼻糞が無惨にも好きな男のために白日下にさらされている。羞恥と憤怒で一杯だが、手足の縛しめと猿ぐつわは一切の自由を奪いさり次第次第に諦めて心が移ってゆくという絵です。

（東京　畑政一）

○

私は奇クのずっと以前からの愛読者で女性の足に対するフェチシストです。女性の足に関心があるといってもマゾではなく、女性に対してはサジ的です。例えば何かの事情で身動き出来ない状態になった若い女性が身悶えしている時など、その足の指の表情を見るのを好みます。今迄奇クには旧刊号にも復刊号にも二、三女性の足フェチの記事が載ったことがありますが、まだまだ私の満足するような記事や写真に遭遇しないのを残念に思っています。宝塚二三夫氏の「ボクの責め方」で大変私に似通った点が見受けられますが、然し、氏はどちらかといえば脛に対して強い魅力を感じておられるようです。私は女性の脛の美しさに対しても勿論魅力は感じますがむしろ、足の指に対してより強い関心を持っております。後手に縛ら

れてころがされた女性の足を見るのが好きです。別に縛られておらなくとも手術台にのぼった女性、或は重い荷物を持って自由のきかなくなった女性、そういった際の足の表情に心をひかれます。今迄美しい足の持主を探しあてる度にモデルになって貰って相当枚数撮影しました。女性の足で第一に肝心なことは色が白いということです。どなたか私と同じように女性の足に関心を持っておられる方がありましたら誌上で御呼びかけ下さい。私の連絡場所をお知らせいたします。女性の足の写真が数十枚もたまっていますので、その中気に入ったのを進呈いたします。

（大阪　村井生）

○

昨秋、この欄に褌愛好者の交流を提案した「東京Y」です。その後、反応を待ちましたが、此の間所謂「褌」なるものについても、いろいろの好みがあって各者まちまちなことを知りました。越中褌で紐の細いのをよしとする人、六尺についても白をとらず赤褌のみを好む人、こうなると褌グループも幾つかに分けねばならぬと思いました。もっとも私の考えるところでは、おそよ越中褌など名ばかりの褌で、赤ん坊のおしめと異るところがないのですが。六尺（それ以上の長尺をも含めて）の良さは、やはり自らを男として意識し必要とあれば、褌一本の体を張り力の限りをつくす。その緊張感が絶えず与えられてくる所にある。一面には又、我と我が身を縛るところから心の中の何物かに満足を与えることであろうと思います。第二の理由は褌愛好者にSとMの共にあることを（時にはその一方が強くなることもありますが）証明しており、これは以前の誰かの投書にもあったように記憶しています。内田氏、一褌亭の貴方から賛同の御意見、そして又褌一本で互いに話を出せたらとのこと、全く嬉しい限りです。いつの日にかこの希望を叶えたいものと、私は褌の三つ又をぐいと締め上げて心躍らせているのです。連絡方法、御教示下さい。香川氏、「帝国海軍の私刑」を発表された貴兄からも、此前私への呼掛けを此の欄に拝見しました。私も軍隊特に褌について意識的であったような海軍のありし日の姿を知る貴兄から更に伺いたい多くの事があると思います。ただ誠に残念なのは私の狭い偏見にもよるのでしょうが、私への呼び掛けの通信欄で「セラン」等の入手につき、女性にも言葉をかけ居られることです。私自身もかの女性と同席したようで、先方の方には誠に失礼ですが、私には耐えられない所です。私はあくまで男だけの私の世界に呼吸したいと念願しているのです。静岡市の北沢孝司兄、二月号に投書し貴兄より文通御希望の「東京A」も実は私です。縄と褌につかれた二十三才の男と云われますが、私の心を正しく裏返した貴兄こそ、我がよき対象です。今までに後手にくくられた貴兄の身体のぬくもりが私の胸毛を通して肌に伝わってくる程の感じすら抱かせます。褌一本の、まこと男一匹、これを縄の餌食とし奴れいとして、私のカメラは凌辱の貴兄の姿を心ゆくばかりなめまわし素晴しいイメージをフイルムにおさめることでしょう。貴兄への連絡先を是非とも御教え下さい。早速御手紙を送ります。そして桜咲く頃には伊豆の西海岸あたりでも、ゆく春のひとときを共に送ろうではありませんか。

（東京　Y・A生）

【新版】女体緊縛フオト　◎分譲◎

R組　六十組　（印画紙の大きさ　9×13cm）

各組一枚一組（全部送料共）

一組一枚　一〇〇円
五組五枚　四〇〇円
十組十枚　七五〇円
二十組二十枚　一四〇〇円
三十組三十枚　二〇〇〇円
四十組四十枚　二四〇〇円
五十組五十枚　三〇〇〇円
六十組六十枚　三五〇〇円

R1　柔肌と荒縄（須川令子）
R2　海浜の緊縛（萩千恵子）
R3　床間の飾り（佐賀美智子）
R4　高手小手（花坂道子）
R5　海老縛り（萩千恵子）
R6　後手猿轡（須川令子）
R7　後手足縛り（村田那美子）
R8　鏡うつし（伊吹真佐子）
R9　股間しばり（須川令子）
R10　鎖縛晒責（萩千恵子）
R11　股間縛正面（伊吹真佐子）

○

青葉槙一様、私の拙い文章がお目に止り光栄です。警官の制服姿に憧れる点で一致出来ました事を心から嬉しく思う次第です。私の住んでいる町に小さな橋が懸っています。その橋のたもとに交通巡査の絵姿の標識が立っています。夜光塗料が施され、自動車などのヘッドライトが凛々しい警官の姿を浮き上らせます。私は夜、好んでその物言わぬ巡査の傍を通ります。私の顔のあたりが丁度、立てる警官の太股に当ります。私は人通りのないのを見すませ熱い接吻を与えるのです。ナマの警官に果たせぬ夢を私は立像に心ゆくまで捧げるのです。又、この土地の名物、花火大会の折など、機敏な動作で群衆を整理する若い交通巡査に行きずりの接吻を彼の肩の辺りに残してゆくスリルも捨て難いものです。兎に角、左様に私の憧れは制服の警官に向けられています。青葉槙一様、小生の方からもお願いします。どうか今後よろしく文通の程、お願いします。又、男性ヌードにも非常な興味を持っています。（兵庫・凡生）

○

奇ク三月号を見て、待ちに待った藤山秀緒さんの「屠腹乙女桜」後篇が載った。前篇と共に記事としては誠に結構であるが、挿絵物足りない。この事は新年号「愁風連」の挿絵に対する批評もある通り挿絵執筆者は、記事描写をそのまま（筆者の考えを加えずに）画にして欲しいものだ。例えば、乙女桜の由美の下着（下）は白無垢となっているのに様物となっている。乙女としては花模様の下着の方が一見好ましいと思われるが、死装束としてはやはり白無垢の方が実感が出ると思う。目下「責小説特集号」が発売中であるが、この次は是非「女性自刃小説特集号」の発売をしたい。欲しいものだ。以前、限定版としては出たらしいが相当高価な為普及しなかったのではなかろうか。今度は大正年間の雑誌「うきよ絵」にならって「責小説」程度の大型版を出してもらいたい。

（滋賀・田中正治）

○

読者の皆さま今日は、私はこの欄へ通信を寄せられる読者の方々と同じように、ずっと以前から愛読者で、時折、欠かすことはあってもこの数年ずっと引続いて愛読しております。この欄へ投稿するのは初めてですが、皆さまからの便りは本当に楽しみに拝見しています。自分一人だけが好みに合った友達がほしい、といった通信なんかは全然興味がありません。やはり読者のための読者通信欄としては読者全体に訴え関心を持たせるような内容のものを選

R12 女学生縛り（須川令子）
R13 尻立縛り（萩千恵子）
R14 開股しばり（川辺砂登子）
R15 猿轡の魅力（伊吹真砂子）
R16 トイレ縛り（須川令子）
R17 立木しばり（村田那美子）
R18 緊縛横臥（厚狭春江）
R19 足揚梯子責（伊吹真佐子）
R20 いたぶり（春日、伊吹）
R21 帆立縛（萩千恵子）
R22 強烈梯子責（伊吹真佐子）
R23 椅子責め（佐賀美智子）
R24 逆さ吊り（伊吹真佐子）
R25 後手吊責め（伊吹真佐子）
R26 股間縛後手（中塚文子）
R27 逆海老責め（伊吹真佐子）
R28 高手小手（加賀利江子）
R29 変型しばり（萩千恵子）
R30 松樹後手縛（村田那美子）
R31 くさり責め（伊吹真佐子）
R32 薄羅の緊縛（加賀利江子）
R33 股間縦縛り（中富綾子）
R34 首縄股間縛（坂口利子）
R35 手足逆吊り（伊吹真佐子）
R36 和装責め（藤田節子）

R37 仰向悦虐責（川端多奈子）
R38 後手首縄締（加賀利江子）
R39 乳房下緊縛（村田那美子）
R40 肉体美誇示（伊吹真佐子）
R41 お灸責め（春日、伊吹）
R42 後手猿轡（萩千恵子）
R43 松樹しばり（村田那美子）
R44 コルセット（中塚文子）
R45 股間しばり（〃）
R46 手足緊縛（萩千恵子）
R47 後手しばり（加賀利江子）
R48 御開帳（萩千恵子）
R49 くさり責（川端多奈子）
R50 折檻の魅力（須川令子）
R51 雁字搦目（津森静子）
R52 股間緊縛（〃）
R53 のぞき見（〃）
R54 引き裂き（〃）
R55 後手しばり（〃）
R56 猿ぐつわ（〃）
R57 苦悶の表情（〃）
R58 あきらめ（〃）
R59 強烈しばり（〃）
R60 トップモード（〃）

んで下さるよう特に係の方にお願いします。最近はなんだか、自分一人だけの一人よがりや、友達を求める手段として悪用しているような文章が、この欄でも多いようで失望です。どうか、そのような通信は没にして、全体の読者が読んで興味のあるような通信、例えば、前号の批評とか、他誌の紹介とか、編集者執筆者の先生方に対する感想や呼びかけといったものをドシドシ選んで下さい。私はこのような通信には非常に興味を持っています。これは雑誌を一部の人達に悪用されない為にも、読者全体の利益の為にも、必ずやって頂きたいと願います。さて、私のことですが、例の通り平凡なサラリーマンで毎日平凡で平和な生活を送っております。又、それだけに、探偵雑誌や奇ク誌には興味を持ち愛読しているわけです。文章とか絵、写真、そういったものから空想を働かすことが好きでもあり得手でもあります。最近の本誌は非常に高度のものとなり、内容も次第次第に充実してくるようで嬉しいかぎりです。私の拙い筆ですが、別に最近号の批評から悪口といったものを書いてみましたので、もしおよろしかったら掲載の栄を賜れば幸甚です。（熊本・ウスノロ生）

○

小生は浣腸マニアです。最近の本誌には浣腸の記事が殆んどなく小生には大いに失望ですが、しかしそれでも奇クからは離れられず毎号購入しています。奇クが手元にないとなんとなく淋しいのです。他の記事を読んで、僅かに慰められておりますが、出来ますれば北原先生に次のようなテーマで絵を描いていただけないでしょうか。全国の浣腸ファンの皆様、皆様もどうぞ小生の願いに応援して北原先生にお願いして下さい。それは十六、七才ぐらいの制服の美しい女学生が食事中にオナラをしたというので四十才位の女と同じく十七才位の同年輩の娘の二人に浣腸責にされているところ。そして、次は二階の診察室のような部屋で一米ぐらいの高さの診察台の上にうつぶせにされた女学生が、前記の二人の女性から浣腸責のあとの身体検査をされているところ、その他、便器を使った排泄の場面なども面白いと思います。構図の考え方によって誌上に載せられるような絵が出来ると思うのですが如何でしょう。尚、他の浣腸ファンの方々も、どうか、どしどし、この欄でも顔を出して下さるようお待ちします。（京都　浣腸ファン生）

○

少しばかりの注文でしたのに折返し、直ぐ御送付下さって有難うございました。花坂道子嬢の第二集、全く素晴しい写真なので封を開いて思わず、あッと驚きの叫び声を挙げてしまいました。今迄私の探し求めていたフォトはこれだと思いました、本当に素晴しい一語につきます。花坂嬢の近代的な美貌が画面全体にふくいくと匂い出して、このフォトの縛りを一段と素晴しくしています。それも只美貌さばかりでなく可憐なマスクと姿態の巧みさが、より一層美しく見せています。早速第一集も求めたいと思いますので、お手数ですが、よろしくお願い致します。それから、これは単なる同好者としての願いですが、今後花坂嬢の写真を作られる際は、次のような含みを加えて下されば、これに越した幸いはございません。猿ぐつわは豆しぼり、普通の日本手拭、西洋タオル、純白の布、柄物の布等々種々の趣向のものを変えて頂く。豆しぼりは時代物によく、洋間などのバックの折は近代的な明るい模様物がよいのではないでしょうか。三月号の口絵で縛られた女優たち緊縛映画の名場面より、の「冥土の顔役」毛利郁子さんがされている猿ぐつわのハンカチかネッカチーフのような柄のものは

女体褌美の緊縛
（9×13センチ）印画紙焼付
五枚一組　四百円
略号（こん1）

女体の褌美フォト
（9×13センチ）印画紙焼付
二枚一組　二百円
略号（こん2）

甲斐仁参案
四馬孝画
『涙のダイヤモンド』略号（なみ）
大中判印画紙焼付　二枚一組　三百円
○胃の洗滌　○ヒマシ油責

よかったと思います。一度花坂さんにも、あのような柄物でお願いしたいと思います。花坂さんのマスクでしたら決して映画スターにも負けないと思いますから大いにたのしみです。次に縛り方ですが花坂さんのポーズのとり方は大層素晴しいのですから、縄を本縄でしっかり本格的に掛けたときのものと、それから早縄で簡単に括ったものとの二通りの場面をポーズにも現わして区別して下されば、一層興味深いものが出来るのではないかと思います。私の秘蔵のアルバムには、もう数十枚の写真が私独自の解説つきで、ぎっしりと貼られていますが、その中でも花坂嬢は一きわ美しく光っていますどうか、今後ともマニアのために御自愛の程を、（大分・HH生）

○

暖冬暖冬と繰返えしている間にもう立春というわけですが、その間にも不断の前進を続けているKKに衷心敬意を表します。今迄屢々御便りしていた読後の感想も昨年の十一月号以来途絶えているようですので綴ってみることに致します。32年11月号について、映画のスチールを歓迎される方々も多いと思いますが確かに著名な美女を配してのスペクタルには相違なくてもKK特写のフォトには及ばないと思います。事実、伊吹嬢の実写六葉をグラビヤの中心と見て誤りはありますまい。四馬氏の麗筆は第一頁にふさわしい力作ですと白い顔のコントラストは妙です記事のトップを飾る久米木氏のアイデアは素敵でした。同氏の力作「美容病院」については完結後に感想を述べたいと思います。岸本氏の実験譚は羨ましい限り。七十二頁の画の可憐過ぎるのも、この際プラスになっています。南方氏の創作は過去のいろいろな作品から得たらしいヒントに基くものと思われますが惜しむらくは画が落ちると思います。泉さんの記事も楽しいものでした。絵も本文にマッチしており、若い女性の読者も多いKKに必要な一篇でしょう。次に藤山氏（敢て氏とお呼びします）の記事が、いつもながら悲惨な美を感じさせて迫って来ました御活躍を切にお祈りします。本号の圧巻は雪俊遙氏の「終戦奴隷」だと思います。いずれ機会があれば詳しい感想を記したいと思いますが、次々と大がかりな責を行っていてもヒロインが若く健康であり、マゾヒスチンでないことが救いだと思います。これは氏の作品の共通の特色ですが、情景の描写が精密で当事者の心理は読者の推察に任せる程度のヒントくらいしかないことが私として氏の作品を愛読せしめる因なのです。私の拙文に七ページ余りを与えて頂いたことに感謝しています。一六四ページのカットは殊に気に入りました。読者通信の南川様から御鄭重な御挨拶で恐れ入りました。青森の熱狂居士氏、今後共御指導を御願いすると共に微力ながら研究を重ねることをお誓い致します。（東京・近藤一）

○

貴誌愈々御隆盛の由お喜び申し上げます。毎号私達マニアを喜ばす立派な口絵写真を掲載下さいまして本当に有難く思っております新しいモデルの縛り写真も本当にすばらしいもので、喜んでおります。今度は実際にモデル嬢を使って色々な縛りの方法を写真にして説明してほしいと思います。一本の紐を使ったもの、二本の紐を使ったものなど、余り複雑なものではなく、簡単にわかるようなやり方を連続写真にしてもらえませんか。以前に「縛られるまで」とかいう題で口絵に載ったこともありましたが、只単に縛られている写真だけでなく、縛られつつある写真の方に、ひかれます。いろいろとお忙しいところ失礼ですが、出来れば同好者の一人としてお願いいたします。（清水・向井孝一）

「潰滅の前夜」のアイデアに依る責画
四馬孝画『美しき女体家畜飼育室』略号（しま）
大中判印画紙（タテ十八糎ヨコ十三糎）焼付　八枚一組　八百円

甲斐仁参案
四馬孝画『涙のダイヤモンド』略号『かん』
大中判印画紙焼付　三枚一組　四百円
○伸し責　○苦悶のコルセット　○浣腸責

○

私は数年前よりのKKの愛読者であります。二月号の読者通信欄で八潮三枝子様の御文を拝見いたしましたが、そのとたんに、どうにも居たたまれなくなって厚顔しくも早速お便りを差し上げる次第です。私は以前本誌上に「フェチシストの悲願」「フェチシストの見た鼻」等の記事をのせていただいた事のある二十五才の青年と申上げれば或は思い出して頂けるかもしれません。限られた頁数でありますので単刀直入に申し上げます。貴方の御境遇に心から御同情致します。或いはもう既によき同好者を獲得されたかもしれませんが、私にはそれはどちらでもかまいません。そうです。私は貴方の同志なのです。私は御婦人の鼻に絶大なる（文字通り）興味を持ちこれが私に多大な生き甲斐を与えてくれるのです。御婦人の鼻は私から見れば大自然が造り賜うた最上の美術品であります。亡くなられた御主人が貴女に対してなされた行為をそのまま再現する能力があると自信を持って申し上げられます。貴女のあの通信を拝見して余りにも旧御主人と私との趣味が一致しているのに大変驚くと同時に、貴女という同志のあるのを知って大いに力強く感じました。私も神戸の真中辺に住んでおりますので連絡場所さえ判れば今すぐにでもとんで行けるものをと残念です。是非是非、私に直接御返事下さいませんでしょうか。そして御会い出来る場所（貴女の御店又は御住居で御都合悪ければどこか他の適当な場所）を御知らせ下さい。私の行動範囲は、西は湊川公園新開地辺りから東は三宮、原田迄（市電湊川公園ー原田間定期有）。尚、日曜日は大阪迄行けます。

（神戸　B・H生）

謹告

臨時増刊号『ある夢想家の手帖から』沼正三

発行延期について！

二月中旬発売予定でありましたが、著者の御希望により単行本として発行するよう予定を変更いたしました故雑誌型にての発行は印刷直前に於て中止いたしました、詳細決定次第、改めて誌上に広告いたします。予約された方へは本号四月号をお送りして替えます。

編集後記

○時折編集後記を載せない時があると、熱心な読者の方から何故編集後記を書かないのだとやかましく言つて来られる。書いたところで、いつも印刷所の機械の前で立つたままの走り書きなので相済まない次第だが、例の通りの時間に追われての埋草で御辛抱願いたい。

○先月号から連載を開始した土路草一氏の「魔境圏NO・8」は本号では愈々話の本筋へ入つてきたようで次回からの進展が期待されます。同じく連載小説として夢原狂介氏の「十三人目の奴隷」は久留木栄氏の「美容病院」と共にその重厚なタッチと悠揚迫らざる筋の運びでマニアの方から高く評価される事でしょう。

○沼正三氏の「家畜人ヤブー」は作者の御都合により本月号を最後として一時中絶のやむなきに至りましたのは甚だ残念でありますが、なるべく早く再び継続されるよう読者の方々と一緒に待ちましょう。そのかわり一時中絶しておりました森本愛造氏訳の「残虐なる女性たち」の連載を次号より開始することにします。尚、浮いた誌面は「告白」などの新鮮な記事によつて埋めてゆくつもりです。

○本号では「私の生い立ち」と題した杉江美津子氏の真実味溢れた告白物を掲載しましたが、編集部の机上には、まだ数多くの女性男性の告白原稿が掲載を待つております。只、表現方法の中で公開に支障あると思われる個所の訂正のため遅れておりますが、いずれ皆さまのお眼に触れる機会があろうかと思います。

○次号では本職の御繁忙のための中絶中の「赤いペチコート」（鴉嘔吐天氏）が再び脚光を浴びる外、泉かよ子氏、三隅千恵子氏のお二人の文章、皆川のぶ子氏の「虹のつゆあと」と題した文、並に藤山秀緒氏の「夕陽に散る華」という女体切腹をテーマとした作品、等々多くの掲載作品を予定しております。

○辻村隆氏、緑猛比古氏、桂牧次郎氏、その他ベテランの方々から近い中、力作を寄せる旨の通信を貰つておりますので一陽来復と共に華麗な作品の花が絢を競う事と今から楽しみにしております。

○中国山脈を背にした山里に展開する今までにない異様な責場面を素材とした創作「紅山彦」（三条卓史氏）は果して今後どういう変転を見せるでしょうか、第一回目から息をのませるに足る書きぶりではあります。

○近藤一氏、内田武男氏、扇要氏、青葉槙一氏、森太一氏、古井真哉氏、等々から寄せられた作品は誌面の許す限り掲載したいものです。口絵に本文に今後益々充実を計つてゆく積りですから、どうか御期待下さい。

（三三、二、一五）